創造神の誕生（後）

白黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
創造神の誕生（後）

【Ｎコード】
Ｎ２１０９Ｕ

【作者名】
白黒

【あらすじ】
前作『創造神の誕生（前）』の続編！ｆａｔｅの世界から帰って早１０年。
休息を終えたオリ主創神リョウは次の世界に行く。
創神リョウは、あらゆる世界でどんな物語を見せるのか！

第０話　出発！（前書き）

白黒「始まります！創造神の誕生（後）！今回からの前書きと後書きは、自分と５人のリョウの仲間が進めます。紹介は後書きに発表します！そんじゃあ第０話始まります！」

第０話　出発！

リョウＳＩＤＥ

ｆａｔｅの世界から帰って早１０年。
しっかり休息をとり、何時でも出発する用意もできている。
さて、何時になるやら…
む！この感じは…

「リョウ。」

「大創造神。ようやくか。」

「うむ。してリョウ。次はどこの世界に行くのじゃ？」

どこの世界に行くか。
それはもう決まっている！

「魔法少女リリカルなのはの世界に！」

「わかった。」

俺の身体の周りに光が包み込む。
そんじゃあ行くか！

大創造神ＳＩＤＥ

行ったの、さて…

「君達に実は頼みたい事があるのだが。」

『『『頼みたい事？』』』

「うむ。実はのぅ…」

頼みたい事が何なのか説明する。

「……と、いう事なのなじゃが。どうかの？」

「わかりました。そんじゃあ、誰か二人いくか決めないとな。」

『『『おう（はい）（ええ）』』』

うむ…これなら早く決まりそうじゃな。
ん？何を頼んじゃだと？
それはおそらく、次回にわかる。
む。どうやら決まったそうじゃな。

「それじゃあお主ら、頼むぞ。」

「「はい（おう）」」

二人はリョウが行った世界に行く。

…さて、頼むのぅ。

第０話　出発！（後書き）

白黒「第０話完成！それでは、前書きと後書きに出る人の紹介します。それではどうぞ！」

テンテン「はああい。テンテンでえす。よろしくです。」

家康「徳川家康です。よろしく頼む。」

セイバー「セイバーです。よろしくお願いします。」

ライダー「ライダーです。」

白黒「…以上のメンバーでやっていきます。」

テンテン「ねえ、リョウさんは？」

白黒「リョウは本編に忙しいからな。参加しません。」

セイバー「そうですか。」

白黒「それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第1話　魔法少女の世界へ！（前書き）

テンテン「ねえ白黒。」

白黒「なんだ？」

テンテン「一体誰と誰がリョウさんと同じ世界へ行ったの？」

白黒「それは、今回わかりますよ！」

セイバー「そうですか。楽しみです。」

家康「第1話出陣する！」

第1話　魔法少女の世界へ！

リョウＳＩＤＥ

…ん、ついたな。
あれ？なんか身体が縮んだような。
よく見ると手も小さい。
…うむ、どうやら小さくなったようだ。
しかもこれは、おそらく3歳位か。
まあ、いいや。
とにかくどうするか。
ちなみに今の服装は、青いＴシャツに白の半ズボン。
……ん？ポケットの中に手紙が入っている。
取り出し読む。
ふむふむ。
どうやら住む場所とその位置が書いてある。
とりあえず、そこに行くか。
十分後、到着。
住む所は、この大きく値段が高そうなマンションのようだ。
ん？どっかで見た事があるな。
……あ！
無印編でフェイトが住んでいたマンションじゃねえか！
…まあいいか。
とりあえず、俺の部屋に行くか。
エレベーターで最上階まで移動する。
つうか、一番見晴らしと豪華な部屋かよ。
…うん、ここだな。

名札もある。
鍵はいつの間にか持っているし、とりあえず入るか。
扉を開ける。

「「おかえりなさい！」」

ぽか～～ん……はっ！
いかん！いつの間にか思考が停止してしまったようだ！
ってか！

「なんでお前らがいやがる！ナルト！ヒナタ！」

何故ナルトとヒナタがいるんだ？

「何って、今日から俺とヒナタがリョウの親役をやるんだってばよ！」

「はい～～！？」

どういう事だよ！
訳分からねえよ！
ん？またポケットに手紙が…
読む……ふ、ふざけるな～～～！！！
今まで両親役がいなかったし、この世界では必要だろうという事で内緒で決めただと！？
勝手に決めるな～！
……はあ、まあいい。
もういいや、このままやって行くか。

「とりあえず、これからどうするか。」

「どうしようってばよ。」

「どうしようか。」

う～む。

本当、どうするか。

「あっ。」

「なんだ？ヒナタ。」

「ねえ、ナルト君。アルバイトしない？」

「アルバイト？」

「ほら、これ。」

覗き込むとそこには、喫茶店翠屋のバイト、パートの募集のチラシがあった。

って翠屋かよ！

「確かこの店ってこの世界の主人公がいる…」

「うん、会う理由もできるし働ける。一石二鳥じゃない。」

「それはわかったが、金ないのか？」

「いんや。金ならめっちゃあるってばよ。」

は？
すると、ナルトがトランクをだし、開ける。
「ワー、イチマンエンノサツタバガイッパイアルナア。」
…って、はあああ！！？
何この大金！
何でこんなに？
しかも同じトランクがあと数個あるとか、マジかよ！
「リョウ。確か俺達の世界に居た時、よく暗部の任務や上忍の任務やっただろう。」
「ああ、そういえばってまさか…」
「うん。そのお金をこの世界のお金に変えたものだって、大創造神がいっていたよ。」
ってこんなにか！
いや確かに、俺達あんまり金使わなかったからってこんなにかよ！
…はあ…もういい。
「ふう。とにかく、行こうか。翠屋へ！」
「おう！」
「はい！」
…所で。
「ナルト、ヒナタ、お前ら…もしかして。」

「もちろん、創神にしたからな。」

「あ、そう。」

まあ行くか。

・・数分後、翠屋に到着。

今は昼2時頃、あんまり客はおらず、空いて居る。

「さて、入るか。」

「「うん。」」

店に入る。

「いらっしゃいませ。」

おお、入ると、主人公の母『高町桃子』がいた。

とりあえず、まずはケーキを注文するか。

俺は苺のショートケーキとジュース。

ナルトはチーズケーキと紅茶、ヒナタはモンブランと紅茶を注文する。

俺はケーキを食う、その間にナルトとヒナタは桃子とアルバイトの面接をしている。

うん、うまい。

これは本当に美味しいな。

本当はコーヒーを飲みたかったが仕方なくジュースを飲む。

「リョウ。」

「何？」

「とりあえず、ここでアルバイトする事になった。」

「そうなんだ。」

「そうよ。リョウ君…でよかったかしら。」

「あ、はい。ええと桃子…さん。」

「うふふ。おばさんでいいわよ。」

「いえ、結構です。」

なんだろう？
そう言ってはいけない。
そんな感じがする。
まあいいや、とにかくよかったな。

「よろしくね。創神さん。」

「こちらこそ。あと、私はヒナタで結構ですよ。」

「俺もナルトと呼んでください。」

「はい。わかりました。」

なお、ナルトは普通に喋る。
おかわりのジュースを飲んでいると。

「ただいま、母さん。」

「あら美由希、おかえりなさい。」

あのメガネっ娘は『高町美由希』だな。
やっぱりかなり若い。
確か、小学5年生位だったかな。

「あれ?その人達は?」

「ああ、この人達は明日からこの店で働く人達よ。」

「初めまして、創神ヒナタです。」

「創神ナルトだ。よろしくな。」

「こ、こちらこそ。高町美由希です。」

「初めまして、美由希お姉さん。創神リョウです。」

「初めまして。よろしくね。」

まずは挨拶をする。
これは、基本だな。

「ねえ母さん。なのは知らない。」

「えっ、なのはいないの?」

「うん。部屋にも入ったけど、どこにもいないの。」

「困ったわね。どうしましょう。」

ふむ、これはチャンスだな。
俺はナルトとヒナタを目配せする。

「あの、桃子さん。」

「はい？」

「家の息子のリョウ君に探しに行かせてもらいましょう。」

「えっ！でも…」

「いいよ桃子さん。僕がその…なのはちゃんを探しに行くよ。」

「…本当にいいの？」

「うん。」

「そう。じゃあお願いね。」

「はい。」

うん、これでよし！
手間も掛からんですむし、原作ブレイクする為にもな。

「えと、そのなのはちゃんの歳は幾つなんですか？」

「リョウ君と同じ位の歳で、茶色い髪で頭にリボンがついている娘

よ。」

「わかりました。」

「あ！それから、リョウ君。」

「はい？なんですか？」

「もし見つかったら、なのはと一緒に遊んでくれないかしら。」

「いいですけど。」

「ご覧の通り今、私達は忙しくて遊んであげられないの、こんな事頼んではいけないんだけど、お願いだけど。」

「いいですよ。見つかったら、一緒に遊んであげます。」

「よろしくね。」

店を出て、とりあえず公園に向かう。
きっとそこに居るはず。
さて、会いに行くか。
この世界の主人公『高町なのは』に！

なのはＳＩＤＥ

…ひっく…ひっく…
ないちゃいけないのに、なのははないているの。
おとうさんは、おおきなけがをしてびょういんってところいてあえないし、おかあさんとおねえちゃんは、おみせでいそがしいし、おにいちゃんは、なにかものすごくこわいかおしているの。
だから、はのははひとりなの。
だから、はのははひとりになってもないてはいけないの。
なのは、つよいこだから、ぜったいになかないの。
でも、いまはないていの。
ないちゃいけないのに、なかないってきめたのに。
わたしは、ないているの。
わたしは…
ふとじめんをみると、かげがあるの。
かおをあげると、なのはとおなじくらいのおとこのこがいたの。

リョウＳＩＤＥ

「高町なのはちゃんだね。」

「ふえ。」

公園に着き、探すとブランコのイスにすわっていた。
うん間違いない、高町なのはだ。
とりあえず声をかけたのだが…どうしようか。
あ～、なんかなのはが怪しんでいるし、警戒もしている、今にも泣きそうだな。

とりあえず説明だな。

「僕は、君のお母さんから、君を見つけてほしいと頼まれてね。」

「おかあさんが？」

「うん。そうだよ。」

あ。ちょっとこわがんなくなって泣くのをやめたようだ。
よかった。
でもまだ警戒は解いてないな。
なんでだ？

「わたし、おうちにかえらない。」

「なんでなんだい？」

「だって、だれもあいてにしてくれないもん。」

あ～、そういえばそうだったな。
多分桃子さん、こうなるってわかってたんだろうな。
まあ俺もだけど。

「う～うん、違うよ。」

「ちがう？」

「うん、なのはちゃん。僕と一緒に遊ぼう。」

「あそぶ？」

「うん。」

「どうして？」

「桃子さんがね、なのはちゃんの事を頼まれてね。それに…」

「？」

「君の悲しい顔を見てたら、僕も悲しいから。」

全く、見つけたらものすごく泣いていたからな。
俺は、小さな子の泣いてる所や悲しい顔を見るのは嫌いだ。
…はじめに言っておくが、俺はロリコンじゃないからな。

「…」

「だからさ。僕と一緒に遊ぼう。」

「…うん。」

ほっ。
少し明るくなったな。
よかった。
さて、何して遊ぼうか。

「…ね、ねえ。」

「ん？」

「おにいちゃんのなまえは？」

お兄ちゃん？

…ああ、そういえばまだ名乗ってなかったな。

「僕の名前は創神リョウ。後、僕はなのはと同い年だよ。」

「そうなの？」

「うん。」

「うん、わかった。よろしくねリョウくん！」

なのははニコッと笑う。

うん、なかなか可愛い笑顔だな。

それから、夕方になるまで俺となのはは遊んだ。

滑り台で滑ったり、砂遊びをしたり、ブランコでと、とにかく遊んだ。

その後、翠屋に戻り、ナルト達と合流する。

「おかえりなさいなのは。」

「ただいま！おかあさん！」

「おかえりリョウ。」

「ただいま…」

さて、帰るか。

「…」

「…ん？」

なんだ？
なのはが俺の服の裾を掴んでる。

「どうしたの？なのは。」

「…もう帰るの？」

「え？うん。そうだけ「帰っちゃやだ～！」…うお！」

え～～…何この状況。
急になのはが泣き出したんだけど。

「…えっとな、なのは。なのはには、桃子さんや美由希さんがいるじゃ「それでもやだ～！」…いかってえ～と。」

どうしようか。
ナルトとヒナタを見る。
とりあえず念話で聞く。

〔どうすればいい？〕

〔私に任せて〕

ヒナタは何か考えているんだろう。
期待しよう。

「桃子さん。」

「なんですか？」

「なのはちゃんなんだけど、今日一日だけ家に預けてくれませんか？」

「えっ？」

「はっ？」

ってうおおい！

何言ってやがるんだよ！

「…いいのですか？」

「かまいませんよ。何より、なのはちゃん。」

「？」

「リョウ君と離れたくないでしょ。」

「うん！」

「…わかりました。ヒナタさん、ナルトさん。なのはをよろしくお願いします。」

「はい。」

「？どうゆう事？」

「ああなのはちゃん。つまりなのはちゃんは今から僕の家に泊まりにくるの。」

「ふえ?ほんとに?」

「本当。」

「うわ～い!リョウくんのおうちにおとまりなの!」

「リョウ君。なのはの事、よろしくお願いね。」

「あ、はい。わかりました。」

というわけで、俺達はなのはと共に俺達が住むマンションまで帰る。
帰るなり、まずはご飯をだな。

「なのはちゃん。なのはちゃんは何が食べたいかな?」

「う～んと。ハンバーグがたべたいなの。」

「わかったわ。それじゃあすぐに作ってあげるわね。」

ヒナタは、キッチンに移動し、料理を始める。
約２０分後リビングのテーブルに料理が運ばれる。
品は、お米にハンバーグ、野菜にコーンスープ。
うん、相変わらず旨そうだ。
(ヒナタはかなり料理が上手い!)
夕飯を食い終え、なのはとヒナタが一緒に風呂に入る。
次に俺、最後にナルトが入る。

そして、就寝なんだが、ただいま俺はなのはと一緒に寝る事になった。
理由は、なのはが俺と一緒に寝たいと言ってきたからだ。
もちろん俺は断ったが、なのはが…

「リョウくんといっしょにねたいの。いや？」（涙）

…と、涙目プラス上目遣いのコンボで仕方なく一緒に寝る事になった。
…はあ、仕方ない。
とりあえず、明日に備えるか。
・・次の日の朝、なのはがリョウの身体にしがみついていたのは言うまでもない。

〈おまけ〉
「おいヒナタ。さすがにその白目はまずいぞ。」

「そうだよね。どうしよ。」

「…ん？これなんだってばよ。」

「…コンタクトレンズだな。しかもヒナタ用。大創造神の仕業だな。貰っとけ。」

「よかったな。ヒナタ！」

「うん。」

つけると、ちゃんと黒い眼だった。
…似合う。

第1話　魔法少女の世界へ！（後書き）

白黒「第1話完成！なのはの世界へ行きました！」

テンテン「まさか、ナルトとヒナタがリョウさんの両親役なんてね。」

ライダー「白黒。選んだ理由は？」

白黒「自分の中で一番好きなカップルだから。それに、一応この作品では結婚してるしな。」

家康「なるほど。」

白黒「他にもあったんだが、自分の勝手でこうなりました！」

セイバー「はあ。」

白黒「それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回！リョウに遂にデバイスが！」

第2話　リョウのデバイス完成！（前書き）

白黒「…」

家康「どうしたのだ？白黒殿。」

ライダー「何かあったのですか？」

白黒「書きたい…」

セイバー「はい？」

白黒「新作小説が書きたいんじゃあああ！！」

テンテン「きゃあああ！」

家康「うおお！お、落ち着くんだ白黒殿！」

白黒「うおおお！！」

ライダー「セ、セイバー。さっさと進めてくれ！」

セイバー「わ、わかった！第2話始まります！」

白黒「うおおお！！書きてええ！！」

『落ち着けええ！！』

第2話　リョウのデバイス完成！

リョウＳＩＤＥ

次の日、俺達はなのはと朝食を取る。
朝食は食パンとスクランブルエッグ、あとサラダだ。
飲み物は俺達はコーヒー、なのはは牛乳だ。
もうすぐで１０時になる時、俺はなのはにある提案をする。

「なのはちゃん。」

「何？リョウくん。」

「…今からなのはちゃんのお父さんに会いに行かない？」

「…おとうさんに？」

「うん。」

そう、俺はなのはの父親『高町士郎』に会いに行こうと提案する。
理由はある。
彼を治療しようと考えている。
ヒナタがいるから、早く回復できるだろう。
それに、なのはの兄『高町恭也』を少しお灸をすえる必要があるからだ。
桃子や美由希はともかく、兄である恭也はなのはをほったらかしにして敵討ちとかどうしようもない事をやっているからな。

俺は許せん！

「でも…おとうさんはいまは…」

「うん。知っているよ。大丈夫、もしかしたら目が覚めているかもしれないよ。」

「ほんと？」

「…多分ね。」

「…」

「とにかく行こう。父さんや母さんにも伝えないとね。」

ナルトとヒナタに士郎が入院している病院に行こうと言う。
行く理由も言い、病院に行く。
ナルトとヒナタは、桃子さんから夫士郎の事を聞いている為問題無い。
数十分後病院に到着。
ここは、あのはやてが入院する病院である。
入り、先ずナルトとヒナタが先に病室に入る。
その理由は、ヒナタに掌仙術で回復させてもらう。
仙豆にしてもよかったが、さすがに怪しまれるので却下。
その間、俺となのはは病室の外で待つ。

「それじゃあ、先に入るね。」

「あ、はい。」

「大丈夫。ちょっと時間使うけど、心配するな。」

「そうだよ、なのはちゃん。母さんは看護婦をした事もあるんだよ。」

「そうなんだ。あの、ヒナタおばちゃん、おとうさんをよろしくおねがいします。」

「はい。任されました。」

そう言い、ナルトとヒナタが入る。
任せたぞ！

ナルトＳＩＤＥ

扉を閉める。
さて、始めるか！

「俺は結界を貼るってばよ！ヒナタは治療を！」

「うん！」

リョウから病院に行く理由を聞いた。
なのはちゃんの為らしい。
そういえば、リョウは子供には優しかったな。
俺とヒナタの子とかできた時も、かなり可愛がっていたっけ。

やっぱり優しい奴だ。
普段は冷静で、敵と戦う時は熱く、嫌いな奴には冷酷で残酷な性格なのに、子供がいる時は、優しい。
だから、なのはちゃんの為に早く回復してほしいそうだ。
本当に子供には甘く、そして優しい。
俺は結界を貼り、ヒナタは掌仙術で高町士郎の傷や体力を回復させていく。
本当は仙豆がいいんだけど、さすがに怪しむ上にそんなに完治してはおかしいので却下だって言っていた。
ヒナタの掌仙術ならごまかしようがあるらしい。
まあいい、とにかくヒナタは高町士郎を治療する。
掌仙術をかけて数分後、高町士郎の意識が少し戻った。

「ヒナタ、もういい。」

「うん。」

さて、俺は結界を解き、リョウとなのはちゃんに報告するか。

リョウＳＩＤＥ

ナルトが病室から出てきた。

〔意識が回復した〕

〔そうか。サンキュー〕

さすがはヒナタだな。

「なのはちゃん。君のお父さんの意識が目覚めた。」

「ほんと!?」

「うん。さっ!」

「リョウくん!」

「ああ。入ろうか。」

病室に入る。
入ると士郎さんが目を覚ました。

「う…んん……ここは、病室か…」

「目を覚ましたか?高町士郎さん。」

「…君達は?」

「初めまして。私達は今日から貴方のお店でアルバイトをする創神ヒナタです。そして、この人は私の夫の。」

「創神ナルトだ。」

「そして、この子は私達の息子で。」

「創神リョウです。」

「…そうか。」

「おとうさん！」

「！なのはか。」

「うん！リョウくんとリョウくんのりょうしんがね、おとうさんの病院にいこうっていってね、もしかしたらめをさますかもっていっていたの。」

「…そうか。…創神ヒナタさん、創神ナルトさん。」

「ヒナタでいいですよ。」

「俺もナルトで！」

「わかりました。ヒナタさん、ナルトさん。なのはをありがとうございます。」

「いえ。気にしないでください。」

「それに、なのはちゃんの遊び相手をしていたのはリョウだからな。」

「そうですか。リョウ君。」

「はい。」

「なのはと一緒に遊んでくれてありがとう。」

「いいえ。気にしないでください。桃子さんにも頼まれてましたし、何よりなのはちゃんの悲しい顔を見たくなかったから。」

「リョウくん。／／／」

ん？なのはの顔が赤い。

〔流石はリョウさん〕

〔見事にフラグを立てたな〕

おい！聞こえているぞ。
さすがにそれはないだろう。

「ふふ、本当にありがとう。」

「いえ。」

その後、昼頃になるまで雑談をした。
妻の桃子さんの事、息子にして長男恭也の事、娘にして長女美由希の事を話した。
恭也にいたっては、なのはの事をほったらかしにして敵討ちをしていたと話すと、説教をしなくちゃな、と言っていた。
昼頃になり、病院を出、翠屋に行く。
翠屋に着き、ヒナタが桃子さんに病院に行き、士郎さんの意識が覚めたと言う。
桃子さんはとても喜んでおり、夕方に家族と一緒に病院に行くと言う。
その間に、俺はなのはと共に公園に行き、遊んだ。

夕方になり、桃子さんは美由希さんとなのはを（恭也は病院に行くように携帯に連絡した）連れていった。

「…いったな。さて、どうする？」

「もちろん家に帰る。」

「そうね。」

残った俺達は家に帰った。
数日後、士郎さんは退院した。

・・・あれから約三年だたち、なのはは小学生になった。
この三年、俺はなのはとたくさん遊んだ。
公園で遊ぶ事はもちろん、家でゲームをしたりと楽しんだ。
なのはが小学生になった為、遊ぶ日、時間が少なくなった。
その間に俺はやっておきたい事がある。
それは…デバイスだ！
俺は別荘の研究室に入り、デバイス製作を開始する。

「さ～て、どんなのを作ろうかな。とりあえず、ブレスレットタイプにして、いろんな機能を付けて。」

あ～だこ～だと、とにかく付けたり外したりと楽しく作る。
お、なんか楽しいな！
こりゃあ完成した時が楽しみだ！
・・・ふ、ふふふ…完成だ。
約三ヶ月かかったが、ようやくできた。
とにかくたくさん実験もした。

爆発もしたし、壊れもした。
だが！ようやく完成だ！
よし！さっそく起動だ！

「起動確認。マスター、私の名の登録をお願いします。」

おお！
上手くいった！
声も完璧ガンダム００の主人公刹那・Ｆ・セイエイの声をやっていた声優、宮野真守だ。

「お前の名はバサラだ。」

「バサラ…登録完了しました。次にマスター名を登録します。お教えください。」

「ああ。名は創神リョウだ。」

「創神リョウ…マスターの登録完了しました。よろしくお願いしますマスターリョウ。」

「よろしく。さっそくで悪いが、バサラ。機能テストをするぞ。」

「了解しました。」

研究室を出、フィールドに立つ。

「よし、行くぞ。バサラ！セットアップ！」

「スタンバイレディ！セットアップ！」

光に包まれ、バリアジャケットが形成されていく。
光が消え、セットアップが完了する。
…ん、よしよし、上手くいったな。
服装は何時もの服がバリアジャケットになっただけ。
変わった所は、靴が金属でできたのと、グローブがついただけ。
あとデバイスの杖はなのはのデバイスと似たもので違う所は球体の所が星形になっただけ。

「よし。上手くいったな。さて、いろいろ試すか！」

その後いろいろ試す。デバイスの性能、武器の威力、魔法などとにかくたくさん試す。

「よし！まあこんなもんだな。とりあえず、カードリッジシステムはまだ先だな。バサラ、解除だ。」

「了解マスター。」

ん、元の服装にもどる。

「マスター。」

「なんだ？バサラ。」

「マスターの能力や正体を知りました。なのに何故今頃になって私を作ったのですか？」

なるほど、確かに早く作ったほうがいいし、作る必要もないだろう。
だが…

「バサラ。この世界には時空管理局という組織がある。」

「はい。」

「もし俺がデバイス無しで魔法を使ったりしたら、怪しまれる上に掴まって実験材料にされたくないからな。」

「なるほど。」

「デバイスがあれば、多少のごまかしもできる。さらにゆうなれば、俺は管理局を信用していない。そう言う事だ。」

「納得しました。」

うむ。

とりあえず、これでよしだな。

後は、三年後…つまり無印編までどうしようか。

……やっぱり、修業だな。

三年たったらなのはの学校に入学するし、それまで暇だからな。

とりあえず、この世界の魔法を使いこなさないとな。

そうと決まればさっそく特訓！

…と、言いたいがさすがに眠い。

今日はここまでだな。

明日修業するか。

俺は自室に移動。

自室に入り、シャワーを浴び、パジャマに着替え、ベッドに飛び込む。

「バサラ。とりあえず朝１０時に起こしてくれ。」

「了解しました。」

「うん。おやすみ。」

・・・朝１０時きっかりにバサラは俺を起こしてくれた。
流石は俺の相棒だ。
頼りになるぜ！
さて、三年後まで、たっぷり修業してやるぜ！
どんなイレギュラーが起きても対処できるようになるまで！

第2話　リョウのデバイス完成！（後書き）

白黒「第2話完成。とりあえず落ち着いた。」

テンテン「全くもう、このバカ作者が！」

家康「テ、テンテン殿。さすがにそれは言い過ぎ…」

白黒「いえ、テンテンの言う通りだ。全く、恥ずかしい限りの事をしてしまったよ。よくよく考えてみれば、今この小説で忙しいのにな。」

セイバー「全く。」

白黒「でも何時か、新作小説を書くつもりです。」

ライダー「そうですか。」

白黒「はい。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回は、オリ主の追加設定とデバイス紹介と設定です。」

リョウ9歳時設定とデバイス紹介&設定

創神リョウ・・9歳バージョン

・身長なのはよりも三センチ高い（大人バージョンは約178ｃｍ）

・服装、青のTシャツに薄い茶色の長ズボン。

・瞳の色、黒

・髪型、肩位までの長い髪。

・追加性格、敵に対して（特に嫌いなキャラ）、かなり冷酷で残忍、さらに、容赦が無い！

・能力、そのまま！

デバイス！

・デバイス名、『バサラ』（原案は、戦国ＢＡＳＡＲＡのＢＡＳＡＲＡを片仮名読み）

・使用デバイス、インテリジェントデバイス！

・バリアジャケット、大人の時の服装がバリアジャケットになっただけ。
追加でグローブと靴が金属製になった。

・形状、レイジングハートと同じ。
ただ、球体の所が星形になっただけ。

あらゆる武器、武具になる。
また、大人モードにもなれる。
カードリッジシステムはまだ付けない。
遠距離形の杖や銃を使うほか、近距離形の剣や鎌にも変えられる。

・使用魔法、ほぼ全て使える。
属性は全て！
ただ今オリジナル魔法考え中。

声・宮野真守

性格は、真面目で冷静。
起動したばかりだが、かなりしっかりもの。

第3話　入学！シスコン！誘拐！（前書き）

白黒「今回はリョウがあの三人娘にフラグを建てます！」

テンテン「どういう事かな？かな？」

家康「ひ、ひぐらし化！」

セイバー「落ち着きましょう。」

ライダー「そうです。殺るのは一緒です。」

白黒「うおお！助けてくれー！」

テンテン「うふふ。第3話始まります。」

第3話　入学！シスコン！誘拐！

リョウＳＩＤＥ

俺のデバイスが完成して早三年がたった。
今日から俺は、聖祥小学校に入学する。
表の理由は、ようやく入学金がたまり、はいれるよいになったからだが、本当の理由は、後数日たてば、原作が開始するからである。
しかし…この制服似合わねえ！
特にこの半ズボンはダサい。
まあ、しょうがないな。
ちなみに、左手首にはデバイス、バサラがある。
そんな事を、読者に言っている間に、教室前に到着し、扉の前に立って待っている。

「はい。皆さん、おはようございます！」

『おはようございます！』

うむ、子供は元気があっていいな。

〔マスター、少し親父くさいですよ〕

〔仕方ないぞ。これでも俺は、数１００歳なんだからな〕

「さて、皆さんにご報告があります。なんと！今日から我がクラスに転校生が来ました！」

ザワッザワッザワッ

少し騒がしくなったな。
男ですか？女ですか？など、大きな声がよく聞こえる。

「それじゃあ、入ってきて。」

む、呼ばれたな。
扉を開け、教室に入り、職檀の横に立つ。

「今日から皆と一緒にお勉強する、創神リョウ君です。」

「創神リョウです。よろしくお願いします。」

先生が黒板に俺の名前を書き、紹介する。
俺も挨拶をする。
パチパチパチパチ…
周りから拍手がくる。
周りを見渡すと、高町なのはがいた。
同じクラスか。
退屈しなくてすむな。

なのはＳＩＤＥ

にゃ～～！

リ、リョウ君だ。
久し振りにリョウ君を見たの。
しかも、今日から私と同じ学校にかようの。
なんだか嬉しいな。

「じゃあ、リョウ君は…なのはさんの隣の席に座ってね。」

「はい。」

うにゃっ！
私の隣に座るんだ！
いっぱいいっぱい、い～っぱいおしゃべりするの。
リョウ君が私の隣の席に座るの。

「久し振りだね。なのは。」

「うん！久し振りなの！」

「これからよろしくね。なのは。」

「！！うん！！」

にゃ～～！
ちゃんと覚えててくれたの。

「それでは、授業を始めますね。」

おっとっと、ちゃんと聞かないと。
・・一時間目が終わり、今な休み時間なの。
いっぱいお話ししようとしてたら。

…リョウ君、今いろんな人達に囲まれていろんな質問とかされてるの。
う～～！
私もいっぱい聞きたい事とか、お話しとかしたいのに。
そんな時。

「こら～！アンタ達、困っているでしょ！もうやめなさい！」

『は～～い。』

ほっ、よかったなの。
これでゆっくりお話しができるの。

「リョウ君。」

「よっ、なのは。改めて久し振りだな。」

「うん！本当に久し振りなの！リョウ君は、今までどうしてたの？」

「ん？ああ、今まで違う学校に通っていてな。だいぶお金がたまってきたから、母さんがなのはと同じ学校に通うようにしたんだ。」

「そうなんだ。」

「ああ。」

ヒナタさんにはとても感謝なの。

「なのは！」
「なのはちゃん。」

「アリサちゃん。すずかちゃん。」

「ねえなのは、こいつと知り合い。」

「うん。小さい頃に一緒に遊んだ事があるの。」

「ふ～ん。」

「なのは。この二人は誰？友達？」

あ、そうか。
リョウ君は知らなかったの。

「うん。リョウ君。アリサちゃんとすずかちゃんなの。二人は私の親友なの。」

「『アリサ・バニングス』よ。」

「『月村すずか』です。よろしくね。」

「創神リョウ。ええと、アリサとすずか…と言っていいのかな？」

「ふん！それでいいわ！」

「うん。私達はリョウ君って呼ぶね。」

「ああ。じゃあ、改めてよろしくな。アリサ、すずか。」

そう言うと、リョウ君はニコッと笑ったの。

うにゃ～、顔が赤いの／／／
アリサちゃんとすずかちゃんを見ると、二人も顔が赤いの。
む～～、なんだかわからないけど、イライラするの！

「どうした？なのは。」

「…なんでもないの。」

私はほおを膨ませて、顔を逸す。

「…」
ポンッ

「うにゃっ！？」

な、ななな！
リョ、リョウ君の左の手のひらが、私の頭を撫でてるの！
んにゃ～、リョウ君の手、とても気持ちいいの。
チラッとアリサちゃんとすずかちゃんを見ると、羨ましそうに私を見てるの。
にゃ～…ん？

「ねえ、リョウ君。」

「ん？」

「左手首にある物は何？」

「これ？」

リョウ君は撫でるのをやめて、左手首にある物を見せた。
もう少ししてほしかったけど、仕方ないの。
…これって。

「ブレスレット？」

「ああ。そうだよ。」

「これ、どうしたの？」

「父さんの友人からもらったんだ。片方しかないけど。でもこれだけでいいけどな。」

右手首にはないもんね。
キーンコーンカーンコーン
あ、休み時間終わったなの。

「続きは後でな。」

「うん。わかったなの。」

・・お昼休み、私とアリサちゃんとすずかちゃんとリョウ君は屋上でご飯を一緒に食べる。
リョウ君のお弁当、とっても美味しそうなの。

「それにしても、リョウ。アンタものすごく頭いいわね。」

「うん。本当に凄いね。」

「うんうん！」

「こんなの簡単だろ。」

か、簡単って、リョウ君ものすごく頭いいの。
これまでの授業、リョウ君全部答えたの。
凄すぎるの！

「次は体育ね。リョウ！アンタ運動得意？」

「得意だよ。」

「そう。なら勝負よ！」

「…まあいいよ。」

「よし！すずかもよ！」

「わ、私も！？」

「当然でしょ！」

にゃはは。
リョウ君もすずかちゃんも大変なの。
あ！

「ねえねえリョウ君。」

「ん？」

「帰りに久し振りに翠屋によっていかない？」

「翠屋か…」

「どうかな？」

「うん、わかった。久し振りに行くか。」

「うん！ナルトさんとヒナタさんも喜ぶよ！」

「そうだな。そういえば父さんと母さんの働いている姿を見た事ないな。」

「あの美人店員とイケメン店員って、リョウの両親なの？」

「ああ。」

「へ～！」

「それより、もうすぐチャイムがなりよ。」

あっ！

「ヤバい！急ぎましょう！」

残りも食べ終え、急いで教室に戻って体操服に着替えて運動場に行くの。

体育の授業はドッチボールだったの。

リョウ君と一緒のチームになり、アリサちゃんとすずかちゃんは敵のチームになったの。

勝負の結果は、リョウ君がアリサちゃんとすずかちゃんをあっさり

当て、勝ったの！

リョウＳＩＤＥ

６時間目も終わり、俺はなのはとアリサとすずかと一緒に翠屋に行く。
数十分後到着、翠屋に入る。

「いらっしゃいませ。あら、リョウ、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんおかえりなさい。」

「いらっしゃい。それにおかえり。」

「ただいま。」

「おかえりなさい。なのは。」

「ただいま！お母さん！」

「おや、久し振りだね。リョウ君。」

「こんにちは。士郎さん、桃子さん。」

「ふふ、久し振りね。」

士郎さんと桃子さんに挨拶する。

本当に久し振りだな。

「ナルトから聞いたよ。聖祥小学校に入学おめでとう。」

「ありがとうございます。」

ナルトと士郎さんはかなり親しくなって、士郎、ナルトと呼び合っているようだ。

「そうだ。リョウ君の入学祝いに、今日は奢ろう。」

「え、でも…」

「いいよ。君にはまだ、お礼もしていないからね。このくらい安いものだよ。」

「そういう事なら、今日はご馳走になります。」

俺達は、端の席に座り、ケーキを注文し食べる。

俺は、ブルーベリーチーズケーキとコーヒーを注文する。

…うん。やっぱり美味しい。

ケーキもコーヒーも旨い。

特にコーヒーは今まで飲んだ中で一番旨い。

「どうだい？美味しいかい？」

「はい。とても美味しいです。それにこのコーヒーも旨いです。」

「そうかい。このコーヒーは俺が鍛錬していれたからね。」

「そうですか。」

ふう、俺はゆっくりコーヒーをブレイクする。
夕方まで、なのは達と雑談していると。

「ただいま。父さん、母さん。」

「おかえり。恭也。」
「おかえりなさい。恭也。」

なのはの兄、恭也が帰ってきた。
ん?恭也がこっちにくる。

「君がリョウか…」

「…はい。そうですが。」

なんだこいつ?
俺に殺気だして。

「なのはの事は礼を言う。」

「別に、気にしないで下さい。なのはの悲しむ姿を見たくなかったからさ。」

「そうかい。」

「ええと、恭也さんでしたね。あんたは…何が言いたいんですか?」

まあ、何が言いたいのかわかるけどな。

「正直に言おう。君が気にいらない。勝負してもらおうか。」

「恭也！？」

「お兄ちゃん！？」

「…いいだろう。敵討ちに夢中でなのはを放置した報いを受けてもらう。」

「貴様！」

おーおー、殺気が強くなった。
まあ、大した事はないが。

「どこで戦るんだ？」

「家の道場でだ。」

「わかった。」

道場に移動する。
って、士郎とナルトは分かるが、何故なのは達が？

「なのは、アリサ、すずか、なんで付いてきてるんだ？」

「だって心配だからなの！」

「そうか。」

道場に入り、恭也と対峙する。
ってか、もう武器を持って構えているし。
早いな、恭也の武器は小太刀の木刀二本か。

「貴様も武器を取れ！」

「アンタに武器は必要無い。素手で充分だ。」

俺は、ただ突っ立ってる状態になる。
これで充分！

士郎ＳＩＤＥ

「なんだと！ふざけるなよ！」

恭也は怒るのも無理は無い。
リョウ君は武器も持たず、ただ突っ立っているだけだ。
だが、俺にはすぐにわかった！
これは…

「気付いたかい。士郎。」

「ナルト。これはまさか…」

「そのまさかさ。」

「凄いな。」

「全くだよ。親である俺も驚きだ。」

「ねえお父さん！リョウ君大丈夫なの？」

「大丈夫だよなのは。この戦い、リョウ君の勝ちだ。」

「どういう事なんですか？士郎さん。」

「リョウの奴、ただ突っ立ってるだけじゃないですか！」

アリサちゃんとすずかちゃんが聞いてきた。

「ただ突っ立っているんじゃないよ。あれは、完全に無になっているんだ。」

「無？」

「つまり、全く気配を感じられないと言う事さ。」

「よ、よくわからないの。」

「まあ普通はわからないよ。だから、これに気付けないようでは、恭也はリョウ君に勝てない。」

静寂が続く。

「…うおお！！」

恭也が先制攻撃をする。
一気に接近し右の小太刀で攻撃する。

「ハッ！」

「…」

だが…

「なっ！？…！！」

当たる直前、リョウ君は消えた。
すると、いつの間にか恭也の背後に立ち、少しジャンプし、手刀で恭也の首筋を浴びせた。
そのまま恭也は倒れる。

「リョウの勝ちだな。」

「そうだね。」

まさか、恭也をあっさり勝つなんて、ナルトから聞いたけど、ここまでとは。

「す、すご～い！」

「うそー！あの恭也さんに勝っちゃうなんて！」

「すごい…」

なのは達も驚いている。

「士郎さん。恭也さんは後少しで目が覚めるでしょう。」

「そうか。それにしてもすごいな。こんなに強いなんて。どれだけ修練したんだ？」

「それは秘密です。」

ふふ…まあ、いいか。

簡単に聞いてはいけないな。

その後、恭也は目が覚め、負けた事を伝えた。

それにしても、リョウ君ならなのはを任せられるな。

約十年後が楽しみだ。

リョウＳＩＤＥ

恭也との戦いを終え、数分後、なのはにもう帰る事を伝えアリサ、すずかと一緒に帰る。

「俺の家はこっちだから。」

「わかったわ。それじゃあね。」

「ばいばいリョウ君。」

「ああ。じゃあな。」

交差点で別れ数秒後、車の急ブレーキ音が聞こえ、振り向くとアリサとすずかが車に乗せられかなりのスピードで去った。
…誘拐か、まさかこんな大通りでやるとは、いろんな人に見られているのに。

〔マスター。どうしますか？〕

〔もちろん追うぞ。ナンバーを覚えたなバサラ。〕

〔もちろん。こっちです。〕
俺は車を走って追う。
その間に俺はナルトにアリサとすずかがさらわれた事を電話する。
さて、急ぐか！

アリサＳＩＤＥ

油断した！
まさかこんな大通りでやるなんて！

「アリサ…」

「大丈夫よ！すずか！」

今、私達は何処かの倉庫にいて、縄で縛られている。
しかも、口にはガムテープでふさがれている。

どうしよう。

「へっへっへっ…まさか、バニングス家と月村家の令嬢を捕らえられるなんてな。これは、儲けもんだぞ。」

くぅぅ！

「おいおい。まさか、このまま待つのか。せめて楽しみ位はさせろよな。」

「その通りだ。この餓鬼二人、将来いい女になるぜ。もっといい女にしてやろうぜ！」

「くっくっくっ…そうだな。ただし、あんまり傷つけるなよ。」

「わかってるって！」

な、なんだかわからないけどヤバいってのだけはわかったわ。
さらった一味の一人がゆっくり近付いてくる。
く、くるな！

「へっへっへっ…そう嫌がるなよ。心配すんなって、俺達に任しときな。」

い、いや…誰か、助けて！
ガララララ！
倉庫の扉が開いた。
扉の所に気になる子、リョウがいた。

リョウＳＩＤＥ

こんな所にいたか。
まあ分かりやすい場所にいたもんだ。
入ると、アリサとすずかが縄に縛られており、口はガムテープでふさがれている。
そして、さらった一味の一人がアリサとすずかに近付こうとしていたらしい。
ふう、間に合ったな。
もう少し遅かったら危なかったな。

「おいおい、坊主。こんな所になんのようだ？ここは、坊主のくる所じゃないぜ。とっととお家帰りな！」

一味の一人が俺に近付きそう言ってきた。
ふん、屑が。
俺はそいつに近付き、腹にパンチを叩き込む！

「が！？…」

かなり手加減したがあっさり倒れる。
本気でやったら殺してしまうからな。

「こ、この餓鬼！！」

ふむ、ざっと十人か。
一人を除いた奴等が俺に一斉に襲ってくる。

だが！

「ハッ！フッ！…」

「ぐっ！」
「ぐえ！」
「ぎゃ！」
「がは！」
「ぐあ！」
「ぐふ！」
「ぐお！」
「あが！」
「ぬが！」

俺は軽く、あしらい倒す。
さて、後一人か。
すると、最後の一人の手にマシンガンがある。

「く、くるな！くると撃つぞ！」

ふん、バカが。
俺は、一歩二歩歩く。

「うわあああ！」

奴がマシンガンを撃ってきた。
だが！

「…」

俺はマシンガンの弾丸を両手で掴む。

「んな！？」

手を広げ、掴んだ弾を地面に落とす。

「あ…あ…」

奴はまたマシンガンを構えるが、俺はすぐに接近し腹を殴る。

「うご！」

最後の一人を倒す。

アリサとすずかの所に行き、ガムテープをはがし、縄を切る。

「大丈夫か？」

「ぷはっ！リョウ…アンタ一体。」

「…」

まあ普通はあんなのを見せられたら恐怖するよな。

「ああ。あれは、父さんに鍛えられてな。いつの間にかこんなに強くなった。」

「「なるほど。」」

納得してくれたようだ。

よかった。

「ああそうだ。アリサ、すずか、できればこの事は内緒にしてもらいたい。」

「え!?どうしてよ!」

「あんまり目立ちたくないからな。それに、説明するのも面倒くさい。」

「面倒くさいって。」

「でも…」

「お願い。」

俺は、優しく微笑み人差し指を口の前にあてウインクし、お願いする。

「「う、うん。／／／／」」

あれ?
なんでだ?
秘密にしてくれたけど、なんで二人とも、顔を赤くしてるんだ?
まさか…

(な、何。なんでこんなに胸がドキドキするの?／／／)
(さっきのリョウ君の姿、とってもかっこよかったし今のリョウ君は可愛い。／／／)

…はあ。

〔マスター。これはまさか〕

〔バサラ。多分お前の思っている通りだ。はあ…〕

まさしく、なんでさだ。
…まあ、考えても仕方ないか。
む、この気は、恭也達か。
後少しで到着するな。
そろそろ去るか。

「そんじゃあ、そろそろ行くわ。もう少ししたら恭也さん達が来るからそれじゃあね。」

アリサとすずかが何か言おうとしたが、その前に去る。
もちろん恭也達に気付かれないように。
数分後家に帰還。
は～、やれやれ、今日は長い一日だったな。
後数日で原作が始まる。
それまで、ゆっくりしますか！

第3話　入学！シスコン！誘拐！（後書き）

白黒「第3話完成！次回から原作スタートです！」

家康「次回か…楽しみだな。」

テンテン「ねえ。バカ作者？向こうでＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＩしましょう？」

白黒「断る！（（ガシッ））？！」

セイバー「そう言わずに。」

ライダー「そうです。逝きましょう。」

白黒「ちょ！漢字違うし引っ張るな！た、助けて～～！！」

家康「ははは…それでは、今回はワシ一人で。それでは皆さん、次回もよろしくお願いします！」

白黒「やめて！助けて！自分死んじゃう！やめ…あああああ！！」

第４話　なのは、魔導師になる！（前書き）

白黒「こ、今回からなのは無印編が始まります。」

家康「だ、大丈夫か？」

テンテン「大丈夫よね～？」

白黒「は、はひっ！」

セイバー「頑張ってください！」

ライダー「それでは、第４話始まります。」

第４話　なのは、魔導師になる！

リョウＳＩＤＥ

入学して数日がたち夜、俺は建物の屋根に立っている。
今日、なのはが魔法少女になる日だ。
朝から、念話で誰かの声がめっちゃ聞こえてウザかったな。
まあ仕方ないが。

〔マスター。どうしますか？〕

〔とりあえず、なのはが魔法少女になったら、介入する〕

〔わかりました。しかし、本当に姿を変更しないんでいいんですか？〕

〔どうせバレるんだ。ならそんなムダな事はしない〕

〔了解〕

さて、まだかな。
む、この魔力は…

〔マスター！〕

〔ああ、なのはが魔法少女になったな〕

〔行きますか？〕

〔ああ、行くか〕

さて、俺もバリアジャケットを着るか。

「バサラ！セットアップ！」

〔オーライ！スタンバイレディ！セットアップ！〕

バリアジャケットを装着する。

さて、行くか。

なのはＳＩＤＥ

な、何？

どうなってるの？

確か夕方、塾に行く為に公園を通り、近道しようとしていたら、何故か声が聞こえたの。

声が聞こえた所に行くとそこに、傷を負ったフェレットが倒れていたの。

動物病院に連れていって、その後、誰が飼うか決めあって夜、寝ようとすると、夕方に聞いた声と同じ声を聞いたの。

動物病院に向かうとそこに、黒い塊みたいな物が現れて、何故か、フェレットが襲われてて、そのフェレットが喋って、しかも、何故か巻き込まれたの。

さらに、とんでもない事に今、何故か私は、変身して魔導師っていうのになってるの！！？

「ふえ？何？何これぇ！？」

「来るよ！」

「えっ？」

グオオオ！！
な、なんか襲ってくるの！！
私は目を瞑る！

〔プロテクション！〕

何かがぶつかる音が聞こえるの！
少し目を開けると桜色の壁ができて、黒い物体からの攻撃を防いでるの！
しばらく拮抗していたけど、根負けしたのか黒い物体は吹き飛ばされたの！
何？
この杖『レイジングハート』のおかげなの？
これが、魔法なの？

「また来るよ！」

前を向くと、黒い物体がまた仕掛けてきたの！
ど、どうしよう！
どうしたらいいのか聞こうとすると。
グオオオ！

黄色の何かが黒い物体に当たり動きを止めたの。

「魔力弾!?一体だれが?」

誰かいるの?

すると、私の隣に誰かが現れたの!

「大丈夫か?なのは。」

正体は、私の思い人のリョウ君なの!

リョウＳＩＤＥ

ふう、まあこんなもんかな。

俺は軽く二発の魔力弾を放ち、なのはの隣に降りる。

すぐ近くには、なのはを魔導師にしたフェレット…いや少年『ユーノ・スクライア』がいる。

「君も魔導師かい!?」

「まあな。」

「ふえ～!リョウ君もなの?」

「ああ、そうだ。」

なのは、とっても驚いているな。
む、ジュエルシードの思念体がせめてきた。
俺はなのはの前に立つ。

「バサラ。」

〔プロテクション〕

思念体が突っ込んできたが、ガードし吹き飛ばす。

「おい、そこのイタチ！アレはどうやったら倒せるんだ？」

まあ知っているが。

「イタチじゃない。アレはとある物の思念体なんだ。それを封印しなきゃならない。」

「どうやってだ。」

「…君。」

「わ、私？」

「うん、君が封印するんだ。」

「ど、どうするの？」

「どうやら、なのはじゃないとその封印ができないようだな。なら、俺はあの思念体という奴の動きを封じる。バサラ。」

〔了解！バインド！〕

思念体の動きをバインドで封じ止める。

「すごい…」

「ぼさっとしない。なのは、早く封印を。」

「う、うん！」

ユーノがなのはに封印魔法を教え、なのはが封印魔法を発動する。

〔バサラ。封印魔法の解析と使えるようにしてくれ〕

〔了解マスター〕

実は、俺とバサラは封印魔法ができない。
その為、なのはが手本を見せてくれるので助かる。
今後の為にも、絶対に覚えないとな。

「…リリカルマジカル！ジュエルシードシリアルＸＸ？、封印！」

そう言い、レイジングハートで封印した。
けど…

〔マスター。マスターもあんな風にクルクル回りながら呪文を言うのですか？〕

〔アホか。絶対にやらん！簡潔にジュエルシード封印だけにしとく、お前もそうしとけ〕

〔了解！〕

そんな事を念話で話をしていたら、ジュエルシードがレイジングハートの中に入る。
これで一段落だな。
封印完了を確認したユーノは、そのまま倒れた。

「ね、ねえ！大丈夫？」

「おい、なのは。」

「何？リョウ君。」

「このままだと、俺達ヤバいんじゃないか？」

「ふえ？」

周りを見ると、電信柱が倒れていたり、そこらへんに地面にひびができていたり、さらに、サイレンの音が近付いてきている。

「ええと、ええと…ご、ごめんなさ～い！」

なのはは走ってこの場から去る。
俺は、指を鳴らし周りを修復してからなのはのあとを追うように去る。
数分後、俺達は公園に到着し、ベンチに座る。
息を整えたあと、俺となのはは、ユーノの話を聞く。
俺は原作を知っている為あんまり聞いていない。

「ねえリョウ君。ユーノ君をどうしようか？」

「一応、ユーノはなのはのパートナー的な存在なんだから、なのはん家に泊めたほうがいいだろう。」

「…うん。そうだね！」

とりあえず、現状はこれでいいな。

さてと。

「俺はそろそろ帰るな。なのはも早く帰りな。桃子さんや士郎さんが心配するからな。」

「うん！じゃあねリョウ君！」

「おう。」

俺はそう言い家に帰る。

さ～て、これから忙しくなるな。

次の日、俺は学校に登校、なのはとアリサとすずかの会話に耳を傾けながら聞く。

とりあえず、原作と同じ会話だな。

〔僕はとある遺跡の発掘と調査をしていたんだ〕

授業中にユーノの念話が聞こえてきた。

しかもいきなりかよ！

〔全くいけてませんね。あのフェレットは…〕

〔ああ〕

原作を知っている為、殆ど聞いてはいない。
なのはが、自分も手伝うと言っている。
まあなんとも、なのはらしいな。

〔リョウ君はどうするの？〕

〔ん？もちろん俺も協力する。お前が無茶しないように見張っとかないとな〕

〔む～～！〕

〔それに、なのはを守らないとな〕

〔ふえ！／／／〕

〔マスター。それは告白と同じです〕

なんでだよ。
・・授業も終わり、家に帰ろうとする。
！

〔マスター。これは…〕

〔ジュエルシードだ。行くぞ！〕

〔了解！〕

俺は神社の方に急ぐ。
石段のところでなのはと合流する。
なのはと共に駆け上がるが。

「なのは…大丈夫か？」

「ハア…ハア…だ…大丈…夫…なの…ハア…」

なのはは体力がない。
その為、この程度の石段でも疲れてしまう。

「ふう、仕方ない。」

「きゃっ！／／／リョ、リョウ君／／／」

「ほら、さっさと行くぞ。」

「う…うん／／／」

俺はなのはをお姫様抱っこして、石段を駆け上がる。

〔マスターって意外と大胆なんですね〕

〔バ～カ、そんなんじゃねえよ〕

駆け上がると、そこに、気を失い気絶している女性と見た事もない獣がいた。
これは…

「な、何？あれ…」

「ジュエルシードの力であんなになったんだ。」

「見た目は狼っぽいな。元は犬か。なら、犬がジュエルシードの力であああなったって所だな。」

「と、とりあえずなんとかしないと！」

確かにその通りだな。

「なのは！変身だ！」

「ふえ！？ど、どうするの？」

「昨日の夜に呪文を教えただろう？」

「あ、あんな長い呪文を覚えられないよ。」

「え～～！！」

まあ、普通は覚えられないよな。

「も、もう一回教えるから…」

「そんな事をやってる場合か！来るぞ！」

グオオオ！

狼っぽいものが、なのはに突っ込んで行く！

「なのは！」

「！！」

すると、レイジングハートが光り輝く。
これは…

「レイジング…ハート。」

〔スタンバイレディ！セットアップ！〕

光が収まると、なのははバリアジャケットを装着した。

「！！パスワードも無しに変身するなんて！」

「やるなあ、なのは。そんじゃあ俺も、行くぜバサラ！」

〔Ｙｅｓマスター！スタンバイレディ！〕

「セットアップ！」

そう言い、俺もバリアジャケットを装着する。

「き、君もパスワード無しで！」

「まあな。」

「ふえ～！凄いの！」

「む、くるぞ！」

「えっ？」

グオアア！

「なのは！」

〔プロテクション！〕

「ッヅ！！」

グオオオ！

狼っぽい物がなのはに突っ込んで行ったが、ガードし弾き飛ばす。

「あ、あの攻撃をノーダメージで！」

（やっぱりだ。あの子、とんでもない魔力の持ち主だ）

「いたた…って痛くないかな。えっと、封印…をすればいいんだっけ。…よろしくね。レイジングハート。」

〔オーライマスター！〕

うん、流石だな。

「そんじゃあ俺は、アレの動きを止めるか。バサラ。」

〔了解マスター！〕

杖を敵に向ける。

杖の先端に魔力の弾ができる、そして…

「ショット。」

一発、二発と魔力弾を放つ。

グオオオ！

魔力弾が当たり、動きを封じる。

「今だなのは！」

「うん！リリカルマジカル！ジュエルシードシリアルＸ？！封印！」

グオオオ！

封印が完了したようだな。

ふう、これで終わりだな。

夕方になり、俺となのはは別れ、家に帰った。

さて、明日からも忙しくなるな。

〔マスター〕

〔なんだ？〕

〔今後現れるフェイトは、どうするつもりですか？〕

〔お前が気にする事じゃない。すでに考えてるから問題ない〕

〔わかりました〕

〈おまけ〉リョウのデバイス！

「そういえば、リョウ君のデバイスってどれなの？」

「ん？これだ。」

〔初めましてなのはさん〕

「ブ、ブレスレットが喋ったなの！」

「こいつが俺のデバイス、バサラだ。」

〔マスターリョウのデバイス、バサラです。よろしく〕

「こ、こちらこそよろしくなの！」

挨拶終了

第４話　なのは、魔導師になる！（後書き）

白黒「第４話完成！とうとう原作スタートだ！」

ライダー「ふふふ…あんな可愛い衣装…私には無益…ふふふふ…」

家康「うおお！ライダー殿！どうしたのだ！？」

セイバー「ああ、ライダーは自分の身長と体型にコンプレックスを持っていましたね。」

テンテン「え～！私はライダーのような長身が羨ましいな！」

ライダー「…本当ですか？」

テンテン「本当よ！」

ライダー「…グスン、ありがとうございます。」

白黒「よかった。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回は、あの娘が登場！」

第5話　フェイト・テスサロッサ登場！（前書き）

白黒「遂に、なのはのもう一人のメインヒロイン登場！」

ライダー「まさか、またリョウの新たな女？」

白黒「あ、あはは…」

セイバー「第5話始まります。」

第5話　フェイト・テスサロッサ登場！

リョウＳＩＤＥ

なのはが魔導師になって一週間がたった。
俺はなのはと協力してジュエルシードを集める。
集まった数は六個、その内の一つは俺が持っている。
この一つを封印し、持ったのは今日、本来はなのはがますます決意を固める日だったのだが、俺がコッソリとジュエルシードを持っていた少年と小さな宝石を交換し、手にいれたのだ。
もちろん、封印し、バサラの中にある。
物語は着実に進んでいるな。
ピンポーン。
ん？誰だ？
俺は玄関に行き、扉を開ける。

「初めまして、お隣に引越ししてきました『フェイト・テスサロッサ』です。」

「…あ、ああ。初めまして創神リョウです。よろしく。」

マジかよ。まさかフェイト本人の登場とは…しかも、お隣りさんとは。
よく見ると、フェイトの隣に、大きな獣がいた。

「ええと、フェイト…でいいかな。その獣は何？」

「…『アルフ』。」

「…犬かい？」

「えっと、狼…かな。」

かなっておい。

…まあいいか。

「…もしよかったら、家に入らない？両親を紹介したいから。」

「…わかった。」

俺はフェイトとアルフを引き連れ、部屋に入る。

フェイトＳＩＤＥ

私は母さんにジュエルシードを集めるのを頼まれ、地球の海鳴市に来ている。

マンションに住み、一応お隣りさんに挨拶をする。

チャイムを鳴らし、現れたのは私と同い年の男の子だ。

とりあえず、互いに自己紹介をする。

男の子が両親を紹介したいから入らないかと言われる。

〔アルフ、どうしようか？〕

〔いいんじゃない。どうせやる事もないし！〕

〔…そうだね〕

私はわかったと言う。

「ああ、そうそう。」

「？」

「俺の事はリョウって呼んでくれ。」

「…わかった。リョウ。」

「ん、よろしくなフェイト。」

！／／

リョウが笑うと何故か胸がドキドキした。／／

なんで？／／

〔どうしたの？フェイト〕

〔！！／／…ううん、なんでもないよ。アルフ〕

とりあえず、リョウのあとを追い、リビングに行く。

入ると、そこに、長い黒髪の女性と金髪の男性がいた。

この人達がリョウの両親かな。

「あら？リョウ？どうしたの？お客さん？」

「うん。隣に引越ししてきたらしくて、その挨拶だって。」

「あらそう。初めまして、私はリョウの母の創神ヒナタ。よろしくね。」

「俺はリョウの父の創神ナルトだ。」

「初めまして、フェイト・テスサロッサです。この子は、アルフ。」

挨拶をする。

「…犬…かな？」

「ええと、狼…らしい。」

「あら、そうなの。」

少し軽い雑談をする。

「あら、もうこんな時間。そろそろ夕食の準備をしないと。そうだフェイトちゃんにアルフ、もしよかったら一緒に食べて行かない？」

「え、でも…」

「そうだな。引越ししてきたんだから、引越し祝いをしよう。」

「それだったら、フェイトの両親も呼んだほうがいいんじゃないかな。」

「ええと…お母さんは、別居中だから、いない。」

私がそう言うと、三人共少し表情が沈んだ。

「そうなの。ごめんなさい。」

「い、いえ。」

「まあいいじゃない。とにかくフェイトちゃん、改めて一緒に食べて行かない？」

「ええと…」

〔どうしようか？アルフ〕

〔いいんじゃないかい。見た所、三人共魔力は一般人クラスだし、リンカーコアも感じない。ここはお言葉に甘えさせて貰おう！〕

〔うん。そうだね〕

「わかりました。ご一緒にさせてもらいます。」

「ええ。ちょっと待ってね。すぐに調理するからね。」

「俺も手伝おう。フェイトちゃんはリョウと一緒に遊んでてくれないか？リョウ、いいか？」

「俺は構わないよ。」

「…わかりました。」

「それじゃあ、ちょっと待っててね。」

ヒナタさんがそう言い、ナルトさんと共にキッチンに入る。
その間に、私はリョウとゲームをした。
よくわからなかったが、リョウが優しく教えてくれたので、楽しく遊べた。
アルフはそこらへんの床に寝ている。

「できたわよ！」

数十分後、料理ができたらしい。
私の前には、家庭料理がならんでいた。
アルフにはドッグフードとお肉が器にのっている。

「さ、どうぞ。」

「あ、はい…いただきます。」

「「「いただきます。」」」

一口食べる。
……

「どうかな？」

「…美味しいです！」

美味しい！
こんなに美味しいのは初めて！
アルフも勢いよく食べている。

「あ、あの、これはなんですか？」

「これ？コロッケっていう食べ物よ。もしかして、知らないの。」

「…はい。」

「そうなの。これは普通に家庭にでる食べ物よ。」

「え、ええと…あの…り、料理とかした事がなくて。」

「え？そうなの？じゃあいつもは何を食べているの？」

「えっと、レトルトを。」

あれ？
急に三人共静かになって俯いた。
なんで？

「フェイトちゃん。」

「は、はい。」

「貴方には、料理が作れるように勉強してもらいます！」

え？え？

「フェイト、まさかレトルトですませる気か？」

「え？でも、レンジでするから簡単だし。」

「さすがに健康や栄養によくないな。」

「そうね。という訳でフェイトちゃんには、夕方には毎日私と一緒に、料理が作れるようになるまで勉強します！いいですね！」

「は、はい！」

こ、恐い！

なんだかわからないけどとても恐い！

食事を終え、私とアルフは自分達の家に戻った。

もちろんちゃんと挨拶をしてから。

「アルフ。」

「ん～。なんだい？」

「隣の人達、温かかったね。」

「うん。結構いい人達だったね。」

「うん。」

私とアルフはそう言い、窓の外の景色を見る。

「でも、私にはやるべき事がある。」

「…そうだね。」

そう、母さんに頼まれた事を。

ジュエルシードを見つけ、集める使命を！

リョウＳＩＤＥ

フェイトが隣に引越ししてきて数日がたった。
今、俺は月村家にきている。

「は～、大きいな。」

「本当に、何時来ても大きいの。」

隣には、なのはと兄恭也、なのはの肩にはユーノがいる。
前門を通り、玄関に入ると、一人の女性と二人のメイドさんがいた。
まずは恭也の彼女『月村忍』次に忍のメイド『ノエル・Ｋ・エーアリヒカイト』最後にすずかのメイド『ファリン・Ｋ・エーアリヒカイト』。

「恭也！」

「忍！」

二人は、挨拶し抱き締めあう。
その後、俺は三人と挨拶する。
そして、俺はなのはとファリンと一緒に、すずかとアリサがいる庭まで移動する。

「いらっしゃい。」

「遅いわよ！」

「ごめん。アリサちゃん、すずかちゃん。」

「悪い。」

とりあえず、軽い挨拶してイスに座る。
そして、雑談しながら紅茶を飲む。
…のだが。
ニャーニャーニャーニャーニャーニャー

「…はあ。」

「にゃはは。リョウ君はネコに好かれてるの！」

「ほんと、こんなの見た事もないわ。」

「家のネコが他人にこんなに懐くなんて、初めて。」

「……はあ。」

何故か知らねえが、俺の周りにたくさんの猫がすり寄ってくる。

〔マスターは、動物に好かれる体質なのでしょうか？〕

〔俺も知らん〕

っていうか、ユーノなんか猫にものすごく追いかけられてるじゃねえか。

〔た、助けて～！〕

〔すまんが無理〕

〔が、頑張ってなの〕

〔ファイトです〕

そんな会話（念話？）をしていると。

「！」

〔なのは！〕

〔これって！〕

〔ジュエルシードだな〕

〔どうします？〕

まあ、わかっているが。

ユーノがネコから逃げるように森に入って行った。

「ユーノ君？」

「森に逃げたようだな。なのは、探してこないと。」

「うん！」

なのはが、ユーノの後を追う。

〔悪いけど、俺は行けないからな。なのは一人でやってくれ〕

〔んにゃ!?どうして?〕

〔俺まで行ったら怪しまれるだろう!〕

〔あ…〕

〔という訳で頑張れよ!〕

〔うん!〕

俺はすずかとアリサと一緒に紅茶を飲みながら、なのはに念話した。
今日はなのはとフェイトの初めての出会いだからな。

〔マスターは何故行かなかったんですか?ごまかす位簡単な筈です〕

〔さすがに、今会ったらまずいだろう。フェイトと魔導師の俺が会うのはもうちょっと後だ。それに、ムダな力を使いたくない〕

〔わかりました〕

なのはがユーノを後を追って十分たった。

「なのは、遅いわね。」

「うん。」

「…仕方ない。俺が探してくる。二人は待っててくれ。」

「大丈夫なの？」

「大丈夫。心配するな。」

「だだ、誰がアンタの心配なんか！／／／私はなのはが心配なの！／／／」

「もう、アリサちゃんは素直じゃないなあ。もちろん私はなのはちゃんもリョウ君も心配だよ。／／／」

「うん。ありがとう。アリサ、すずか。」

「ふ、ふん！／／／」

「うん。／／／」

「そんじゃあ行って来る。」

そう言い、俺はなのはを探す。
というか、すでに見つけているけどな。
こっちに近付いて来てるし。
あ、きた。

「なのは。」

「あ、リョウ君…」

「どうした？何かあったのか？」

「うん…あのね、さっき…」

まあ、知っているがとりあえず聞く。
聞くと、やっぱりフェイトが現れたそうだ。
まあ、まだ俺の事はバレてないようだしな。
話を聞いた後、俺となのはは、アリサとすずかの所に戻った。
戻った後、なのははアリサに怒られたのはご愛嬌だ。
夕方になり、俺は家に帰る。
扉を開けると、何か声が聞こえる。
下を見ると、靴が一つ多い。
これはフェイトの、家に来ているのか。
リビングに入ると、アルフが床に寝そべっている。
ナルトは出かけているのか、フェイトとヒナタは?

「こうして、こうするのよ。」

「わかった。…こう?」

「それじゃあ指を切ってしまうわ!こうよ。」

「こう?」

「そうそう、上手よ。飲み込みが早いわね。」

どうやら料理の練習らしい。
聞く限りしっかりできているようだ。
俺は自室に入り、パソコンをする。
何をするのか?…秘密だ。
・・数十分後。

「出来たわよ。」

俺はリビングに移動する。

「あら、帰ってたの。」

「うん、ただいま。なんか料理を作っていたから声をかけられなかった。それと、いらっしゃいフェイト。」

「あ、うん。」

「さ！食べましょう。」

「「「「いただきます。」」」」

作ったのは、野菜炒めのようだ。

一口食べる。

「…リョウ君。どうかな？」

「…うん、美味しい。」

「！！本当？」

「うん。本当に美味しいよ。」

「そう。よかった。／／／」

そう言うと、フェイトはとても嬉しいらしく微笑んだ。

数十分後には、全部食った。

その後、皿洗いをし、フェイトとアルフは帰った。
…ふう、次は温泉か。
なんだろう、なんか自分の身に危険な予感が。

〔マスター？〕

〔…なんでもない〕

まあ、この予感、杞憂に終わればいいがな。

第5話　フェイト・テスサロッサ登場！（後書き）

白黒「第5話完成！フェイト・テスサロッサ登場しました！」

テンテン「それにしてもフェイトって娘、ヒナタと同じ声ね。」

白黒「まあ、同じ声優だからな。」

セイバー「そう言うテンテンもあのなのはって娘と同じ声ですよ。」

テンテン「そうなのよね～。本当、私の声って罪よね～。」

家康「…」

（つ、突っ込んではいけない！）

白黒「まあいいや。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第6話　温泉！（前書き）

白黒「今回の話は温泉の話です！」

テンテン「温泉か～。いいな、私も温泉に行きたいな～。」

セイバー「私もです。」

ライダー「私も。」

家康「女性は温泉が大好きなんだな。」

白黒「そうだな。そんじゃ、第6話始まります。」

第6話　温泉！

リョウＳＩＤＥ

フェイトが隣に引越してきて数日、今日は高町家、アリサ、月村家と一緒に温泉に行く日だ。
もちろん、ナルトとヒナタも一緒だ。
一応、ナルトもヒナタも車の免許を持っている。
だが・・・何故・・・

「何故こうなった。」

「人間、あきらめが肝心よ。」

「いや、すずか・・・ちょっとこれは・・・」

「何よ！私達と一緒じゃい、嫌なの！／／／」

「いや、アリサ・・・そう言う意味じゃなくって・・・」

「にゃはは。だったら何も問題無いの！／／／」

俺はなのは家の車に乗っているのだが、今の状態は、右になのは、左にすずか、そのすずかの隣にアリサが座っている。
それだけならまだいい。
だが、後の車からものすごい殺気がビシビシきている。
多分恭也だろうな。

まだ父親士郎さんから殺気がこないだけまだましだな。

「士郎さんはいいの？なのはの事。」

「構わんさ。むしろリョウ君なら大歓迎だ。」

「だそうよなのは。」

「お、お父さん！／／／」

「士郎さん。火に油を注がないでください。」

なんか、なのはが抱き付いてきた。
しかも、すずかまで。
アリサはブツブツいいながら悔しがっているし。
恭也は殺気を濃くしたし。
・・・はあ。
勘弁してくれ。

〔マスター。モテモテですね〕

〔それしか言えんのかお前は！〕

バサラは、ある意味無視だもんな。
あ～、早く着いてくれ！
・・・十分後、温泉に到着。
ふう、やっと着いた、やれやれ。
部屋に荷物を置き、さっそく風呂に入るか。
風呂場に着くと、なのはが何かしている。

「どうしたなのは？こんな所で他の客に迷惑だろう。」

「あ、リョウ君。実はね、ユーノ君もいれようとしてるんだけどね。何故かいやがってるの。」

「キュッキュ～！！」

〔た、助けて～リョウ！〕

ああ、そういやなのははユーノが男の子だなんて知らなかったな。仕方ない。

「コイツは一応オスだろう。だから、コイツは俺と男湯にいれる。」

「え～、でも・・・」

「じゃあな。」

そう言い、俺はユーノを掴みそそくさと入ろうとするが。

「じゃあ、わ、わた、私達も一緒に入るの！／／／」

「・・はあ！？」

何言ってやがるコイツは。

「ちょ、ちょっとなのは！何言っているのよ！」

ナイスアリサ！

「あら、私は構わないわ。／／／」

すずか?何、顔を赤くしながら言っているの?

「すずか?」

「嫌なの?アリサ。」

「そ、そう言うんじゃなくて・・・／／／」

なのは達が少し俺にとってよくない話をしているうちに、俺はユーノを連れて男湯に入る。
なのは達はいつの間にかリョウがいない事に気付いたのは、数分後の事である。
・・・男湯。

「ふう〜〜。いい湯だな。」

〔そうだね。助かったよ〕

〔気にするな〕

〔もし、マスターが助けなかったら貴方は淫獣扱いになっていたでしょうね〕

〔・・そうだね〕

約十分、湯に浸かる。
その後、湯から上がり浴衣に着替える。
一度部屋に戻る。
数分たち、俺はなのは達を探しに移動する。

少し歩いたら見つかったが、そこに酔っ払いのおっさんのような絡み方をしている女性アルフがなのは達にガンをつけていた。
知っていると思うが、アルフはフェイトの使い魔である。
その為、人間体にも慣れるのである。
つうか、やめろよアルフ。
それじゃあただの酔っ払いだぞ。
まあ本人にしてみれば、忠告なんだろうけど。
仕方ない。

「ちょっとそこのお姉さん。家の連れに何してるんですか？」

「え？」
（な、なんでリョウがここにいるんだい！？）

「「「あ、リョウ（（君））。」」」

「何絡んでるんですか。迷惑です。これ以上絡むなら、業務員を呼びますよ。」

「あ、あはは～。ごめんごめん、人違いだったよ！お嬢ちゃん達、ごめんよ！」

「全く！さっさと行くわよ！」

「う、うん。」

通り過ぎろうとすると。

〔おちびちゃん〕

〔〔！〕〕
〔・・・〕

〔これは忠告だよ！あんまりあたし達の邪魔をすると、おいたがくるよ！〕

〔〔！〕〕
〔・・・〕

念話で忠告か、全く最初からそうすればいいのに。

〔頭が悪いんでしょうね〕

〔言ってやるなよ〕

その忠告を聞き終えた後、俺達はゲームセンターに行き、遊んだ。

フェイトＳＩＤＥ

ここにジュエルシードがある。
しかも、あの時にいた魔導師もいるようだ。
アルフはちゃんと忠告しただろうか？

「フェイト～！」

「アルフ。」

アルフが帰ってきた。
上手く忠告してきたのかな？

「どうだった？」

「一応忠告しといたよ。けど、多分現れると思うよ。」

「そう・・・」

そう簡単には、いかないか。

「それと、だね・・・」

？

どうしたんだろう、アルフ？
なんだか歯切れが悪い。

「実はさ・・さっき、その魔導師の娘と一緒にさ、リョウが居たんだよ。」

「！？リョウが？」

どういう事？
なんで？

「見た感じじゃあ、友人関係だと思う。あたしの事も知らないしね。
多分、あの娘が魔導師なのも知らないと思う。」

そういえば、リョウには魔力やリンカーコアが無いんだったね。

だから、知らないのは当然か。
それにしても、まさかあの子がリョウと友人関係だったなんて。
チクリ。
？なんだろう？
なんだかわからないけど、リョウとあの子と友人関係だと知ると、とても胸が痛くなる。
これは一体、何？

リョウＳＩＤＥ

アルフと別れて、なのは達と一緒にゲームセンターに行き、ゲームをする。
射的からホッケー、卓球などもやり遊んだ。
夕飯は皆と食べた。
ただ、その間、俺は、なのは達にあ～ん攻撃を食らったり、その時に恭也から殺気をビシビシ感じたりと、とにかく精神が疲れた。
夜になり、風呂に入り、何故か、なのは、アリサ、すずかと一緒に寝る事になった。
ふう・・・さて、どうするか？

「・・・！」

〔マスター！この魔力は！〕

〔動いたな〕

〔どうしますか？〕

〔なのはが起き、動いたら俺も動く〕

〔了解！〕

〔なのは！起きて！ジュエルシードが！〕

〔う、ううん・・・！！これって！〕

〔なのは！〕

〔ユーノ君！これって、ジュエルシードの・・・〕

〔そうだよ！だから、早く起きて！〕

〔うん！すぐに準備するの！リョウ君！〕

〔起きている。俺も準備して動く〕

〔うん！〕

アリサとすずかを起こさないように起き、誰にも気付かれないように外に出る。
バリアジャケットを装着する。
移動中、俺はある事をなのはに言う。

「なのは。」

「何？」

「俺は隠れてお前をサポートをする。」

「ふえ?どうしてなの?」

「あんまり敵に警戒されたくないのと、これはなのは、お前がやるべき事だ。」

「・・う、うん。」

まあ、本当の理由はバレたくないのと、なのはの為だ。
あんまり俺を頼りにされたくない。
できれば、自分の力で切り開いてほしい。
まあ、鍛えてくれと言われれば鍛えてやるが。
もうすぐで着くな。
俺は離れたところで隠れ、待機する。
なのはが木の枝に乗っているフェイトとアルフを見つける。

「待って!」

「・・・」

「君達は、あの時の!」

「あ~りゃりゃ、来ちゃったか。」

「答えて、何故ジュエルシードを集める?」

「忠告を聞いて無かったかい?あたし達の邪魔をするとガブッといくよと!」

そう言うと、アルフが人型から獣型になった。

「え、え？あの人、姿が変わったの！」

「あれは、使い魔か！」

「使い魔？」

「早い話、あの娘の魔力でできた生命体って事。」

「ふえ～！」

〔マスター。マスターは使い魔を作らないんですか？〕

〔俺には必要無い。それに、必要とも思えん〕

俺とバサラが念話でそんな話をしていると、いつの間にか戦いが始まった。

俺はそれを観察する。

「・・・ふむ、流石はフェイトだな。大した腕と魔法だな。」

〔対してなのはさんはまだ魔法に馴染んだばかり、見た限り空を飛ぶのも初めてらしいですね。動きがぎこちないです〕

「それだけじゃない。なのはは、対人戦闘をした事がない。それに今までの戦いは、防御魔法や封印魔法だけだ。攻撃魔法が全く無い。今のままではフェイトに話を聞く事も勝つ事もムリだ。」

〔なるほど。となると、なのはさんは攻撃魔法と戦闘経験を手に入れなければなりませんね〕

「そう言う事だ。」

そんな会話をしている内に、勝負が決したようだ。
勝ったのは、もちろんフェイト。
勝敗が決したのか、レイジングハートからジュエルシードが出た。

「レイジングハート！？」

「きっと主人思いなんだね。」

なのはとフェイトの勝負が終わった為、アルフとユーノも戦いを終え戻ってきた。
終えた後、少し会話をし、フェイトとアルフは去ろうとする。

「待って！名前を教えてほしいの！」

「・・・フェイト。」

「私の名前は・・・」

「行くよ！フェイト！」

「うん。」

フェイトとアルフはなのはの名を聞かず、その場から去った。
フェイトとの戦いを終え、なのはとユーノは旅館に戻ろうとする。
その途中に合流する。

「なのは。」

「あ、リョウ君。」

「負けちゃったな。」

「うん・・・」

まあ、仕方ないけどな。
とりあえず、慰めないとな。

「仕方ないさ。相手のほうが魔法の使い方も戦闘センスも上なんだからな。」

「でも・・・」

「なのは。今のままでは、相手の話を聞く事も相手をしてもらう事もできない。」

「だったら、どうすればいいの？」

「簡単だ。強くなればいい。強くなれば、話を聞いてくれるだろう。」

「強く・・・」

「ああ・・なのは、もし強くなりたかったら、俺に言ってくれ。強くしてやる。」

「・・・」

「まあ、今じゃなくていいからな。」

「うん。」

「そんじゃあ、早く帰るか。アリサとすずかにバレないようにな。」

「うん。」

そして、俺となのはは、旅館に帰還。
部屋に入り、寝た。
次の日の朝、俺はなのは、アリサ、すずかに抱かれて目を覚ました。
つうかいつの間に？
いくらなんでもこれは無い！
・・・はあ、なんか子供相手だと油断するのかな、俺。
もちろん気付かれないように起きた。
朝風呂に入り、午後には、家に帰った。

〈おまけ〉
「はっ！」

「ん？どうしたのフェイト。」

「・・なんかリョウがとんでもない事になったような気がする。」

「気のせいじゃない。」

「うん。そうかも。でも、何故かとてもムカムカする。なんでだろう？」

「さあ？」

第6話　温泉！（後書き）

白黒「第6話完成！なのは強化フラグが立ちました。」

家康「なのは殿はどれほど強くなるのだ？」

白黒「とりあえず、フェイト位の強さを手にいれる予定。」

セイバー「それはぜひ、勝負したいですね。」

ライダー「全くセイバーは、仕方ないですね。」

白黒「ははは。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、A，s編のメインヒロイン登場！」

第7話　八神はやて登場！フェイトにバレる！（前書き）

白黒「今回、あのA’ sのヒロインが登場！」

セイバー「ほう、あの娘ですか。」

ライダー「そしてまた、リョウに新たな女が。ふふふふ。」

白黒「怖！」

家康「第7話出陣いたす！」

第7話　八神はやて登場！フェイトにバレる！

リョウＳＩＤＥ

旅館から帰って次の日、ただいまなのはとアリサが喧嘩（？）中。
理由は、なのはがフェイトの事で何か考えているからである。
アリサはもちろん知らない為、文句を言いまくる。
まあ、俺には関係無い。

「ちょっとリョウ！」

「ん？なんだアリサ。」

「なんだじゃないわよ！なのはが何か悩んでる感じなのよ！なのに私達になんも相談してこないのよ！アンタ、なんとかしなさいよ！」

「断る。」

「なんですって～！」

「どうして？」

「あんまりがっつくのはよろしくない。こういうのは、相手が話してくれるまで根気よく待つだけだ。困ったら、相談に乗ってほしいって言ってきてくれるだろう。それに・・・短気は損気って言うしな。」

「・・・そうね。ありがとう、頭が冷えたわ。」

「さすがリョウ君ね。」

・・授業を終え、家に帰ろうとすると。

「リョウ君。」

「どうしたなのは？」

「ちょっといいかな？」

〔頼みたい事があるんだけど〕

「わかった。」

俺はなのはと一緒に帰る。

公園に移動する。

「んで、なんだい？」

「・・・リョウ君。私を鍛えてほしいの！」

・・フッ、どうやら答えを得たようだ。

「わかった。ただし、俺は厳しいぞ。覚悟はいいか？やめるなら今の内だぞ。」

「・・大丈夫。あの娘、フェイトちゃんと絶対にお話をしたいから！」

「そうか、わかった。それ・・」

「待ってなのは！」

「ユーノ君？」

いつの間にかユーノがいた。

なんだ？

「なのはが強くなりたいのはよくわかったよ。けど、リョウの魔力量はなのはより少ないんだよ。」

「え、そうなの？」

ああ、そういえばそうだったな。

忘れていた。

「なのは、ユーノ、実は俺は実力を隠している。」

「どういう事なの？」

「ユーノ、お前が感じている魔力量は実は、俺が押さえているからだ。」

「なんだって！？」

〔そうです。マスターは魔力を押さえています。その気になれば、なのはさんやフェイトさんの魔力を上回ります！〕

「ふえ～、凄いの！」

「でも、なんでそんな事を?」

う~ん、どう言おうか。
管理局に利用されないようにというのが答えだけど・・それ以外だと、これしかないな。

「理由は簡単だ。鍛える為だ。」

「鍛える為?」

「ああ。それに、隠したのはあんまり目立ちたくなかったからな。」

〔どうせ、後に目立つでしょう〕

〔この世界ではあんまり目立ちたくない。管理局がおるからな〕

〔確かに、モルモットはごめんですね〕

〔犬になる事もな〕

「・・・なるほど、わかりました。」

どうにかユーノは納得したようだ。
なのははちんぷんかんぷんのようだ。
頭から煙がでている。

「なのは。」

「ふえ!?な、何?」

「鍛えてやるが、それは明日からな。いいか？」

「うん。わかったの。」

そう言い、なのはは帰った。
俺も帰る。
次の日、学校を終え、帰り、俺は密かに影分身をする。
分身体はなのはと共に公園で結界を貼り、修業する。
本体である俺は、とある建物に行く。
その場所は、図書館。
ここに来た理由は。

「ここに、あの娘がいる。『八神はやて』が。」

そう、俺ははやてに会いに来たのだ。
理由はいずれ話そう。
俺は図書館に入る。
さて・・どこに。

「・・う～ん、届かへん。」

いたよあっさり。
車椅子に乗ったショートヘヤーの髪をしたなのはやフェイトと同い年の女の子、はやてが本を取ろうと四苦八苦していた。
俺ははやてに近寄り、はやてが取りたい本を取り、はやてに渡す。

「これかい？」

「あ、ありがとう。すんまへん。助かりました。」

「いや、大変そうだったから。それに、それじゃあ無理だったろう？」

「いや、ほんますんまへん。」

俺ははやてと一緒に本を呼んだ。

なんの本かは、読者のご想像にお任せします。

とりあえず、なんか話すか。

「そういえば自己紹介がまだだったね。俺は創神リョウ。君は？」

「うちは八神はやてといいます。」

「八神はやて・・うん、覚えた。よろしくな。」

「こちらこそよろしゅうな。創神リョウ君。」

「リョウでいいよ。俺も君をはやてって呼ぶから。」

「うん。ほんじゃあよろしゅうな。リョウ君。」

よし、とりあえずはやてと会え仲良くなれた。

「そういえば、はやての両親はいないのか？」

「うち、両親おらんねん。」

「・・ごめん。悪い事を聞いたね。」

「いいんや、別に気にしいひんといて。」

「・・すまない。という事は、一人暮らしなのか。」

「うん、そやで。」

「そうか。」

それから一時間ほど、はやてと会話をした。

「さて、そろそろ帰ろうか。」

「ああ、俺が送ろうか？」

「ええよ別に。一人で帰れるよ。」

「駄目だ。一人だと危ない。俺がはやてを守るよ。」

「え！？／／／」

ん？なんで顔が赤くなってよんだ？

まさか・・・

〔マスター、またですか。無意識すぎます〕

〔・・やっぱりそうなのか。なんでこうなるんだよ？〕

〔私は構いませんが、苦労するのはマスターです。それに、これをしればなのはさん達がどんな反応するのでしょうか〕

〔・・・（ぞわっ）勘弁してくれ〕

バサラめ、余計な事を。
恐い、何故かものすごく恐怖を感じるんだが。
ブルブル・・なんとか震えを振り払う。

「さっ、家は何処だい。俺が引っ張るからさ。」

「う、うん。／／／そんじゃあお願いするな。／／／」

「ああ。」

そう言い、俺ははやてをはやての家まで運んだ。
運んだ後、実家に帰る。
実家に着くと、分身体からの情報からきた。
・・ふむ、どうやらしっかり鍛えているようだ。
とりあえず、攻撃の基礎と飛行訓練と防御と回避の基礎を教えたようだ。
しかもなのはは、元から高い素質を持っていたので、すぐに物にしたようだ。
これならすぐにフェイトと互角の強さが手に入るな。
・・次の日、なのはとアリサは仲直りをした。
ふう、よかったよかった。
学校の帰り、はのはは分身体と一緒に修業、本体の俺ははやてに会いに図書館に移動する。
図書館に入り、はやてに会い、談笑する。
数十分後・・！

〔マスター！〕

〔ああ、フェイトだ〕

〔行きますか？〕

〔当然だ〕

「はやて、悪いが俺はもう帰るわ。」

「・・うん。」

「ごめんな。もしよかったら今度家に遊びに来てくれるか？一緒にゲームとかして遊ぼうぜ！いっぱいあるからさ。」

「ほんま！」

「ああ。」

「ほんなら今度な。絶対やで！」

「おう。」

そう言い、俺は図書館を出、人気が無い所でバリアジャケットを装着し、フェイトがいる場所の近くまで移動する。
フェイトがいる場所まで移動後、近くの建物の影に隠れる。
数秒後になのはが到着。
分身体が俺の近くに来ると同時に消える。
情報が流れる。
・・ふむ、ちゃんと魔力を回復さしてるな。
なのはとフェイトが対峙する。
言い忘れていたが、しっかりと結界は貼ってある。

ん、なんか話しているな。
なのはが話を聞かせてといい、フェイトが言いそうになるがアルフが止め、甘ったれに話す事は無いと言っている。
まあ俺にはどうでもいいが、アルフ・・外見で判断してはいけないな。
む！戦いが始まったな。
なのはとフェイトは激しい空中戦を、ユーノとアルフは地上戦を開始した。
つうか、ユーノとアルフ、あれはどうかと言うと追いかけっこだな。
まあ、それは放置、俺はなのはとフェイトの戦いを見る。
・・ふむ。

〔やりますね。たった一日、それも僅か数時間でここまでとは〕

〔全くだ。あれは才能というしか他は無い。まあもっとも、フェイトもまだ全力じゃ無いがな〕

〔そうですね〕

俺とバサラはじっくりと二人の戦いを見、観察する。

〔うお！なのはの奴、砲撃をしやがった！あれはディバインバスターだな。やるなあ、なのは〕

〔そうですね。本当になのはさんは素晴らしい才能ですね〕

〔全くだ。後に教導官になるのも、納得だな〕

〔本当です。しかし、まだ甘いですね〕

〔まあ、それは仕方ないさ。フェイトもそれなりに訓練を受けているんだしな。これから次第に強くなっていくさ。なのはは〕

〔そうですね〕

そんな会話をしていると、なのはの砲撃とフェイトの砲撃が、ジュエルシードの近くでぶつかりあう。
すると、ジュエルシードから膨大な魔力が放出する。
これは・・暴走か！

〔バサラ！俺に強力な結界を貼れ！管理局に気付かれないようななな！〕

〔了解！〕

さて、フェイトにバレるが。

「行くか！！」

なのはＳＩＤＥ

私の砲撃とフェイトちゃんの砲撃がぶつかった瞬間、ジュエルシードがいきなり光眩く輝いたの！
これって、なんなの！？

「なのは！」

「ユーノ君！一体どうなっているの！？」

「おそらく、ジュエルシードが暴走したんだと思う！」

「暴走！？」

「うん。このままでは、次元震が起きて、この辺りを飲み込んでしまう！」

「え～～！ど、どうするの！？」

「なんとかして、ジュエルシードの暴走を止めなくちゃ！」

ユーノ君とそんな会話をしていると、フェイトちゃんがジュエルシードに近付いて行ってるの！

「フェイト！！」

「フェイトちゃん！？」

「まさか、ジュエルシードの暴走を止める気か！無理だ！彼女の魔力も減っているのに！」

そんな！

私もフェイトちゃんの所に行こうとするが。

「やめろ、フェイト。俺に任せろ。」

「！？リョウ！？」

リョウ君！
リョウ君がフェイトちゃんの腕を掴んで、フェイトちゃんを後方に投げたの！

「フェイト！大丈夫かい？なんでリョウの奴が・・」

「大丈夫だよ、アルフ。私にもわからない。どうしてリョウが・・！」

！？リョウ君がジュエルシードを右手で掴んだの！
すると、ジュエルシードの光がさらに輝きだしリョウ君の右手が傷ついていくの！

「リョウ君！」
「リョウ！」

「くるな！任せろ！」

そう言うけど、リョウ君の右手、とても痛そうだの！
・・アレ？
なんだか、ジュエルシードの光がどんどん消えていくの！

「そんな！？ジュエルシードの暴走を止めたのか！？」

「嘘！？」

え？え？つまりリョウ君がジュエルシードの暴走を食い止めたという事なの！
完全に光が消え、暴走が止まったの。

「ふう、これで暴走が止まった。バサラ。」

〔了解。ジュエルシード封印！〕

ジュエルシードが、バサラに封印されたの。

「・・・引くよ。アルフ。」

「フェイト！？でも・・」

「アルフ。」

「・・わかったよ。」

あ、フェイトちゃんが行っちゃったの。
私は追いかける気はなかったの。
それよりも、リョウ君！

「リョウ君！大丈夫？」

「なのは、大丈夫だ。心配かけたな。」

「でも、右手が・・」

「問題ない。こんな怪我、すぐに治るさ。」

「・・うん。」

リョウ君が大丈夫なら、大丈夫なの！

「さて、そろそろ帰るか。なのはも帰りな。」

「うん、わかったの。・・」

「なのは、フェイトはいずれまた現れる。その時に・・な。」

「うん！」

そうだね、フェイトちゃんはまた現れるの。
その時に、今度こそお話をしてもらうの！

「それじゃあまた明日な。」

「うん！また明日なの！」

そう言い、リョウ君と別れたの。
次こそ絶対にフェイトちゃん、お話を聞かせてもらうの！

リョウＳＩＤＥ

痛っつ、一応魔力や気やチャクラで包んで掴んだけど、ここまでとは。

「暴走すると、ここまで凄まじいとは。包んでなかったらどうなっていた事か。」

〔そうですね。さすがはジュエルシードって事ですか〕

「だな。まあしかし、ジュエルシードを封印できたし、よしとするか。」

〔そうですね。フェイトさんも怪我しなくて済みましたから〕

「だな。」

そう言い、俺は家まで飛ぶ。

・・ん？

あれは・・

〔マスター・・〕

「わかっている。バレたんだ。ちゃんと説明しないとな。」

マンションの屋上でフェイトとアルフが立っていた。

さて、上手くやってみますか。

フェイトＳＩＤＥ

なんでリョウがいるのか？

なんでリョウがあの魔導師の娘と一緒にいたのか？

なんで・・リョウが魔導師になっているのか？
わからない事だらけだ。
あの時、初めて会った時、魔力もリンカーコアも感じなかった。
それに、さっきも魔力をあんまり感じなかった。
けど・・あの暴走したジュエルシードをあっさり止め、封印した。
普通は有り得ない。
もうなんだかわからない。
こうなったら、本人に直接聞くしかない。
私はマンションの屋上で待つ。
数分後、リョウが飛んできた。

「リョウ・・」

「アンタ、一体・・」

「話してやる。とりあえず、家に入りな。」

「・・わかった。」

とりあえず、私とアルフはリョウと一緒に家に入る。
リビングに入るとナルトさんとヒナタさんがいる。

「おかえりなさい。それに今晩はフェイトちゃんと・・君は誰だい。」

「あ、えっと・・」

「あとで教えるよ。その前に母さん、手の治療を頼むよ。」

「どうしたの？・・これは・・」

「ちょっと・・お願い。」

「わかったわ。」

ヒナタさんはリョウに近付き、右手を見、両手を右手に添える。
すると、ヒナタさんの両手が淡く光だし、リョウの右手の傷がどんどん治っていく。

「フェイト！これって！？一体・・」

「わからない。魔法じゃ無いみたいだけど。」

一分後、リョウの右手が完全に完治した。

「・・うん、ありがとう母さん。」

「いいえ、それでリョウ、説明してくれないかしら。」

「ああ。」

まずは私の隣にいる女性、アルフを説明。
ナルトさんとヒナタさんはこの女性がアルフだとしりとても驚いていた。
そして、自分が魔導師だと教える。
次にリョウの事を教えてもらう。
リョウも魔導師だと教えてもらう。
ナルトさんとヒナタさんも魔導師なのか聞くと、二人は魔導師じゃないらしい。
さっきのは何か聞くと、あれは魔力とは別の力らしい。

詳しく聞くがちんぷんかんぷんだ。

「それで聞くけど、なんで今まで隠していたんだい？」

「・・理由は簡単だ。なのはの為だし、何より管理局に気付かれたくないからな。」

「管理局を知っているのかい！？」

「まあな。」

「管理局を嫌っているのかい。」

「ああ、管理局がどんなのか知っているつもりだ。もし俺の存在をしれば、利用するに決まっているからな。そう言う事だ。」

「なるほど。」

納得できた。
けど・・どうして？

「どうして、あんな事を？」

「あんな事？・・ああ、さっきのか。」

私は首を縦にふった。

「これも理由は簡単だ。フェイトに傷をつけたくなかったからな。」

「え？／／／」

そ、それってどういう事？／／／
な、なんでこんなに胸がドキドキするの？／／／
一体どうしたの？私。／／／
これって、もしかして。／／／

「フェイト。どうしたの？」

「あ。／／／な、なんでもないよ、アルフ。／／／」

「本当に・・」

「大丈夫だよ！アルフ！」

「わ、わかった。」（汗）

ふう、アルフのおかげで少し落ち着けた。

「フェイト。」

「は、はい！／／／」

もう～、ま、またなんか変な感じになったよ～。

「とりあえず、言っておきたい事がある。」

「な、何？／／／」

「俺はお前のジャマはしないし。なのはとの戦いをジャマする気は無い。」

「・・どういう事？」

「別に俺は、ジュエルシードを集めているわけじゃない。たまたま手伝ってるだけだ。それだけだ。」

「・・うん、わかった。」

「サンキュー。それと、約束してくれねえか？」

「約束？」

「ああ、なのはには言わないでほしい。かわりに俺もお前の事をなのはには言わない。」

「どういう事？それは。」

なんで？

「別に深い理由は無い。まあ、ちょっとな・・」

「？そうですか。わかりました。」

「サンキューフェイト。お礼にコレをやろう。」

そう言うと、デバイスからある二つの物がでてきた。

！これは、ジュエルシード！

しかも二つも！

「どこで・・」

「一つはさっきの。もう一つは、前に偶然見つけてな。」

「そうですか。」

「どうする？いる？」

「いります。」

「あいよ。ほら、やるよ。」

そう言って、私にくれました。

「いいの？」

「別にいらん。それに、それは口止め料だと思ってくれ。」

「わかりました。」

「ありがとう。」ニコッ

ドキッ！

ま、また胸が・・／／／

ほ、本当に一体どうしたの私！／／／

リョウＳＩＤＥ

その後、フェイトとアルフも一緒に飯を食い、フェイトとヒナタが一緒に風呂に入った。
俺はアルフが入ったあとに入る。
風呂から上がり、フェイトとアルフは帰った。
その直後、ヒナタから話がきた。

「リョウさん。」

「どうした？ヒナタ。」

「フェイトちゃんと一緒にお風呂に入った時にね、あの娘、なんだか鞭みたいな物で叩かれた跡がたくさんあったのよ。一応その跡をきれいに消したけど、あれは一体。」

「あれは・・」

あの叩かれた跡は、母親がやった事だと話す。

「酷い・・」

「許せないってばよ。」

「心配するな。俺に考えがある。任せてくれ。」

「「わかった（ってばよ）。」」

さて、明日だな。
いよいよ、あの大魔導師と出会う。
とりあえず今は。

「寝よう。」

俺はベッドに潜り、寝た。

そう、全ては明日。

第7話　八神はやて登場！フェイトにバレる！（後書き）

白黒「第7話完成！遂にフェイトにバレてしまいました！」

テンテン「バレちゃったね。」

セイバー「それにしても、あのはやてって娘、凛の声によく似てますね。」

白黒「まあ同じ声優だしね。」

家康「リョウ殿。なんて無茶を。」

ライダー「それでこそリョウです。」

白黒「うむ。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、あの大魔導師出現と交渉！」

第8話　大魔導師プレシア・テスサロッサ！交渉！（前書き）

白黒「サブタイトル通り、フェイトの母親登場！」

家康「どうやって説得するのだ？」

白黒「まあ、見てくれたら分かる。」

ライダー「戦闘シーンが最近ありませんね。」

白黒「すみません・・」

セイバー「第8話始まります。」

第8話　大魔導師プレシア・テスサロッサ！交渉！

リョウＳＩＤＥ

フェイトにバレて次の日の昼頃、俺はフェイトとアルフと一緒にマンションの屋上にいる。
フェイトと一緒にいる理由は、時の庭園に行くからだ。

「本当にいいのか？フェイト、俺も一緒に行って。」

「うん。私は構わないよ。アルフは？」

「あたしも別に。」

「わかった。」

これはまさしく、チャンスだ。
上手くいけば交渉ができるな。
ん？
学校はどうしたか？
もちろん、影分身に行かせた。
さて、行くか。

「座標（以下省略）・・行くよ。」

んむ、行くか。

〔マスター座標を記録しました。これで今後、楽にいけます〕

〔そうか〕

〔それにしても、以下省略はいただけません〕

〔仕方ないだろう。作者は覚えてない上に、長くて書くのも面倒くさいからな〕

〔マスター。メタな発言をしてはいけません〕

そうだな。

地面に魔法陣が現れ、俺達を光で包む。

・・・ん、時の庭園に到着したようだ。

周りを見る。

思った以上に広いな。

「リョウ、どうする？一緒に来る？」

「いや、俺は少しこの時の庭園を探索するよ。」

「でも、ここは広いし、場所はわかるの？」

「問題無い。フェイトの魔力はバサラが覚えた。だから、お前の魔力を目印にする。」

「・・そう、わかった。それじゃあ、行ってくるね。」

「ああ。探索しおえたらすぐに行くよ。」

「うん。わかった。」

「迷うなよ～！」

そう言い、フェイトとアルフは行った。

俺は時の庭園を探索する。

・・・数分後、全部を見回った。

〔バサラ、記録したか？〕

〔バッチリです。しかし、あんまり使う必要も無いでしょうね〕

〔そうだな。それにしても、思った以上に広いな。初めてきたら間違いなく迷っていたな〕

〔ですね〕

〔さて、そろそろフェイトの所に行くか〕

〔了解。・・マスター！これは・・〕

〔わかっている。急ぐぞ！〕

フェイトの魔力が減ってきている。

俺は急いでその場所まで移動する。

一分後、俺の前に門があり、その近くにアルフが座って震えていた。

「アルフ。フェイトはどうした。」

「リョウ～！フェイトを助けてくれよ～！」

「・・わかった！」

俺は門を粉砕する。

粉砕し、入るとそこには、バインドで封じ縛られ、鞭で叩かれるフェイトと、バインドでフェイトを封じ縛り、鞭で叩くフェイトの母親『プレセア・テスサロッサ』がいた。

「フェイト！」

「う・・うう・・リ、リョウ・・」

「誰かしら？貴方。」

俺はフェイトの所に移動し、バインドを破壊。

フェイトは倒れそうになるが、抱き締め受け止める。

「大丈夫か。」

「・・うん・・」

「フェイト～！」

「アルフ・・」

「アルフ、フェイトを連れて時の庭園から去れ。俺は少し用がある。」

「で、でも！」

「心配するな。少し相手をしたらすぐに帰ってくる。」

「・・わかったよ。絶対に帰ってこいよ！」

「ああ。」

そう言い、アルフはフェイトを背負い、この場から去る。

さて・・・

「アンタが大魔導師プレセア・テスサロッサだな。」

「ええ、そうよ。貴方は？」

「俺は創神リョウ。フェイトの友人だ。」

「そう。で、私に一体なんの用かしら。」

これから俺は、誰もがする原作ブレイクをする。

そう・・・

「アンタと交渉したい。」

プレセアを生かし、その娘『アリシア・テスサロッサ』を生き返らせるという行為を！

プレセアＳＩＤＥ

私はフェイトをバインドで縛り、鞭で叩く。
本当はジュエルシード全部手にいれてきて欲しかったわ。
でも、たったこれだけしか手にいれてきてなかった。
しかも、謝らなかった。
叩いたら謝ったけど。
これがアリシアならまず最初に謝るでしょうね。
でも、フェイトはアリシアじゃない。
アリシアに似ているけど、結局はコピー。
しかも欠陥品だわ。
アリシアなら私は必ず許すわ。
けど、この欠陥品は許さない。
早くジュエルシードを集めて、あの伝説の地アルハザードに行かねばならない！
娘を・・アリシアを生き返らせる為にも！
フェイトを叩いている時、門が破壊された。
破壊したのは、あの欠陥品の友人らしいわ。
まあ、どうでもいいわ。
この聞き分けの無い坊やには、一度痛い目を合わせなくちゃね。
でも、この坊やからでた言葉は交渉だった。

「交渉？なんのかしら。」

「ああ。だが、その前に。」

坊やが少し移動し、壁を触る。
！
そ、そこは！

「ま・・」

言おうとする前に、坊やが隠し通路に入る。
いけない！
あそこには！
私は急いで後を追う。
隠し通路を通り、隠し部屋に入ると、坊やがアリシアが入っているポッドを見ている。

「私のアリシアから離れない！」

私は坊やに雷を放つ！
しかし、坊やは躱した。

「クッ！」

「これが、お前の娘、そして、フェイトのオリジナルのアリシア・テスサロッサか。」

「そうよ。貴方、どうやって知ったの！」

「そう簡単に教えられないな。まあ、それはいい。さて、プレセア・テスサロッサ、交渉・・いや、取引をしよう。」

「・・なにかしら。」

「なあに、簡単な事だ。フェイトをちゃんと娘として見てやって欲しい。」

「ふざけないで！何それ！なんであんな欠陥品を！」

「もし、娘として見てくれたなら、アリシアを生き返らせてやる。」

「なんですって!?」

アリシアを生き返らせる!?

そんな事・・

「出来るわけないでしょう!アンタみたいな坊やに!」

「できる。どうやって生き返らせるかわいえないがな。」

あの目・・嘘をついてないわね。

「残念だけど、貴方の力を借りる気は無いわ。私にはある方法があるから。」

「約束の地アルハザードか。」

「!?」

「残念だが、そんな低い確率のより、俺の方法のほうが堅実にして確実だ。」

「なんですって?それに、何故貴方がアルハザードを!」

「それも、条件を飲んでくれたら、いずれ教える。どうする?」

確かに、アルハザードに行ける確率はかなり低い。

それに、坊やのは堅実で確実らしいわね。

当然この坊やの案に条件に乗った方がいい。

「けど、残念だけど却下するわ。貴方の案は魅力的だけど、その交換条件がいただけないわ。」

「・・理由を聞こう。」

「簡単よ。あの娘は私にとっては人形よ。人形を人として、何より娘として見る事なんて不可能よ。」

「そうか・・」

「わかったかしら、じゃあ・・」

「なら、アリシア本人の意志を聞こう。」

「!?」

アリシアの・・意志ですって!?
どういう事!?

「・・説明してくれないかしら。」

「そのまんまの意味だ。アリシアの魂を呼び寄せ、本人の意志を知る。」

「ふざけないで!そんな事、出来るわけ・・」

「できる。まあ任せとけ。」

アリシアの魂を呼び寄せる！？
そんな事、出来るわけ無い。

〔マスター。やはりこの部屋にアリシアの魂があります〕

「俺も驚いている。おそらく、母親プレセアが心配なんだろうな。」

アリシアの魂がここにあるですって！？

「ど、どういう事よ！」

「本来、人が死んだら、魂はあの世にいくんだが、何か未練や気になる事、他にもいろいろなそんな事でとどまったり、その人に付いて行ったりするんだ。まあ、とどのつまり幽霊だな。」

「幽霊！？」

「ああ。もともと幽霊ってのは、未練を残して死んだ者の事だからな。それに、ここに肉体があるから魂だけの状態だからな。」

「そ、それじゃあ、魂を肉体に戻せば生き返るのね！は、早くして！」

「落ち着け、はっきり言ってしまえばたとえ魂を肉体にいれても生き返らない。」

「どういう事よ！説明して！」

「わかっている。簡単に言ってしまえば、死んでしまえばたとえ肉体があり、魂があっても蘇生しない。本来肉体と魂は、生命の糸が

繋がってるんだ。」

「生命の糸？」

「簡単に言えば、肉体と魂の繋がりだ。」

なるほど。

「つまり、肉体と魂があってもその糸が無ければ生き返らないと言う事ね。」

「そう言う事だ。」

納得したわ。

・・・で。

「どうやってアリシアと会話するの？」

「俺のレアスキルを使えば、会話できる。」

「ほ、本当に！？」

「ああ。」

「じゃ、じゃあすぐにやってちょうだい！アリシアと話させて！」

「わかった。ちょっと待ってくれ、すぐに準備する。」

そう言うと、坊やが印を結ぶ。

「変化！」

すると、坊やが煙に包まれ、煙が消える。

「！あ、ああ・・アリシア！？」

坊やがアリシアになった！？

「何これ・・変身魔法？」

「まあ、そんなもんだ。」

「でも、魔力を使った感じじゃなかったわ。」

凄いわね。

声もアリシアそっくりだし。

「さて、アリシアと話させてやるぞ。心の準備はいいか？」

「いいわ。お願い。」

「了解。行くぜ！バサラ！」

〔了解。・・・マスター、アリシアの魂を捕捉、捕らえました〕

「よし。アリシア、人魂モード！」

何！？

坊やの右手に青白い炎みたいな物が！

これが、魂。

アリシアの・・

「憑依合体アリシア！」

アリシアの魂を坊やが取り込む。

坊やは動かない。

「・・お母さん。」

「！？アリシア・・」

「お母さん！」

「アリシア！」

ああ！

アリシア！

アリシアを抱く！

「アリシア・・会いたかったわ。」

「お母さん。あたしもお母さんに会いたかった。」

「アリシア！アリシア！」

「お、お母さん・・苦しいよ。」

「え？あ、ああ、ごめんなさい。」

私は、抱くのをやめる。

でも、嬉しい！
また、アリシアと話せるなんて！

「アリシア、坊やが貴方がこの時の庭園にいる事は聞いたわ。」

「うん。あたし、お母さんが心配だったから。」

「アリシア・・・」

これは一時的なものだけど、いずれ必ずアリシア、貴方を！

「お母さん。」

「何？アリシア。」

「・・・」

「どうしたの？」

「あの娘を、フェイトを優しくして？」

「え？」

どういう事なの？

「どうして？」

「フェイトはあたしからすれば、いわば妹だよ。姉として、妹を心配するのは当然だよ。」

「でも、あの娘は・・」

「知っているよ。あの娘の事は。だけど、そんなの関係ないよ。フェイトはあたしの妹だよ。」

「で、でもね。」

「お母さん。」

「な、何？」

「お母さんのやってきた事、あたしは死んだあと、ずっと見てきた。フェイトにやった事も。」

「ア、アリシア・・」

「お母さんがジュエルシードを集めている理由も。」

「・・・」

「お母さん。もうあたしの為にこんな事をしないで！」

「あ、アリシア！」

まさか、見ていたなんて。
それに、アリシアにこんな事言われるなんて。

「お母さん。あたしを生き返らせてくれるのは、とても嬉しいよ。でも、その為にフェイトをあんな酷い事して。」

「アリシア・・」

・・・私は、アリシアを生き返らせたい一心で、やってきたのに、まさかアリシアに怒られるなんて。
しかも、あの欠陥品・・いや、フェイトにやった事も。

「ふふふふ・・・」

「お母さん？」

「最低ね私。アリシアの為にやってたのに、それに、アリシアの言葉のおかげで、ようやく気付くなんてね。」

「お母さん。」

「アリシア。こんなお母さんでごめんね。私はとんだ過ちを犯したわ。私はアリシアの為だってやってきた事も、結局は自分の為だったって事を。」

「お母さん・・」

「アリシア、私は自分の過ちを贖罪しなければならないわ。私は・・・」

〔その必要は無い〕

「！？この声は！」

坊やの声！
念話で話してくる。

〔俺は別にアンタのやり方を否定しない。俺も似たような事をするからな。だが、俺はフェイトにやった行いを許せないだけだ〕

「お兄ちゃん、何言っているの？」

〔まあ、そんな事はいいんだ。俺が言いたい事は、アンタが罪を背負う必要は無いという事だ〕

「どういう事？」

〔まあ、それは後で〕

〔それよりマスター〕

〔ああ、そうだったな。アリシア、そろそろ時間だ〕

時間？

「うん。そうだね。」

「アリシア？」

「そろそろ、戻らないと。何時までもお兄ちゃんの身体を使ってちゃあいけないもんね。」

「どういう・・事？」

〔簡単に言ってしまえば、俺の肉体から離れる時間だ。あんまり長くとどまると消えてしまうからな〕

「そ、そう・・・」

もう少し、アリシアと話したかったな。

「お母さん。忘れないでね。あたしアリシアは、何時までもお母さんを見守っているよ。」

「アリシア。わかったわ。」

「うん。お母さん。妹を、フェイトをもういじめちゃあだめだよ！」

「ええ、わかったわ。もういしめないわ。アリシアにもう怒られたくないわ。」

「うん！お兄ちゃん！ありがとう！お母さんとお話しさしてくれて！」

〔いいって。気にするな。生き返れば、いつでも話せるからな〕

「でも・・」

〔いやかもしれないが、俺はお前を絶対に生き返らす。これはわがままだ。俺のな。だから気にするな〕

「・・うん。わかった！」

〔それじゃあな、またな〕

「うん！じゃあね！」

そう言うと、アリシアの魂がでてきて、消えた・・・いや、見えなくなった。
見えなくなった後、坊やは元の姿に戻った。

「ふう。」

「・・ありがとう。アリシアともう一度、話をさしてくれて。」

「俺がすきにやった事だ。」

「そう。」

「んで、どうする?条件を飲むか?飲まないか?」

条件?

・・ああ、そういえば、そうだったわね。

「・・フェイトはもういじめないわ。けど、もう少し、時間をくれないかしら。」

「構わないぜ。ただし、あんまり待てないがな。」

「そうね。・・!ゴホッ!ゴホッ!」

「・・そういえば、アンタ、病持ちだったな。」

やっぱり、知っていたのね。

ふふふ・・もう、驚かないわ。

坊やは私に近付き、ある薬品の瓶を渡した。

「これは？」

「ポーションだ。平たく言えば、回復アイテムだ。１０瓶やろう。これで体力はしばらくもつだろう。」

「・・ありがとう。」

私は、ポーションを飲む。

！・・凄い！

身体が軽くなった。

「すごいわね。」

「ただ、さすがに病は治せないがな。」

「いいえ。これだけでも、充分よ。」

「そうか。ああ、そうそう、言い忘れてたことがあった。」

「何？」

「管理局のデータとかないか？例えば、アリシアだ死んだ原因になったのとか。」

どういう事？

「まあ、アンタやアリシア、フェイトの為だな。」

・・そう。

「ありがとう坊や・・いえ、リョウ。」

「フッ、気にするなプレセア。アンタと同じで俺個人の勝手だからな。じゃあな。次からは、フェイトを優しくしてやってくれよ。」

「ええ。」

彼は、時の庭園から去る。
これからどうするか、考えないとね。
アリシアの事、フェイトの事を。

リョウＳＩＤＥ

俺は時の庭園からマンションの屋上に移動する準備をする。

〔マスター〕

「どうした？」

〔なんで仙豆をあげなかったのですか？〕

「仙豆は万能じゃない。傷や体力は回復できても、病気までは治療できない。」

〔そうですか〕

「さあ、帰るぞ。フェイトが心配しているはずだからな。」

〔了解〕

数秒後、時の庭園からマンションの屋上に移動。
フェイトは・・俺の家におるのか。
帰るか。

「ただいま。」

「あ、おかえり。」

「リョウ!アンタ大丈夫なのかい?あの鬼婆に酷い事されてないかい?」

「大丈夫。何もされてない。少し話をしただけだ。」

「そう・・かい。なら、いいよ。」

「それよりフェイト、君の方こそ大丈夫かい?」

「あ、うん。大丈夫だよ。ヒナタさんに治療してもらったから。」

「そうか。」

「リョウ・・／／／」

「ん?」

「あの・・あ、ありがとう。／／／」

「フフッ、気にするな。」

フェイトの怪我も完治し、一緒にご飯を食べて、フェイトとアルフは家に帰った。
俺は風呂に入り、パジャマに着替え、自室のベッドに倒れる。
今日は少し疲れたな。
あの憑依合体は、かなり体力を使ったな。
しかし、初めて使ったにしては、上出来だな。
さて、次はＫＹと管理局が現れるな。
もちろん、すでにどうするか考えている。
とりあえず、ＫＹはフルボッコだな。
まあ、今はそれより・・・

「何故、お前がここにいる。アリシア。」

〔あれ？気付いていたの？〕

「悪いが気付いていた。」

そう、何故かアリシアの魂が俺に付いてきていた。
全く、仕方ない。

「お兄ちゃんに興味あるもの。それに・・・／／／」

おいおい、またフラグを立てたのか？
なんでだよ！
なんでこうなるんだ！？

〔無自覚なんですね。マスター〕

勘弁してくれ。
俺はただ、幸せになってもらいたいだけなのに。

「ふふふ・・・ライバルは多いようだね。でも、負けない！」

はあ。
もういい、俺は寝る！

〔マスター。現実逃避ですね〕

だまれバサラ！

「お兄ちゃん。次からは、お兄ちゃんじゃなくてリョウ君って呼ぶね。」

もう好きにしてくれ。
あ、そうそう、分身体からちゃんと情報も入っている。
なのははかなりできるようになったらしい。
はやてはいつものように楽しんだ上、病院の医師、石田先生と出会えたようだ。

第8話　大魔導師プレシア・テスサロッサ！交渉！（後書き）

白黒「第8話完成！今回はかなり難解した話です。」

テンテン「なんでこんなふうになったの？」

白黒「最初は、プレセアに怒りをあらわにし、諭す！って方法を考えていたんだが、それやったら、自分がやっている事はどうなんだ？って事になってね。それで、こうなった。」

セイバー「なるほど。」

ライダー「これが、読者の皆様方から見たらどんな反応をするのでしょうか。」

白黒「そうなんだよね。読者の皆様方、もし読んでくれたなら、感想を下さい！よろしくお願いします！」

家康「ワシらでは、どうも難しいからな。」

白黒「うん。それじゃあ、皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、ＫＹフルボッコ！」

憑依合体・・シャーマンキングの技。死んだ人の魂を肉体に憑依させる事ができる。死んだ人の意志がでてくる。

第9話　KYフルボッコ！！（前書き）

白黒「ふんふんふふ～ん♪」

家康「白黒殿。なんだか機嫌がいいですね。なにかいい事でもあったんですか？」

白黒「ふふふ・・・今回の話だよ♪」

テンテン・セイバー・ライダー「「「ああ！あの女の子の敵ですね。」」」

白黒「そ♪も～、楽しみでな。」

家康「そうか。」

白黒「苛めるのが♪」

家康「そこですか！」

テンテン・セイバー・ライダー「「「うふふ♪第9話始まります♪」」」

第9話　KYフルボッコ！！

リョウＳＩＤＥ

プレシアと交渉して、一日がたった。
俺は学校に行き、授業に参加している。
といっても、ほとんどぼーっとしているか、寝ているかのどちらかだ。
学校の授業を終え、なのはと共に家に帰る。
その途中・・・

〔！なのは！〕

「これって・・」

「結界だな。と、いう事は・・」

「フェイトちゃん！」

今日か。
これは、少し真剣にやらないとな。
結界を貼る。

「行くぞ！なのは！」

「うん！レイジングハート！」

「バサラ！」

「セーットアーップ！」
「セットアップ！」

〔〔スタンバイレディ！セットアップ！〕〕

バリアジャケットを装着する。
飛行魔法を使い、フェイトの所まで飛ぶ。
一分後、到着。
フェイトとアルフは、目の前の巨大な樹の怪物と戦っている。
俺は近くの建物の屋上に降りる。
ユーノは、俺となのはが到着して数分後に到着する。
なのはとフェイトは協力して、巨大な樹の怪物を倒す。

〔十分もかかりませんでしたね〕

〔それだけ、強くなったって事だ。なのはは本当に強くなった〕

バサラとそんな話をしていると、なのはとフェイトが対峙する。
まさか、ぶつかりあう気か！
・・はあ、まあいいそんな事をすれば、どうなるか二人共、わかっているようだしな。
なら、好きにやらせるか。
静寂が一分ほど続き、互いに・・動いた！
互いの武器がぶつかる！
その直前、そこにいらん介入者が現れた！
でやがったか！
ＫＹ野郎が！

「ストップだ！こんな所で戦闘行為は止めてもらおう！僕は時空管理局管理員『クロノ・ハラオウン』執務官だ！武器を収めてもらいたい！」

（時空管理局！）

「事情を説明してもらう。」

うわ～、生で見たらめっちゃイラッとくるな！
気持ち良くブっ飛ばせそうだな。
なのはとフェイトは武器を収める。
すると、上空から魔力弾の雨が降ってきた。
撃っているのは、アルフだ。

「フェイト！今の内に逃げるよ！」

フェイトは去ろうとする。
しかし・・

「クッ！待て！逃がさない！」

そう言い、ＫＹはフェイトに魔力弾を放つ！
これは直撃コース！
やらせん！
俺は魔力弾を放ち、ＫＹの魔力弾を弾く。

「何！？」

「リョウ・・」

〔フェイト、アルフ、今の内に逃げな〕

〔で、でも・・〕

〔早くしな。心配するな。このＫＹ野郎に少～しお灸をすえるだけだ〕

〔・（ＫＹ？）・・うん。わかった。気をつけてね〕

〔ああ〕

フェイトとアルフはこのまま逃げ去った。

よし！

あとは・・・

「おい、貴様！一体どういうつもりだ！」

ん？

「どういうつもりって、どういう事だ？」

「しらばっくれるな！何故ジャマをした！」

何言ってやがるんだこのクソガキが！

エラそうにふんぞりやがって！

殺してやりたい！

「俺は別に、ジュエルシード封印要員を減らしたくなかっただけだ。

それに、あのままだったらあの娘は直撃していた。だから防いだだけだ。」

「何ぃ！」

「だいたい貴様こそどういうつもりだ。今のは直撃コースだったぞ。威嚇のつもりだったのだろうが、それならしっかり当たらないように撃ちやがれ。反省の色も無しかコラァ！」

「き、き、貴様ァァ！」

何場違いに怒ってやがるんだ？
コイツ、やっぱりアホでどうしようもない屑だわ。

「僕は、ちゃんと当たらないように撃った！だが、あの娘が勝手に当たりそうになっただけだ！僕に非は無い！」

マジで言っているのかコイツは！
スッッッゲエイライラしてきた！
最低すぎるぞ！

「だいたい貴様は、僕の妨害をした！管理局にたて突くつもりか！」

「知るか！だいたい管理局なんて知らねえよ！てめえの脳みそで計ってんじゃねえ！てめえは何様だ！何わが物顔で言ってやがる！一から勉強しなおしてこいクソガキ！」

「んなっっ！！」

「さらに言ってしまえばてめえは何偉ぶってやがる！いきなり現れて偉そうに！しかも、横槍をいれやがって！どんだけＫＹ野郎だよ！高い所から見下ろすように言いやがって！ふざけんのも大概にし

やがれ！なのはと同じ位の身長を持ったガキが！どうせ俺達と同い年だろ？ええ！」

めちゃくちゃに、言ってやったらなんかブルブル震えてやがる。
なんだ？

「ふざけるな！こう見えても僕は１１だ！」

「と、年上だとぅぅ！？」

あ！
そういえばコイツ、俺より年上だったな。
すっかり忘れていたよ。
どうでもよかったから。

「もういい！貴様は管理局にたて突いた！貴様を拘束する！」

なんっっつう勝手なガキだ。
ここまでとは。

「おいおい権力行使ですか。どんだけ沸点が低いんだよ。」

「貴様は実力で黙らさせなきゃならないようだな。」

「どういう教育をされてんだ？親の顔が見て見たいぜ。ま、いいぜ。てめえは、ちょっとＯ★ＳＩ★Ｏ★ＫＩが必要だぜ！」

〔ええ、もう少し文句を言ってやってよ！アイツものすごくムカつくからさ！〕

〔その前になんでアリシアさんがここにいるのですか？〕

〔ん～とね、あの黒服のアイツが現れた時に。アイツ、フェイトに攻撃したんだよ！しかも、反省の色も無いんだよ！許せないよ！〕

全くしょうがねえなあ。

ま、アイツは痛い目にあわせてやる！

「あ、そうそう。始める前に一つ言っておきたい事がある。」

「？なんだい！今から負け惜しみかい？それとも、降参かな？」

「お前、背ぇ小っさすぎ。ちゃんと牛乳飲まないと、大きくなれないぞ！」

ブチィッ！

「背の事は言うな！もういい！貴様に手加減はいらん！全力でする！」

お、怒りやがった。

単細胞だなあ。

まあいいや、俺は手加減しながらフルボッコにしてやるぜ！

クロノＳＩＤＥ

コイツからは、魔力はあんまり高くない。
精々一般魔導師クラスだな。
だが、コイツは僕を怒らせた！
それだけは万死に値する！

「あ、あの・・・」

ああ、そういえばツインテールで栗色の髪の女の子が近くに居たね。

「離れてて、すぐにすむ。」

そう言うと、女の子は離れた。
行くぞ！
僕を怒らせた事を、後悔するがいい！
食らえ！

〔スナイプショット！〕

ドォォン！

「リョウ君！」

僕のデバイス、杖、スティンガーから魔力弾を放ち、奴に当たる。
直撃した。
こんなものかな。
煙が晴れる・・・な！？

「こんなものか？」

バカな！？

今のは直撃のはず！？
そうか、きっと無意識に手加減をしていたんだな。

「弱すぎるな。執務官のくせに。」

な、何ィ！
コ、コイツ、手加減してやれば付け上がりやがって！
そこまで言うなら、本気の僕の魔法で終わらせてやる！
スティンガー！

〔了解！〕

僕の周りに魔力でできた短剣のような物がたくさんできる。
目標はアイツだ！
食らえ！
そして、後悔しろ！

「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！！」

僕はスティンガーを振り下ろし、奴に攻撃した！
ズガガガガァン！

「リョ、リョウ君！！」

全部直撃！
ざまあみろ！
僕に・・管理局にたて突くからこうなるんだ！
煙が晴れる・・・！！？

「なんだぁ？今のは？」

そ、そんな・・バカな・・・あれだけの攻撃を食らって・・なんで・・なんで無傷なんだ！！

リョウＳＩＤＥ

弱いな、本当に弱い。
これほど弱いとはな。
これなら、なのはやフェイトのほうが強い。

〔凄いね。あの魔法攻撃を食らって無傷なんて〕

〔あんな攻撃よりなのはやフェイトの砲撃や攻撃のほうが強力だ〕

〔確かに、なのはさんの砲撃はかなり強力でしたし、フェイトさんの雷魔法攻撃はかなり高威力ですしね〕

さて、そろそろ反撃ささせてもらうか。
こっからは、ずっと俺のターンだ。

「今度は・・こっちから行くぞ。軽く・・な。」

「クッ！」

ＫＹは杖を構えるが、すぐに俺は飛行魔法で空を飛び、高速移動でＫＹの懐に入り、左で腹を殴る！

「！・・グハッ！」

シールドを貼る間もなくモロに食らう。
そのまま、左の裏拳でＫＹの顔面を殴り、地面に叩き付ける。
地面にぶつかる音がこの空間に響く。

「ガハァッ！」

うっわ、モロ！
めっちゃ手加減してやってこんなに食らうとは。
どんだけ柔いんだよ。

（な、なんだコイツは！？ハンパないスピードにこの攻撃力は！バリアジャケットを着てなかったら、ヤバかった！それにシールドを貼る間もないとは！コイツは一体、なんなんだ！）

〔リョウ君。もっとアイツを痛め付けてやれぇ！〕

〔アリシアさん。さすがに言葉が悪すぎますよ。まあ気持ちはわかりますが。私も同じ気持ちですから〕

そうだな。
ＫＹは立ち上がろうとする。
だが、俺は魔力弾を浮かせ・・・

「ショット！」

魔力弾を放つ。

「ギャッ！」

あっさり直撃する。
さらに・・・

「連続でくれてやる。」

一発二発と連続で魔力を放つ。

「ふぎゃあ～～！」

全弾直撃する。
おいおい、もうちょっと頑張ってくれよ。

「クソォ・・・」

KYは、なんとか立ち上がる。

（や、やばすぎる！このままでは、やられる！に、逃げなくては！）

ん？
アイツ、逃げる気か。
悪いが逃がさん！
もう少し、痛め付けてやるんだからな。
だが、逃げようとするのはちょうどいい。
逃げようとしたフェイトの気持ちがわかるハズだ。

「おっと、どこに行くきだ？逃がさねえよ。食らえ！バサラ」

〔スナイプショット！〕

「グハッ！」

逃げようとするＫＹにスナイプショットを食らわす！
もちろん、嫌味つきだ！

「いや～、悪い悪い。スレスレに当たらないように撃ったんだが、お前に当たっちまった。全く、お前から当たりにいくなんて、俺は悪くないからな。」

「う、嘘を吐くな！今のは絶対わざとだろ！」

「なんの事かな？俺、わかんないな？」

くくくっ・・・
まだまだ、もう少しいじめさせてもらうぜ！
お前は他人の気持ちを知ってもらうぜ！
知るかどうかは、コイツ次第だがな。
まあ、知った所で、いじめるのはやめないがな。
おっと、また逃げようとするか、逃がさねえよ！

「ショット！」

〔シュート！〕

また魔力弾を逃げようとするＫＹの背中に当てる。

「グギャッ！」

直撃！ヒットォ！

さすがは俺だな。

「ああ、悪い悪い。また当たっちまった。ちゃんとスレスレの攻撃をしたのに、なんでお前は自ら当たりにいくのかなあ！」

「あ・・う・・」

（わざと・・・絶対わざとだ。コイツ、絶対にわざと当てている！こ、このままでは、やられる！に、逃げなくては！）

ふはははは！

アイツ、恐怖で顔が歪んでやがる。

だが、まだまだ俺のターンは終わってないぜ！

「ショット、ショット、ショット！」

「アベッ！ギヘッ！ギャビッ！」

連続で三連発食らわす。

そのまま、ＫＹは落下して落ちる。

クックックッ！

いい気味だ！

俺はゆっくりＫＹの真正面に降りる。

「どうだ？さっきの娘の気持ちがわかったかい？まあ、貴様みたいなくずではわからんかな？」

「あ・・う・・ぐ・・」

「さて、そろそろ決めるか。最後にさっきより強力な攻撃をくれてやろう。」

「や・・やめ・・ろ・・」

「リョ、リョウ君。さすがに可哀相なの。」

「なのは。コイツはフェイトに攻撃したんだぞ。しかも反省の色も無しだぞ。そんな奴を許せるか？」

「そ、それは・・・許せないけど・・でも・・・」

「なのは、こういう奴は一度痛い目を見ないとわからないんだ。覚えておくんだよ。」

「う、うん。」

〔上手く乗せましたね。マスター〕

〔まあな〕

「さて、そろそろお終いにしようか。」

そう言い、少し強力な魔力弾を作る。
ふっふっふっ・・・これは凄く痛いぞぉ！

「た・・・助けてくれ・・・」

「ふふふふ・・Ｉ★ＹＡ★ＤＡ！」

食らいやがれ！

「やめてもらえないかしら。」

うん？
なんか目の前に画面みたいなもんが現れた。
画面には、ポニーテールをした緑色の髪の女性が現れた。
この人は・・・

「かあ・・艦長！」

「誰？アンタ。」

「私は時空管理局の『リンディ・ハラオウン』です。これ以上攻撃するのはやめてくれないかしら。」

やっぱりそうか！
それにしても、なんでこの世界の母親は、見た目はあんなに若いんだよ！
なんか秘訣があるのかな？
わからん。

「断る。コイツがやった事は許せん。しかも謝りもしない。さらにいえば空気も読めない。自分の非を認められない奴は少し痛め付けないといけない。」

「それは確かにそうね。こっちに非があるもの。」

「かあさ・・・艦長！？」

「でも、あの子には責任はありません。あの子は仕事をこなしただけです。貴方がたにも非はあるでしょう。私達も仕事があります。

それに少しお話しを聞きたいのですが、どうですか？」

「おいおい、どこに俺達に非があるんだよ。何コイツのせいじゃないと言ってやがるんだよ！ふざけんじゃあねえぞ！てめえの目は節穴か！それになんで貴様らに話をしなきゃならないんだ。アンタ等めっちゃ怪しいんだよ！そんな奴等の言う事を聞くなんざごめんだ！」

「き、貴様！かあさ・・・艦長になんて口を！」

「よしなさいクロノ。」

「か、艦長！しかし！・・・」

「貴方の気持ちはわかりました。しかし・・・」

「アンタがコイツに甘いのは、コイツがアンタの息子だからか？」

「！？」

「き、貴様！なんで・・・」

なんでって、バレバレだっつうの。
バレないと思っていたのか？
バカだろう。
まあ、どうでもいいしな。

「コイツがかあさ・・って言っていたからもしかしたらと思ってな。やっぱりな。それに、アンタがコイツの母親ならアンタの育て方にも責任があるぞ。」

「・・・そうね。確かにごめんなさい。改めて、話を。」

う～ん、俺はイヤなんだけどなぁ。
どうするか。
なのはに聞いてみるか。

「なのは、どうする？」

「ふえ！？わ、私！？」

「ああ、お前の意見を聞きたい。」

「・・・私は行っていいと思うの。」

「そうか、わかった。いいだろう。」

「ありがとうございます。」

「ただし。」

〔バインド〕

「んなっ！」

「クロノ！？」

「これくらいはさせてもらう。構わないな。」

「ふざけるな！今すぐこれを外せ！」

「わかったわ。」

「母さん！・・・艦長！！」

「クロノ、全ては貴方に非があるのよ。それは反省としてよ。いいわね。」

「そんな！僕は・・・」

くくくっ・・・いい気味だ！
ナイスだリンディさん！
少しはアンタの評価が上がったぞ。
逆にこのＫＹの評価は大暴落だな。

「そんじゃあ、行くかなのは。」

「うん。」

おっと、その前に。

〔アリシアはフェイトの所に行きな。様子を見てほしい〕

〔任せて！大事な妹だもん！〕

そう言い、アリシアは飛んで行った。
さて、改めて行くか！
時空管理局の戦艦アースラへ！

第9話　KYフルボッコ！！（後書き）

白黒「第9話完成！そしてKYフルボッコ～♪」

テンテン「いや～♪スカッとしたよ♪」

セイバー「全くです。あんな女の子の敵は死ぬべきです♪」

ライダー「セイバー、簡単に死なせてはなりません♪もう少し痛め付けなくては♪」

家康（い、今ワシがここに居る事が恐い）ガクガクブルブル

白黒「これで、無印編も中盤かな。このまま突っ走るぜ！」

テンテン「頑張っ！」

白黒「それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、交渉？と・・・」

第１０話　時空管理局！（前書き）

白黒「今回は前書きの話は無し！」

ライダー「何故？」

白黒「書くことが無い！」

セイバー「そうですか。」

テンテン「第１０話始まります。」

第１０話　時空管理局！

リョウＳＩＤＥ

戦艦アースラ・・・俺、なのは（あとユーノ）はそこに入る。
そこに、数名の管理員と、この戦艦の艦長リンディさんがいた。

「初めて。改めて自己紹介するわね。この戦艦アースラの艦長のリンディ・ハラオウンです。」

「あ、はい。高町なのはです！」

「・・・創神リョウです。」

「そう、高町さんに、創神さんね。よろしくね。家の子がごめんなさいね。」

「そうだな。アンタの責任だな。」

「おい！いい加減これをなんとかしろ！」

五月蠅いな、このＫＹは！
今、自己紹介中だろうが！
本当は口を閉じさしたろうか考えていたんだが、やめた。
でも、やっぱりやかましい。
なので・・・

「わかったわかった。外してやる・・よ！！」

「ギャッ！！グヘッ！！」

背後からＫＹを蹴りをいれ、顔面から倒れる直前にバインドを解除する。
もちろん受け身も取れず、顔面を地面をぶつける。

ぷくく・・いい気味。
リンディさんがＫＹに近付く。

「クロノ！大丈夫！？」

「かあさ・・艦長。だ・・大丈夫です。」

「リ、リョウ君。さすがに、ひどいの。」

「甘いぞなのは。コイツにはこれくらいがちょうどいいんだ。」

〔そうですねマスター。なのはさん。あんなＫＹに優しすぎです〕

そんな会話をなのはとバサラと一緒に喋る。

「ゴホンッ、とりあえず、場所を変えるわね。ついてきて！・・・っとその前にバリアジャケットを解除してくれないかしら。」

「あ、はい。わかりました。」

「そうだったな。」

そう言い、俺となのははバリアジャケットを解除する。
元の学校の制服になる。
「貴方も元に戻ったらどう？」
「そうですね。すっかり忘れていました。」
ああ、そういや、ユーノってそうだったな。本当にすっかり忘れていた。
「ふえ？」
ユーノの身体が光りだした。
光が消え、一人の男の子がでてきた。
「ふう。」
「・・・」
「へえ。」
〔びっくりですね。〕
「この姿になるのは久し振りだね。」
そろそろかな。
俺は耳をふさぐ。
「なのは？」
「ふえ～～～！！！？」

「な、なのは!?」

「え?うそ!?ユーノ君!?ふえ~!?」

「ちょ、ちょっとなのは!なのははこの姿の僕を見ただろう!ほら、初めて会った時!」

「見てないよ!最初からフェレットだったよ~!」

「ユーノ。お前は最初からフェレットだったぞ。思いだして見ろ。」

「・・・ああ!そ、そうだったね!うん。ごめん!初めてだったね!びっくりさしてしまったね!」

「う、うん。とてもびっくりしたの!ユーノ君がフェレットじゃなくて男の子だったんだね。」

「うん。」

「とりあえず、ユーノ。よかったな。」

「?何が?」

「温泉の時だ。」

「温泉・・・あ!」

「そうですね。もしあのままなのはさん達と一緒に入っていたら・・・」

「うん。危なかった。君は恩人だよ。」

「フッ、気にするな。」

「？温泉？なんの話なの？」

「なのはは知らなくていい事だ。いいな。」

「？うん、わかったの。」

やれやれ、なかなか面倒くさい。
こういうのは、さっさと済ませるに限る。

「もういいかしら。そろそろついてきてね。それと、エイミイ、ごめんだけど、クロノを医務室に連れってくれないかしら？」

「わかりました艦長。」

「よろしくね。さて、ついてきてね。」

「あ、はい。」

「わかった。」

「わかりました。」

俺となのはとユーノはリンディさんについて行く。
クロノは『エイミイ・リミエッタ』に医務室に連れていかれた。
少し歩くと、違和感を感じた。

何ていうか、視線を感じる。

〔マスター〕

〔気付いたか。これはおそらく〕

〔はい。マスターとなのはさんの魔力量を計っているのでしょう〕

やはりか・・・まあ、俺は魔力を押さえているからな、おそらく一般魔導師クラスかな。
だから、あんまり重要視されないだろう。
そんな念話をしていると、艦長室に到着したようだ。

「さ、入って。」

「お、お邪魔します。」

「・・・」

部屋に入ると・・・

「ふえ～！」

「これは・・・」

それは、見事に和風の部屋、和室そのものだった。
此所って本当に戦艦なのか？
なんだか、機動戦艦ナデシコのナデシコみたいだな。

「ささ、どうぞ入って。」

「は、はい！し、失礼します。」

「・・・」

とりあえず、入り、テーブルを挟んで正座して座る。
テーブルには、お茶と羊羹が用意されていた。

「さて、まずは、貴方達が何故ジュエルシードを集めていたか、教えてくれないかしら。」

「あ、はい！実は・・・」

これはユーノにしか話せないので、俺はお茶と羊羹を交互に食べ、飲む。
・・・うん、なかなかうまいな。
俺はユーノの話を聞いている時、とある事を考えていた。
なんか怪しいと。

〔バサラ、この事件を作ったのはおそらく管理局だと思う〕

〔私もそう思います。しかし、どうしてこんなまどろっこしい事を？〕

〔これは勘だが、管理局の面目ってとこだろう。ミッドチルダに行き、ハッキングした時も、管理局は一枚岩じゃない事がわかったからな。活躍すれば、管理局は面目が保てるからな。それに、スカウトの意味もあるだろう〕

〔スカウト・・ですか〕

〔ああ、管理局は魔導師が少ない。殆どがレアスキル持ちや高ランク魔導師しかいない。だから管理外の世界に行き、才能ある魔導師に手伝わせて、管理局にいれようって魂胆だろう。少なくとも、上の屑はそんな考えだろう〕

〔なるほど。それにしても管理局って組織は何なんでしょうね。神様のつもりなのでしょうか？〕

〔いろんな世界に行き、監視や管理をする。そんな事を何十年、何百年もやっていたら、そうなる。特に、権力がある奴はな。それに、こいつらもそんな感じに育てられたんだろう。全く空しい奴等だ。まさしく何様のつもりだな〕

〔ですね〕

こいつらは自分達が管理しているんだってわがもの顔で動く。
そんな事をすれば、いずれは崩壊する。管理されている人々からな。
神になった。
それは、言い方を変えれば独裁者だ。
管理局は正に独裁者の組織・・だな。
俺は絶対に管理局に入らん！

「・・・と、いうわけです。」

ん？
いつの間にかこうなったかの説明が終わったか。

「そう、それは立派な事だわ。」

「だが・・・無謀だ。」

「クロノ！？」

「艦長・・・」

「貴方はまだ立ち上がることは・・・」

「大丈夫です・・・」

ほお、ＫＹの奴、あれだけ痛め付けたのに立ち上がるか。
なかなか根性があるな。
おそらく意地だな。
管理局の・・・無駄でくだらない意地だがな。
その後、リンディさんとＫＹの二人がロストロギアの事と次元震の事を説明する。
早い話、ロストロギアとは、滅んだ世界のアイテムや宝物って奴だ。
管理局はそれを封印し保持する事を主にする仕事だ。
だが、結局はそれを自分達の物にしているだけだ。
それに、そういう物は、使う人によって危険になったりするんだ。
それを理解しないようでは、管理局がやっている事は泥棒や盗人と同じだ。
次元震とは、次元空間に穴を開ける事をいう。
開いたら、この戦艦や地球、世界を吸い込み、消滅させてしまうという、いわゆる核爆発の大規模版だと考えてくれたらいい。
まあ、桁がちがうが、そんなもんだ。
そんな話をしている最中、俺となのはは見てしまった。
リンディさんが、お茶に砂糖をかなりの量をいれ、かき混ぜ、飲んだ所を。

「あ・・」

〔マ、マスター。リンディさんがお茶に砂糖を・・・」（汗）

〔バサラ、俺は何も見ていない。見ていないんだ〕

〔・・・わかりました。私も見たものを消去し忘れます。・・・はい、私も何も見ていません〕

さすがは俺のデバイスだ。
誇りに思うぞ。
話も終わり、今後の事を話す。

「今後は我ら管理局がやる。君達は元の生活に戻るんだ。」

「そんなぁ・・・」

「君達を危険な目にはあわせられない。」

「で、でも・・・」

「まあ、急にいわれても仕方ないわね。今夜一晩ゆっくり考えて決めてちょうだい。」

そう言われ、なのはは立ち上がり、部屋を出ようとする。

「あれ?リョウ君出ないの?」

「・・・リンディさん。」

「何かしら？」

「何故そんな事を言った？」

「そんな事？」

「とぼけるなよ。なんで一晩ゆっくり考えさせるように言った。そこにいるＫＹは、元の生活に戻れと言った。だがアンタは、一晩ゆっくり考えて決めてと言った。どう考えてもつじつまが合わんだろう。何考えてる。答えてもらいたい。」

「・・・」

「か、艦長！どういう事ですか！？」

まあ、予想はついているがな。

ふざけやがって、せっかく評価が上がったのに、今ので下がったな。

「アンタは考えさせる選択をさした。なのはを自主的に管理局に手伝わせるようにな。」

「そんな・・デタラメを！」

「ＫＹ野郎は黙っていろ。」

「ＫＹじゃない！僕にはクロノ・・・」

「黙れ！貴様と無駄話をする気は無い。」

「きき、貴様～！」

「そして、ゆくゆくは管理局員って所か。だいぶせこいな、管理局ってのは、そうでもしないといけない理由でもあるのか？」

「そ、それは・・・」

「おい！無視するな！」

「戦闘員が少ないんだろう。」

「！！」

「当たりか、そんな事だろうと思った。」

「・・どうしてわかったの。」

「理由は二つ。一つ、さっきの戦闘介入にこのＫＹ一人しかいなかった。こういうのは、たくさん来るハズ。なのにコイツ一人しか現れなかったから。」

そう、普通なら十数人は来てもおかしくない。
なのにこのＫＹたった一人。
普通ならなめられてると判断するが、俺がボコボコにした時に応援すらこなかったからな。

「二つ、前に次元震が起きた。なのに、あまりの対応の遅さ。この二つだ。」

もし、次元震が起きたなら、素早く対応するだろう。
なのに、今頃になって現れた。

これではおかしいと思うだろう。

「・・ええ、そうよ。」

「リンディさん、俺はアンタが手伝ってほしいって言ってくれれば、やってやったよ。でも、こんなせこい上に意地汚いやり方は許さん！そんなまどろっこしいやり方じゃなく、真正面から正直に言いやがれ！アンタ、人間として最低だぞ。」

「き、きき、貴様～～艦長になんて口の聞き方を！」

「やめなさいクロノ！」

「母さん！いや、艦長！」

「あの、リンディさん！」

「・・・」

「私にお手伝いさせて下さい！お願いします！」

「高町さん。・・・わかりました。」

「母さん！？」

「高町さん。今後私達とご同行をお願いします。」

「はい！」

「どうやらなのはのほうができているな。」

「貴方はどうするの？」

「なのはが手伝うなら、俺も手伝う。」

「リョウ君！」

「俺だけ、やらんわけないだろう？なのは。」

「うん！」

「あの、僕も手伝います！元はといえば、僕の責任だから！」

「ユーノ君。」

「という事だ。アンタが正直に言っていれば、こんなにあっさりしてたんだ。なのははかなりのお人好しだからな。」

「ぶ～！リョウ君だって！」

「フッ、ちがいない。」

「では、改めて私達に協力をお願いできますか？」

「「はい！」」

「ああ。」

「ありがとうございます。これより三人は私達管理局の民間協力者とします。」

「艦長！」

「いいわね？クロノ。」

「～、・・わかりました。」

ふう、全く組織って奴は面倒くさいぜ。
その後、俺となのは、ユーノ（フェレットモード）は元の世界の公園に転送してもらい、俺達は家に帰った。
家に帰ると、フェイトとアルフが玄関前に現れ、迫られた。
フェイトには、プラス、抱き付かれた。
いろいろ心配させてしまったようだ。
心配ないと伝え、フェイトとアルフの事は伝えて無いと答えた。
しばらく、俺は管理局と行動を共にすると言った。
なんでと言われたが、ちょっとなと言い、はぐらかした。
もちろん、敵対する気は無いと伝える。
話終えたあと、一緒にご飯を食い、ゲームをし、フェイトとアルフは家に帰った。
さ～て、明日から忙しくなるな。

リンディＳＩＤＥ

私は、とある部屋に入る。
そこには、息子クロノとエイミイがいる。

「かあ・・・艦長。」

「お疲れ様、クロノ。エイミイ、あの子達の魔力は？」

「凄いですよ。さっきの白い服の娘と黒い服の娘は、魔力量はＡＡクラスですよ！クロノ君でもＡ＋なのに・・・」

「そう、すごいわね。これは有望候補かしら。」

「しかし、魔力量が高いだけでは、決まりません。」

「そうね。ところで、男の子のほうは？」

「はい、それが・・・」

？どうしたの？

なんだか、言いにくそうな顔をしているわね

「どうしたんだ？エイミイ。」

「・・・この子、一般魔導師クラスの魔力量なんです。アースラ徘徊中も調べたんですけど。」

「やっぱりそう。」

「でも、おかしいです！一般魔導師クラスしかないコイツが僕を圧倒したんですよ！」

「・・・そうね。」

確かにそうね。

あの子の魔力は一般魔導師クラス。
でも、あの強さはエースかストライカーレベル。
しかも、あの頭の良さ、本当に子供かと疑うわ。
一体、あの子は何者かしら。
一体・・・

第１０話　時空管理局！（後書き）

白黒「第１０話完成！今回の話はつまらないと思います。」

家康「まあ、今回の話は一応重要な場面だけど内容がな。」

セイバー「そうですね。なんだかイライラする話ですね。」

テンテン「なんだか、殴り込みがしたいわ。」

白黒「それはやめてくれ。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、リョウぶちキレる！」

第１１話　海上決戦！（前書き）

白黒「最近書くテンポが早くなっております。」

セイバー「それはいい事ですね。」

白黒「だからこれからもバンバン書いていきます！」

家康「第１１話出陣いたす！」

第１１話　海上決戦！

リョウＳＩＤＥ

俺となのはとユーノが、管理局の民間協力者になって、数日たった。
俺達はいつものようにジュエルシードを集めている。
しかし、昨日からジュエルシードは見つかっていない。
はずれが多くなった。
フェイトが先に集めたんだろう。
ジュエルシードを集めるメンバーは、俺となのはとユーノとＫＹの４人で行動する。
なのはが封印し、ユーノと俺が動きを封じ、ＫＹが攻撃と、連携でジュエルシードを集める。
時々、俺は参加せず、コッソリコンピューターにハッキングをしたりしている。
何をかというと、管理局の闇の部分とか、アリシアが死んだヒュドラ事件の真相とか、闇の書のことなどを記録、コピーしている。
今、俺はなのはとユーノと一緒に食堂で飯を食っている。

「にゃ～、今回もはずれだったよ。」

「もう、だいぶ集めたからね。なのはとあの娘のおかげで、おそらくあと数個しかないだろう。」

「だな、問題はその残りがどこにあるかだな。」

「どこにあるのかな？」

「う～ん。」

飯を食いながらそんな会話をする。

うん、なかなかうまいな、ここの料理は。

「ちょっといいかい？」

「ああ？」

「ふえ？」

「なんですか？」

「君達はこの黒い服の女の子の事、なにか知らないか？知っているなら教えてほしい。」

フェイトの事か・・・

俺は知っているが、なのはは、知らないからな。

教える必要は無いな。

「いんや、知らない。」

「私も・・」

「僕も・・」

「そうか・・・すまない。」

そう言いながら、ＫＹは俺をにらむ。

無論無視する。
質問に答えた後、ＫＹは去る。
なのはは、なんか考えている。
どうせ、フェイトの事だろうな。

「フェイトの事か？なのは。」

「・・・うん。」

「ま、いずれ会えるさ。今は、ジュエルシードの事だ。」

「そうだね。残りは、一体どこに？」

「・・・もしかしたら。」

「？」

「おそらくだが、海の中、つまり海中にあるんじゃないか？」

「海・・・」

「確かに、それは有り得るね。」

そういえば、そろそろそんな時期だったな。
という事は・・・

「なのはさん、リョウ君、ユーノ君、すぐにブリッジに来て下さい！」

そうか、今日だったか。

「なのは、ユーノ、行くぞ！」

「うん！」

「はい！」

俺達は急いでブリッジに移動する。
ブリッジに到着し、目に飛び込んできたのは、モニターに写るフェイトとアルフだった。
しかも、場所は海上上空にいる。
フェイトの前には、巨大な竜巻がある。
あれは、ジュエルシードか・・・しかも、ちょうど六個ある。

「フェイトちゃん！」

「無理矢理ジュエルシードを発動させるなんて！」

「なんて無茶を・・・」

全くだ、あんな無茶をしやがって。
しかし、このままではフェイトは倒れ落ちるぞ。
どうする・・・

「あのままでは、魔力がなくなり倒れるぞ。最悪死ぬぞ。」

「！！いますぐにフェイトちゃんを助けに行きましょう！」

「だめよ。現状待機を命じます。」

「え！？」

「・・・」

やっぱりな。

「どうしてなんですか！？早く行かないとフェイトちゃんが！！」

「僕達の目的はジュエルシードの封印と回収だ。彼女の救援ははいっていない。彼女が封印寸前に僕は動く。彼女の逮捕と同時にな。」

「そんな・・・！」

「残念だけど、これが現実よ。」

「フェイトちゃん・・・」

パチパチパチパチ！

「「「！？」」」

「リョウ君？」

俺は拍手した。

皆は不思議がって俺を見る。

「いや～、さすが管理局ですね。そんな思考が、考えができるなんてな。・・・最低の屑だな。」

「なっ！？」

「!?」

ふん!
このクソ供がそんな考えが思いつくなんてな!
なんでそんな思考ができるのか一度脳みそ内を見てみたいぜ!
こいつらには、人を救うという考えは無いのかよ!

〔全くです。確かにフェイトさんは魔導師ですけど、その前に彼女は一人の女の子なんですよ!全くもって最悪ですね!管理局は、本当に最低のクソです!〕

「きき き、貴様〜!なんて事を言うんだ!」

「だってそうだろう。貴様はフェイトを見捨てようとしてるんだろう。救おうもせず、ただ放置してよ。普通なら救いに現場に行くだろう。」

「何を!僕達は最善の策を!」

「最善だと?どうみても最悪だろう。」

「貴様!いい加減にしろ!素人が口だしするな!」

「ふざけるなよ!」

ブチッ!
今、俺はぶちキレた!
もう容赦しない!

「いい加減にしろよ！貴様らには人の心が無いのか！人の心があるなら、普通は迷いなくフェイトを救いに行くだろう！なのに貴様等はなんだ！フェイトの事よりジュエルシードの事だと！ざけんなよ！貴様等組織は人の命をなんだと思ってやがる！人の命と組織の命令とどっちが大事なんだ！貴様等組織の人間は、人命救助ははいって無いのか！貴様等にとっては人の命なんてそこらへんにある石ころと同じか！さすがは管理局！最低のクソ組織だな！そのクソっぷりには、尊敬するよ！貴様等は、最低最悪の組織だな！」

殺気をだしながら、ボロクソに言いまくる！
殺気に当てられた管理局の奴等（主にＫＹとリンディ）は、思いっきり震え、恐怖をいだいている。
かなり押さえているが今にもその殺気が爆発しそうだ！
なのはとユーノには、殺気を当てていない。

「き、きき、貴様！いい加減に・・・」

「だまれ屑！貴様の意見など聞いていない！黙っていろ！黙らんと、永久に口を聞けなくするぞ！」

「グッ・・・」

「行くぞなのは！」

「ふえ！？どこに？」

「決まっている。フェイトを助けに行くぞ！」

「！！うん！」

「ユーノ、転送装置をどうにかできないか？」

「え！？あ、うん、なんとかできるけど。」

「上出来だ。行くぞ！」

「待ちなさい！」

「ああ？」

なんだよこのクソ年増！
文句でもあるのか？

「貴方達、勝手な事はしないで下さい！」

「なんだと！？」

「これは命令です！」

「ふざけるな！いつから俺達がアンタの命令を聞かなくちゃならない！」

「それは、私はこの船の艦長だからよ。」

「バカか！俺となのはは確かに民間協力者だが、アンタの部下じゃねえ！俺達は俺達の勝手にやらさしてもらう！」

「貴方達・・・」

「もし、俺達のジャマをしようとするなら、叩き潰す！」

殺気を濃くする。

「きききき、き、貴様！い、いいいい加減に・・・」

「わかりました。貴方達に任せます。」

「艦長！？」

「リョウ君、なのはさん、ユーノ君、お願いします。」

「艦長！何を言っているんですか！彼らは、命令違反を！」

「黙れＫＹ！少し大人しくしろ！」

「グハッ！」

ＫＹを蹴り飛ばす。
吹っ飛び、倒れる。

「クロノ！」

「急ぐぞ！早く行かないとフェイトが危ない！」

「うん！ユーノ君お願い！」

「あ、うん。わかった。失礼します。」

俺達は転送装置がある所に急いで移動する。
一分後、到着し急いで転送準備する。

「ユーノ、急いでくれ！」

「ユーノ君急いでなの！」

「わかった！・・・よし！これでよし！行くよ二人共！」

「ああ。」

「うん！」

「転送！」

フェイトＳＩＤＥ

私とアルフは海上上空に浮き、海中にあるジュエルシードを強制に発動さした。

さしたのはいいが、発動させる為に膨大な魔力を使ってしまった。

今は、なんとかしているが、もう数分も持たないかも知れない。

「フェイト！もうヤバいよ！今回は諦めて・・・」

「駄目・・・今の内に封印してみせる！」

「無理だよ！フェイト、あたし達の魔力はもう殆どないよ！」

「くっ！」

わかってる！
わかってるけど、このチャンスをムダにはできない！
でも・・・やっぱり、もう限界かも。

「フェイト！」

「アルフ・・・！？」

こ、この魔力は！？
リョウ君とあの娘！
くっ・・こんな時に！
アルフも気付いたようだ！

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

「ジャマを、するな～！」

「ストラグルバインド！」

アルフが突っ込むが、あの娘の隣にいた男の子のバインドによって動きを封じ込まれる。
もしかして、あの小動物があの男の子なのかな。

「待って！僕達は君達の手伝いに来たんだ！」

「落ち着けアルフ！今はそんな事をしている場合じゃないだろう！」

「リョウ・・・」

「フェイトちゃん。」

「・・・」

「フェイトちゃん。一緒に封印しよ！一緒にやれば、きっと出来るよ！」

あの娘がそう言う。
どうしようか？
私はリョウを見る。

「フェイト、俺とユーノとアルフであの竜巻を封じる。その間になのはと一緒にジュエルシードを封印するんだ。」

「・・・うん、わかった。」

「やろう！フェイトちゃん！」

「わかった。」

「その前にフェイト、お前の魔力を回復させないとな。」

「？」

そう言いながら私に近付き、触れる。

「・・・」

「！？」

こ、これは・・・魔力が回復していく！
どうして？

「俺の魔力を少し分け与えた。これでいいだろう。」

「あ、ありがとう。／／／」

「むう～！」

ビクッ！
な、何？
あの娘がなんでか怒っているような。
おっと、そんな事を考えている場合じゃない。
私はあの娘と一緒に並んで浮く。
その後にリョウとアルフと男の子が並んで浮く。

「行くぜアルフ、ユーノ！」

「ああ！」
「うん！」

「「「ストラグルバインド！」」」

バインドで竜巻を封じる。

「行くよフェイトちゃん！」

「うん！」

「ディバイ～ン！」
「サンダー！」

「バスタ～～！」
「スマッシャー！」

私の金色の砲撃とあの娘の桜色の砲撃が竜巻の中心に直撃する。
そして、ジュエルシードが現れた。
数は六個。

「えっと、六個だから、三つづつに分けて封印しよ！」

「・・・わかった。」

「いくよ！」

「「封印！」」

封印が完了し、互いに三つジュエルシードを手にいれる。
あの娘と向き合う。

「フェイトちゃん。私、貴女とお友達になりたいの！」

あの娘がいきなりそんな事を言ってきた。

「私は・・・」

どう言おうか考えていると。

「リョウ君！？」
「リョウ？」
私とあの娘の頭上にリョウが移動していた。

リョウＳＩＤＥ

よし、とりあえず封印はできたな。
なのはとフェイトが向かい合っている。
そういえばこのあとって・・・ヤバい！
俺は急いで二人の頭上に飛ぶ！

「リョウ君！？」
「リョウ？」

なのはとフェイトの頭上に雷が落ちてきた！
プレシアの魔法だな。
俺は急いでプロテクションを発動する。

「グッ！」

〔マスター！〕

「問題無い。この程度なら耐えられる。楽勝だ。」

簡単に防ぐ！

ふう、これで一安「動くな！」心・・あ？

「管理局だ！大人しく「くたばれや～！！」グハァ！」

いきなり現れたＫＹを思いっきり蹴っ飛ばす！

何考えてやがるこのＫＹは！

ふざけるな！

せっかくのいいシーンを台無しにしやがって！

これだからＫＹは・・・

あ、プレシアは仕方ないからな。

あれは例外だ。

「フェイト、アルフ、今の内に逃げろ！」

「で、でも・・・」

「さっさと行け！掴まりたいのか！」

「おい！何故ジャマを「うるせえよボケＫＹ！ちっと黙れ！」ギビャア！」

今度は殴り飛ばす！

「う、うんわかった。じゃ、じゃあねリョウ。／／／」

フェイトは顔を赤らめながら、この場を去った。

ふう、全くこのカスＫＹは、少しＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＩをしないとな！

「き、貴様は～！何故僕のジャマをする！」

「うるせえよ、このクソカスＫＹが！てめえは、何したのかわかんねえのか！だから貴様はＫＹなんだよ！」

「なんだよさっきからＫＹＫＹって一体なんなんだ！」

「ＫＹって言うのは空気が読めないって言うんだ！てめえは空気が読めない奴だって事だ！わかったか！このボケナスＫＹ！」

「きききき、き、さ、ま～！もう許さん！貴様だけは・・・」

「もうてめえの話なんざ聞くか！てめえはこれでも食らって大人しくしていろ！・・月読！」

「ぎゃあああ！！」

月読を発動し、食らわす！
食らったＫＹは思いっきり悲鳴をあげ、落下していく。
一応、落ちないようにＫＹの服を掴む。
ん？どんな幻術を見せたかって？
母親や管理局の仲間に痛め付けられ、苛められる幻術を見せた。
一応、精神が崩壊しない程度にしている。
ふう、さて早く戦艦に帰還するか。
さっさと帰りたい。

「リョウ君・・」

「ん？どうしたなの、は？」

あれ？
なんかなのはから黒いオーラがでてるんだけど。

「リョウ君。なんでフェイトちゃんとあんなに仲がいいのかな？」

ゾクッ！
な、なんだこの悪寒は！？
なのはから恐ろしい感じが！

「べ、別になんでもない。」

「ぶ～！リョウ君、少しＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＩしよ？」

「だが断る！」

数分間、俺はなのはと話し合いし、なんとか砲撃を食らわずにすんだ。

「・・・」

〔どうしました？マスター〕

〔・・・いや、なんでもない〕

俺はさっきの雷魔法をだしたプレシアの事を考えていた。
なんで攻撃する必要がある。
もうジュエルシードはもういいはずなのに、何故・・・まさか、プレシアの奴！
・・・いや、それは無いだろう・・多分。
杞憂であればいいが、もしそうだとしたら俺は・・お前を、アリシ

アを、フェイトを・・・

第１１話　海上決戦！（後書き）

白黒「第１１話完成！いい感じに進んでおります！」

ライダー「無印編も終盤に近付いてきてますね。」

テンテン「そうだね。この調子で頑張って書いてね！」

白黒「わかっております！それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第１２話　決戦準備！（前書き）

白黒「ようやくここまできたか。」

家康「なのは殿とフェイト殿の戦い・・・」

テンテン「今回は戦い無し。次回からよ。」

ライダー「第１２話始まります。」

第１２話　決戦準備！

リョウＳＩＤＥ

アースラに帰還し、会議室みたいな所で何故か説教を受けている。
ふざけんな！
あっそうそう、アースラはプレシアの魔法を食らい動けない。

「全く、貴方達は・・・本当に勝手な事を。」

「ああ！アンタふざけるなよ！役立たずのアンタらの代わりにやってやったんだぞ！説教や怒られる事をした覚えはないぞ！」

「確かにそうね。ごめんなさい。それでリョウ君。少し聞きたいのだけど、クロノに一体何したの？あの子、動かなくなったんだけど。」

「別に、ただ幻術を見せただけだ。あと少しで目が覚ますハズだ。」

「そう。エイミイ、さっきの魔法をだした人物の特定できたかしら？」

「バッチリです！今、モニターに写しますね。この人です。」

モニターに写し出されたのは、プレシアだ。
しかも若い時の姿のだ。

「この人は・・・」

「はい、プレシア・テスサロッサ。かつて、管理局の管理員にして大魔導師と言われた人です。」

「そういえば、あの娘もテスサロッサだったわね。親子かしら。」

「親子か。」

さて、どうしようか。
あとはなのはとフェイトの戦いのみだな。
少しゆっくりできそうだな。

「とりあえず、あの娘の保護とプレシアの逮捕を最優先にしましょう。」

「わかりました。」

そうはさせないぜ、管理局さんよ。
アンタらの思い通りにはさせん！

「なのはさんにリョウ君。貴方達はもう帰ってもいいわよ。ゆっくり休んできてね。」

「あ、はい。わかりました。」

「わかった。」

俺となのはは、家に帰った。

プレシアＳＩＤＥ

私の部屋にフェイトが入ってきている。
ジュエルシードの報告にだ。
あの時、私はフェイトと白い服を着た娘に魔法を当てようとした。
しかし、あの坊やリョウが防ぐとわかっていた。
あれはフェイトを逃がす為の攻撃だ。
さらに管理局の船も攻撃し、しばらく動けないようにした。
これでいいのよ。
これで。

「あの、母さん。」

「・・・なあに、フェイト。」

「あの、ごめんなさい。ジュエルシード、結局これだけしか手に入らなかった。」

「そう。」

「あの、母さん。」

「フェイト、貴方は大丈夫？怪我してない？」

「え？あ、うん。大丈夫。」
（どうしたのかな？母さん）

「そう、もういいわ。下がりなさい。」

「はい。あの・・・母さん。」

「何？」

「あの、また何か甘い物とか買ってきます。」

「・・わかったわ。」

フェイトはそう言い、部屋から出る。

・・・ふう、アリシアとリョウのおかげで、ようやく気付くなんて。

私はなんてだめな母親なんでしょうね。

だけど、私は止まるわけには行かない！

私は・・

「！？ゴホッゴホッ！」

グッ！

私はリョウからもらった薬を飲む。

・・ふう、なんとか落ち着いた。

この事件の犠牲は、私だけで充分。

リョウ、もしもの時は、アリシアとフェイトの事をよろしく頼むわね。

フェイトＳＩＤＥ

「・・・」

「どうしたの？フェイト。」

「ううん。なんでもないよアルフ。」

どうしたんだろう。
母さんが優しくなった。
もしかしたら、頑張ったから母さんが優しくなったのかな。
そんな事を考えながら、私とアルフは庭園からマンションに移動する。家に帰ろうとすると扉の前にリョウがいた。

「リョウ。」

「フェイト。少し話があるんだが。」

リョウＳＩＤＥ

フェイトが庭園から帰ってきた。
俺はフェイトを部屋に入れ、座らせる。

「何？リョウ、話って。」

「ああ。実はな、なのは、白い服の娘と勝負をしてほしいんだ。」

「どういう事？」

「多分気付いているだろうが、ジュエルシードはもう探しても見つからない。あとは、フェイトとなのはが持っている物しかないだろう。」

「・・・そうだね。」

「そこで、残っているジュエルシードを賭けて勝負をしてほしい。」

「・・うん。わかった。」

「サンキューな。あとでなのはに伝えないとな。」

「それで、何時勝負するの？今？」

「いや、そうだな・・・三日後にしよう。いいな？」

「うん。」

「よし、あとでなのはに伝えないとな。そうそう、今日は一緒に飯を食わねえか？」

「え？いいの？」

「うん。母さんに言えば問題無い。」

「わかった。ありがとうリョウ。／／／」

「ああ。」

その後、俺はフェイトとアルフと一緒に飯を食う。
次の日、学校でなのはに話す。
もちろん、ちゃんと誤魔化してだ。

「・・・というわけで、どうする？」

「フェイトちゃんからの挑戦状・・・」

「なのは・・・」

「リョウ君・・私、フェイトと勝負する！」

「そうか・・・わかった。なら残りの期間、なのは、お前をフェイトと互角までの強さにしてやる。覚悟はいいな？」

「うん！」

決意は固いようだ。
なら、学校が終わったらさっそく公園で「ところでリョウ君。」・・・ん？

「なんだ？なのは。」

「なんでフェイトちゃんがリョウ君にそんな事を言ったの？」

アレ？
なんでなのはの目が単色になってるんだ？

「さあな。俺もわからん。」

「・・・フェイトちゃんもライバルなんだね。」

「ん？なんだって？よく聞こえなかったが。」

「リョウ君。私、絶対にフェイトに勝つの！」

「お、おう。」

なんでだ？

なんでなのは、こんなに燃えてるんだ？

〔鈍感・・・〕

バサラ、今俺をバカにしたな？

まあいい、まあやる気をだしてるしいいか。

学校を終え、俺はなのはの修業に付き合う。

気合いがはいっている為、なのははものすごく強くなっていった。

そして何故か、アースラがそれを知り、プレシア捕獲の準備を進めている。

フェイトも、とても気合いをいれており、バルディッシュのメンテをしている。

俺は緩やかに日を待つ。

三日後、アリシアを生き返らせる為のアイテムを無くさないように、しっかりチェックする。

これが、俺の勝手を可能にする物だ！

それぞれの思いを秘め、そして三日、遂にこの時がきた。

早朝、公園の中央に俺となのはとユーノが立っている。

なのははすでにバリアジャケットを装着し、杖を握っている。

気合いは充分だな。

「大丈夫か？なのは。あんまり力いれると後でバテるぞ。」

「あ、うん。わかったの！」

さて、そろそろかな。

・・・来た！

「時間だね。でてきてフェイトちゃん！」

なのはが林の方に目を向けながらそう言うと、そこからフェイトとアルフが現れた。

「フェイトちゃん。」

「・・・」

なのはとフェイトは対峙する。

アルフは俺とユーノと一緒に並び立つ。

「そんじゃあ、俺とアルフとユーノはお前達の戦いを見守らせてもらう。アルフ、ユーノ、お前達はこの二人の戦いに介入しない。もししようとしたら、俺が力ずくで止める。いいな？」

「「「「うん！はい！ああ！」」」」

了解も得た。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

「・・・」

「逃げればいいってわけでもない。」

真っ直ぐになのははフェイトを見つめる。

「きっかけはジュエルシード・・・だから賭けよう。お互いが持ってる全部のジュエルシードを！」

そう言うとなのはとフェイト、互いのデバイスから全部のジュエルシードが出る。

「それからだよ。全部それから！」

「・・・」

「なのは。」

「私達の全てはまだ始まってすらいない・・・だから、本当の自分を始める為に・・・始めよう！最初で最後の本気の勝負！」

今、なのはとフェイトの二人の魔導師の最後の戦いが始まる！

第１２話　決戦準備！（後書き）

白黒「第１２話完成！無印編もようやく終盤にきました！」

セイバー「原作通りの展開ですね。」

家康「だからこそ、次回の勝負は見逃せない！」

ライダー「ですね。」

白黒「上手く書けるように頑張るよ！それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、なのはとフェイトの真剣勝負！」

第１３話　なのはＶＳフェイト！！真実と本音！（前書き）

白黒「今回は宿命の対決だ！」

テンテン「なんか私対ヒナタって感じだね。」

ライダー「そういえばこの作者は、ＮＡＲＵＴＯの対戦ゲームでは絶対にやってる事だよね。何故かチームワーク戦でも一緒に組みますよね。」

白黒「なんか、声優の定番って感じ？」

セイバー「第１３話始まります。」

第１３話　なのはＶＳフェイト！！真実と本音！

三人称ＳＩＤＥ

「戦闘開始みたいだね。」

「ああ。」

アースラ内のブリッジで、クロノとエイミイは、はのはとフェイトの戦いの様子を、モニターの画面で見ている。
もちろん、ただ見守るだけではなく、なのはが戦闘で時間を稼いでる間に、こちらで帰還先の追跡をしておくという作戦を展開している。

「頼りにしてるんだから、逃がさないでよ！」

「おう！任しといて！」

フェイトＳＩＤＥ

〔フォトンランサーマルチショット！〕

〔ディバインシューター！〕

私の周りには複数の金色の魔力弾が、あの娘の周りにも複数の桜色の魔力弾が現れた。

「ファイヤ！！」
「シュート！！」

同時に複数の魔力弾が発射する！
幾つかの魔力弾がぶつかり、爆発するが、幾つかの魔力弾は私やあの娘に届く！
私はあの娘の追跡型魔力弾を躱しながら障壁で防ぐ！
あの娘は私の魔力弾をなんとか避けていく！

「！」

「シュート！！」

早い！もう次の攻撃なんて！
でも・・・甘い！

〔サイスフォーム！〕

バルディッシュを鎌状の杖、サイスフォームに変形させ、あの娘の魔力弾を切り裂く！

（最初は、ただ魔力が強いだけの素人だったのに・・・強い！）

本当に強い！
でも・・・私はバルディッシュを強く握り締める！

（でも・・・負けられない！）

そう、私には負けられない理由がある！

（母さんの為にも負けるわけにはいかない！）

なのはＳＩＤＥ

フェイトちゃんの杖の先端が鎌状になり、私の魔力弾を切り裂く。

（フェイトちゃん、やっぱり強い！でも・・・負けられない！）

私はまた距離を取り、魔力弾を放つ。

（フェイトちゃんの為にも・・・そして、リョウ君の為にも・・・）

私は決意を胸に、レイジングハートを握り締める！

（絶対に負けないの！）

リョウＳＩＤＥ

俺はアルフとユーノと一緒に上空で戦っているなのはとフェイトの二人の戦いを見守る。
フェイトが接近し、サイスを振るうがなのはの杖で防ぐ！
なのはが距離を取り、魔力弾を連射で撃つ！
しかし、フェイトは躱したり障壁で防いだりする！
そんな戦いをしながら、二人は海の方へ移動する。
俺もアルフとユーノと一緒に海の方へ移動し近くの建物の屋上に降り立ち見守る。

「あの娘、前より確実に強くなってる！」

「まあな。今のところは全くの互角か。なら、この勝負は、別の力の差で決まるな。」

「なんだいそれは？」

「心だ。」

「心？」

「ああ、この勝負、どちらの想い、信念が強いほうが勝つ！」

「フェイト・・・」
「なのは・・・」

アルフとユーノは互いの主人の名を言う。
なのはとフェイトはまだ激しい戦いを繰り広げる。
どちらも一撃必殺を出す為の機を伺っている。
どちらが先にだすか。
・・・む！フェイトが呪文を唱え、構える。

「フェイトが先に大技をだすか。」

「ま、まずい！フェイト、まさかアレを使うのかい！リョウ、アレを止めてくれ！アレはヤバい！」

「心配ないだろう。なのはなら。」

「そんなんじゃないんだ！とにかく、アレは本当にヤバいんだ！」

アルフがそう言っていると、フェイトはなのはにバインドをかけ、動きを封じる。

「なのは！すぐに救援に！」

ユーノがなのはのとこに向かおうとする。

だが！

「悪いが駄目だ！」

俺はユーノの邪魔をする。

「なんで！このままでは、なのはが！」

「そるにこのままだと、あの娘が、それにフェイトが！」

「お前達はここでこの戦いを見守れ！介入は許さない！」

「でも！」

「心配するな。なのはは俺が鍛えたんだ。そう簡単にやられはしない。」

「あの娘、リョウアンタが鍛えたのかい！？」

「まあな。だから、このまま見守れ！それに、これはあの二人の戦いだ。それを邪魔をする気なら、俺がお前達を止める！力ずくでな！」

少し殺気をアルフとユーノに向ける。
二人は動けなくなる。
フェイトは呪文が完了したようだ。

〔フォトンランサー・ファランクスシフト！〕

フェイトの周囲に無数の魔力弾が佇む。
なのははバインドにより、両手両足が拘束され動けない。
フェイトはなのはを睨み、手を掲げ。

「打ち砕け！ファイヤ！！」

手を振り下ろす！
それを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲いかかる！

フェイトＳＩＤＥ

私の攻撃魔法の中で最強の攻撃魔法をあの娘に食らわす！
無数の魔力弾があの娘に食らう。
無数の魔力弾を食らい大爆発を起こす！

「なのは！！」
「フェイト！！」

魔力弾を撃ち終え、私は残った魔力を集め、魔力弾を作る。
油断はしない、私は魔力弾を片手に、立ち込める煙を見る。
煙が晴れてくる。
！？いない！？何処に！？

「撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね。」

「ハッ！」

私は頭上を見る。
数m先に、服はボロボロだが、ほぼ無傷のあの娘がいた！

なのはＳＩＤＥ

ふう、危なかったの。
少しでも身体に魔力の膜を貼ってなかったら負けていたの。
魔力の膜、これはリョウ君に教えてもらったもの。
魔力で身体を多い、威力を減らす方法。
意外と簡単だけど、維持するのは、難しい。

結局食らうから、それに耐えながら維持しなきゃならない。
簡単なようで難しい、これが魔力の膜。
とりあえず、耐えれた。
この場にいては危険な為、場所を移動するの！
これはリョウ君との特訓の賜物なの！
フェイトちゃんより高く飛び、杖を掲げ構える！
フェイトちゃんが何かしようとする前にバインドで封じる。

「今度はこっちの番だよ！レイジングハートと一緒に考えたディバインバスターのバリエーション！」

受けてみて！フェイトちゃん！
これが私の魔法！私の全力全開！
〔スターライト・ブレイカー！〕
私の前で私の魔力が集まり収束されて、巨大な魔力弾ができた！

〔スターライト・ブレイカー！！！〕

レイジングハートをフェイトちゃんに向けて振り下ろすと巨大な魔力砲の閃光がフェイトちゃんに向かって放たれる！

「クッ！はぁ！！」

フェイトちゃんはバインドを破り、片手に持っている魔力弾をスターライト・ブレイカーに目掛けて放った。
だけど、フェイトちゃんの魔力弾はスターライト・ブレイカーによって掻き消され飲み込まれた！

「！！」

フェイトちゃんは驚いたが、すぐに障壁を貼る！
・・が、防ぎきれず障壁が壊され、フェイトちゃんは砲撃を食らい
飲み込まれた！

リョウＳＩＤＥ

うわ～、生で見ると本当に凄まじいとよくわかる。

〔凄まじいですね。これが噂の魔砲ですか〕

〔バサラ、なのはには絶対に言うなよ。もし言ったら俺が殺される〕

〔わかりました。けど、これで・・・〕

〔ああ、これで勝負は決まったな〕

これで、この戦いは終わったな。

「フェイトーー！！」

「フェイトちゃん！」

あ、フェイトが落ちていく。
このままだと、海にダイブだな。
俺は高速移動で空を飛び、フェイトを抱き抱える。

「あ、リョウ。」

「おう。ちょっと待てよ、魔力を回復さしたるからな。なのはも。」

「あ、リョウ君。うん。」

なのはが俺に近付く。
そして、なのはとフェイトの魔力を回復させる。

「私・・・負けちゃったんだ。」

「ああ。」

そう言い、フェイトの顔は清々しそうだ。

〔プットオン〕

バルディッシュからジュエルシードが出てくる。
その時、空から雷が俺達目掛けて落ちる！

「バサラ！」

〔プロテクション！〕

雷を防ぐ。
その瞬間にフェイトのジュエルシードがプレシアによって奪われた。
何故だ？何故？わからん。
アリシアは生き返らせれるのに。
全くわからない。
とりあえず、俺はなのは達と一緒にアースラに移動する。

プレシアＳＩＤＥ

「ゴホッゴホッ・・・」

グッ、もう残り少ない。
おそらくさっきの魔法でここがバレて気付かれただろう。
いずれここに管理局がくる。
私がやる事は、絶対にアリシアとフェイトを泣かす事だ。
だけど、もう私にはこれしかない。
これが、アリシアとフェイトを幸せにできる方法。
ごめんなさいアリシア、フェイト、私は酷い母親ね。
でも、これしかない。
これが、私のせめてもの償い。
ジュエルシードは十一個、充分に次元震が起きる。
リョウ、アリシアとフェイトをお願いね。
勝手なお願いだけど。

「アリシア、フェイト、幸せになりなさい。」

リョウＳＩＤＥ

俺となのはとユーノはフェイトとアルフを連れてアースラに移動する。
管理局の奴等はフェイトとアルフを手錠をかけようとするが、俺が殺気をだし、手出しできないようにした。
俺達はそのままブリッジに移動する。

『プレシア・テスサロッサの居場所を発見！これより突入します！』

「了解！プレシア・テスサロッサの確保、よろしくお願いします！」

リンディはモニターに写る管理員達にそう命令する。
そう言った後、リンディはこっちに向く。

「初めましてフェイトさん。私は時空管理局管理員でこの船の艦長リンディ・ハラオウンです。」

「あ、はい。フェイト・テスサロッサです。」

いやいや、そんなのんびり挨拶するなよ。
天然なのか？フェイトは。
あ、天然だったな。
そうしてる内にモニターでは、すでにプレシアの王座的部屋に入っていた。
そして、隠し通路を見つけ進行している。
あ、ヤバッ！あそこには！

「フェイト！いますぐにこのブリッジから出・・・！」

「！？」

「なっ！？」

「あれは！？」

「私？」

「フェイト？」

誰もがカプセルに入っている少女アリシアの姿に驚いている。

「私のアリシアに触らないで！」

カプセルの後ろから現れたプレシアが魔法を放ち、管理員に攻撃する。

数人の管理員が倒れる。

「う、撃て！！」

残りの管理員が反撃する。

だが、簡単に障壁に防がれる。

「いけない！皆引き返して！」

「愚か者供め！食らいなさい！！」

プレシアの魔法が直撃し残りの管理員が倒れる。

管理員達は急いでアースラに戻される。

どうやら非殺傷設定だった為、命に別状はないようだ。

「もう駄目ね・・・たったこれだけしかないけど・・・アルハザー

ドに辿り着けるかわからないけど・・・」

（どういう事だ？何故こんな事をする。まさか・・まさかそんな！
やめろプレシア！やめろ！！）

「フェイト。そこにいるんでしょ？」

「！」

プレシアに名を呼ばれて、フェイトの体は小さく震わせる。
やめろプレシア！言うな！

「貴女はね・・・アリシアの代わりにしようと・・・私が造ったアリシアのクローンなのよ・・・」

「！？クローン？アリシアの・・・？」

驚愕の真実に、フェイトは混乱し信じられないと言った表情をする。

「・・・プレシアは最初の事故の時に、実の娘、アリシア・テスサロッサを亡くしているの。“フェイト”という名は、当時の彼女の研究につけられた開発コード名です。」

「よく調べたわね。」

やめろプレシア・・・もういい、やめろ。

「フェイト、正直に言うわ。・・・私ね、貴女を造りだした時から、貴女が好きになれなかったの・・・」

表情を暗くしながらプレシアは語る。
“好きになれなかった。”
その言葉を聞いたフェイトは体をビクッと震わせる。

「何故、貴女を嫌っていたのか・・・ある二人のお陰でね、ようやくわかったわ。私は貴女を“アリシアの代わり”としか見てこなかった・・・」

フェイトもなのはも誰もが全員が、黙ってプレシアの話を聞く。
そんな表情をするな。

「・・・でも、それは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない・・・貴女は“フェイト”だもの・・・」

もういい、そんな表情をするな!プレシア!

「フェイト・・・貴女をフェイトという、私の娘として見た時に・・・私の気持ちは大きく変わり、本当の思いに気付いたわ・・・」

フェイトはプレシアを、プレシアはフェイトをジッと見つめる。

「ごめんなさいフェイト・・・今更、謝っても許されない事はわかっているわ。・・・でも、これだけは・・・貴女に伝えておきたいの・・・」

もうやめろ!そんな・・・そんな今にも泣きそうな表情で優しく微笑むな!

「フェイト・・・貴女の事が・・・大好きよ。」

第１３話　なのはＶＳフェイト！！真実と本音！（後書き）

白黒「第１３話完成！」

家康「宿命の対決か。独眼竜対真田みたいな感じだな。」

テンテン「ナルト対サスケだね。」

セイバー「私達だと・・・」

ライダー「士郎対アーチャーですね。」

白黒「そんな感じだな。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第１４話　時の庭園突入！（前書き）

白黒「今回はちょっと少ないかな。」

テンテン「もうちょっと長く書かなかったの？」

白黒「気分しだいだからな。」

家康「そうか。」

セイバー「第１４話始まります！」

第１４話　時の庭園突入！

リョウＳＩＤＥ

真実を知り、フェイトは手に持ったバルディッシュを落とし、目のハイライトが消え、倒れる。
俺となのはとアルフとユーノはフェイトを抱える。
プレシアは管理局にこれからどうなるか説明する。
・・が、俺達はそんな事聞いていない。
クソクソクソ！
プレシアの奴、死ぬ気か！
フェイトとアリシアを俺に託す気だ！
そんな事、二人は望んではいない！
なんとしても、プレシアを助けなくてわ！

「リョウ。」

「・・・なんだ？アルフ。」

「アンタ、アレを知っていたんだね。」

「・・・」

「どうなんだい！」

「・・ああ、知っていた。」

「！」

質問に答えると、アルフに殴られた。
痛くはないが、心のほうが痛かった。

「・・」

「なんで・・なんでそれをフェイトに教えなかったんだい！なんでその事を・・・」

「それを言えばどうなるか、今のフェイトを見ればわかるだろう。」

「うっ。」

「それに、俺はもう少し後で教えるつもりだったんだが、まさかこんな事になるなんて思わなかった。」

「・・」

「さすがに想定外だ。だが、今はそんな事よりフェイトを何とかし、プレシアを・・」

「これより我らは敵の本拠地に乗り込み、プレシア・テスサロッサの確保に向かいます！」

「「「了解！」」」

「なのはさん、ユーノさん、リョウさん、よろしかったら私達と一緒にアレを止める協力を！」

「「わかりました！」」

「・・わかった。だが、先にいっててくれ。」

「どうしてなの？」

「フェイトと少し話をするから。」

少しフェイトと話があるからな。
立ち上がらないと、プレシアを・・母親を救えない。
これは、俺の責任だからな。

「・・わかったわ。フェイトさんの事、よろしくお願いするわね。」

「リョウ君・・・フェイトちゃんの事、よろしくお願いなの！」

「ああ。話を終えたら俺もすぐ行く。」

「急ごう！時間も少ない！」

「はい！」

なのはとユーノはクロノと一緒に庭園に行った。
俺はフェイトとアルフと一緒に一つの空部屋にはいる。
フェイトはベッドに寝させる。

「フェイト・・・」

「・・・」

「フェイト。」

フェイトに話かける。

「フェイト、少し話をしよう。つまらない話だ。とある世界でかつて、英雄がいた。その英雄は記憶を無くし、記憶を取り戻す為に戦っていた。」

「・・・」

「とある戦いで、その英雄は真実を知った。その真実はあまりに残酷だった。」

「・・」

フェイトは俺を見つめる。

「なんだと思う?」

「・・・わからない。」

「そこに現れたのは、もう一人の自分だった。そして明かされた衝撃の真実、それは・・・」

「それは?」

「その英雄の体は偽者だったんだ。」

「偽者。」

「そう、もう一人のほうが本物だった。魂を偽者の体に入れ、本物の体にはただ破壊と殺戮しかない魂を入れた。それを知っても、その英雄は戦った。」

「どうなったの？」

「偽者の体のほうが勝った。そして、英雄は本物の体を倒した。」

「どうして？本物を倒したの？もしかしたら、元に戻れるのに。」

「その英雄の友人がある言葉を言ったんだ。なんだと思う？」

「何を、言ったの？」

「“必要なのは体じゃない！魂なのだと！”とな。」

「魂・・」

そう、必要なのは体ではない。
心なのだ。
この話、意味があるのかわからない。
だが、何故かフェイトにこの話をさせた。
ちなみにこの話はロックマンゼロのゼロの話である。

「フェイト。確かにお前の体、見た目はアリシアだ。だが、お前はフェイトだろう。心が魂がフェイトという存在にさしたんだ。たとえその体がクローンだとしても、お前はフェイトだ。」

「・・・」

「フェイト。プレシアは、最初はお前をアリシアの代わりの人形だと思っていた。だが、俺が少し説教（？）をして、認識を変えた。プレシアはそれまでしていた自分の行いに後悔を抱き、死ぬきだ。」

「・・・」

これは、俺の責任だ。
だから、絶対に阻止してみせる！
必ずな！

「俺はプレシアの死を食い止める。フェイト、お前はどうする？」

「わ、たしは・・・」

すぐには決められないだろうな。
別に急かす気は無い。

「焦って答えを言う必要はねえぜ。じっくり考えな。さてっと、何時までもここにいてもしょうがない。そろそろプレシアの所に行くか。」

〔うん！リョウ君、お母さんを助けてね！〕

〔本当にいつの間に居たんですかアリシアさん。〕

実はアリシアの魂もここにいたのだ。
何時いたのかというと、俺達がアースラに帰還する時に一緒に来たのだ。

「さて、時間もない。急いで合流するか。行くぞアルフ。」

「ああ。」

俺とアルフは転送装置の部屋に急ぐ。
途中でアルフがフェイトに何か言ったが、俺は聞いていない。
崩壊する庭園に着き、なのは達と合流する。

「なのは。」

「リョウ君！」

「苦戦してるようだな。」

俺達の前には大量の機械兵がいる。
なかなか面倒だな。
ん？この魔力は。

「来たか。」

「リョウ！アルフ！」

「フェイトちゃん！」

「フェイト～！」

フェイトが起き上がり、俺達と合流する。

「フェイト。大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫。ありがとうリョウ。」

「ふっ。」

どうやら立ち直ったようだ。
なら、こんなところでグズグズしている必要は無いな。
さっさと片付ける！

「ここをさっさと突破する！」

俺は腰にディケイドライバーを出し、装着する。
ライドブッカーからカードを取り出し！

「変身！」

［カメンライド、ディケイド！］

俺は仮面ライダーディケイドになる。
つうか、久し振りだな。
仮面ライダーになるのも。

「リョウ君！？何その姿？」

「リョウ。」

「な、なんだ！？それは！」

「こいつは仮面ライダーディケイド。まあ、俺のレアスキルの一種と思ってくれていい。」

「ふえ～。」

「レアスキル・・」

機械兵供が攻撃を開始しようと構える。

「悪いが、一瞬で終わらす！」

俺は一枚のカードをドライバーに差し込む。

［アタックライド、クロックアップ！］

カブトが使うクロックアップを発動する。

俺以外が止まっているかのように動かなくなる。

「バサラ、ブレードモードだ。」

〔了解！〕

バサラが杖から西洋の剣に変わる。

柄の先端には星のマークがある。

「はあ！」

俺は一気に接近し、機械兵供をブレードで切り裂く！

まるで肉をスライスするかのようにあっさりと切り裂いていく。

一気に二体、三体と切り裂く。

どんどん切り裂きラスト一体になった。

ラストはこれまでの機械兵よりもでかい。

だが、俺の敵じゃない。

「バサラ！」

〔了解！〕

ブレードに魔力が包み込む。
すると、魔力の刃が現れ、ブレードから伸びていく。
食らえ！俺のオリジナル魔法技！

〔スタイラル・ザンバー！〕

「そらぁぁ！！」

伸びたブレードが巨大な機械兵を切り裂く！
一太刀目は横に、二太刀目は右斜め、三太刀目は左斜め、最後に四太刀目は縦に斬った。
スタイラル・ザンバー・・・伸びた剣で相手を切り裂く技だ。
技名は適当に決めた。

［クロックオーバー！］

クロックアップが終わり、時が動きだす。
その瞬間、機械兵は全部爆発し、破壊される。

「な、何？何が起きたの？」

「いつの間にか敵が全滅・・・」

「一体どうやって！？」

「全くわからなかったよ！」

「なんなんだ、アイツは！？」

ふん、ざっとこんなもんか。
さて、急ぐか。

「よし、行くぞ！」

「「「「「・・・」」」」」

「おい、ボケ～っとしてないでさっさと行くぞ。」

「「「「「あ、うん。」」」」」

俺達は先に進む。
もちろん、下に落ちないようにだ。
先に進むと、分かれ道が。

「分かれ道か。」

「どうすんだい？」

「二手に分かれて行動する。」

「一つは動力炉の完全停止を！もう一つはプレシアの所へ！」

「なら、早く決めるか。」

動力炉へはなのはとユーノが、プレシアの所へは俺とフェイトとアルフが行く事になった。

「おい！僕を忘れるな！」

「ああ、そういえばいたな。そんな奴が。」

「貴様～！」

「なんか、私達は人数が少ないの。」

「もちろん考えてある。」

俺は印を組む。

変化の術を発動し、分身体の俺が現れる。

「「リョウ（君）がもう一人！？」」

「な、なんだその魔法は！？」

コイツは魔法じゃなく、忍術なんだがな。

まあ、こいつらにはわからんしな。

適当な言葉を並べて誤魔化す。

「ふえ～、凄いの。」

「まあな。さてと、そろそろ行くか。分身体、なのはを頼むぜ。」

「ああ。」

「よし！行くぞ！」

「「「はい！」」」
「あいよ！」
「「・・・」」

プレシア・・・お前を死なせねえ！

第１４話　時の庭園突入！（後書き）

白黒「第１４話完成！今回は久し振りに仮面ライダーになりました。」

ライダー「なんだか、本当に久し振りですね。」

セイバー「それに、オリジナル技もでましたし。」

白黒「まあ、技名はかなり適当だしな。」

家康「いいのか？それで。」

白黒「いいのさ。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はプレシアを救出！

第１５話　動力炉停止！プレシア救出！庭園破壊！！（前書き）

白黒「第１５話始まります！」

全員『なんか前書き書けよ！』

白黒「じゃかあしい！書く事ないんじゃあ！」

第１５話　動力炉停止！プレシア救出！庭園破壊！！

なのはＳＩＤＥ

私はリョウ君とユーノ君と一緒に動力炉という所に行っているの。

「ディバインバスター！！」

「フッ！」

「チェーンバインド！」

私はディバインバスターで、リョウ君は剣で機械兵を倒していくの。
ユーノ君はバインドで機械兵の動きを封じるの。
ちなみにリョウ君はいまだにあの仮面のヒーロー見たいな者になっているの。

「後少しだ。油断するなよ、二人供。」

「わかったの！」
「はい！」

階段を駆け上がると、そこに門があった。
ここが動力炉がある所。
リョウ君が門を破壊して中に入る。
入ると、目の前に巨大な機械が動いてるの！

「これが・・・動力炉。」

ふえ～！凄く大きいの！
こんなの、どうやって止めるの？

「こりゃあ、破壊したほうが楽だな。」

「は、破壊たって、これはさすがに・・・」

そうだよ！どうやってアレを破壊するの？

「なのは、俺とお前の砲撃で破壊する。」

「ふえ？わ、私？」

「そうだ。バサラ、ロッドモードだ。」

〔了解！〕

リョウ君がそう言うと、剣が杖になったの。

「なのは。」

リョウ君が私を見つめるの。

「・・・うん。わかったなの！」

リョウ君！私、わかったの。
そういう事だね。

「いくよ！レイジングハート！」

〔オーライマスター！〕

「バサラ。」

〔すでに完了しています。いつでも撃てます！〕

「上出来！」

私とリョウ君は動力炉に向けて、杖を構えるなの。

「いくぜ！なのは！」

「うん！」

いくよ！

これが、私とリョウ君の全力全開！

「「スターライト・ブレイカー！！！！！」」

私とリョウ君の全力全開の魔法を当て、動力炉は破壊され、機能を停止したの。

「ふう、やったなの！」

「凄い・・・」

「こんなもんか。」

動力炉をどうにかできたから、あとはフェイトちゃんの所に「よし、アースラに帰還するぞ。」行くってふえ?

「ど、どうしてなの!?」

「あっちには、本体の俺がいるんだ。心配いらんだろう。」

「で、でも・・・」

そりゃあ、大丈夫だろうけど、やっぱり心配なの。

ポンッ!

ふえ!?リョ、リョウ君に頭を撫でられたの!///

「なのはは優しいな。でも、本体の俺は必ずみんなを守るさ。それに、俺達がアースラに戻らないと、本体の俺やフェイト達が帰れなくなるからな。俺達が帰る場所を守らなきゃな。」

「帰る場所。」

「ああ、アースラは今、無防備な筈だ。もし、敵に攻撃などされたら、俺達は帰る場所を失っちまう。そうさせないように、俺達がアースラを守らなきゃならない。」

・・・そう、だよね。

私と分身体のリョウ君とユーノ君が、みんなの帰る場所を守らないと!

「うん!わかったなの!戻ろう!」

「ああ!」

「うん！」

私達は、アースラに戻る為、移動するなの！
本体のリョウ君、フェイトちゃん、アルフさん、リンディさん、それに・・・プレシアさん。
みんな、絶対に帰ってきてなの！

リョウＳＩＤＥ

俺はディケイドのまま、フェイトとアルフと一緒にプレシアに会う為に奥に進むが、途中で機械兵と遭遇し、戦闘に入る。
ちなみに、俺はバサラを分身体に持たせてるので、俺はデバイスを持っていない。
だから、俺はライドブッカーをソードモードにして、敵を切り裂いていく。
フェイトはバルディッシュをサイスフォームに変形させ、接近戦で機械兵を倒していく。
アルフは、拳で殴り倒す。
ＫＹ？知らん！興味無し！

「ふう、結構な数だな。」

「うん、こんなにいたなんて。」

「でも、あたし達にかかればこんな雑魚供、敵じゃねえ！」

「そうだね。」

「急ぐぞ！早く行かないと、プレシアが！」

「うん！」

「ああ！」

「おい！僕を無視して放置するな！」

俺達は先に行く。

どんどん奥に進む。

・・・ここだな。

む？この声は・・・リンディ？あ、そういえば、ここでプレシアとリンディが会話をしていたな。

なんかこんな筈じゃなかったとか言っているな。

要するに、自分の思い通りにならなかったって事だ。

まあ、普通はそんなもんだ。

そう簡単に思い通りにはいかんもんだ。

まあいい、今はこの壁を破壊だ。

「どきたまえ！僕が壁を破「どけ。」！？」

「ファイナルアタックライド・ディディディディケイド！」

「うわあああぁぁ！」

ライドブッカーをソードモードからガンモードに変え、必殺技ディメンションシュートで壁を破壊する。

壊れた壁から侵入する。

「悪いが、俺はアンタらの思い通りになるなんざまっぴらごめんだ。
だから、これからは俺の思い通りにいかせてもらう。」

「だ、誰！？」

「・・・貴方、リョウね。」

「正解。」

リンディはいきなり壁を壊し、現れた仮面の男（俺）に驚き、プレシアはそいつが俺だと見抜いた。

「ほ、本当にリョウなの？」

「そうだぜ。それにしても、よく気付いたなプレシア。」

「簡単よ。声でわかるわ。」

「ありゃま。」

そうか、確かに声でバレるな。
一本取られたな。
フェイトが前に出る。

「母さん。」

「フェイト・・・なんのようかしら。」

フェイトとプレシアが見つめ合う。
さっさと話さないと、ここ崩れちゃうよ。

「いたた・・き、貴様～！やるならやると早く言え！そんな事より、誰だってこんなハズではなか「ちょっと黙れＫＹ。」グベギャッ！」

「クロノ！」

邪魔でうるさいＫＹを手刀で沈める。

全く、これだからＫＹはいけないんだ。

「母さん。私はアリシアのクローンかも知れない。けど！私は母さんの娘！私は、母さんが大好き！」

「私もよ。フェイト。」

「だから、母さん死なないで！」

「フェイト。貴方からそんな言葉を聞けるなんて、私は嬉しいわ。でも、私は・・・」

「それで、俺にフェイトとアリシアを押し付ける気か？」

「ええ、貴方にしか託せないもの。」

冗談じゃない！

俺はそんな人間じゃない！

アンタの思い通りにはいかねえよ！

「悪いが俺はごめんだ。アンタの勝手な判断で任されるのはな。」

「どうして？」

「理由は簡単、アンタがフェイトとアリシアの母親だからだ。」

そう、アンタはフェイトとアリシアの母親だ。
二人には、母親であるアンタが必要なんだよ。
それに何より、ハラオウン家の娘にしたくはない！
特にこのＫＹ！の妹なんかには絶～対にさせねえ！！

「なんか、貴方から物凄い思念を感じるのだけど。」

「気のせいだ。」

「そ、そう。」

そうだ！気のせいだったら気のせいだ！

「ごほんっ、だとしても私はこの娘に酷い事をしたわ。だから・・・」

「だから、死んで償う気か。」

「そうよ。」

「・・・ふざけるなよ！」

俺は怒り、思いっきり怒鳴る！
ふざけるな！それだけの事で簡単に死ぬ道を選ぶな！

「それでアンタは満足かも知れないが、それはアンタの自己勝手な満足だ！そんなの俺は一切認めない！それに、アンタが死んだら、

フェイトとアリシアは悲しむ！もしかしたら、精神が崩壊してただの屍の人形になるかも知れねえ！」

「・・・」

「それにより、それをフェイトとアリシアは納得するのか！」

「しないわ。」

「そうだろう！」

「なら、どうしたらいいのよ！？どうしたら！？」

「生きろ！」

「！？」

「生きて罪を償え！そして、フェイトとアリシアと幸せに暮らせ！それがアンタのするべき事だ！」

死んで償うなんて、なんの解決にもならない。
どうせなら、生きてフェイトとアリシアの為な母親になれ。
本当にフェイトとアリシアの事を思うなら！

「そうね。でも、私はもう。」

その瞬間、プレシアの地面が崩れた！
まずい！

「母さん！！」

〔お母さん！！〕

「チッ！」

［アタックライド・クロックアップ！］

俺は急いでクロックアップのカードをドライバーに差し込む！
そして高速移動で、プレシアとアリシアの入ったカプセルを掴み、
元の場所に戻る。

［クロックオーバー！］

「え？リョウ！？」

〔いつの間に！？〕

「またさっきのレアスキルかい！？」

「どうして？」

ふう、間に合ったぜ。
マジで焦ったぜ。

「フェイトとアリシアの為だ。当然だ。」

「・・・ふう、そうね。なら、生きてみようかしら。」

「母さん！」
〔お母さん！〕

「アリシア、フェイト。う、ゴホッゴホッゴホッ！」

「母さん！？」

〔お母さん！？〕

「ゴホッゴホッ！先ずはこの病気を治さないとね。」

「そうだな。そんじゃあ帰還するか！アースラに！」

俺達はアースラに帰還する。船の前には、たくさんの機械兵の屍があった。

そのそばには、なのはとユーノがいる。

分身体は消えており、バサラも俺の所に戻る。

「リョウ君！フェイトちゃん！」

「上手くいった！さあ、アースラに！」

「うん！」

アースラに入る。

ブリッジに移動し、モニターには庭園が崩壊していく。

これで・・・

「た、大変です！庭園から次元震が！このままでは、飲み込まれます！」

「な！！？」

これはヤバいな。
仕方ない、俺はブリッジからでる。

「何処に行くの！」

「あの庭園を吹っ飛ばす！」

「無茶よ！」

「問題無い。」

そう言い、船から出る。
宙に浮き、気を溜める。
手を上げ、手のひらに気を集中する。
手のひらから、デカいエネルギーの弾ができる。
これは、ドラゴンボールZの敵キャラ、クウラの最強技スーパーノヴァ！

「これで、吹っ飛べえええぇぇ！！！」

スーパーノヴァを、庭園に放つ！
庭園に直撃し、大爆発する。
強烈な光と煙が包む。
光が収まり、煙が晴れると庭園は完全に消滅した。
それと同時に次元震も消えた。
これで終わりっと。

〔ご苦労様でした〕

「サンキューな。さて、帰還するか。」

俺はアースラに帰還した。
あとは、プレシアの病気を治すのとアリシアの蘇生だな。
アースラに戻ると、いろんな奴等に質問させられたがなんとか誤魔化して事無きことをえた。

第１５話　動力炉停止！プレシア救出！庭園破壊！！（後書き）

白黒「第１５話完成！今回は庭園の最後です。」

家康「もうすぐで最後だな。無印編の。」

テンテン「どうするの？」

白黒「その前にちょっとやる事があるので、次の次が無印編の最終話です。」

テンテン「なんかライバルが増えて嫌な予感が・・・」

白黒「あはは・・・それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回は、治療と蘇生と無罪！」

第１６話　治療と蘇生！（前書き）

白黒「ふう、順調にいってるな。」

ライダー「予定通りですか？」

白黒「一応ね。」

テンテン「第１６話始まります！」

第１６話　治療と蘇生！

リョウＳＩＤＥ

庭園を破壊し、なのは達の所に戻る。

「さて、リンディさん。」

「何かしら？」

「何処か、無人の世界の行ってくれないか？」

「・・・どういう事？」

「プレシアの治療とアリシアの蘇生の為にだ。」

その言葉を聞いた瞬間、みんな叫びだした。

プレシアは叫ばなかったが。

「そういえば、そうだったわね。」

「よく覚えていたな。」

「覚えてなかったら、貴方にアリシアとフェイトを託さなかったわ。」

「確かにそうだな。」

「ふ、ふざけるな！蘇生など不可能だ！妄言も言うな！」

「黙れＫＹ！貴様には聞いて無い。黙らんと・・・」

「うっ（汗）」

全くこのＫＹは、話を折りやがって。
というか、もう目を覚ますとは、意外と頑丈だな。

「理由は？」

「理由は二つ。一つはあんまり人に見せたくない為。もう一つは船でやると、壊れてしまうから、この船が。」

「どういう事？」

「ま、見てのお楽しみだな。」

「・・・わかったわ。エイミイ、この近くに無人の世界がないか調べてくれない？」

「了解しました！」

エイミイがこの近くに無人の世界がないか調べる。
すぐに見つかればいいんだが。

「見つけたよ！この近くに人が一人もいない世界があるのは、草木があるだけです！」

ほお、近くにあったとはな。
運がいいな。

「わかったわ。そこに行くわよ。いいわね。」

「わかった。行くか。」

アースラは無人の世界に動かす。
一時間後、無人の世界に着く。
世界に降り、カプセルからアリシアを取り出し、草が生える地面に降ろす。

「よし、ここならいいだろう。さっそく始めようか。」

俺とプレシアとアリシアの他に、なのはとフェイトとアルフとユーノとリンディがいる。

「さて、やるか。」

俺は何もない所から空間が現し、その空間から何か入っている風呂敷を取り出す。

「な、何!?それ・・・」

「俺のレアスキルの一つだ。」

俺は風呂敷を広げ、中身を出す。
風呂敷の中にある物は、俺が知っているアイテムの中で最高のアイテム、ドラゴンボール!
数は七個で、野球ボール位の球状で色はオレンジ、球状内には星が

ある。
しかも、一つ一つに星の数が違う。
半年前に俺はドラゴンボールの世界に行き、そこでデンデにお願いしてもらい、ドラゴンボールを貸してもらった。
こいつなら、プレシアの治療もアリシアの蘇生もできる。

「これが？」

「ああ、これがアンタの治療とアリシアの蘇生に必要な物だ。」

「これが？どうやって？」

「まさか、その球でどうにかできるのかい？」

「まあ、見てな。みんな、少し離れてな。」

皆を離れさせ、俺はボールの近くに立つ。

〔バサラ〕

〔大丈夫です。ハッキングに成功し録画もコピーも消去させました。
それに、結界も張りました〕

〔上出来だ〕
「始める。・・・いでよ神龍！」

そう言うと、ドラゴンボールが光り輝く。
空は暗くなり、太陽が雲に覆われる。

「な、何？これ？」

「何何何？」
「一体何が？」

リンディ、アルフ、プレシアはこの現象に驚き、他はあまりの現象に声がでない。
その時、ドラゴンボールから光が伸び上がっていく。
そしてその光は形を変え、何かの生き物になっていく。
光が消え、現れたのは・・緑色の肌をした細長い巨大な龍である。
それは、体長数十mはあるとても巨大な龍。

「こ、これは一体！！？」

「ふえ～～！！！？」

「・・・」

「フェイトォ！しっかり！目を覚まして！」

〔凄～い！〕

「これは、とんでもないわね。」

「す、凄すぎる！」

「これは夢これは夢これは夢これは夢・・・・・」

上からリンディ、なのは、フェイト、アルフ、アリシア、プレシア、ユーノ、ＫＹが神龍をまじかで見た感想を言う。
俺も生で見て結構驚いている。
しかし、ＫＹ居たのか。

全然気付かなかった。

「こいつは神龍。まあ簡単に言ってしまえば、神様が作った物だ。」

「か、神様が？」

「ああ。」

さすがにびっくりだよな。

さてて、そろそろ言うか。

「さあ、願いを言え！どんな願いも三つまでかなえてやろう。」

「・・・ふう。一つ目の願いは、この女性プレシアの病気を治してくれないか！」

「え、えと・・か、可能なの？」

「容易い事だ。」

そう言うと、神龍の目が赤く光り、プレシアの体が赤い光に包まれる。

プレシアの顔色が良くなっていく・・・ってあれ？

なんか、顔色どころかなんか若返っているような。

「か、体が軽くなった！それに、なんだか前より調子が良い！」

「プ、プレシア・・・鏡を見て。」

リンディがプレシアに鏡を見せる。

プレシアの顔に皺が無くなっているのだ。

「わ、若返ってる！どうして？」

「治療したついでに若返らした。」

大サービスってやつか。

良かったなプレシア。

「さあ、二つ目の願いを言え！」

「プレシア、アンタが言いな。」

「ええ。この娘を、アリシアを生き返らせてほしい！」

「できるのかしら。」

「ふっ。」

「・・容易い事だ。」

神龍の目が赤く光る。

光が収まると、アリシアの目が少し開ける。

「アリシア！」

「お母・・さん。」

「アリシア！アリシア！！」

「お母さん・・く、苦しいよ。」

「あ、ごめんなさい。でも、生き返ってよかった。アリシア・・・」

「お母さん。」

プレシアは生き返ったアリシアを抱く。
アリシアは少し苦しそうだが、嬉しいらしく、嬉し涙を流している。
よかったな、プレシア。
あ、言い忘れてたが、アリシアには布を羽織っている為、裸ではない。
フェイトが、アリシアとプレシアに近付く。

「アリシア・・・」

「フェイト。」

お互い、沈黙する。
う～む・・・話すきっかけを作らないとな。
どうしようか。

「「・・・」」

「そうよフェイト。アリシアは貴女のお姉さんよ。アリシア、この娘はフェイト。フェイトは貴女の・・・」

「妹でしょ？」

「そうよ。」

「お姉ちゃん・・・」

おや、プレシアが話すきっかけを作ってくれたか。

「アリシア・・お姉ちゃん。」

「アリシアはいらないよ。普通にお姉ちゃんか姉さんにしてほしいかな。」

「わかった。・・・姉さん。」

「フェイト。私は、貴女を見ていた。お母さんの為に一生懸命に頑張ってたのを。お母さんの為に魔法を覚えたのを。ずっと、見てた。」

「姉さん。」

「アリシア。」

「私達は、今は話す事が少ない。でも、これから話す事が増えるよ！」

「そう・・だね。うん！私達はいつでも話せるね！」

うん、これでよしだな。

「三つ目の願いを言え！」

「もう願いは無い。ありがとう神龍！」

「そうか。では、さらばだ！」

そう言うと神龍は消え、七つのドラゴンボールは宙に浮き上がる。
俺は手を上空に差し出す。
上空に空間が現れる。
そしてドラゴンボールは、空間に入る。
ドラゴンボールが空間に入ったのを確認した後、俺は空間を閉じる。
これでよし。
あとは・・・

「ちょっといいかしら？」

「・・・なんだ？」

リンディが話しかけてきた。
たぶん。

「あのアイテム、いや・・・ロストロギアは何処に？」

「ロストロギアだと？アンタ、何を言ってやがる。」

「アレは正にロストロギアよ。アレは我ら管理局が管理しなきゃならないわ。」

「アンタ、話聞いてなかったのか？それとも、耳が悪いのか？アレは神が管理しているんだ。お前等管理局が管理していい物じゃない。」

「ふざけるな！神なんて存在しない！」

やれやれ、盗人とは正にこいつらを指すんだろうな。
しかも、まるで自分達の物だというその物言い、アホとしか言えん。
それにしても、五月蠅いＫＹだ。
眠らせよう。

「ふん！」

「ぐびがだまげりゃああ！！」

「クロノ～！」

ＫＹに思いっきり顔面に右ストレートのパンチを叩き込む。
殴られ、宙に浮き、何回転も回りながら地面に落ち、倒れる。
なんかピクピクいってるが、無視する。

「あ、貴方・・クロノに！」

「あんまりにも五月蠅いから黙らしただけだ。」

「くっ・・・」

「まあいい、それにアレはしっかり管理されてるし、問題無い。それに、アレを守る守護者もいる。そいつらの強さは、管理局全部隊が束にかかっても勝てないほどの実力だ。」

大部分嘘をついてるがな。
本当は違うんだが、こうでも言わんと、管理局は何しでかすかわからんからな。
どうする？

「・・・はあ、わかりました。ちゃんと管理されてるなら、何も言いません。」

話がわかってくれて助かる。
さて、今度はプレシア一家の話を。

「それでいい。もし、ドラゴンボールがある世界に行き、それを管理しようとしたり、使おうとしたらお前等の世界は滅びる所だったな。」

「どういう事？」

「ドラゴンボールはあんまり多用してはいけないんだ。もし多用し過ぎると、世界を滅ぼす存在いや、怪物が現れてあらゆる世界を滅ぼす。だから、数十年、もしくは数百年は使用してはいけないんだ。」

「な、なるほど。なら、エイミイ、あのアイテムの記録を消去しなさい。」

「了解しました！」

「さて、それじゃあ、プレシア達の事なんだが。」

「何？」

さて、プレシア一家の罪を無罪にしないと。
ちゃんと材料も用意したからな。

「プレシア達の罪は無実だ。だから、無罪にしてくれないか？」

「・・・それは不可能よ。」

「理由は？」

「彼女等には、すでに記録があるわ。それに、管理員に攻撃したわ。罪は消せないわ。」

「それは、アンタらが不法侵入したからだろ。攻撃したのは、不法侵入したアンタ等への撃退攻撃だ。」

「た、確かにそうだけど・・・」

「それに、アンタ等が最初の次元震の時に早くこれば、こうはならなかったな。アンタ等にも責任はある。」

「そ、それはそうだけど。」

くくくっ・・・このまま攻め続けてやる。
反撃なんかさせねえぜ。

「それに、このＫＹの乱入のせいで余計な混乱を作った。」

「それは・・・ごめんなさい。」

全く、このＫＹのせいでとんだ災難だぜ。
コイツは場を混乱させるしかできんのか。

「でも、それとこれとは話は別です。」

ま、だろうな。
だから、アースラでハッキングをし、プレシアからもらった資料で見つけたアリシアが死んだ事件の真実を。

「ほれ。」

「・・？何かしらこれ？」
俺はリンディにある内容が入ったディスクを渡す。
それは。

「これは、プレシアの最初の事件の真実が載っている。」

「なんですって！？」

「それはコピーだが、もしこの真実がアンタ等管理局の管理している世界にメディアに流せば、どうなるかな？」

「・・・・」

リンディは俺のあまりの考えに声がだせないようだ。

〔マスター。正にあくどいですね〕

「リョウ。アンタ、正に悪役ね。」

バサラ、アルフ、黙んなさい。
これは、プレシア達の為なんだからな。

「ふう。わかりました。彼女等の罪を必ず無実に無罪にしてみせます。」

ふん、そうでなくては困る。
これで、プレシア達は無実にできる。

「どういう事？」

「フェイト、つまりリョウ君はお母さんと貴女の罪を無罪にしてくれたのよ！」

「え？リョウ・・・」

「お前達に罪は無い。管理局の間違いで罪を背負う事は無い。だから、その材料を用意したのさ。」

「リョウ、ありがとう。」

「ふっ、気にするな。」

俺が勝手にやった事だからな。
原作では、かなり悲しい結末だったからな。
まあ、フェイトの為だな。

「ありがとう、リョウ。／／／／」

「ん。」

これで、後は終わ「リョウ君。」・・・ん？

「どうしたんだ？なのは。」

「リョウ君。なんでフェイトちゃんにはそんなに優しいのかな？かな？」

「え、えっと、俺はただフェイトに「リョウ君。」・・はい。」

な、なんだ？なのはがめちゃくちゃ怖いんだけど。

〔マスター。ここは気付くとこですよ〕

いや、わからんのだけど。

本当に。

「リョウ君。少しＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしよう？」

「断る！」

俺はその場から逃げた。

俺はただ、フェイトの為にやった事なのに！

〔マスター。相手の気持ちに気付いているようで気付いてないんですね〕

なんでこうなるんだ～！！

フェイトＳＩＤＥ

リョウ・・・最初に会った時は、なんだか不思議だなと思った。
リョウが魔導師だと知った時は困惑した。
私が母さんに鞭で叩かれた時は、私を心配して、駆け付けてくれた。
黒い執務官が現れた時と海上のジュエルシードを封印にてこずってた時は、私を助けてくれた。
そして、母さんと姉さんを助けてくれた。
・・・リョウ。
今、私は、やっとこの私の心の中にある感情に気が付いた。
私は・・・リョウが好き。

第１６話　治療と蘇生！（後書き）

白黒「第１６話完成！おそらく、ほとんどの者がやるであろうアリシア蘇生とプレシアの病の治療をしました。」

セイバー「しかし、まさかドラゴンボールを使うとは・・・さすがに予想外でした。」

テンテン「なんでドラゴンボールなんですか？」

白黒「結構迷ってね。特にアリシア蘇生は、考えて考えた結果、こうなりました！」

家康「いいのか？これで。」

白黒「いいの！ご都合主義だから！それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回、無印編最終回です！」

第17話　名前を呼んで！（前書き）

白黒「今回でなのは無印編は最終回です。」

セイバー「ふむ、リョウはあんまり戦わなかったな。なんなんですか？」

白黒「無印編はバトル中心じゃないからな。」

家康「だからなのか。」

白黒「だからなのです。」

ライダー「第17話始まります。」

第17話　名前を呼んで！

リョウＳＩＤＥ

プレシアの治療とアリシア蘇生から三日がたった。
あの後、アースラに戻り、俺となのはは地球に帰り、フェイト達は裁判しにいった。
三日間、フェイト達が来るまで緩やかに過ごした。
そして三日がたち、海岸沿いに俺達は集まった。

「裁判の結果、彼女等は無罪放免になった。彼女等は、これからは、管理局の特別部署で働く事になった。」

特別部署って事は、おそらく三提督直属の部署かな。
そこなら安全かな。

「よかったな。」

「ええ。これも、貴方のおかげよ。リョウ。」

「別に、気にするな。」

「ふふ、そうしとくわ。」

俺はなのはとフェイトとアリシアと一緒に海辺の方に移動する。
あ、あれか。

「「「・・・」」」

「なあ、なんか話せよ。」

「・・・今日、来てもらったのは・・・返事をするため」

「え・・・？」

「君が言ってくれた言葉・・・“友達になりたい”って・・・」

「あ・・・うん、うん！！」

「私に、出来るなら・・・私でいいならって・・・だけど・・・私、どうしていいかわからない。母さんに聞いても、わからないって・・・だから、教えてほしいんだ・・・どうしたら、友達になれるのか？」

「私も、お友達いないから・・・わからない・・・だから、教えて？」

俺は何も言わない、全てなのはに任せる。

「そんな事ないよ・・・友達になる方法は凄く簡単・・・名前をよんで、初めはそれだけでいいの・・・君とかあなたとか、そういうのじゃなくて・・・ちゃんと相手の目を見て、はっきりと相手の名前を呼ぶの・・・私がリョウ君の名前を呼ぶように、リョウ君が私の名前を呼ぶように。私は、高町・・なのはだよ。」

なのはの言葉に、フェイトとアリシアは小さく・・口にだした。

「なのは・・・」

「うん、そう！」

「なのは。」

「うん！うん！」

なのはが嬉しそうにフェイトとアリシアの手を取り、笑顔になる。
フェイトとアリシアが、俺のほうを見る。

「リョウ、貴方は・・・」

「何も言う必要はねえぜ。俺はすでに、お前達を友達のつもりだぜ。」

「リョウ。」

「リョウ君。」

「おう。フェイト、アリシア。」

俺もフェイトとアリシアの手を取る。

「ありがとう。なのは、リョウ。」

「ありがとう！なのはちゃん！リョウ君！」

なのはが嬉し涙を流し、フェイトがそれを拭ってあげた。
よかったな、みな笑顔だった。

「リョウ。」

ん？フェイトに呼ばれた。
なんだろう？

フェイトＳＩＤＥ

私はリョウを呼ぶ。

「なんだ？」

リョウが私を見つめる。
ううっ・・・は、恥ずかしい。／／／／
で、でも言うんだ！私の思いを！この気持ちを！／／／／

「リョ、リョウ。／／／／」

「？」

「あ、あのね。／／／／私、貴方に伝えたい事があるの。／／／」

「伝えたい事？」

「うん。／／／」

うわっ・・・心臓がバクバクいってる。／／／

緊張して、震えが止まらない。／／／
でも、言わなきゃ！／／／

「・・・わ、私・・・／／／／」

「？」

「私・・・貴方の事が・・・／／／／」

「ん？」

「貴方の事が・・・好きです。／／／／」

「・・・は？ごめん、もう一回言ってくれないか。」

「だ、だから・・・私、貴方の事が好きです！／／／／」

い、言っちゃったよ～！／／／
今、ものすごく恥ずかしい事言っちゃったよ～！／／／
で、でも言えたんだ・・・はう～。／／／

「・・・えと、マジ？」

「マ、マジです。／／／／」

「・・・・・・・・・・・・・」

「リョ、リョウ？」

リョウが動かなくなった。

どうして？

「フェイトちゃん。やってくれたの。」

「なのは。」

「まさか、あたし達の前でリョウ君に告白するなんてね。」

「姉さん。」

「フェイトちゃん。私は負けないの！これからライバルなの！」

「あたしもだよ！あたしもライバルだよ！」

なのは、姉さん。

私、負けない・・・絶対に！

「負けないよ！」

「それはこっちのセリフだよ！」

「私もなの！」

なのは、姉さん・・・これからは、リョウを巡ってのライバルだよ！

私、絶対に負けないよ！

リョウＳＩＤＥ

・・・えとこれ、どういう事なんだ？
確か、フェイトに告白されて・・・えと、マジ？

〔どうするんですか？マスター〕

〔どうするって言われても・・・どうすればいいんだ！？〕

〔自分にもわかりません！っていうか自分、デバイスなので〕

あかん、何もうかばない！どうしよう？どうする？俺は・・・どうすればいいんだ～～！！
数分後、俺はいまだに混乱しながらフェイト達と一時のお別れをする。

「お別れだね。」

「ああ・・・」

「どうしたの？なんだか、心ここにあらずって顔なんだけど？」

「気にするな・・・」

「まあいいや。お別れだね。」

「ああ。いつか、こいよ。歓迎してやる。」

「ありがとう。その時には、よろしくね。」

「はい！」

「それじゃあ、行きます。」

「あ、ちょっと待って！」

「？」

アリシアが突然待ったをかけ、俺を見る。
ま、まさか・・・勘弁してくれ。
もしくは、違ってくれ！

「リョウ君。／／／」

「な、なんだ？」

う～！頼む～！違ってくれ～！

「あたし、リョウ君の事・・・大好きだよ！／／／」

やっぱりか～！！
なんで・・・なんでなんだ～！

「だから、これがあたしの思い！受け取って！／／／」

「え？・・！！？！？！！」

・・・

アリシアが唇を放し、俺を見る。
アリシア・・・えと・・・顔・・・すごく・・真っ赤・・・なんですけど?

・・・~しばらく思考停止~・・・

・・・はっ!・・・あれ?フェイト達がいない?いつの間に帰ったんだ?しばらく思考停止してしまったな。
ゾクッ!
な、なんだ!?この黒いオーラは!?この感じは・・・なのはから感じる!?何故・・・?

「うっふっふ~!リョ・ウ・く・ん~!」

「な、なななんだ?」

こ、恐い~!!(汗)
な、なんでなのはがこんなに怖いオーラをだしてんだ~!!(ガクガクブルブル)

「ふふふ・・・ちょっとO★HA★NA★SHIしよう?」

そう言い、なのははレイジングハートを俺に向けた!
じょ、冗談じゃない!

「断る!!」

「断るはなしだよ。リョウ君・・・少し頭を冷やそうか。」

なんでＳｔｒｉｋｅｒＳのセリフを！？
それより、なのはの周りに桜色の魔力弾が幾つか・・・これは・・・
・・逃げなくては！

「い・・・いいい、イヤだあああぁああ！！！！！」

「逃げるななの～！！」

そう言い、なのはは魔力弾を撃ってきやがった！！
俺は結界を張りながら、逃げる！
あ～～も～～！！

「不幸だ～～！！！」

俺は某とある幻想殺しの口癖を言い逃げまくる！

第17話　名前を呼んで！（後書き）

白黒「第17話完成！そして、無印編終了！次回からはA's編です！」

ライダー「A's編・・・という事は、バトル物が多くなるんですね。」

家康「おお！それは楽しみだな！」

セイバー「家康に同意です。どうなんですか？白黒。」

白黒「それはまだ秘密です。」

テンテン「そ・れ・よ・り～、白黒～アレはどういう事かな～？」

白黒「え？え？」

テンテン「とぼけないでね～あの小娘二人の告白、とくに一人はリョウさんにキスをしたんだよ～？ねえ、なんでかな？かな？」

白黒「テ、テンテン・・・目が・・ひぐらし化に・・ア、アレは・・その・・（汗）」

テンテン「物凄く、頭冷やそうか。」

セイバー「エクスカリバーの錆になってもらおうか。」

ライダー「血を吸われましょう。」

白黒「ぎぃいやぁぁあああ！！！！！」

家康「こ、怖い・・・（ガクガクブルブル）あ、と、とりあえず、それでは皆さん！次回もよろしくお願いします！」

白黒「死ぬ～死ぬ～死んじゃう～～！！！助けてぇぇえええええ！！！あぁぁぁぁあああああ！！！！！」

第１８話　Ａ'ｓ編の始まり！闇の書起動！（前書き）

白黒「ようやくか。」

テンテン「ようやくだね。」

家康「Ａ'ｓ編突入だな。」

白黒「どうなるかは、俺もわかりません。」

ライダー「作者でしょ。貴方は。」

白黒「ははは、すみません。」

家康「第１８話出陣いたす！」

第18話　A's編の始まり！闇の書起動！

リョウＳＩＤＥ

フェイト達が管理局に行き、数日がたった。
もう、六月である。
え？なのはとの追いかけっこはどうなったかって？・・・ブルブルブルブル！お、思い出したくない！

「クッ、イヤな事を思い出したぜ。」

「どうしたの？リョウ君。」

「あ、いや・・なんでもない。」

「そう？」

なのはが心配そうに、俺を見つめる。
つうか、お前がやったんだろう！・・とは、強く言えない。
今何処にいるのかというと、ただいま学校にいる。
もうすぐで授業も終わる。

「はい、今日の授業はここまでです！気よつけ！礼！」

『ありがとうございました！』

やっと、授業が終わった。

さっさと帰ろう。
今日は何日だっけ?え〜と・・・九日、ああ、もうすぐか。
闇の書が起動するのは。
ならば、行くしかないな。

「リョウ君、一緒に帰ろう。」

「悪い。今日は少し寄るとこがあるから。」

「そうなの?」

「ああ、悪いな。」

「わかったなの!じゃあまた明日なの!」

「ああ、明日な。」

そう言い、俺は先に帰る。
速攻で家に帰り、私服に着替え、図書館に行く。
図書館に着くと、すぐ近くのテーブルにはやてがいた。

「はやて。」

「リョウ君。久し振りやな。」

「ああ、といってもほんの三、四日だけどな。」

「あはは。でも、私にとっては久し振りや。」

「そうか。」

俺とはやての隣のイスに座り、一緒に本を読む。

「そういえば、はやて。」

「なんや?」

「はやての誕生日っていつなんだ?俺、はやての誕生日、知らないからな。」

「そういえば、教えてなかったな。」

まあ、知っているが一応確認だな。
ふう、面倒い事だ。
多分、これからはあの猫姉妹に喧嘩売られるだろうな。
本当に面倒い!

「私の誕生日は明後日や!」

「そっか、なら誕生パーティーしないとな。」

「え?でも・・・」

「いいからいいから。それに、はやてそんな足だから、友達いないだろう。」

「・・・うん。」

う・・悪い事言っちまったな。
たが、これはチャンスなんだ。

「だから、その誕生パーティー、俺の友達に頼んでもらうようにするよ。」

「友達？」

「おう、俺が通っている学校の同級生で友達だ。」

「学校の友達・・・」

「ああ、俺の友達を紹介するよ。友達は同じ女子がいいだろう？」

「女子・・・？」

あれ？なんだ？なんか空気が冷たくなったんだけど・・・さ、寒い。

「リョウ君・・・」

「な、なんだ？はやて。」

あれ？はやてがものすごく怖いんだけど。

何故なんだ！？もし、はやての事なのは達に言えば、三人に殺されるかも！（汗）

（正確には五人だけどね。　ｂｙ白黒）

おい白黒！なんで五人なんだよ。

なのはだろ、アリシアだろ、アリサの三人の筈だ！怒るのは。

すずかとフェイトは多分、怒らない筈だ。

〔それは客観的すぎです。むしろ、その二人が一番恐い気がします〕

何を言う。

それは無い！それは・・・無い、とは言えない。（汗）

「リョウ君、何人の女の子と“友達”なん？」

「え、えと・・・五人だけど。」

あの～、なんで友達の所を強調するの？

「そうなん・・・？」

「え～と、はやて・・さん？」

「・・まあええわ。その件については、その娘らと、じっくりお話を聞くわ。」

多分、俺その時死ぬかもな。

「は、はやて・・・はやてだって友達はまず女の子のほうがいいだろう。」

「まあ、そらそうやろう。」

「そういう事だ。」

「まあ、わかったわ。ただし！納得する為に、私の条件に飲んでもらうで！」

条件？なんだろう。

「な、なんだ？」

なんか少し、嫌な予感がするんだが。

「う～ん。」

「難しい条件は却下だぞ。」

「・・・ん！よし、決まったで！」

「・・・なんだ？」

「簡単や！明日は私の家に来てもらう！」

「・・それだけか？」

「それだけや。」

それだけか、なら大歓迎だな。

上手くいけば、闇の書の起動に立ち会えるかもしれない。

なら、断る理由も無い。

「それでいいなら。」

「わかったで。ありがとな、リョウ君。」

「ああ。」

その後、夕方までともに本を読み、はやての家まで送り、俺も家に帰る。
それにしても、さっきから監視させられてる感じなんだが。
誰かに見られてる。
まあ、誰かわかるがな、あの猫姉妹か。
結界張ってなかったり、襲ってこない事は、俺をただの一般人だと思ってるって事だな。

〔マスターの魔力を押さえているのが、上手くいっているようですね〕

〔そうだな。だが、闇の書が現れれば誤魔化せないだろうな〕

〔そうですね。その時は、どうするんですか？〕

〔その時はその時だ〕

〔そうですか〕

あ、そういえば忘れる所だった。

〔バサラ、帰ったら研究室に行くぞ。お前にカードリッジシステムを付けるぞ〕

〔カードリッジシステムをですか。そうですか、いよいよ付ける時ですか〕

〔ああ、だから明日はお前を連れて行けないからな〕

〔了解です〕

俺はバサラと念話しながら、家に帰った。
帰った後、俺はなのは、アリサ、すずか、フェイトとアリシアにはやての事と明後日誕生パーティーをしようと電話する。
はやての事を話すと、何故か全員声を冷たく話しきた。
マジ恐かった。
特に、すずかとフェイトは恐かった、マジで足がガクガクしたし、冷や汗がでてきた。
まあ、はやてがどんな状態か言うと納得したようだ。
電話し終えた後、ミニチュアの研究室に行き、バサラにカードリッジシステムを付けるようにする。
そして、何時ものように修業し、真夜中になって寝た。

はやてＳＩＤＥ

あう～、昨日めっちゃ恥ずかしい事言ってもうた。／／／
き、今日家に遊びに来るんや。／／／
掃除もした、買い物もした。
あ、後はリョウ君が来るだけや。
う～、めっちゃ緊張する。／／／
ピンポーン。
き、来た！／／／お、落ち着いて、落ち着くんや私。／／／
玄関に行き、扉を開ける。

「こんにちは、お邪魔します。」

「いらっしゃい。上がって。」

私はリョウ君をリビングに連れていく。
リビングに移動し、一緒にゲームをする。
対戦ゲームや協力プレイができるゲームなどをして楽しんだ。
夕方になり、一緒に料理をした。
リョウ君が料理できるなんて知らんかったわ。
しかも、めっちゃうまいわぁ。

「リョウ君、料理作れるなんなぁ。しかも慣れとるなぁ。」

「両親いるけど、まあ一応ってとこかな。それよりも、はやては凄いな。とても美味しそうだな。」

「ありがとな。煽ててても何もでんで？」

「煽ててないぞ。これは本心だ。」

「そ、そうなん？／／／あ、ありがとな。／／／」

リョウ君と一緒に作った料理を食べた。
リョウ君の料理めっちゃ美味いわ。
こりゃあ女顔負けやわぁ。
夕飯を食べ終え、少しリビングでのんびりしていると。

「そろそろ帰らないとな。」

「え？帰るん？」

「ああ、そろそろ帰らないとな。」

そんなんいややや。
まだ居てほしい！こ、こうなったら。／／／

「リョ、リョウ君！／／／今日は家に泊まっていって！／／／」

「・・・は？」

「や、やから今日は家に泊まってほしいんや。／／／」

は、恥ずかしいわ！／／／た、多分耳まで真っ赤な筈や！／／／

「・・・ちょっと、家の両親に電話して聞いてみる。」

リョウ君はそう言い、携帯で電話し始めたわ。

「あ、ちょっと玄関に行くな。」

「あ、うん。」

リョウ君は玄関に移動したわ。
・・・しばらく暇や。

「はあああ！！？」

！？な、なんや？リョウ君が叫んでる。
なんや？

「なんでそうなるんだよ！俺とはやては何も・・・違うから！わかって言ってるのか！？」

なんや口悪いなぁ。
自分とこの両親にものすごい文句言ってるで。

「おい待て！なのは達には言うな！言ったら、俺殺されるだろう！
だから絶対に絶っっっ対に言うなよ！わかったな！」

そう大声で言った後、リョウ君がリビングに戻ってきた。
どうなんやろう？許可してもらえたんやろか。

「はやて、許可はもらった。だから、今日は泊まらせてもらう。」

「！！ほんま？ほんまなん！？」

「本当だ。」

「じゃ、じゃあよろしゅうな。／／／」

「ああ。」

嬉しい、私めっちゃ嬉しい！だ、だったら・・・こ、こんな事も頼
んじゃおうかな。／／／

リョウＳＩＤＥ

全く、ナルトもヒナタは何バカな事言ってやがるんだ。

なんで俺とはやてが恋人関係なんだよ。
バカも休み休みに言え！全く。

「な、なぁリョウ君。／／／」

「ん？」

なんだ？はやての奴、なんかモジモジしてるんだが。

「リョウ君、もし・・・よ、よかったら一緒にね、寝てくれへん？」

「・・・Ｗｈａｔ？」

なん・・だって？一緒に寝てくれ・・だと？幻聴か？

「すまん。もう一回言ってくれ。よく聞き取れなかった。」

「や、やからな。私と一緒に寝てて言うてんねん。」

・・どうやら幻聴ではなかったらしい。
しかし・・・

「はあ、仕方ない。わかったよ。」

「あ、ありがとう。／／／」

その後、はやてが先に風呂に入り、次に俺が風呂に入る。
パジャマに着替え、一緒のベッドに潜り寝る。

はやてはしばらくは寝れなかったが、頭を撫でたら寝てくれた。

俺もその後にすぐに寝る。
そして・・・真夜中０時０分００秒、闇の書が起動した。

第１８話　Ａ'ｓ編の始まり！闇の書起動！（後書き）

白黒「第１８話完成！そしてＡ'ｓ編突入開始！」

セイバー「Ａ'ｓ編は、どんな内容になるのですか？」

白黒「・・・一応、原作とは違う内容でいく予定です。」

ライダー「どんな感じなんですか？」

白黒「それは秘密という事で！それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はヴォルケンリッター登場！」

第１９話　ヴォルケンリッター出現！はやての誕生パーティー！（前書き）

白黒「最近、レトロゲームにハマっています。」

ライダー「唐突ですね。なんでいきなり？」

白黒「いや、最近見てるバラエティ番組のゲームセンターＣＸがとても面白くてね。もうＤＶＤとかレンタルしまくりなんだよ。」

家康「はあ、そうなのか。」

白黒「有野課長は素晴らしい！この一言に尽きるね！本当に有野さんは素晴らしいゲーマーですよ。前に借りた内容なんか」

テンテン「第１９話始まります！」

白黒「ってコラ～！さっさと進めるな～！！」

第１９話　ヴォルケンリッター出現！はやての誕生パーティー！

三人称ＳＩＤＥ

八神家の自室にて、闇の書が起動した。
強い光を放ち、数分後に光が収まる。
そこに現れたのは、四人の男女が出現した。
女性二人と少女一人は黒いワンピースで、男性は黒いタンクトップとパンツ姿だった。

「［闇の書］の起動、確認しました。」

「我ら闇の書の募集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を！」

最初にピンク色の髪でポニーテールの女性が言い、次に金髪の女性、その次に白い髪で獣の耳と尻尾を付けたたくましい肉体の男性、最後に赤い髪で三つ編みをした少女が言った。
四人とも片手と膝を床につけ、頭を下げて主の命令を待った。
しかし、待って聞こえてきたのは。

「はやて～！しっかりしろ！目が回ってるぞ。目を覚ませ！」

「きゅう～～！」

目を回し気絶している少女八神はやてと、はやてを起こそうと肩を揺さぶる少年創神リョウの声である。

リョウＳＩＤＥ

ヴォルケンリッターが現れ、はやてが気絶した。
俺はなんとかはやてを起こそうと肩を揺さぶる。
このままだと、俺はデバイスを向けられるかもしれない。
なんとか誤魔化さないと。

「はやて！起きろ！俺だって気絶したいんだ！だが、もし気絶したら俺達殺されるぞ！こんな怪しい奴等を俺一人に任せるな！起きろ！起きろ～！」

「うう～～ん。」

「おい。」

「！？」

必死に起こそうとすると、ヴォルケンリッターの烈火の将『シグナム』が声をかけてきた。
振り向くと、四人とも睨んで俺を見ていた。
はあ・・・

「な、なんなんですか？」

「貴様は何者だ？答えろ。」

「な、何者って俺はこの娘の友達だ。大体アンタらこそ何者だよ！ま、まさか強盗か！？それとも変人か？」

「そうか、それは済まなかった。それと、我らは強盗でも変人でも無い。我らは「そんな事よりはやてを病院に連れて行こう。」・・・確かにそうだな。」

ふう、なんとか誤魔化せた。
このまま俺はヴォルケンリッターと一緒にはやてを病院に連れて行く。

〔『シャマル』この少年の魔力は？〕

〔ほとんど魔力を感じないわ。一応リンカーコアはあるけど。〕

〔なら、コイツから募集しようぜ！〕

〔それはさすがにならんぞ『ヴィータ』。この少年は我が主の友人なのだ。〕

〔『ザフィーラ』の言う通りだ。今は主の事が最優先だ。だから、黙っていろ〕

〔チッ！わかったよ！〕

四人が念話して俺の事を話している。

まあ俺にはマル聞こえてるがな。
数十分後、病院に到着し病室ではやては目を覚ました。

「大丈夫か?はやて。」

「大丈夫や。心配してすんまへんなリョウ君に『石田先生』。」

「全く、それにしてもなんでリョウ君がはやてちゃんの家に居たの?」

石田医師がそんな事を聞いてきた。
つうか、その前にこいつらヴォルケンリッターの事を聞けよ。

「それは、お泊まりしてまして。」

「ああ、なるほどね。・・で、あの人達は一体誰なの?」

ようやくか、これは俺には答えられないな。

「さあ、俺は知りません。」

「そう、・・・貴方達は一体誰なの?」

ここでヴォルケンリッターは言いよどむが、はやての機転のおかげでなんとか事なきを得た。
昼頃には、はやての家に帰った。
その間に俺は翠屋に連絡し、夕方からに変更してもらった。

「さて、このままじゃ怪しまれるからな、とりあえず、サイズを測らせてもらうで。」

「は、はあ。あ、あの・・・募集に関してなんですが。」

「ああ、それな。」

実は、病室で闇の書の募集の事と、自分達が何者なのか説明してもらった。
俺も一応聞いた、というか聞かされた。

「それやけど、とりあえず言う事は一つや。」

四人は喉をゴクッと飲む。

「とりあえず、人様に迷惑をかけないという事と私は望んで無いとだけや。」

「「「「は？」」」」

「私はそんな力はいらへん。それだけや。」

「し、しかし・・・」

シグナム達ははやての解答に困っている。
そらそうだろうな、普通は力が手に入るから欲する筈なのにな。
だが、はやてはいらんと言った。
はやては強いな。

「そう言う訳や。この話はお終いや。まずはアンタらに服を用意しないとな。」

「しかしはやてよぉ。どうやって服を買うんだ?」

「そんなん必要無いよ。何故かタンスにたくさん服やら下着やらあるから」

何故あるんだ?ていうかそれをどうして知ってるんだ?謎だ。

まあ、買うよりマシだな。

「そんじゃあ寸法測らせてもらうで!」

「じゃあ俺は部屋から出るわ。」

「うん。」

俺は部屋から出る。

ふう、・・ん?あれ?なんでザフィーラがここに?

「なんでここにいるんだ?」

「我はこの姿になればいい。」

そう言うとザフィーラは獣形態に姿を変えた。

「は~、魔法ってなんでもありなんだな。」

「我は守護獣だからな。このくらい簡単だ。」

「さよか。」

・・・十分たった。

長いな、さすがは女性って所か。

「お待たせや！」

「長かったな。」

「そりゃあ女やからな。当然やで。」

そう言うと、シグナムとシャマルとヴィータが着替えて現れた。

ふむ、改めて見ると、皆結構似合ってるな。

特にシグナムが・・・

（自分はヴォルケンリッターの中でシグナムが大好きです！　ｂｙ白黒）

ん？なんか作者の声が聞こえた気が、まあいいか。

ん？ちょうど夕方だな。

「それじゃあ行こうか。はやて。」

「うん。わかったで！四人共も一緒に行かへん？」

「何処にですか？」

「実はな、今日私の誕生日やねん。んでな、リョウ君の友人のお店で誕生パーティーしてくれんねん。」

「そうなんですか。」

「それでな、一緒に行かへんか？」

「・・・よろしいのですか？」

「構わへんやろ、リョウ君。」

「ああ、構わないだろう。」

「なら、よろしくお願いします。」

「んじゃ、行くか。」

俺達は翠屋に行く。

十数分後、翠屋に到着。

「ここだ。」

「ここか～。」

はやては少し緊張している。

「先に入りな。はやて。」

「そう、ほな先にな。失礼します。」

扉を開けると。

パンパパーン！

『『『八神はやてちゃん！！！お誕生日おめでとう！！！』』』

「ひやあぁ！びっくりしたぁ！」

驚いたようだ。
これぞ誕生パーティーの醍醐味だな。

「改めてお誕生日おめでとう！はやて。」

「う、うん。みんなありがとう。」

「ん？どうしたお前ら。」

後ろを向くと、ヴォルケンリッターは警戒していた。
まあ、かなり高い魔力を持った魔導師が四人ほどいるからな。
そりゃあ警戒するか。

「あ、いやなんでもない。」

「そうか？なら早く入りな。」

そう言うと、ヴォルケンリッターが入ってくる。

「おや、この人達は？」

「はやて、説明よろしく。」

「はいはい、任せとき。」

はやてが説明した。
その時、プレシアから念話がきた。

〔リョウ、あの人達人間じゃないわね。一体何者なの？〕

〔確かに、人間じゃない。けど、今は話せない〕

〔そう。貴方は何者なのか知っているようね〕

〔まあな〕

そういえば、言い忘れていたがプレシアにはなのは無印編のＤＶＤを見せている。
なんで俺がアリシアを知っていたのかこれで教えた。
それで納得したようだ。

〔わかったわ。貴方に任せるわ〕

〔悪い。あとで教える〕

どうやら説明を終えたようだ。
しかし、なのはとフェイトとヴォルケンリッターは互いを警戒している。
ま、無理は無いかな。

「リョウ君。」

「ん？」

アリシアが話しかけてきた。
なんだ？

「あの娘がはやてちゃんだよね。」

「そうだ。つうか、さっきクラッカー鳴らしただろう。はやてに向けて。」

「うん。それはわかってるよ。そうじゃなくて。」

「？」

「はやてちゃんとど・ん・な・関係？」

うお！？なんだ！アリシアから黒いオーラが！ハッ、よく見るとなのはとフェイトとアリサとすずかも同じオーラをして詰め寄ってきた！つうかなのはとフェイト、いつの間に！
はやては何故か頬を赤くしてるし！

「それは私達も聞きたいかな？かな？」

こ、怖い！五人ともめっちゃ怖いんですけど！特にフェイトとすずかがめっちゃ恐いぃぃ！！
と、とりあえずこの窮地を脱しないと！

「えっとだな。はやてとは「一緒にベッドで寝た仲やねん。／／／」・・って何とんでもない事言ってやがるんだよはやてぇぇぇ！！！（（（（（（ギロッ））））））ヒッ！！」

「「「「「リョウ（（（君））））～？少しＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしよう（しましょう）？」」」」」

「ひぃ～～！！」

怖すぎる～！に、逃げなくては！ガシッ！んな！いつの間に！？

「さあリョウ、逝こうか。」

「フェイト！怖いよ！しかも逝くの字が違う～！」

は、はやて、助けて！俺ははやての方に顔を向ける。
アレ？さっきまで顔を赤くしてたのに、なんでなのは達と同じく黒いオーラを出してるわけ！？

「そういえば、私もリョウ君となのはちゃん達の関係を聞いて無かったな～。」

うお～い！こんな時にそんな事を聞くな～！それにいつの間に仲良く！？なってんだ！
クッ・・・！こうなったらナルトとヒナタに。

「さすがはリョウ、モテるなぁ。」

「本当ね。それで無自覚だものね。」

「ほぉ、前の学校でもそんな感じだったのかい？ナルト。」

「ああ、本当にモテるよ。リョウは。」

「まあ、ライバルは多いようね。リョウ君は。」

「そうなのよね桃子さん。もしかしたら、重婚しちゃうかも知れないわよ。」

「それはそれで大賛成よ。私は。」

「あら、プレシアさんがそう言うなら、私も賛成しちゃおうかしら。」

うお～い！ナルト、何嘘ついてやがるんだよ！しかもヒナタと桃子さんとプレシアは何考えてやがるんだよ！つうか助けろ！

「私、お父様にソレ頼んでみようかしら。」

「私も！」

ぬあ～！アリサとすずかも何考えてやがる！

それよりも、誰か助けてくれ～！！

その後、俺はなのは達に別室に連れ込まれ、尋問させられた。

そこに恭也が現れ、勝負を挑まれたが返り討ちにして、ストレス発散した。

尋問も終わり、改めてパーティーを再開した。

ヴォルケンリッターはかなり戸惑っていた。

そもそも、誕生パーティーなんかやった事無かったもんな。

だが、徐々に分かっていき今は心から楽しんでいる。

特にヴィータとシグナムは、最初はなのはとフェイトにガン付けしていたが、今では仲良くなっていった。

ヴィータとなのはなんか姉妹のようだ。

そんな楽しい誕生パーティーも終わりを向かえた。

ヴォルケンリッター達の手にはいっぱいのプレゼントを持ち抱えている。

ちなみに俺は手作りのブレスレットをプレゼントした。

その時になのは達の顔が恐かった。（汗）

今度作ってやるか。

「そろそろ帰りますわ。」

「そうだね。誰かに送ってもらおうか。」

「なら、俺達が送って行こう。いいかい、ヒナタとリョウ。」

「構いません。」

「俺も。」

「えと、よろしくお願いします。」

というわけで、俺はナルトとヒナタとはやてとヴォルケンリッター達と一緒にはやての家近くまで帰る。
途中で、ナルトとヒナタが先に帰り、俺ははやてとヴォルケンリッター達を送る事になった。
全く、普通なら余計な事をっと言うが、今回は助かるは。

「いいの？私の為に・・・」

「気にするな。それに、ちょうどよかったしな。」

「何が？」

「いや、何でも無い。」

数分後にはやての家に到着。
これは、賭けだな。
だが、やる価値はある！やってみるか。

「はやて。お前達に話したい事があるんだが。」

「なんや？」

「とりあえず、家に入ったら話す。」

「？わかったわ。」

俺ははやて達と一緒に家に入り、リビングに移動し、イスに座る。

「んで？話って一体何なんや？」

「ああ・・・実は、本当の事を話そうかなっと。」

「本当の事？」

「そ。」

多分、シグナム達は武器を構えるだろうな。

ま、覚悟の上だ。

「俺は、魔導師だ。」

第１９話　ヴォルケンリッター出現！はやての誕生パーティー！（後書き）

白黒「第１９話完成！なんか中途半端な終わり方ですみません。」

セイバー「それにしてもシグナムという人物、騎士と呼ばれているようですね。戦ってみたいですね。」

ライダー「その前にシグナムは、セイバー貴女に一つっていうか一部分だけ勝っていますね。」

テンテン「何処がなのってああ、そう言う事ね。」

セイバー「何処がですか？」

ライダー「何処がって・・・胸。」（バインッ）

セイバー「（ブチィ）・・ふ、ふふふ、それは私への当てつけですか？いいでしょう！そこになおりなさい！聖剣の錆にしてくれます！！」

テンテン「まあまあ、胸で価値をきめるのは良くないわ。」（ポヨンッ）

セイバー「くっ！！貴女方に言われても嬉しくありません！うわあぁぁああん！！！（涙）」（ダダダダダダ）

家康「セイバー殿！」

白黒「ほっとくんだ家康。これは・・・それでは皆さん！」

全員（セイバーのぞく）『次回もよろしくお願いします！』

セイバー「どうせ私は、貧乳ですよぉぉおお！！」（号泣）

白黒「えと、じ次回はリョウがいろいろやっちゃう？」

第２０話　説明と考え！（前書き）

白黒「熱い・・・」

セイバー「今年の夏も熱いですね。」

ライダー「冷たいジュースやアイスを買う量が増えましたね。」

白黒「全くだよ。おかげで金がかなり使っちゃうよ。」

テンテン「あんまり無駄遣いしちゃダメだよ！」

家康「第２０話出陣する！」

第２０話　説明と考え！

リョウＳＩＤＥ

「「「「魔導師だと！？」」」」

そう言うやいなやシグナム達はデバイスを構えた。
やっぱそうなるか。
さて、どう説明しようか？っと迷っていると。

「やめんかい！リョウ君を怖がらせるんや無い！」

「し、しかし我が主！」

「そうだぜ。コイツはあたし達を騙してたんだぜ。」

「だとしても理由があるやろう！まずは落ち着いて話を聞きい！」

「我が主！・・・わかりました。」

「いいのかよシグナム！？こいつは！」

「ヴィータちゃん。シグナムの言う通りよ。今は話を聞きましょう。」

「そうだな。我らが主がそう言っているのだ。それに烈火の将もこう言っているのに、鉄槌の騎士が駄々をこねるなど。」

「うっせーよ！チッ、わかったよ！けど、さっさと答えろよ！」

はやてがなんとかしてくれたおかげで助かった。
まだ四人とも警戒は解いて無いが、それでもまだマシだ。

「んじゃ、説明するぞ。何故俺が魔導師なのかと言うと・・・・・・
説明中・・・・・っと、いうわけだ。」

「なるほど、納得した。」

「ふう、長い説明は苦手だ。」

なんか肩凝っちまった。
慣れん事をしちゃあかんな。

「それにしも、貴方って結構大胆な事をするのね。」

「まあな。」

俺が闇の書を知っていた理由は原作で知っていたではまずいので、
管理局のデータバンクにハッキングして偶然見つけたと言った。
まあ、本当にハッキングして見つけたからな。
まだ完全に手にいれたわけでは無い。
本当の名も手に入れてない。
それは、別の方法があるから構わない。

「本当に、はやてとの出会いは偶然なんだな。」

「本当だって、これを知ったのは、数週間前なんだから。」

「・・・わかった。信じる。」

「助かる。」

ふう、これで一つ目の難関を突破したな。
突破したって事で少しお願いを。

「なあ、悪いんだが闇の書を見せてくれないか?」

「それは構わんが、何の為だ?」

「ちょっとな。調べてみたいんだ。」

「わかった。」

シグナムが闇の書を持ってきてくれた。
俺は闇の書に手をかざす。
魔力を通して見る。
募集されないようにだ。
ん・・・これは、かなり厄介だな。
これはもう、募集させてバグを無理矢理取り出すしかないようだ。

「ありがとう。もういいよ。」

「そうか。」

「さて、そろそろ帰るか。」

「あ、ちょっと待って!」

「？」

ん？なんだ？

「あんな、もう遅いから今日は泊まっていかへん？」

「え？」

今日もだと？いや、今日は・・・ん？この気配は、あの二匹の猫使い魔か。

・・・ふう、仕方ない。

このまま帰れば、襲われる可能性は高いな。

「わかった。とりあえず、家に電話して聞いてみるから。」

「あんがと。リョウ君。」

俺は家に電話して、泊まる事を言う。

もちろん、ＯＫをもらった。

風呂に入り、俺はリビングのソファーで寝た。

次の日、俺はなのはとテスサロッサ一家をはやての家に呼んだ。

理由はなのは達に協力してもらおうと思っている。

話し合えば、絶対に協力してくれる筈だ。

お昼過ぎになのはとテスサロッサ一家と一緒にはやての家にきた。

あ、そうそう俺は朝学校があった為、早く起き、はやてに説明して家に帰っている。

チャイムを鳴らす。

「は～い。誰や？」

「俺達だ。」

「リョウ君達。入ってきてや。」

俺達ははやての家に入る。

あ、言い忘れていたがなのはとテスサロッサ一家には、シグナム達が何者なのかすでに伝えている。

「いらっしゃい。」

「「「お邪魔しま～す。」」」

「ごめんなさいね。お邪魔するわね。」

「構いまへん。どうぞ上がってください。」

上がり、リビングに移動する。

そこには、シグナム達がすでに座って待機している。

「よ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ。」

「ああ。」

みんな床かソファーに座る。

プレシアが飲み物を出してくれた。

飲み物や茶菓子を食べながら、シグナム達の事とテスサロッサ一家となのはの事を互いに説明しあう。

「さて、互いの説明も終えたし今後の事を考えようか。」

「今後ってどうするの？」

「まずは闇の書の事を調べる必要がある。だから悪いんだけどプレシア、なんとか調べてきてくれないか？」

管理局に入っているプレシアにしか頼めない。

「それは構わないけど、私はそういうのは専門じゃないわ。だから、詳しくは調べられないわ。」

そうか。

「んじゃあ、どうするんだよ！？」

「落ち着けヴィータ！」

「そうよ！ここで怒っても仕方ないわ。」

「でもよ！」

「落ち着きなさい。別に調べないとは言ってないわ。ただ調べるのに長けてる人に手伝ってもらうだけよ。」

長けてる人？そんな奴いたか？アレ？いたな。

名前は・・・誰だったっけ。

「誰なんですか？」

「・・・なのはちゃん。貴女はわからないの？」

「？」

「リョウ君。貴方は？」

「いや、さっぱり・・・あ、もしかして。アイツか？」

「思い出したようね。」

そういえばそうだったな。
すっかり忘れてたよ。
つうか、なのはは知らんだろう。
だって、そういう事話して無いからな。
分からんだろう。

「つうか、俺となのははアイツがそういうの得意なんて知らないし。」

「そういえばそうね。」

「ねえねえ、リョウ君にプレシアさん。一体誰なの？」

「・・・ユーノだ。」

「ユーノ君？」

原作でもユーノのおかげで闇の書の真実がわかったからな。
この時のユーノは役に立つ。

「そ、ユーノはっていうか、スクライヤ一族は発掘が主体なんだが、調べる事も得意なんだ。」

「ふえ～。」

「でも、貴方はどうやって知ったの？」

「ユーノ本人から直接聞いた。」

「そうなんだ。」

実は、温泉の時に密かに聞いていたのだ。
聞いておかないと、こういう展開の時、怪しまれるからな。

「そんじゃあ、ユーノにこの事を頼んでもらうか。」

「そうね。調べるなら無限図書館がいいわね。」

「「「無限図書館？」」」

なのはとフェイトとアリシアが聞く。

「無限図書館はあらゆる歴史やロストロギアの記録の本がある場所よ。しかもその名の通り、無限にあるわ。」

「「「「「へえ～～。」」」」」

なのは達は驚くが、俺は驚くふりをする。
さて、これで決まりだな。
あとは、いつ闇の書がもっと詳しく分かるかだな。

できれば、クリスマスまでには闇の書の真の名を見つけてほしいものだな。

「さて、これからどうする？」

「そうね。しばらくは暇ね。どうしようかしら？」

「ほんなら、リョウ君ん家に行きまへんか？」

「俺ん家？」

「うん。リョウ君ん家でゲームしよう。」

「うん！それがいいなの！」

「私も賛成。姉さんは？」

「あたしも大賛成だよ！」

「んじゃあ、行くか！」

俺達は、俺ん家まで移動し、ゲームをした。
移動中、やっぱり気配を感じた。
やっぱり、あの猫姉妹の使い魔か。
それと、一緒に妙な気配が一つ。
・・・この感じ、なんだ？魔力はただ漏れだし、気配の隠し方も下手くそだ。
だが、魔力量はハンパない量だ。
これは一体・・・何者だ？

三人称ＳＩＤＥ

建物の屋上、そこに仮面を付けた二人の男が立っていた。
同じ格好、同じ仮面をつけていた。
二人の男は、ある一団を見つめていた。
ある一団とは、リョウとなのはとテスサロッサ一家とはやてとシグナム達ヴォルケンリッターである。

「どうする？」

「どうすると言われても、なんとか闇の書の主から放すしかない。だが・・・」

リョウ達ははやて達にべったりくっついているのだ。
襲おうにも襲えない。

「どうにも無理だな。それにあの少年、魔力を感じないただの一般人だ。襲う必要もないだろう。」

「そうだな。」

そう言うと、二人は仮面を外し、本来の姿に戻る。
男の正体は、男ではなく女であった。
一人は髪が短く、もう一人は逆に長い。
二人は同じ格好しており、髪の色は薄いピンクで何故かネコミミと尻尾を付けていた。

二人の名は『リーゼアリア』と『リーゼロッテ』、とある人物の使い魔である。
彼女等は何故はやてを監視しているのかというと、とある人物からの頼みだからである。

「でも、このままだと父様とご主人様の願いが。」

「わかってるよ。しかし、このままでは・・・」

「どうだ？お前達。」

「「ご主人様！！」」

そこに後ろから、一人の男が現れた。
姿はたんぱつの青髪、目は赤目で背はリーゼ二人より五センチほど低い、体付きは中背中肉で服装は赤と青のシマシマの長袖と紺のGパンを着て履いている。
見た感じは一応イケメンな感じだが、空気からかなり邪な感じを感じる。
リーゼ二人は彼をご主人様と呼び、顔を赤らめている。
彼は屋上からリョウ達を見る。

「ふむ、とうとう闇の書が起動したか。」

「は、はい。ご主人様の予想通りです。」

「しかし、予想外の事がおきたな。テスサロッサ一家につい最近管理局に協力した民間協力者が一人に一般人が一人か。」

「はい・・・どうしましょう。」

「一般人はほおっておいていいだろう。問題はテスサロッサ一家と民間協力者だな。」

「そうですね。」

「とりあえず、闇の書の主とヴォルケンリッターの監視をよろしく頼むな。」

「「は、はい。／／／／／／」」

三人はそんな話をしている。
男はそんな話をしながら、リーゼ二人の尻をなでまわしていた。

「「ご、ご主人様。／／／／／／」」

「ふ、先に帰っておきな。ご褒美は帰ってからな。」

「「は、はい。／／／／／／」」

頬を赤らめながら、リーゼ二人はこの場から去る。
男はリョウ達を見る。

「ふん、モブふぜいがなんで俺様のハーレム要員と仲良くやってやがる。まあいい、どうせそんなの長くは続かない。それにしても、何故プレシアとアリシアが生きていたのかはわからんが。」

そう言いながら、口はニヤけていた。

「まあいい。プレシアはともかく、アリシアが生きていたのは好都

合だ。俺様のハーレム要員が増えたんだからな。それにしても、なのはの世界に来たのはいいが、まさか無印編が終わっていたとはな。しかも、目が覚めた場所が管理局の廊下だったとはな。だがそのおかげで、リーゼアリアとリーゼロッテを俺様のハーレム要員の一員にできたんだからな。」

舌を舐めずりながら、なのはとテスサロッサ姉妹とアルフとハヤテとシグナムとヴィータとシャマルを見る。

「ふ、ふふふふ・・・・待っていてくれよ。俺様の女達よ！この世界はこの俺様が助けてやる！あんなモブではなくてな！そう！この俺様こそ、史上最強の転生オリ主様『草部サロメ』様だ！あ～はっははははは！！」

第２０話　説明と考え！（後書き）

白黒「第２０話完成！原作とは違う展開になりました。」

家康「原作ではなのはとフェイトは戦っていたのに、ここでは仲間なんだな。」

テンテン「それより、最後に現れた奴・・・何者よ？」

白黒「今は秘密。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はバトルマニアと戦います。」

第２１話　リョウＶＳシグナム（前書き）

白黒「ネタ～、ネタがほしい～。」

セイバー「どうしました？いきなり。」

白黒「いや～、最近ネタに困っててね。この作品のネタがないんだよ。なんかないかなぁ？」

ライダー「作者の戯言ですか。テンテンさんお願いします。」

テンテン「ＯＫ！第２１話始まります！」

白黒「コラ～！こっちは真面目な話をしとるんじゃ～！」

第２１話　リョウＶＳシグナム

リョウＳＩＤＥ

八月・・・それは夏休みという時期である。
はやて達と話し合いをして二か月がたった。
あのあと、ユーノに話し無限図書館に調べさしてもらっている。
管理局には内緒でだ。
その間に、俺のデバイスのメンテナンスとカードリッジシステムを装着を完了した。
その後、管理局にバレないように、闇の書に募集させるリンカーコアの吸収を開始した。

「大分集まったな。」

〔そうですね。かなり集まりましたね。あとは、なのはとフェイトとアリシアとプレシアのリンカーコアですね〕

「ああ、それまでゆっくり待つか。」

そんなこんなで八月になった。
八月のある日、俺達は海に行くことになった・・・のだが、プレシアとザフィーラ以外の奴等が気持ち悪い気配を感じると言ってきて行きたいのに行けなくなったのだ。
そういえば、最近俺も妙な気配を感じていた。
気持ち悪いと言うより敵意に近い感じだった。
その為、なのは達は困っていた。

そこで、俺はある考えを思い付いた。
俺達は俺ん家に移動した。

「ねぇ、これから何処に行くの？」

「ん、俺ん家だ。」

「リョウの家？どうして？」

「着いてからのお楽しみ。」

数分後、家に着き俺の部屋に入る。
そして、別荘があるミニチュアの前に立つ。

「ミニチュア？」

「これがなんなの？」

「ふふ・・・これから面白い場所に連れてってやる。」

そう言った瞬間、ミニチュアが光り輝きミニチュア内に入る。
なのは達は目を瞑っていたが、光が消え目を開けると呆然とした表情になった。
くくく・・・面白い表情が見れて少し笑う。

「な、なんなの！？ここ！？」

「ふふ・・・ようこそ、俺の別荘へ。」

なのは達に質問されたが、レアスキルの一つだと言い誤魔化した。

そのあと、リズとセラになのは達に似合う水着を着させるよう指示を出した。
俺も水着に着替える。
浜辺に移動し、皆と一緒に海を満喫する。
ちなみに、なのはやフェイトら少女達は可愛いタイプをシグナムら大人達は色気あるタイプの水着を着た。
いちいちそれに答えなきゃならなかった為、大変だった。
ちょうど昼飯を食べている時だった。
なお、昼飯はバーベキューである。
シグナムがこんな事を言ってきた。

「リョウ、もしよかったら一勝負しないか？」

シグナムから勝負を申し込まれた。
もちろん、俺はＯＫをだした。
昼飯を食い少し休憩をしたあと、俺達は砂漠と岩場のフィールドに移動した。
このフィールドを選んだ理由は、原作でフェイトと戦っていたからだ。
シグナムはすでにバリアジャケットを装着している。
俺もバリアジャケットを装着する。

「いくぜバサラ！セットアップ！」

〔セットアップ！〕

「バサラ、ブレードモードだ。」

〔了解！〕

バリアジャケットを装着し、武器をブレードモードにし握る。

「ほぉ、まさかカードリッジシステムを付けているのか。」

「ああ。」

ブレードモードの柄の端の部分にカードリッジシステムを付いている。

「カードリッジシステム？」

「なにそれ？」

「カードリッジシステムっていうのは、かつてベルカ式の魔導師、いや騎士と呼ばれる者達が持つ魔力強化システムの事よ。」

なのはとフェイトがカードリッジシステムがなんなのか聞き、プレシアがそれに答えた。

ちなみに、なのは達は観戦場で俺とシグナムの戦いをモニターで見る。

「さて、始めようか。」

「そうだな。・・・こい！」

しばらくは互いに睨み合う。

そして・・・

「！ハアアア！！」

「・・・」

シグナムが駆け、先制攻撃をしてくる。
俺はバックステップで躱す。

「フッ！」

「チィッ！」

躱したあとすぐに前に出、突きを繰り出す。
シグナムは剣型デバイス、レヴァンティンで防ぐ。
そして互いに距離を取る。

「ほぉ、なかなかやるな。」

「どうも。」

「フッ、強いな。面白い！」

シグナムは嬉しそうな表情で俺を見る。
さすがはバトルマニアだな。
面倒いな。

〔その割にはマスターも嬉しそうですね〕

マジで？俺、今そういう表情してるの？はぁ～、まあ否定はしないな。
シグナムはベルカの騎士でヴォルケンリッターの将だ。
燃えないほうがおかしい。

「いくぜ！」

「こい！」

今度は俺から仕掛ける。
一気に駆け、剣を振るう。
シグナムはそれを躱し、カウンターを仕掛ける。
だが、それを俺は空に飛んで躱す。
シグナムも飛び、追撃してくる。
そのまま、高速移動しながら剣劇を繰り広げる。

「ハアアァア！！！」

「オォオオ！！」

お互いに雄叫びをあげながら剣の攻防を繰り広げる。
この空間では、剣のぶつかる音と高速移動する音しか聞こえない。

「チッ！レヴァンティンカードリッジロード！！」

〔了解〕

「む、なら俺も！バサラ！」

〔了解。カードリッジロード！〕

カードリッジを一つ使う。
俺の剣は青く燃え、シグナムは紫に燃えている。

「紫電・・・」

「青炎・・・」

「「一閃！！！！」」

魔力が籠った剣同士がぶつかる。
ドガアアァァンっという爆発音と煙が舞う。

三人称ＳＩＤＥ

「うわ～！凄いの！」

「凄い戦い。」

「リョウ君すご～い！」

「マジかよ！あのシグナムと互角なんて！」

「いや、僅かだがリョウのほうが押している。」

「それ本当！？ザフィーラ！」

リョウとシグナムの戦いを見て、各々が感想を言う。
どっちも、接近戦の戦いな為かフェイトが多少燃えていた。
ヴィータ、ザフィーラ、シャマルはリョウがシグナムと互角の戦いを繰り広げたのを驚いていた。

「それにしても、さっきの技も大したものね。」

「青炎一閃（せいえんいっせん）ね。青い炎を纏った剣の一撃・・まさにその名の通りね。」

「剣の腕前もかなりのものだ。シグナムよりも上だな。」

「才能って事かしら？」

「それだけではなく、努力もしたのだろう。でなければ、あれだけの剣技を魅せんだろう。」

「そうね。リョウ、本当に貴方は一体何者かしら？」

プレシアとザフィーラがリョウの実力を評価する。
プレシアはさらにリョウの正体に興味を持つ。

「そういや、リョウの戦いってあたし達、初めて見るんじゃねえか？」

「「「あ、確かに。」」」

アルフがそう言い、なのはとフェイトとアリシアがそういえばと思い納得した。
この戦い、勝つのはどっちだ。

シグナムＳＩＤＥ

強い！これほど強いとは！私がここまで追い詰まれるとは。
だが、負けん！

「レヴァンティン！」

〔了解！シュランゲフォルム！〕

連結刃と呼ばれる刃を備えた鞭、シュランゲフォルムで攻撃する。
しかし、リョウはそれをことごとく躱す。

「おっと危ない！」

時には、剣で弾き防ぐ。
まさか、読まれているのか？

「背後に周る。バサラ！」

〔了解。ソニックムーブ！〕

「！？」

な！？消えた？いや、これは！

（もらった！）

「クゥッ！！」

高速移動で私の背後に周ったのか。
リョウが横なぎに切り付けてくる。

私は咄嗟に鞘で防ぐ。

「さすがだな。だが、甘い！！」

「グゥゥ、ガッ！！」

防いだのに、そのまま吹き飛ばされた。
私は地面にたたき落とされた。
我が主と同い年なのに、なんて力だ。
大人である私が押し負けたなんて。
さっきからリョウは片手であの剣を扱っている。
どれほどの習練をすれば、あれほどの強さを。

「フッ、本当に面白い！レヴァンティン！」

〔カードリッジロード〕

「バサラ。」

〔カードリッジロード！〕

私とリョウはともにカードリッジを使う。

「飛竜一閃！」
「光幻刃！」

私はシュランゲフォルムの技を、リョウは剣の衝撃波を飛ばす。
技がぶつかり、爆発する。
上空で煙が舞う。
その時、煙の中からリョウが現れ、突っ込んできた。

「うらぁああ！！」

「チッ！」

私は急いで上空に飛んで躱す。
ふぅ、危なかった。
このままでは、私は負けるな。
だが、私にも意地がある。

「リョウ、お前は本当に強いな。この私よりもな。」

「それは嬉しいな。アンタからそんな事を言われると。」

「だから、私はこの一撃に全てを賭ける！」

「フッ、いいだろう。俺もこの一撃で決めよう。」

乗ってくれるか、ならば全力で答える！

「烈火の将シグナムが炎の魔剣レヴァンティンのもう一つの姿、これが私の本気！」

レヴァンティンは姿を変える。
剣と鞘を繋がり、弓へと変わる。

「これが私のデバイス、炎の魔剣レヴァンティンのもう一つの姿、ボーゲンフォルムだ！」

「なら俺もバサラ、刀モードだ。」

〔了解〕

リョウの剣が東洋の剣に変わった。
これは、刀か、それも日本刀。
左手に持ち替え刃を水平にし、刀を持っている手を引き右手を前にだし、構えた。
この構えは一体？

「この技は昔、幕末時代に滅んだ新撰組の副長土方歳三が考案した平突きを昇華させた技だ。果たして、アンタに防げるかな。」

ふ、ふふふ・・・面白い！

「行くぞ！」

「！ハァァアア！！」

リョウがカードリッジロードし、突っ込んでくる。
私はすぐさまカードリッジをロードし、放つ！

「賭けよ！隼ぁぁ！！！」

「ぅらあぁぁ！！」

シュツルムファルケンとリョウの突きが激突する。

「ぐぐぐぐ・・・」

まさか、互角とは・・・直接突っ込んでいったリョウの方がダメー

ジを食らう筈だ。

「バサラ！カードリッジロード！！」

〔了解！〕

ガシュンガシュンッと音がなり、リョウの刀が光輝く。

次の瞬間。

「ォオオオ！！」

「なにぃ！？」

リョウの刀から砲撃が飛んできた。

まさか、砲撃までできるとは、シュツルムファルケンはかき消され、砲撃はそのまま私にくる。

私はすぐに、障壁をだし防ぐ。

たが、防ぎきれず直撃した。

私は空から落ちるのを理解しながら、少し意識を失った。

・・・・アレ？ここは、確か私はリョウの砲撃に直撃して・・・

それで空から落下して・・・はっ、何故私は地面にたたき付かれて無いんだ？それに、誰かに抱かれてるような？意識が回復し、目を開ける。

「よ、大丈夫か？」

「？！リョ、リョウ！」

んな、リョウが私をお姫様抱っこして地に着地していた。

「ごめん、予想より威力が高かったから少し強くしてしまった。」

「そうなのか？」

「ああ。まさか、一時的とはいえ意識を失うとは、自分もまだまだ精進が足りないな。」

「そうか。」

どうやら私が思った以上に強いようだ。

ふふ、完敗だな。

「それにしても、怪我や傷がなくてよかった。」（ニコッ）

ドキッ／／／

な、なんだ？む、胸がドキドキする。／／／

こ、この感覚は一体何なのだ？／／／

リョウは私を地にゆっくり降ろした。

リョウＳＩＤＥ

俺はシグナムをゆっくり降ろす。

シグナムは頬を赤くしながら立つ。

アレェ？もしかして。

〔マスター。フラグ乙です〕

〔な、何故だ。これはいわゆる勝ちフラグというやつか〕

〔そういうやつですね。それよりマスター、後ろ向いたほうがいいですよ〕

〔背後？・・・ゾクッ！〕

な、なんだ？この恐怖と悪寒は！俺はゆっくり後ろを振り向く。
振り向くと、物凄く黒いオーラをだしたなのはとフェイトとアリシアとはやてがいた。

「な、なん、だ？」（汗）

「リョウく～ん、今シグナムに何をしたん？」

「へっ？」

「今のどうみてもお姫様抱っこだったよね？」

「え？えと・・・」

「してたよぬ？よね？」

「は、はい・・・」

「うふふふ・・・リョウく～ん。」

「な、何・・かな・・・なのはさん、いや皆さん。」（ガクガクブルブル）

こ、ここ怖い～！！めちゃくちゃ怖いんですけど～！！（ガクガクブルブル）

「「「「少しＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしましょう？」」」」

ひ～～！！こ、殺される～！ここは逃げるにかぎる！

「だが全力で断る！！！」

俺は全速力で逃げる！！

「「「「待て（なの）～～！！！！」」」」

四人は俺を全速力で追いかけてくる。

なお、はやては足が治っていないので、ザフィーラに運んでもらっている。

ザフィーラ、不憫な。

それから、俺達は夏休みいろいろな事をやった。

アリサの別荘のリゾートビーチに行ったり、なのはとフェイトのデバイスに俺特製のカードリッジシステムを組み込んだり、アリシアにデバイスを造ってあげたり、一緒に宿題をやったり、料理を作ったり、夏祭りに行ったり、そんな感じで夏休みを堪能した。

そして、夏休みは終わり九月、二学期が始まる。

第２１話　リョウＶＳシグナム（後書き）

白黒「第２１話完成！シグナムにフラグが建ちました～！つうか、他作品を見ても、シグナムはフラグ建つ確率高いよな。主人公に。」

家康「確かにそうだな。このなのはの世界のヒロインの大半はフラグが建つな。」

ライダー「それはいけませんね。もしＳｔｒｉｋｅｒＳ編になれば、リョウの恋人（嫁）は増加してしまいます。」

セイバー「それはまずいです！というわけで白黒！この聖剣の錆になりなさいってああ！？」

テンテン「いないわ！逃げたわね！追って探しましょう！」

セイバー・ライダー「「ラジャー！！」」

三人（ダダダダダ）

家康「・・・」（汗）

白黒「ふう、危ない危ない。」

家康「は、白黒殿、いつの間にそこに！」

白黒「隠れてただけだ。それでは皆さん！」

白黒・家康「「次回もよろしくお願いします！」」

三人「「「何処に行った作者～～！！！」」」

第２２話　二学期！（前書き）

白黒「ふぁ～、眠い。」

家康「どうしたのだ?そんな眠そうな顔をして。」

白黒「ここ最近、暑いからなかなか寝れなくてな。」

セイバー「なるほど。」

ライダー「第２２話始まります。」

第２２話　二学期！

リョウＳＩＤＥ

夏休みが終わり、九月に入った。
つまり、二学期だ。
そんな朝のホームルームで俺にとって大変な日々の始まりが起こった。

「皆さん、おはようございます。」

『おはようございます！』

相変わらず小学生は元気があっていいね。
俺にはそんな気分じゃない、何故ならこれから何が起こるのか知っているからだ。

「ホームルームを始める前に、今日転校生がやってきます。それも二人です！」

ザワザワザワザワ・・・
皆がざわめく、なのはとアリサとすずかもだ。
俺？俺は落ち着いている。
だって。

「さ、入ってきて！」

先生がそう言うと、入口から二人の女の子が入ってくる。
同じ容姿をした女子、もう分かるだろう。
先生が黒板に二人の名を書く。

「それじゃあ、お名前を言って。」

「えっと、フェイト・テスサロッサです。」

「アリシア・テスサロッサです！フェイトの姉です！」

そう、フェイトとアリシアがこの学校に編入してきたのだ。
二人を知っているなのはとアリサとすずかはぼ～ぜんとしている。

〔さすがになのはさん達も驚いていますね〕

〔まあ、それが普通だろう。つうか、俺が一番大変だったんだぞ〕

〔ご愁傷様です〕

〔うるせ～！〕

「それじゃあ、フェイトさんとアリシアさんは創神君の両隣りに座って下さいね。」

「「はい！」」

フェイトが右の席にアリシアが左の席に座る。
ちなみに前がなのは、後ろがアリサでもう一つ後ろがすずかだ。
なんでフェイトとアリシアが学校にしかも俺のクラスに編入できたのかは、一週間前に遡る。

それは、ちょうどアリシアのデバイスが完成し、プレシアに連絡をしたところから始まる。
我が別荘でなのはとフェイトがカードリッジシステム採用のデバイスでシグナムとヴィータと模擬戦をしていた時、俺はプレシアとアリシアを呼んだ。

「リョウ、遂にできたの？」

「ああ、できたぜ！アリシアのデバイスが！」

「わ～い！ありがとうリョウ君！」

ふふふ、もっとお礼を言いたまえ！なのはとフェイトのデバイスにカードリッジシステムを組み込むのとアリシアのデバイスを製作するのに、丸一週間位寝不足なんだよ！あ、言い忘れていたがなのは達が来る時は別荘は現実世界と同じ時間帯にしている。

「はい、これがアリシアのデバイスだ。」

「これ・・・フェイトのバルディッシュ？」

「ああ、だが中身は新品その物だ。ちゃんとカードリッジシステムも付けてある。」

「アリシア、リョウが貴女の為に造ってくれたのよ。」

「プレシア、アンタもだろう。アンタがいなければ完成しなかったぞ。アリシア、大切に使うんだぞ。」

「うん！ありがとうお母さん、リョウ君！」

俺達は訓練場に移動する。

これからアリシアのデバイスの性能と本人の実力を知らんとな。

まずはデバイス名を決めないと。

「うん！名前決まったよ！」

「そうか。名は？」

「バルディッシュ・レヴィア！」

バルディッシュ・レヴィアか、いい名だな。

「そんじゃあ、セットアップしてみな。」

「うん！レヴィア！セーットアーップ！！」

〔了解！セットアップ〕

バリアジャケットを装着する。

アリシアのバリアジャケットは、Ｓｔｒｉｋｅｒｓ版フェイトのバリアジャケットでスカートはロングバージョンだ。

デバイスは鎌ではなく、槍である。

「うん。できたよ。」

「よし、そんじゃあさっそく魔法の訓練を始めようか。」

「はい！」

その後、簡単な魔法から応用まで優しく、時には厳しく教える。
そのおかげでアリシアはなのはとフェイト並に強くなった。

「さすがはプレシアの娘だな。凄まじい才能だな。」

「私も驚きだわ。さすがはアリシアだわ。」

「あとは、このまま才能に溺れず努力と訓練を続ける事だな。」

なのは達もそうだがな。
才能ある者は本当に恐いな。

「リョウ。」

「なんだ?プレシア。」

「実は、頼みたい事があるのよ。」

頼みたい事?

「なんだ?」

「実は、アリシアとフェイトを学校に編入したいのよ。貴方となのはちゃんの学校にね。」

「・・・んで?」

「それで、貴方になんとか二人を編入させてくれないかしら?」

おいおい、さすがにそんな頼みを聞かれるとは思わなかったぞ。
可能な事は可能だが、さすがにな・・・でも、これは難しいな。
だが、やってゆるか。

「「リョウ（君）」」（ウルウル）

んげっ・・・や、やめてくれ。
そんな上目遣いな上に涙目で俺を見ないでくれ！
ぐっぐぅぅぅっ・・・はぁ。

「わかったわかった。なんとかやってみるよ。」

「本当！？」

「ああ。」

「「ありがとうリョウ（君）！」」

テスサロッサ一家は喜んだ。
やれやれ、ハッキングして手続きとなんやらしなきゃならないな。

〔バサラ、頼むぜ〕

〔了解。任せて下さい〕

とまあ、いろいろ頑張ってフェイトとアリシアを学校にしかも俺やなのはと同じクラスに編入させました。
ホームルームも終わり、ただ今二人は質問にあっている。

かなり緊張しているらしく戸惑っている。
もっとも、アリサのおかげで何とかなった。
ちなみに俺は、なのはから念話でさんざん質問されている。
ようやく昼休みに入り、なのはとフェイトとアリシアとアリサとすずかと一緒に屋上に上がり、弁当を食う。

「まさか、フェイトとアリシアが来るなんてね。」

「本当、びっくりしちゃったよ。」

アリサとすずかがそう言い、なのはも同意する。
今更な上もう知ってるだろうが、二人はフェイトとアリシアと会っており、今では友人関係である。

「あはは、でもリョウやなのは達と一緒のクラスになれて嬉しい。」

「本当だよ！これも、お母さんさまさまだよ。」

（本当は俺だけど）

弁当を食い、五時間目六時間目と授業を終え、いつものメンバープラスフェイトとアリシアと一緒に帰る。

「あ、そうそう！皆、これから家に寄ってほしいなの。」

「え？ああ、そうか。フェイトとアリシアの学校入学祝いか。」

「うん！はやてちゃん達も一緒に祝ってくれるの！」

帰りの途中でなのはが聞いてくる。

アリサとすずかはもちろん答えをだしている。

「「ぜひ！」」

「そんじゃあ、行くか。翠屋へ！」

「「「「「お〜！！」」」」」

というわけで翠屋に到着。

店内に入ると、飾り付けをして、デザートがたくさんテーブルに乗っており、完全に貸し切り状態になっていた。

「おかえり、そしていらっしゃい。」

「ただいま！」

「「「「「お邪魔します。」」」」」

そして、フェイトとアリシアの入学祝いをする。

楽しくケーキを食べたり、談笑したりとパーティーを楽しむ。

俺は、近くのテーブルでジュースをチビチビ飲んでなのは達の談笑を聞く。

ふぅ、こういうのはやっぱりいいな、ゆっくりできて。

〔マスター。ユーノから話が〕

〔ユーノから？〕

もしや見つかったのか？俺はなのは達に一言いってから別の部屋に移動する。

移動したあと、モニターが出る。

「待たせたな。んでその様子だと、見付かったようだな。」

「そうだね。とりあえず、名前だけど本当は闇の書という名ではないようだ。本当の名は闇天の書、本来は魔力を募集するだけの本だったようだけど、バグが存在して闇の書という名になってしまったようだよ。」

「なるほど。」

まあ本当は、管理局がバグをいれたせいなんだがな。
本当に、管理局は最低の屑組織だな。
まあいい、この事をあいつらに教えないとな。

「あ、そうそう言い忘れていたよ。アースラがそっちに来るらしい。」

「・・・は?」

どうゆう事?なんで来るんだ?

「何故かわからないけど、そっちに闇の書がある事が分かったらしい。まだ詳しい持ち主は分かってないようだが。」

どういう事なんだ?募集用の魔力を集めている事はバレてない筈だ。

「ユーノ、それは誰からの命令か知っているか?」

「・・・確か、グレアム提督だったかな。」

グレアム・・・『ギル・グレアム』だと？なるほど、闇の書が発動したのに活動しないからというわけか。
ふん！ふざけやがって！グレアムが動く事予想はしていたがまさかそうくるとは、これは必ずシグナム達を会わせないようにしないとな。

「それと、これは噂なんだけど。」

「？」

噂？なんだそれは。

「提督に使い魔がいるんだけど、その使い魔が最近提督より違う人と一緒にいる事が多いらしいんだ。」

は？あの二匹の猫姉妹の使い魔が？あの二匹ってグレアムの為にしか動かないんじゃないのか？

「ふ～ん、あっそ。どうでもいい。」

俺は興味無いと装う。
イレギュラーってとこか。
今までなかったからな。
もしかしたら、転生者かもしれない？いや、それは無い筈。
大創造神から聞いた話だと、俺が行く世界には他の転生者は現れないと言っていた。
だが、もし転生者なら何故現れるんだ？謎だ。
まあいい、もし会ったら分かるだろう。

「報告は以上だよ。」

「ああ、サンキューなユーノ。助かった。」

「君には、助けてもらってばっかりだったからね。これくらい安いものだよ。それじゃあ。」

そう言い、モニターが消える。
俺はなのは達の所に戻り、パーティーの続きを再開する。
パーティーが終わりその帰り、やっぱり視線を感じる。
数は三つ、しかもその中の一つはかなりの殺気を感じる。
もしかしたら、こいつがそうか。
はっきりいって弱いな。
殺気が俺以外にも出してる、つうか下手くそすぎ。
しかもやっぱり魔力タダ漏れだし、訓練もしてない。
やっぱりアホだな。
放置してもいいな。
俺は、それを無視しながらテスサロッサ一家とはやて達と一緒に帰る。
家に着き、俺は瞬間移動ではやて家に行く。
はやて達は驚かしてしまったが、ユーノが集めた情報をはやて達に教える。

はやてＳＩＤＥ

リョウ君がいきなり現れてほんまびっくりしたわ。

ヴィータ達がそろった頃になんで来たのか聞いたら、この子（闇の書）の事が分かったらしい。
詳しく聞いたら、本当の名は闇天の書というらしい。
本来はただ魔力を募集するだけの本やったらしいけど、バグがついて闇の書と名を変えてしまったようや。
ヴィータ達は嘘だと言っていたけど、ヴィータは途中でなんかおかしいと・・・なんでも何か大切な事を忘れてるて言った。
リョウ君はおそらくバグのせいで記憶があいまいになり、重要な事は忘れてしまったという事らしい。
それで、解決方法は無いか聞いてみた。
方法は一応あるらしい。
その方法は、闇の書の募集を完成させバグを取り出すしかないようや。
ヴィータ達はリョウ君を募集すればできるのかと聞いたら、俺の魔力を募集するのはやめたほうがいいと言うた。
なんでか聞いたら、自分のレアスキルなんかをもったりしたらバグを取り出す事が難しくなるからやめたほうがいいと言った。
ヴィータ達は確かに言って納得したわ。
そんじゃあ、魔力を募集しに行くって言っとったけど、私とリョウ君が却下した。
私の理由はヴィータ達にそんな事さしたくないんや。
リョウ君の理由は、管理局が動いてくるからやめた方がいいて言った、さらにいえばなのはちゃんとフェイトちゃんとアリシアちゃんの魔力を募集した方がいいと言った。
なのはちゃん達はええんかと聞いたら、なのはちゃん達のはレアスキルもないからいいらしい。
もう一つは魔力を募集し早く闇の書を覚醒させたいなら、三人の魔力は使えると言った。
それだけだと覚醒しないと言っていたら、なんとリョウ君は自分が魔力を集めると言った。

ヴィータ達はそれでいいと言った。
話を終えた後、リョウ君から念話がきた。
なんか聞くと闇の書には主人格が存在するって言った。
それを言われそういえばそんな人物に会った事があるって言ったら、
名前をつけてやれと言われた。
私はもちろんＯＫをだした。
なんて名前にしようかな。

第２２話　二学期！（後書き）

白黒「第２２話完成！次回から後編です。」

テンテン「原作から離れていくね。」

白黒「正確にいえば崩壊だけどな。」

セイバー「どうなるのですか？」

白黒「すでに考えてるのでお楽しみに。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回は、闇の書の人格が登場！」

第２３話　イレギュラーなクリスマス（前書き）

白黒「管理局の扱いについて。」

ライダー「どうしたのです？いきなり。」

白黒「いや～、実は管理局の扱いをどうしようかなと思っているのよ。酷い扱いにするか、空気な扱いにするか、どっちにしようか迷ってるてね。」

テンテン「どっちでも構わないわよ。」

家康「第２３話出陣いたす！」

第２３話　イレギュラーなクリスマス

リョウＳＩＤＥ

十二月・・・それは、冬の時期そしてクリスマスがある日。
闇の書の真実が分かって三か月、俺達はいつも通りに暮らしていた。
俺は闇の書の募集をし、大分魔力が集まった。
おそらく、これだけあれば闇の書が覚醒してもいいくらいなほどを。
しかし、それでは駄目な為なのはとフェイトとアリシアさらにプレシアの魔力を募集した。
これはなんとか頼んで了承を得た。
四人には、直接闇の書から募集させた。
そのおかげで約半分のページが埋まったらしい。
どんだけだよ。

〔おそらく、プレシアの魔力でしょうね〕

〔だろうな。じゃなきゃ半分は埋まらねえ〕

まあ、そのおかげで助かるけどな。
たが、嬉しい事ばかりでは無い。
イヤな事もある、それはアースラの奴等が来た事だ。
アースラは突然俺達を呼んで、闇の書の対処の為協力してくれと言ってきやがった。
はっきり言ってしまえば気分は最悪、しかもこっちに住むと言いやりやがった。
場所はなんと俺のマンションだ！ただ隣でないだけマシだな。

なのは達には、はやての事は内緒にしろと頼んだ為アースラの奴等は知らない。
そして十二月、遂に覚醒の日がくる。

シグナムＳＩＤＥ

我が主はやてが十二月に入った直前、家で急に苦しみだし病院に通うようになった。
何故急に苦しみだしたのか分からなかったが、シャマルが言うにはどうやら闇の書の呪いのようだ。
このままでは、我が主はやてが！リョウに連絡すると何とかすると言った。
主が病院に入院して二日後に、リョウが来てくれた。
リョウは私達を屋上に来るように言う。
屋上に移動し、すでにリョウが来ていた。

「実は、頼みたい事がある。」

「なんだ？」

リョウが言うにはクリスマスに主を治すと言った。
ヴィータが怒るが、クリスマスプレゼントとしてだと言うと納得した。
なるほど、それは主にとって最高のクリスマスプレゼントだ！私達は納得し主に内緒にした。
その後、シャマルがご馳走を作ると言ったが、全員で必死に拒否し

た。
何故かリョウも必死だったな。
そして、十二月二十四日クリスマスイブ遂に主の足が治り闇の書が直る日だ。

リョウＳＩＤＥ

クリスマスイブ、俺はなのは達と一緒にはやてがいる病室に行き、サプライズプレゼントをした。
その時のはやての驚きっぷりはよかったな。
そのあと、しばらく楽しく雑談しアリアとすずかは先に帰った。
誤魔化すのは少し・・いや、かなり大変だった。
夜、俺達は病院の屋上にこっそり移動する。
もちろん、シャマルが結界を張ってだ。

「さて、始めるか。準備はいいか？はやて。」

「ＯＫや。ところで何をするんや？」

「これから闇の書を覚醒さしてバグを取り出す。」

「なるほど。」

「これが、俺がお前へのクリスマスプレゼントだ。」

「！・・・ありがとう。」

「フッ、気にするな。さてやるか。」

俺の手のひらに沢山の魔力が入った球体をだす。
なんだそれはと聞かれたが、集めた魔力だというと納得した。

「シャマル、頼む。」

「ええ、募集開始。」

どんどん募集していく。
約半分位の時、闇の書が光り輝く。

「募集完了。全ページ埋まったわ。」

「それにしても、それだけ魔力を集めるとはな。一体どうやって？」

「それは秘密だ。さ、はやて起動よろしく。」

「うん。目覚めよ闇の書！」

闇の書が輝き、光の中から一人の女性が現れた。
この女性が闇の書の人格か。

「初めまして我が主はやて。私は闇の書の人格です。」

「この人が闇の書。」

「でも、名前に困るわね。」

なのはとプレシアがそう言う。
やっぱりそうだよな、名前がないとな。

「闇の書なんて名じゃ呼びにくいな。貴女に名前を与える。」

そう言い、闇の書に近付く。

「闇の書なんて名は不便やろ。名前はそうやね・・・これから先、人に不幸は与えない・・・人を支える幸運の追い風『祝福の風』・・・『リインフォース』！」

「リイン・・フォース。」

ようやく名前ができたか。

「名前ができた事だし、そろそろ始めようか。さて、リインフォースお前の中にあるバグを取り出す。」

「な、なんだと!?どうやってだ!!」

「すこしおとなしくしてろよ。」

「あ、ああ。」

俺はリインフォースの目の前に立つ。

「ちょっと我慢しろよ。」

「？はい。」

俺はリインフォースの胸元に左手をおく。

「な、何を!?／／／」

「・・・ん!」

『『『んなっ!!??』』』

左手がリインフォースの胸元に空間ができズブズブ入っていく。
それを見て、全員が驚く。
さて、何処にあるかな?バサラがサポートしてくれる為、何とか見つかるだろう。

〔マスター、あと少し奥にお願いします〕

「わかった。」

もっと奥に腕を伸ばす。
何処だ?何処にバグがあるんだ?何処に・・・

〔マスター!ありました。そのまま掴んでください!〕

「わかった!」

俺はバグを掴む!そして腕を抜くと黒い球体がでてきた。
サイズはサッカーボール位の大きさ、それにしても凄いなこのバグは。
あまりにも黒く邪悪な魔力の塊だな。
これは早く消さないとな。

「それが、私を苦しめたバグだな。／／／」

「？ああ。」

あれ？なんでリインフォース、頬が赤いんだ。
ああ、さっきの胸元に手をか。
それは済まなかったな。
俺は謝った。
リインフォースは許してくれた。

「まさか、リインフォースまでもか？」

「そうだったら敵なの。」

「容赦しないよ。」

「うふふ。」

ブルッ、なんかめっちゃ怖いんだが。
まあいいか、とにかくこれを消すか。

「！？何？誰かが結界に入ってきた！」

「なんだと？」

！やっぱりか。
なら、仕留めないとな。
そんな時。

「！リョウ！バグが！」

「何!?」

んな!?いつの間にかなくなってやがる!まさか、どうして?

「は～はっはっはっ!あっさり奪えたぜ!さすがは俺様だぜ!」

上を向くと仮面を付けた男二人と一人の男が浮いていた。
しまった!仮面を付けた二人に集中して、油断した。
それにしても、あの仮面二人はあの猫使い魔だと分かるが、あの野郎は誰だ?そういえば、ユーノが言っていたな。
まさか、コイツがそうか。
しかし、この感じは。

〔マスター、コイツは〕

〔ああ、間違ない・・・転生者だ〕

何故転生者がいるんだ?わからん。

「それにしても、まさかモブが俺様と同じだったとはな!だがしょせんはモブだ!この史上最強のオリ主の俺様の敵じゃねえ!今から助けてやるからな!俺様の女達よ!我がハーレムメンバーよ!!」

うっわ～、気持ち悪い～これはないわ。
自分でそう言うか?しかもコイツ、力の差がわからんのか?まあいい、やってくれたぜ。

「ね、ねえ。あいつ一体何者なの?なんか気持ち悪いよ!」

「し、知らない。リョウ、こいつ知ってる？」

「知らん。こんなアホでバカで妄想癖がある奴なんか。」

「「貴様～！ご主人様を！」」

「いいよ。そういえば名を名乗ってなかったな。俺様の名は草部サロメだ。俺様の女達よ、覚えておくんだ！君達のご主人様を！」

・・・もう突っ込まん、どうでもいいしな。

「君達も仮面を外しなさい。」

「「はい。」」

仮面を外し、猫耳と尻尾を付けた女になった。

「この二人は俺様の女、リーゼロッテとリーゼアリアだ。」

二人は頬を紅潮している・・なるほど、惚れてるのか、男を見る目ないな。

「さあ！まずはそこにいるモブを殺って俺様の女達の目を覚まさしてあげよう！」

〔マスター、いきなり狙われましたね〕

〔どうでもいい。くるんなら、殺るだけだ〕

つうか、なのは達も敵意を抱いているのに気付かないのか？やっぱ

りバカだ。
はぁ・・・さて、どうしようか。
さっさと殺るか、長引かしするとアースラの奴等が来るからな。
できれば来る前に片付ける。

〔マスター！バグが！？〕

「！？」

何！？バグが奴から離れていく？なんだ？

「な、なんだ？」

次の瞬間、バグが奴に取り付いた！

『『『！！？？』』』

「んな！？」

「「ご主人様！！」」

バグが奴を飲み込む！ま、まさか・・・

「ぐわぁぁあああぁぁあぁぁあああ！！！！」

奴が悲鳴をあげる！奴の体から黒いものが溢れでる。

「な、なんだこれは～！？や、やめろ！！・・・俺様は野望を！！・・ハーレムを！！・・・築くんだ～！！！・・・・ぐぢぶぬみげぜびどゆいれごば●％◇§■¥★℃●●●●●●！！！！！」

闇が奴を包みこみ球体になった。
中でグロテスクな音が聞こえる。
グレアムの使い魔が奴の名を呼ぶ。
なのは達は震えている。
くっ・・・凄まじい魔力を感じる。

〔マ、マスター！奴の魔力がどんどん上昇していきます！〕

〔・・・おそらく、奴自身の魔力とバグの魔力がプラスされたからだろう〕

チッ！全く面倒くさい！その時、球体が割れ遂に姿を見せる。

第２３話　イレギュラーなクリスマス（後書き）

白黒「第２３話完成！オリ主（笑）扱い酷す。」

セイバー「まさか現れてこれは・・・さすがに。」

白黒「これが自分の作品でのオリ主（笑）の扱いだ。」

ライダー「ですが、どうみてもやばそうな感じですよ。」

白黒「それは次回わかります。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第２４話　長い聖夜の始まり！（前書き）

白黒「オーズ終わったな。」

セイバー「かなり変なライダーでしたね。やたらかったらフォームが多すぎです。」

白黒「今だから言うけど、欲望を馬鹿にしてたわ。でもあのやたらやかましい会長の『欲望は人が生きるエネルギー！進化に必要なもの！』と言う言葉には心打ったわ。」

ライダー「確かに人は欲望があるからいろんなものができますし、凄い力がでますね。」

テンテン「なかなか馬鹿にできないわね。」

家康「第２４話出陣いたす！」

第２４話　長い聖夜の始まり！

三人称ＳＩＤＥ

黒い球体が割れ、中から現れたのは人型の化け物だった。
体型はスラリとした長身で引き締まった筋肉、体の色は真っ黒で所々が真っ赤、尻尾もあり、頭にはツノが二本、目付きは鋭く凶悪な顔、その姿は劇場版ドラゴンボールＺに出てくる敵ジャネンバにそっくりであった。
目を開け、リョウ達を見る。

「ご、ご主人様・・・」

「ど、どうしたのですか！？」

化け物はすぐそばにいるリーゼアリアとリーゼロッテを見た。

「・・・ニィッ！」

「「！？」」

薄く笑い、手を二人に向け・・・そして。

「「え・・・？」」

手から魔力弾を放ち、二人の体を貫いた。
二人はわけが分からないといった表情で化け物を見る。

「ご主・・・人・・・さ・・・・ま・・・・」

「ど・・・うし・・・て・・・・で・・・すか・・・・・」

二人は呟きながら、地に墜ち維持できなくなり消えた。
それを見て、化け物は。

「ぎぎゃぎゃぎゃおおおおお！！！」

雄叫びをあげながら海鳴市全体に強力な結界を張った。

リョウＳＩＤＥ

奴が猫使い魔二人が消滅した瞬間雄叫びをあげて結界を張りやがった。
この結界はかなり強力だな。

「リョ、リョウ君！一体どうなったの？」

「おそらくバグが奴を取り込んだのだろう。もうアイツは人じゃない。化け物だ。皆、バリアジャケットを装着したほうがいい！」

俺がそう言うと皆バリアジャケットを装着し、構える。
あ、はやても夜天の魔導書を使ってバリアジャケットを装着している。

奴は俺達に気付き、右手をかざす。

「！飛べ！！」

俺が言った瞬間、魔力弾が放たれた。
俺達はぎりぎりに飛び、躱せた。
あっぶねえ、ノーモーションで放ちやがった。

「だが、向かってくるなら・・・殺らせてもらう！」

〔ディバイン・・バスター！〕

砲撃を食らわす。
・・・無傷か。

「ハーケン・・・セイバー！」

「飛竜・・・一閃！！」

「潰れろぉ！！」

「ハーケンシュートー！！」

「ディバイーン・・シューター！！」

「食らいなさい！」

なのは達が遠距離砲撃を食らわし、さらにプレシアの雷魔法を食らわす。
連続で当たり、爆発し煙が覆う。

煙が晴れる。

「・・・無傷か。」

〔マスター、奴は障壁を張ってません。しかし、奴の魔力で体中に膜をしています。しかも、その膜が障壁の代わりになっています。そのおかげで、奴は無傷です〕

チィッ、全く面倒くせい！どうする？・・・！奴の右手に桜色の魔力が集まってやがる！ヤバい！！

「みんな、この場から離れろ！急いで遠くに離れろ！！」

俺の言葉を聞き、フェイトはなのはを、プレシアはアリシアを、ヴォルケンリッターははやてを連れて一緒にこの場から離れる。

俺はなのはとフェイトと一緒に離れる。

「アレは、なのはのスターライトブレイカー。どうしてあの化け物が？」

「闇の書いや、夜天の書に募集された魔力はその魔力を使った技も使える。しかも、奴はバグに取り込まれたからな、バグにもあるのだろう。」

「それってつまり、私や姉さん・・母さんの魔法も？」

「使える。チッ、余計な事をしてくれる。あの野郎は！」

「それにしても、ここまで離れる必要は無いと思うけど。」

「なのは、それマジで言ってるのか？」

「え？え？」

「なのはの砲撃はかなりヤバいんだよ。」

「そうなの？」

「自覚無しかよ！だからお前は悪魔か魔王と呼ばれるんだよ！」

「なのは悪魔でも魔王でもないなの！」

全く、この魔砲少女が！自分の魔砲の威力くらい自覚しろよ。
そんな話をしてる場合じゃないな、急いで遠くに離れないと。
その時。

〔マスター！左方向三百に、一般人がいます！〕

「「え？」」

「あ」

あああ～～～！！！しまった～！！忘れてた！！原作でこのシーンがあったんだった。
クソ！結局こうなるのか。

〔みんな！こっちに来てくれ！一般人が結界内に入ってやがる。もしかしたら、奴はそこに撃つかもしれない！守る為にこっちに早く来てくれ！〕

〔〔〔わかった！！！〕〕〕

全員了承してくれた。
俺となのはとフェイトもすぐにそこに行く。
到着し、辺りを見渡す・・・いた。

「すみませ～ん！ここは危険です！この場から離れてください！」

「え？この声！？」

「え・・・？」

「うそ・・・」

そこにはアリサとすずかがいた。
やっぱりこの二人か。

「アリサちゃんにすずかちゃん！？」

「なのは！？なんなのその格好？あとどうなってるの？」

「二人共、どうして結界内に！？」

「フェイトちゃんも！？凄い格好。という事は。」

「そうだよ。俺だよ。」

「「リョウ（君）！」」

アリサとすずかが俺となのはとフェイトに質問しまくる。
俺達はどう言おうか迷っていると、プレシア達も来た。

プレシア達もアリサとすずかがいる事に、アリサとすずかもプレシア達がいる事に互いに驚く。
このカオス、どうしようか。

〔マスター！〕

「ハッ！」

しまった！いつの間にか奴がこっちに標準を合わせやがった。
まずい！

『『『リョウ（君）！！？？』』』

俺はみんなの前に立つ。
バサラ！頼むぜ！

〔了解！プロテクションＥＸ！！〕

障壁を張ったと同時に奴が魔砲を放った。
魔砲と障壁がぶつかる。

「チィッ！これほどの威力とは！」

〔マスター！このままでは障壁が！〕

「わかってる！クソッ！」

ちくしょう！防ぎきれねえ！仕方ない、魔力を上げ「レイジングハート！」・・何？

「「「「「「「「「「プロテクション！」」」」」」」」」」

なのは達が障壁を張った。

お前ら・・・

「リョウ君だけに任せてられないよ！」

「なのは・・・」

「アリサとすずかに障壁を張っといたよ！」

「フェイト・・・」

「あたしだって障壁張れるよ！」

「「私もだ。」」

「アリシア、シグナム、リインフォース・・・」

「私もリョウ君の手伝いしたいんや！」

「貴方にまだ借りを返してないわ。」

「はやて、プレシア・・・」

どうして？お前ら。

「あたし達はアンタの仲間なんだからな！」

『『『うん！』』』

「・・・くっ、ははは！なら全力でこの砲撃を防ぐぞ！」

『『『はい（うん）（おう）（ああ）！！』』』

俺達は全力で防ぐ。

なのは達のおかげで俺の障壁にひび割れがおきなくなった。

「俺は盾の守護獣！防げんものなどない！！」

「あたしだって負けないよ！」

特にザフィーラとアルフの障壁が凄い。

さすがだな。

チラッと後ろを向くと、アリサとすずかが手を握りあって震えている。

「大丈夫だ。」

「「！？」」

「俺が・・俺達が二人を守る。」

「「！・・うん！」」

俺の声を聞いて、二人は安全したようだ。

さて、守るか。

しばらくして、砲撃が止んだ。

ふぅ・・・助かったぜ。

「もう大丈夫だ。」

「リョウ・・・」

「リョウ君、一体何が起こってるの?それになのはちゃん達はどうして?」

「そ、それは・・・」

なのは達がどう答えたらいいか迷っている。

「今は話せる状況じゃない。アイツを倒したら、教えてやる。だから。」

「本当?絶対?」

「ああ、絶対だ。」

「絶対よ!絶対に話しなさいよ!今さっき怖い思いしたんだから!」

「ああ。」

俺がそう言うと納得した。

どうせバレるんだ、ならばらすまでだ。

〔いいの?話しても〕

〔どうせバレるんだ。ならばらす〕

〔でも・・・〕

〔ふぅ・・・お前らが心配する気持ちは分かるが、少しは二人を信用してやりな〕

〔私達は・・・〕

〔それとも、二人を信用できないか？〕

〔〔〔そんな事無い！〕〕〕

〔なら信じてやりな。友達、親友だろ？〕

〔〔〔・・・うん！〕〕〕

ふっ・・・全く世話がやける奴等だ。

さて、そう決まったら、そろそろアイツには退場してもらおうか。

「みんな、奴は俺一人で倒す。お前らは離れてろ。」

「ひ、一人でですって！？」

「無茶だ！奴はとんでもない化け物だ！我らも一緒に！」

その気持ちは嬉しいけど、あんな化け物になっても元になった奴は転生者だ。

並の実力じゃない筈だ。

「悪いがあんたらがいたら、俺の邪魔だ足手まといだ。キツい言い方だがな。それに、俺があんな化け物に負けるか。」

「「「「「「でも・・・」」」」」」

「なのは、フェイト、アリシア、はやて、アリサ、すずか。」

六人の名前を言う。

六人は俺を見る。

「俺はお前達の何なんだ？」

「「「「「「友達だよ！」」」」」」

「なら、俺を信じろ！」

「「「「「「うん！」」」」」」

なのは達は納得したようだ。

プレシアとヴォルケンリッター達はため息をついた。

何故？

「テコでも動かないようね。仕方ないわね。」

「リョウ、そう言うなら絶対に勝てよ！」

「ああ。シグナム。」

許可はもらった。

さて、やるか！

「バサラ、ファイターモードだ。」

〔了解！〕

杖が消え、代わりに手と足にデバイス型のグローブやブーツが装着された。
だが、これだけでは終わらない。

なのはＳＩＤＥ

杖が消え、代わりにグローブとブーツがリョウ君の両手と両足に装着したの。

「ほぉ、接近格闘用のデバイスにもなれるのか。」

格闘用デバイス？そんなのもあるの？デバイスの種類っていっぱいあるんだ。

「さらにバサラ、大人モードだ。」

〔よろしいのですか？〕

「構わん。むしろそうなったほおが戦いやすい。」

〔わかりました。大人モード起動〕

バサラがそう言うと、リョウ君の足元に魔法陣が描かれ、リョウ君が光に包まれたの。

魔法陣と光が消え、姿を現したの。

『『『なっ！？』』』

そこには、黒髪のロングヘヤーの大人の男性が立っていたの。

アレってもしかして。

「リョウ君？」

「ああ。」

『『『・・・えええ～～～！！』』』

リョ、リョウ君が大人になっちゃったの～！なんで？どうして？

「なるほど、変身魔法ね。」

「そ。さすがはプレシアだな。」

変身魔法？

「お母さん。変身魔法って？」

「早い話、姿を変える魔法よ。」

「「「へ～。」」」

「でもリョウの場合は変身というより大人になったて感じね。正に大人化。」

ふえ～、リョウ君が成長するとこんなに格好よくなるんだ。／／／
リョウ君がこっちに向いたの。
う～、改めて顔を見ると本当に格好いいの。／／／

「お前ら、今すぐこの場から遠くに離れろ。巻き添えを食うぞ。」

「・・・わかったわ。みんな、とりあえず一番高いビルの屋上に避難するわよ。」

プレシアさんの言葉に従うの。
あれ？シグナムさんとリインフォースさんが動かないなの。

「「カッコいい。／／／」」

え？ま、まさか・・シグナムさんだけじゃなくリインフォースさんもリョウ君の事を？
もし、そうなら二人はライバルなの！

リョウＳＩＤＥ

俺がそう言うてみんな一番高いビルの屋上に移動した。
俺がそう言った時、シグナムとリインフォースの頬が赤かったな。
・・・はぁ。

〔マスター、ハーレム要員ゲットですね〕

「バサラ、お前そんなふざけた事を言うな。怒るぞ。」

〔そうですね、すみません。おっと、今はそんな事を言ってる場合じゃないですね〕

「ああ、そうだな。」

俺は飛行魔法で空を飛ぶ。

さて、いよいよだな。

「準備はいいな。」

〔いつでもいいです！〕

「なら・・・いくぜ！化け物！！」

遂に、バグに取り込まれた化け物との戦いが幕を開ける！

第２４話　長い聖夜の始まり！（後書き）

白黒「第２４話完成！イレギュラーとの戦いが次回始まります！」

家康「まさかリョウ殿が大人に戻るなんて。」

白黒「可能だからな。さらにいえば主人公だからやっぱり大人にならないと。」

テンテン「それにしてもやっぱりリョウさんの大人の姿はカッコいいな。」

ライダー「そうですね！」

セイバー「私も同じ気持ちです！」

白黒「さすがは我らがオリ主！さすがだな。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第２５話　長い聖夜の戦い！（前書き）

白黒「遂にイレギュラーとの戦いが始まる。」

テンテン「バグに取り込まれ、強大な力を持ったイレギュラー！その怪物にリョウさんが挑む！」

ライダー「果たしてリョウは、強大な化け物に勝つ事ができるのか！？」

家康「果たして、海鳴市の運命は！」

セイバー「第２５話始まります！」

第２５話　長い聖夜の戦い！

三人称ＳＩＤＥ

「エイミィ！まだ映像が映らないかしら！？」

「すみません！ジャミングが凄すぎて！」

アースラのブリッジ内は今、海鳴市の映像を映そうとしてるが、モニターには何も映らない。

あまりにも強力な結界が張られてる為、映そうにも映らないのである。

「クロノ！転送して行けないの！？」

「無理です艦長！侵入すらできません！」

「そう・・・提督、詳しく教えてくれませんか？」

リンディの隣にはグレアムが座っていた。

グレアムは突然二人の使い魔からリンクが消えた事に気付き、アースラに乗せてもらったのだ。

「私にもわからん。ただ一つ言える事は。」

「何でしょうか。」

「闇の書が覚醒し、この世界が危機にさらされてるという事だ。」

その言葉を聞き、誰もが硬直し不安な顔になった。

ただ一人、リンディだけを除いて。

「それは無いと思います。」

「・・・なぜかね？」

「なぜなら、それに対抗できる人材達が今結界内にいるという事です。」

グレアムはリンディの言葉に？マークを浮かべる。

リンディは信頼した目で地球を、結界を張った所を見ていた。

リョウＳＩＤＥ

「ぐぎゃぎゃぎゃおおおお！！！」

化け物が突っ込んできた。

化け物は拳を使った連続攻撃を仕掛けるが、俺は躱しいなして防ぐ。

たいした連続攻撃だが、俺には見える攻撃だ。

今度は連続蹴りを繰り出す。

それでも俺には見える。

「遅い。」

「ごばぎゃぁ！！」

「ふぁああ！！」

「がぁあああ！！」

左腕でガードしカウンターの右を顔面に食らわした。
さらに追い討ちをかける、パンチや蹴りをかなり食らわす。
奴はまともに食らいまくる。

「ハッ！」

思いっきり蹴り飛ばした。

「ぐぎぎぎ・・・！！」

「そらそらそらそら！！」

「ぎゃあああ！！」

奴は急停止したが距離が離れた。
その隙を突いて、両手から魔力弾を連続で放ちまくる。
全弾命中！このまま大技で締める！

「ハァアアア！！！」

〔カードリッジロード！〕

（ガシュンガシュン）

「食らえ！ディバイン・・バスター！！」

俺は魔力を右手に集中し、バサラがカードリッジを二つ消費する。
そして、俺はディバインバスターを放った！煙が晴れ、奴が姿を現したと同時にディバインバスターが直撃した。

「がああぁぁ・・・！！！」

直撃し大爆発を起こし、煙がまう。
ちゃんと殺傷設定にしたからな・・・倒したか・・・？
煙が晴れ、そこには右腕と左脚が無くなり体中が傷だらけで血が吹き出している奴の姿が現れた。
思った以上にタフだな、そんな事を考えていると。

「が、ががぁ・・・があ！！」

「！」

こいつ、右腕と左脚が生え治り、傷もみるみるうちに治癒していく！再生能力か・・・厄介だな。

〔マスター！〕

「！」

奴の口が開き、そこから魔力が集中する。
ヤバい！

「ぐぎゃあああ！！！」

奴の口から魔砲が放たれた。
チィッ！俺は軽く躱す。
奴の魔砲は地面を走るように当たり、爆発した。
魔砲が当たった建物が破壊され、火の海とかした。
かなりの威力だな。

〔不味いですね。このままここにいれば、海鳴市は廃墟と化してしまいます！〕

「ああ。」

確かにこの場所は悪いな。
移動するしかないな。

「バサラ、海はどの方角だ？」

〔・・・このままっすぐです！〕

「わかった。」

「ぎゃおぎゃあああ！！」

奴は魔力弾を乱射してきた。
全弾躱し弾きながら一気に接近する。

「！？」

「そぉらああ！！」

俺は奴の顔面を鷲頭かみしそのまま何回かスイングし、海へと投げ

飛ばした。
投げたあとすぐに奴を追いかける。

「・・・」

「ぎぎゃぐべだばざぎ！！」

奴に追い付き、移動しながら奴をボコボコに殴り蹴りを打ち込む。
・・・む、海が見えてきた。
よし。

「オラッ！！」

思いっきり蹴飛ばし、吹き飛ばした。
かなり吹き飛ばし、奴は急停止した。
もうここは海のほうだ。
ここなら存分に戦えるな。
さあ、仕切り直しだ！

三人称ＳＩＤＥ

なのは達は、一番高いビルの屋上でリョウと化け物の戦いを見ていた。

「凄い！」

「あの化け物と全くの互角なんて。」

「違うぞフェイト。むしろ押してるぞ！」

「シグナムの言う通りだ。さっきからリョウはダメージらしいダメージを受けていない。」

「凄～い！さすがはリョウ君！」

「本当、たいした腕よ。」

「リョウ君はそんなに凄いん？」

「凄いですよ主はやて、あの化け物は魔力が桁違いにでかいのに、彼はその半分で押してるのです。」

「全くどんだけ凄いんだい！リョウは！」

「ほんとだぜ！」

「才能ってだけでは片付けられないわね。」

なのは達はリョウの凄さに驚いていた。

「才能だけじゃない。努力を怠らず、自分を過大評価しない。そうでなくは、あそこまで強くならない。」

「シグナムの言う通りです。リョウは自分に厳しくして限界まで、いや限界を超えるつもりで鍛えているのでしょう。」

シグナムとリインフォースはリョウの強さの秘訣をそう判断した。
しかし、リインフォースは一つ間違っていた。
リョウに限界は存在しない。
いや、リョウに限らずみんな限界など無いのだ。
努力し、鍛えあげれば強さは無限に広がるのだ。
それに気付くのはもう少し先のようだ。
今はただ、リョウと化け物の戦いを見守るだけだ。

リョウＳＩＤＥ

「ふん！」

俺は高速移動で奴に接近し、右で顔面を殴る。
続いて左で顔面を殴る。
これを繰り返し、奴は振り子のように右、左と揺れる。
何十回か揺れたあと、奴の顔を掴み膝蹴りを浴びせた。
奴はもろに食らい呻き声をあげる。

「ぐあぎああ！！」

「まだまだ！」

さらに追い討ちをかけるように、魔力弾を三発ぶち込み魔力がこもった拳で奴のどてっ腹に叩き込んだ。

「どらああ！！」

「ごばああ！！」

奴のどてっ腹に穴があいた。
だが。

「ハァ！」

「チッ、また再生しやがったか。」

〔これじゃあ、どうしようも！〕

「いんや、手はあるぜ。奴を完全に消し去れば倒せる。」

この世に倒せないものなどない。
絶対に倒せないものなど存在しない。
いくら不老があっても不死は無い。

「・・ニィッ！」

「！？」

奴の右手に剣が現れた。
アレは、投影魔術か。
しかし、かなりお粗末なものだな。
形だけだな。
ほとんど魔力もこもっていない、ただのガラクタの剣・・いや、玩具の剣だな。

「シェアア！！」

「・・・」

奴は剣を振るう。
だが、奴の剣撃は単調で読みやすい。
だが、避けてばかりでは駄目だな。
まずは。

「ぅううん！！」

魔力がこもった手刀で剣をあっさり砕き折った。

「！！？」

「隙だらけだ！」

至近距離からディバインバスターを放ち浴びせる。
食らわしたが、やっぱり再生してしまう。

「にっひっひっひ！！へ～ひゃひゃひゃ！！」

「気持ち悪い笑い声だしやがって！」

〔全くです！トラウマになったらどうするんですか！〕

さっさと塵にしてやる！俺はまた接近する。

「フッ！」

「ごぉっ！！」

「つぁらああ！！」

「ぬぎゅあああ！！！」

まず腹パン一発殴り、サマーソルトキックで上空に思いっきり蹴り飛ばした。
奴が蹴り飛ばしたのを確認したのち、俺は右腕を上げる。
右手に魔力と気が集まり、巨大な塊ができる。
それは、徐々に小さくなり野球ボール位のサイズになる。
それを掴む。

「今、楽にしてやる！イェヤッ！！」

それを奴にめがけて横投げで投げる！この技名はオメガノヴァ！ドラゴンボールZの劇場版の敵キャラ、ブロリーのオメガブラスターとクウラのスーパーノヴァを合体した技だ。
オメガノヴァは奴に当たる直前で巨大になり奴を飲み込み、宇宙へと飛んでいった。
それを見、俺は左手にかなり小さなエネルギー弾を作る。

「とっておきだ！・・さらばだ！！」

左手をかざし、エネルギー弾を放つ。
エネルギー弾はオメガノヴァに飲み込まれ、そして。

「ぎぃやあああぁぁぁ・・・ぁぁ・・ぁ・・！！！」

巨大な大爆発が起こり、空は光り輝く。
・・・光が消え、いつもの夜に戻る。

「バサラ。」

〔・・・魔力反応無し。完全に消滅しました〕

ふぅ・・・くたばったか。
多少てこずったな、やれやれ。
さて、あいつらの所に戻るか。
俺はなのは達がいる所に行く。
え～と、あそこか。

『『『リョウ（君）！』』』

「よ、仕留めたぜ。」

俺はなのは達の前にゆっくり着地する。
降りるとプレシアとシグナムとリインフォース以外のヴォルケンリッターを除いた人達は頬を赤らめている。
なんで？

〔マスター、大人モードのままですよ〕

「あ、そうか。」

俺はすぐに元の姿に戻った。
元の姿に戻ると、何故かシグナムとリインフォースは少し残念そうな表情をしていた。

「バグは？」

「完全に消滅した。」

「リョウの言う通りです。バグは完全に消えました。」

「それに、結界も消えました。」

「だな、修復は俺がしといたからな。」

リインフォースとシャマルはさすがにわかってるようだ。
俺はアリサとすずかの前に立ち、二人を見る。

「さてアリサ、すずか説明しようか。」

「そうよ。説明しなさいよ！なのはもフェイトもアリシアもはやても！」

「お、落ち着いてアリサちゃん。」

「まあまあ、これから説明するから、まずはこの力は・・ん？」

誰かが近付いてくる。
この魔力は・・・

「お話中の最中すまないが、僕は管理局執務官のクロ「おいＫＹ何しにきやがった。せっかく説明しようという時に。」・・ノっておい！貴様何口を挟んで「やかましい！さっさと用件を言いやがれ！」・・・わかったよ。君達をアースラに連れて行く。」

「だからてめえは何偉そうに言ってやがる！またぶっ飛ばされたいのか貴様！」

全くこのクソＫＹは、学習能力は無いんか。
またボコボコにしんといかんのか。

「す、すまない。悪かった僕達と一緒に来てほしい。」

「そういえばいいんだよ。」

ま、ちょうどよかったしな。

「どうするの？」

「・・・行くぞ。誤魔化しはきかんからな。どうせなら、あっちにいって話したほうがいい。他のみんなもいいな？」

みんな許可したようだ。
ならば行くか、アースラに。

第２５話　長い聖夜の戦い！（後書き）

白黒「第２５話完成！イレギュラーとの戦いは終わりました。」

家康「なんかあっさり倒されたな。」

白黒「そりゃあ、リョウは最強の主人公だからな。負けるのはまだまだ先だからな。」

テンテン「さすがはリョウ君だよ！」

セイバー「それでこそ、私達の夫です。」

白黒「ははは・・・さて、それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第２６話　長い聖夜の終わり！（前書き）

白黒「は～、自分ってやっぱり文才ないのかなぁ。」

テンテン「突然どうしたのよ？」

白黒「いや、他の作品とか読んでるとね、自分の作品ってなんかありきたりって奴なんだなって思ってきちゃってね。」

セイバー「まあ、貴方の才能なんてそんなもんです。」

白黒「うわあぁぁぁぁん！！（涙）」

家康「白黒殿！」

白黒「しょせん自分なんてえぇぇぇ！！（涙＋脱走）」

ライダー「やれやれ、第２６話始まります。」

第２６話　長い聖夜の終わり！

リョウＳＩＤＥ

奴との戦いが終わり、今はアースラの一室にみんな座っている。
正面には、リンディとＫＹそしてグレアムが座っている。
グレアムに対しては会わんと思っていたが、まさかここで会うとはな。

「・・・で？一体何を聞きたいんだ？それにそいつは誰だ？」

「き、貴様は！提督に向かってなんて言い草を！」

「よいのだクロノ。当然の事なのだから。」

「提督。」

「で、アンタ一体何者だ？」

知ってるがな。

「うむ、そうだね。私はギル・グレアムという。」

「あ、そう。」

「リョウ、貴方ね。」

いいじゃねえか。
どうでもいいんだからな。

「んで？何を聞きたいんだ？」

「そうね。まずは、そこにいる五人は一体何者なのかしら？それに、事のあらましを説明してくれない？」

「・・・わかった。その前にこの二人に俺達の事を説明しないとな。」

二人とはもちろん、アリサとすずかだ。

「わかったわ。それは私が説明するわ。」

リンディがアリサとすずかに俺達の事を説明した。
俺が言わなくて助かるわ。
面倒いからな。

「・・・というわけです。」

「リョウになのはにフェイト、アンタ達なんで言わなかったの！？」

「いえばなんかしてくれたか？」

「うぐっ・・・！」

それに余計な事が起こったら困る。
今回のようなな。

「でも、私達は親友だよ？」

「気持ちは嬉しいけどな。けど、力もない二人では、さすがに危険だからな。」

「それは・・・」

「そういう事だ。」

ちなみにこの世界はとらハの世界ではないからな。
ちゃんと調べたから間違ない。

「まあ、その事はまた次回にな。そんじゃあ事のあらましを説明するぞ。」

リンディとグレアムに説明する。
途中でＫＹが何か言ってきたが、思いっきり無視する。

「・・・という事だ。理解できたか？」

「理解できたわ。その人達が闇の書の騎士と本体だという事、そのバグを取り除いたらイレギュラーな存在が現れ取り込まれた事、そしてそのイレギュラーを貴方一人で倒した事をね。」

「そう言う事だ。それと一つ訂正がある。闇の書じゃない、夜天の魔導書だ。」

それと夜天の魔導書の本来の力を教える。

「だが、それをどうやって調べたのかしら？」

「それは、ユーノに調べてもらったからだ。」

「なっ！？彼から何にも聞いていない！」

そりゃそうだろ、お前ら管理局に教えてないし。

教えたら面倒ごとが起きるからな。

「なるほどね。あの宇宙に飛んでいったものはそのイレギュラーというわけね。」

「ああ。」

「闇の書いえ、夜天の書は解決ね。それで、貴方達はどうしたいの？」

俺は無いがな。

なのはとはやてはなんか言いたそうだな。

「「あの。」」

「なんですか？」

「私を管理局員にいれてください。」

「私もです。お願いします。」

やっぱりこうなるか。

〔いいの？〕

〔構わん。二人が決めた事だ。口出しはできん〕

なのはは知らないが、はやては罪滅ぼしだな。
全く自分関係ないのに、はやてが選んだという事はヴォルケンリッターも管理局に入る事を選んだ。

「貴方は入らないのかしら?」

「無い。管理局なんかには入らない。」

「「「「どうして?」」」」

「理由は単純、組織は信用していない。」

自ら正義の組織だと言ってる時点で信用に値しない。
大体自分達は神だと思い込んでいる奴等のモルモットになる気はないんだよ。

「だから管理局に入らない。」

「でも・・・」

「くどい。しつこすぎるとどうなるかわかるな?」

「・・・そうね。ごめんなさい。」

んなの一時的だろう。
今後も何回も勧誘してくるだろうな。
まあ、たとえそうだとしても、何度でも拒否してやるがな。

「この話はお終い。それじゃあ、少しいいかしら・・そのイレギュラーはどんな姿をしていたの？映像とか残してないかしら？」

「映像は取ってあるし、残してある。バサラ。」

〔了解〕

バサラから映像を見せる。
奴と二人の猫姉妹が写っている映像だ。

「こいつらだ。イレギュラーは真ん中の男だ。両隣りの二人の女は知らん。」

俺は知っているし。
こいつらも。

「この二人は！」

知っているからな。

「知っているの？」

「この二人は・・・」

「私の使い魔だ。」

「提督。」

この二匹の猫姉妹はグレアムの使い魔だからな。

なんでいるかは知ってるからな。

「なんで提督の使い魔が。」

「あの、この二人の名は？」

「髪が短いほうがリーゼロッテ。長いほうがリーゼアリア。」

なのはが二人の名を聞き、グレアムが答えた。

「使い魔が奴といたのは？」

「私も知らない。私はただ、ある人物を監視する為に二人を日本に、海鳴市に向かわせたのだ。」

「ある人物とは？誰なんですか？」

「・・八神、はやてちゃんですね。」

リンディが聞くが、プレシアが解答した。

多分、気付いたのは俺とプレシアだけだ。

「な！？どういう事なんですか！？」

「リョウなら分かるわよね。」

俺に聞くか、プレシア。

「リョウ君、知っとったの？」

「知ったのは偶然だ。たまたまハッキングしたのと、ユーノのおか

げでな。」

どうやって知ったのか詳しく教える。
原作でも知っていたが、ハッキングをし夜天の書を調べ、グレアムの事も調べ、さらにグレアムが何をし、考えてたのか教えた。

「アンタが私に援助金をくれたおじさんやったんや。」

「・・そうだよ。」

「なんで主に？」

「短い人生に多少の幸せをやりたかったからさ。」

『『『な！？』』』

「こいつははやてを夜天の書ごと封印する為、辛いままの人生より少しでも幸せの人生を与えてやったんだ。最低な屑のやり方をな。」

こいつは本当に屑だよ。
はやてに幸せを与え、封印する時に絶望を与える・・・人をゴミのような扱いをする管理局らしい思考だ。

「貴様～！絶対に許さん！」

「コイツでぶっつぶしてやる！」

「やめるんや二人とも！」

「しかしはやて！」

「もうすぎた事や。」

「それに、すでに失敗してるだろうが。そうだろ？」

「「確かに。」」

俺のおかげですでに破条、無駄になった作戦だ。

「そうだな。すでに失敗している。私の甘さが。」

「甘いじゃないだろ。貴様の場合は屑で弱くカスな考えがだろ。」

「何？」

なんでだって顔をしてやがる。

やっぱりゴミの考えだな。

「てめえには教えん。教えたとしても理解できるとは考えられん。貴様のグズの思考ではな。」

「貴様～！」

ＫＹが文句を言ってくるが無視、グレアムは俺を見るがこれも無視した。

どうでもいいが早く終わらないかな、帰りたいんだが。

「それでこの二人はどうなったの？」

「奴に魔力弾を撃たれて消滅した。」

リンディが質問してきたが、あっさり答えてやった。

「そう。提督は知っていましたね。」

「ああ。突然リンクが消えたのでおかしいと思っていたのだ。まさか、消滅していたとは。」

ふん、自業自得だ。

「なあ、もういいか？俺は帰りたいんだが。」

「そうね。話はもうお終い。帰っていいわ。」

やっとか、これ以上ここにいたくない。

「あの。」

「何かしらなのはさん。」

「えと、両親に今までの事を話したいんですが。」

「なるほど、わかりました。一緒に行きましょう。私がいればスムーズに進むでしょう。」

俺達は翠屋に行く事になった。

あ、その前にはやてを病院に戻らないとな。

病院に戻り、とりあえず石田先生に誤魔化しなんとか事なきを得た。

なのはＳＩＤＥ

アースラから戻り、家に帰ってきたの。
玄関には家族総出で待っていたの。
リンディさんが私の前に立って、事のあらましを説明しようとしたの。
お父さんとお母さんが全員を家のリビングに連れて行く。
リンディさんが改めて説明した。
お兄ちゃんは怒り、お姉ちゃんは驚き私に文句言ってきた。
お父さんとお母さんはどうしてなのか詳しく聞く。

「なあなのは、帰っていいか？」

「ふえ、だ駄目だよリョウ君。勝手に帰っちゃ。」

リョウ君駄目だよ。
まだ話の途中だよ。

「なのは。」

「は、はい。」

お父さんに呼ばれた。
何かな？

「なのははその管理局に入るんだな。」

「あ、うん。」

いつの間にか話が終わっていたの。
私は答えたの。

「そうか、ならば何も言わん。なのはの好きにやらせるさ。」

「そういう事よ。なのは。」

「あ・・うん！ありがとうお父さん！お母さん！」

私は、嬉しかったの。
この魔法の力で私はフェイトちゃん達と出会えた。
それに、リョウ君とも親密になったの。
これからも私はこの魔法の力で、みんなと楽しくできたらいいと思うの。

リョウＳＩＤＥ

なのはの両親達の会話も終わり、今度は俺の両親つまりナルトとヒナタに事の顛末を話す事になった。
まあ、それはかなり早くすんだ。
知っていたからな。
その後、リンディはアースラへと帰還した。
俺達もみんな家に帰り、俺はビルの屋上に立つ。
しばらく、雪が降り夜空を眺める。

「リョウ。」

「ん？」

振り向くとリインフォースがいた。

「なんだ？どうしてここにいる。はやては？」

「主は騎士達が見てくれている。心配ない。」

「そうか。」

まあ、そうだろうな。

「リョウ・・／／／」

「なんだ？」

リインフォースの奴、どうしたんだ？頬が赤いぞ。

それに少しモジモジとしてなんだ？

「その・・お前には礼を言ってなかったな。あ、ありがとう。／／／」

「気にするな。俺が好きでやった事だし、何よりお前が不名誉な名で呼ばれていたのが少し腹正しかったからな。」

「そ、そうか。／／／」

何が言いたいんだ?こいつは。

「話は終わりか?」

「いや、まだ話がある。」

「?」

「リョウ、お前にどうしても伝えたい事がある。///」

なんだ?っていうかもうわかったよ。

もうなんでこうなるんだよ。

「私はお前の事が好きだ。///」

やっぱりか、もういいわかっていたから。

「ほぉ、まさか貴様もだったとはな。」

「は?」

「何!?」

後ろを振り向くとシグナムがいた。

は?お前いつの間にいたんだ?全然気付かなかったぞ。

「烈火の将シグナム、貴様もという事はまさか。」

「フッ、そういう事だ。」

「そうか・・言っとくが私は負けんぞ！」

「フッ、望むところだ！」

おいおい何二人だけしかわからない話をしてんだよ。
こっちにも分かる説明をしてくれ。

「リョウ！」

「はい！」

は、シグナムが叫ぶからこっちも叫んでしまった。

「一度しか言わないからよく聞け！」

「あ、ああわかった。」

なんかわかってきた。

「私はお前の事が好きだ！／／／」

やっぱりか～！もう勘弁してくれ。
なんでこうなるんだ！

〔さすがはマスターですね。ハーレム要員は増える一方ですね〕

だまらっしゃい！俺はそんなの求めていない！なのに、なのに。

「なんでこうなっちまうんだ～～！」

リインフォースとシグナムの告白が終わって次の日、何故かそのことが伝わってしまいなのは達に追いかけられた。
な～ぜ～だ～！・・・と、とりあえずA'ｓ編はこれにてお終い！

第２６話　長い聖夜の終わり！（後書き）

白黒「第２６話完成！Ａ'ｓ編終了だ！」

セイバー「前書きで苛めすぎましたか。」

家康「して白黒殿、次はどんな話を？」

白黒「決めてません。ただいま考え中です。」

テンテン「さっさと決めてよね！」

白黒「はい。それでは皆さん。」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第27話　ゆったりした一年！（前書き）

白黒「最近書くのが疲れてきた。」

家康「おいおい。」

白黒「だから、いつか休憩しよう。」

テンテン「第27話始まります。」

第27話　ゆったりした一年！

リョウＳＩＤＥ

闇の書事件（？）から四か月がたち、四月・・・俺やなのは達は四年生になった。
俺達は変わらない友人関係を保ちながら進級した。
まあ、かなり変わった事も起こった。
まず一つ、アリサとすずかを鍛える事になった。
事の始まりは三か月前、つまり、一月に遡る

三学期が始まり、いつものようになのは達と帰り、はやての家に立ち寄った。
いつものメンバーがゲームをし、遊んでた時アリサとすずかが俺にこうきりだした。

「「リョウ（君）」」

「ん？なんだ？」

「「私達に魔法を教えて！」」

突然のお願いに俺は呆然とし、なのはとフェイトとアリシアとはやてとヴィータはアリサとすずかを凝視し、お茶を飲んでいた残りの人達は噴き出した。
・・・とりあえず、理由を聞かないとな。

「何故なんだ？」

「アンタ達が魔法を使えるのに、私達が使えないなんて不公平じゃない！だから教えなさいよ！」

「アリサちゃん。私はリョウ君のお手伝いをしたいから。／／／」

なるほどな。

「だ、駄目だよ！危ないよ！」

「なのはの言う通りだよ。この前も危険な目にあったのに！」

「そうやで。自分から危険の中に飛び込むなんてしたらあかん！」

なのはとフェイトとはやてが二人を説得を試みる。

だが、アリシアだけは違った。

「本当にそれでいいの？」

「お姉ちゃん？何を言っているの？」

「フェイトは黙って、あたしは二人に聞いているの。どうなの？」

「・・・どういう事？」

「そのまんまの意味だよ。魔法を学ぶという事は命の危険があったりするんだよ。それでもいいの？」

アリシアの奴、何を考えてるんだ？

「わ、私は・・・それでも魔法を学ぶわ。危険が何？上等よ！そんなの怖くないわ！」

「私も学ぶよ。確かに命がかかわるのは怖いけどでも、リョウ君だってそんな世界にいるんでしょ。だったら私は全然怖くない！」

おいおい、これはなんて意志の強さだ。

「という事でリョウ君、二人の意志は堅いよ。どうする？」

「どうするって二人とも、本当にいいんだな？」

「「うん！」」

ふぅ、しょうがないな。

「わかった。そこまでいうなら鍛えてやる。」

「「本当！？」」

「本当だ。ただし俺は厳しいぞ。」

「「やった～！」」

「リョウ君いいの！？」

はっきり言ってしまえばよくない。

けど、二人が決めた事を無下にはできん。

「二人が決めた事だ。それに、鍛えるからにはかなりの実力をつけるさ。」

そんなわけで俺はアリサとすずかを鍛える事になった。
二人にはリンカーコアが無い為、代わりにネギまの魔法を覚えさせる事にした。
やり方は初心者用の杖を渡し練習させる。
なのは達も覚えたがっていたがすでにミッドチルダ式の魔法がある為必要無いと答えた。
とりあえず分かった事はアリサは火と雷、すずかは風と雷だった。
しかも僅か一ヶ月で上級魔法まで使えるようになりやがった。
全くとんでもない才能だよ。
この世界いや、原作キャラは才能の塊か。
その後、二人には杖ではなく魔法媒体用の指輪をプレゼントした。
これなら杖の代わりになる。
それを渡した時二人は頬を赤く染め、なのは達には襲われるしで大変だった。
次に鍛えたのは体術だ。
魔法使いは遠距離が得意で近距離は苦手だ。
だから、二人に体術や武器を使った戦術を教えてやった、つうかただいまそれの修業中である。
アリサは長刀を使った剣術を使うようになった。
つうかこれってまんまシャナである。
中の人ネタか？何故。
すずかは近距離戦が得意ではなく、護身術とナイフやダガーを使った戦術が使える。
二人を鍛える事になり、なのは達も鍛えるようになった。
フェイトとアリシアは少し俺が鍛えた為、あんまり教える事はない。

なのはは魔法だけしか教えてないので体術を教える。
はやては基本から応用を教える事になった。
なのははっきり言って体力がない。
だから体力作りから始めた。
そのおかげで大分体力がついた。
はやては足が完全に治るまで魔法の基礎を覚えさせそのあと応用を教える。
一ヶ月後には足は完治し歩けるようになった。
その後はなのはと同じく体力作りを始めはやてはなのはより体力がついた。
みんな原作よりかなり強くなっていった。
やり過ぎたかな？まあいいか。
次に二つ目は、はやてが俺達の学校に入学した。
学校に入学できたのは俺がいろいろやったからだ。
フェイトとアリシアを学校に入学さした時と同じ方法でだ。
頼んだのははやて本人でヴォルケンリッター達にも頼まれた。
元々入学させる気マンマンだった為、頑張って入学させた。

「それにしても、まさかはやてもこの学校に入学してくるなんて。」

「あはは、確かに。」

「みんなと一緒に居られるのもリョウ君のおかげや。」

ちなみに、はやても俺と同じクラスである。

「私達もリョウ君のおかげで入れたんだよ。ね、フェイト！」

「う、うん。」

そういえばそうだったな。
それにしても。

「さっきから視線が気になるんだが。」

なんか嫉妬のような視線を感じる。
転生者のような奴等の気配は一切無いが一体なんだ?

「リョウ君は知らんの?」

「何が?」

「他の人達から聞いた話なんやけどな。私等の事を美少女6（シックス）って呼ばれてんねん。」

なんだよその美少女6って、めっちゃ安直なネーミングだな。

「美少女6なんて。／／／」

「にゃはは、恥ずかしいよ。／／／」

「はぅ〜。／／／」

「リョウ君、あたしも美少女なんだ。／／／」

「ま、まあ悪い気分じゃないわね。／／／」

なのは達は頬を赤く染め、嬉しそうに笑っている。
それを見て、周りの男子供の視線がまた強くなる。

「んで、リョウ君はその美少女６を守る騎士なんや。／／／」
騎士！？騎士って何なんだよ！また視線が強くなったよ。
しかも嫉妬から殺気に変わったよ。
「リョウ君私達の騎士なんだ。／／／」
「リョウ。／／／」
「さすがはリョウ君、あたし達の騎士だね。／／／」
「ふ、ふん。まぁ及打点ってとこかしら。／／／」
「騎士・・私達の騎士。／／／」
勘弁してくれ。
頬を赤くするのやめてくれ。
俺のライフは０だよ。
殺気と視線がどんどん強くなるよ。
言い忘れていたが、ただいま昼休みだ。
その為、屋上でご飯を食べている。
昼休みが終わり、いつものように授業をし、いつものように家に帰る。
これが、今の学校の風景になっていった。

夏休みになった。
え？早くないかって？何にも面白い事はなかったからな。
仕方ない。
夏休みになり、俺達はアリサの別荘のビーチに行く事になった。

俺とナルトとヒナタと高町一家とテスサロッサ一家と八神一家とバニングス一家と月村一家が同行した。
ビーチに着き、みんな水着に着替え泳ぎに直行。

「リョウ君！泳ごう！」

「はいはい。」

そう言いなのは達と泳いだりした。
他にも祭りに行き。

「リョウ、アレとって！」
「わかった。」

フェイトに頼まれ、射的屋でいろんな物を取ったり。

「リョウ君、金魚すくいやろう！」

「へいへい。」

アリシアと一緒に金魚すくいをした。
一緒に宿題をしたりした。

秋をすぎ、冬休みになった。
ん？まただって。
気にするな。
ただ運動会は大変だったとだけ伝えておこう。
それだけだ。
冬休みになり、俺達は月村一家所有の雪山に行き、スキーを楽しん

だ。
ペンションもあり、なかなかよかったな。

「リョウ君、どっちが先に滑り降りるか競争しよう。」

「いいだろう。」

すずかとスキー勝負した。
もちろん、俺の勝ちだが。

「リョウ！私とも勝負しなさい！」

「は～、わかったよ。」

アリサとも勝負した。
スキーだけでなく、雪合戦もした。
つうか、いくらなんでも魔法を使うなよな。
危ねえよ。
まあ、勝ったがな。
元旦にはみんなで神社に行き、占うも見た。
俺はあんまり興味がなかったのだが、仕方なくやった。
結果は、ふむ・・・中吉か。
まぁ普通の結果だな。
その後、みんなとお節料理も食べた。

「リョウ君、これ私が作ったんやけどどうかな？」

「どれ。・・・うん、上手い。美味しいよはやて。」

「ほんま！めっちゃ嬉しいわ。」

はやての作った料理を褒めたりした。
そのおかげで他の奴等の分も食うハメになったがな。
他にもシグナムと模擬戦したり、リインフォースと一緒に料理したりとにかく大変だった。
あ、そうそう言い忘れていた。
実は『ティアナ・ランスター』と『ディーダ・ランスター』にすでに出会った。
出会ったの本当に偶然だった。

それは夏休みのある日、俺はユーノに誘われ無限図書館に行った。
初めての無限図書館に来た為、いろんなところを周った。
周っていた時、端のイスですすり泣いている小さな女の子を見つけた
髪の色はオレンジ、誰も助けないので俺が声をかけた。

「お嬢ちゃん、どうしたの？何故泣いているの？」

「ひっくひっく・・・おにいちゃんとはぐれちゃったの。うえ～ん。」

「そうなのかい。もしよかったら一緒に探しに行こう。俺も一緒に探すよ。」

「ほんとう？ひっく・・いっしょにさがしてくれるの？ひっく。」

「本当だよ。だから泣きやんで？ほらティッシュ。」

「うん。」

女の子は涙をティッシュで拭く。

「そういえば名前を聞いてなかったね。君のお兄さんの名前は？」

「・・ディーダ・ランスター。」

ディーダ・ランスター？あれ？まさかこの娘は。

「ちょっと悪いんだけどお嬢ちゃんの名前は？」

「ティアナ・ランスター。」

やっぱりか。

まさかここでＳｔｒｉｋｅｒＳの重要キャラと会うとはな。

「どうしたの？おにいちゃん。」

「え？ううん、なんでもないよ。それと俺の名前は創神リョウ。リョウと読んでくれ。」

「わかった。リョウおにいちゃん。」

「それじゃあ、君のお兄さんを探しに行こうか。」

「うん。」

ティアナは泣き顔をやめ、笑顔を見せてくれた。

やっぱり子供の笑顔はいいな。

そしてティアナと手をつないで一緒にディーダを探す。

いろいろと見て周り、数分後ディーダを見つけた。

「ティアナ！」

「おにいちゃん！」

二人は駆け寄り、ディーダはティアナを抱き締める。

「心配したんだぞ。急にどっかに行くから。」

「ごめんなさいおにいちゃん！」

どうやらティアナが勝手に移動した為、迷子になったようだ。
なるほどな、小さな子がよくおちいる迷子のパターンか。

「君がティアナを、ありがとう。」

「いえ、ただ見過ごせなかったので。」

「それでもティアナの事を感謝している。ありがとう。」

ふぅ、まいいか。
さて。

「そろそろ行きますね。」

「ああ、そうだねすまない。あ、そういえば君の名前を聞いてなかった。君の名前は？」

「創神リョウ。じゃあねティアナちゃん。」

「うん！じゃあねリョウおにいちゃん！」
俺は手をふりながら二人から去った。

ティアナＳＩＤＥ

あのおにいちゃん、リョウおにいちゃんはないてたわたしのためにおにいちゃんをさがしてくれた。
ないてたわたしをやさしくつつんでてをにぎっていっしょにさがしてくれた。
もんくなんかいわないで。
わたしがかってにはしりまわってたんけんしておにいちゃんとはぐれてしまった。
そんなわたしを。
おにいちゃんがみつかり、リョウおにいちゃんはかえった。

「彼、とてもいい人だったねティアナ。」

「うん。」

わたしとおにいちゃんはリョウおにいちゃんがかえったほうこうをみつめていた。

「おにいちゃん。リョウおにいちゃんにまたあえるかな？」

「会えるさ。いつかまたな。」

「うん！」

リョウＳＩＤＥ

ランスター兄妹と出会い再開フラグも建てた。
次の再開が楽しみだ。
それと、あんまり喋りたくないし忘れていたかったがなのは達は管理局に正式に局員になった。
ただ、ただの局員ではなくプレシア直属の局員になった。
俺はプレシアに感謝した。
まぁ、一応リンディ提督との繋がりもある為、リンディの命令で動く事もあるようだ。
あの女なら腐った任務をやらすわけがないからまあいいだろう。
ただ、それが原因でいまだに俺を勧誘してくる。
しかもなのは達も言ってくるから始末に終えない。
なんとか説得し、プレシアに頼んだりしたりして三学期には勧誘はこなくなった。
そんな感じでこの一年を過ごした。
そして四月、この年は二つの大きな事件が起こる。

第２７話　ゆったりした一年！（後書き）

白黒「第２７話完成！こっからはＳｔｒｉｋｅｒＳまでの空白間の話を書きます。」

セイバー「どういう話を？」

白黒「ネタバレになるので内緒。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第２８話　墜落！潜入！（前書き）

白黒「遂になのはにあのフラグが！」

セイバー「あのフラグ？何ですか？」

白黒「それは本編で。それでは始めてくれ。」

テンテン「第２８話始まります！」

第２８話　墜落！潜入！

リョウＳＩＤＥ

五年生になり、約一ヶ月がたちある日なのはとヴィータが任務に赴く事になった。
しかし、なのはの様子がおかしい。
原作を知っている俺は気付いた。
俺以外の全員も気付いたようだ。
フェイトやはやて達が心配して話しかけるが、大丈夫だと言って聞かない。
その為、フェイトに言われ今度は俺が話しかけた。

「なのは。」

「なにリョウ君？」

「体大丈夫か？」

「何の事かな？」

「俺の目は誤魔化せんぞ。心配なんだよ俺は俺達は。」

「ありがとうリョウ君。でも大丈夫だよ。心配性だな。全然元気だよ。」

「そうか。」

これはテコでも動かないな。
これは、少し厳しいようだが痛い目にあってもらうしかないな。

「わかった。任務気をつけて頑張れよ。」

「うん！」

俺はフェイトのいるところに戻り報告した。
そんな時。

「む、分身体から・・・そうか今日か、ゼストの部隊が『スカリエッティ』の研究所に潜入するのは。」

まさか今日だったとはな。
『ゼスト・グランガイツ』、『クイントナカジマ』、『メガーヌ・アルピーノ』が主力のゼスト隊がスカリエッティの研究所に潜入し抹殺され、ゼストは人造魔導師として蘇生させられる。
それが今日か。

〔どうします？マスター〕

「・・こうやるまでだ。」

俺はある考えが浮かんだ。
その考えは・・・

なのはＳＩＤＥ

今日の任務はヴィータちゃんと一緒にとある世界の調査なの。
その世界は雪が降る真っ白の世界なの。
吹雪が降り注いで視界が見えづらいなの。

「うう～、寒いの。バリアジャケットに暖房機能がなかったら凍えて動けなかったなの。」

「確かに寒いな。早く終わらせるか。」

「うん！」

私とヴィータちゃんはこの辺りを調査する。
う～ん、やっぱり視界が悪くてよく見えないの。
もう少し見て周ろうとすると。

〔マスター！この近くに反応が！〕

「え？」

レイジングハートが何かを見つけたようなの。

「何？人？」

〔いえ、これは・・・未確認体アンノウンです！〕

「！？」

アンノウン!?視界が少し見えるようになってきたの。
私の周りに機械かな?足が沢山ある未知の存在が沢山いて囲んでいるの。

「なのは!」

「ヴィータちゃん!」

「なんだこいつらは!?」

「わからないの。でも、見たところ機械のようだね。」

「だな、こんな奴等ちゃっちゃと片付けるぞ!」

「うん!」

私とヴィータちゃんはデバイスを構えるの。
敵は迫ってきたの。
私とヴィータちゃんは敵を倒していくの。
でも、数が多いの!このままじゃ。
だったら広域魔法で一気に!

「レイジ・・!??」

うっ!・・何?・・体が・・・急に痛みだし。

「!!?ぐっ!・・」

がはっ!・・な、何?・・・何かが・・お腹を、貫い・・・たの。
一体何が・・・アレ?・・私、落ちているの。

「なのはぁぁぁ！！」

ヴィータちゃん。
私は・・地面に落ち・・・たの。
地面が・・雪だ・・から衝・・・撃が少・・なかった・・・の。
あ、敵・・が・・・迫って・・・・・きたの。

「なのはぁぁぁ！！」

ヴィータＳＩＤＥ

なのはが落ちた！
あのなのはが！
あたしのせいだ！
あたしが真っ先に気付いていれば、なのはが落ちる事はなかった！

「なのはぁぁぁ！！」

あたしは急いでなのはを助けに行こうとすると、敵があたしの前に立ち邪魔をしてくる。

「おまえらどけぇぇぇ！！」

あたしは敵をグラーフアイゼンでたたきつぶしていってるが、敵がなのはの方に向かってきている！

クソッ！間に合わねえ！

「なのは！！」

その時、なのはに迫ってきた敵が真っ二つにされ、爆発した。
一体誰が？上空から一人なのはの前に降りてきた。
あ、あいつは。

「リョウ！？」

「よ、ヴィータ。」

「どうしてお前が？」

「なのはが気になってな。来て見れば案の定だったよ。」

「・・すまねえ、あたしがしっかりしていれば、気付いていれば。」

「お前だけのせいじゃねえよ。俺やフェイト、はやて達も気付いていた。なのに止められなかった俺達にも責任がある。だが、今はそんな事を言ってる場合じゃない。さっさとこいつらを片付けるぞ！」

「あ、ああ！」

あたしとリョウは敵を倒していき、数分後全滅させた。
そして、なのはをアースラに急いで帰還させて治療室に連れて行った。
とりあえずなのはは一命を取り留めた。
リョウに礼をしたら、自分は分身体だと言い、本体がきてから礼を言いなといいリョウの分身体は消えた。

クイントＳＩＤＥ

私はクイントナカジマ、地上管理局の管理員。
そして、ゼスト隊の一員。
今、私達は絶対絶命のピンチだ。
とある研究所に潜入し、二手に別れて調べていたら見た事もない機械に襲われた。
私とメガーヌ以外は全滅、隊長の方はどうなんだろう。
今、私はメガーヌと背中合わせにして囲まれている。

「メガーヌ大丈夫？」

「一応ね。でも、これはまずいわね。」

「どうする？」

〔クイント！メガーヌ！〕

〔〔隊長！〕〕

隊長から念話がきた。

〔二人共無事か？〕

〔はい！今のところは、ですが私とメガーヌ以外は全滅してしまい

ました。隊長は？」

〔こっちも俺以外は全滅だ〕

そんな！？隊長以外全滅なんて。

〔お前達、退却できるか？〕

〔無理です。囲まれてます。隊長は？〕

〔俺も無理だ。だが、俺達はこんなところで殺されるわけにはいかん！何としても生き残れ！いいな！〕

〔〔了解！〕〕

隊長に生き残れと言われたけど、これは。

「メガーヌ、貴女だけでも逃げるのよ！ここは私が囮になるわ。その間に！」

「何言ってるの！？ここは私がやるわ！」

「いけないわ。メガーヌ、貴女には生まれたばかりの赤ちゃんがいるのよ。その子を独りぼっちにする気？」

「そういうクイント、貴女だって旦那様と娘二人をおいて死ぬ気？」

確かに私は夫と娘二人が、メガーヌは生まれたばかりの赤ちゃんが、家族がいる。

私はまだいいわ。

夫がいるし娘二人もしっかりしてるから。
でもメガーヌ、貴女は違うわ。
生まれたばかりの赤ちゃんを独りぼっちにしてはいけないわ。
だから。

「メガーヌ、貴女は絶対に生きなきゃならないわ！」

私はデバイスを構える。
敵が迫ってきた。
私は向かえうつ！

「くる！」

その時！
ガガガガガンッ！
何かが敵を撃ち抜き破壊した。
一体誰が？

「クイント。」

「ええ、一体誰が。」

すると、後ろの奥の通路からカツンッカツンッと足音が聞こえてきた。
そこから現れたのは、ピンク色のボディにバーコードのようなものが顔についてある仮面をつけた人間がこっちにゆっくり歩いてきた。

「何、あいつは？」

「貴方は一体何者なの？」

メガーヌが彼（？）に聞く。
というか喋るのかしら？

「・・・通りすがりの仮面ライダーだ。」

喋った！？というか仮面ライダーって一体何？

［アタックライド、ブラスト！］

右手に持ったカードみたいなものを腰にあるバックルに差し込んだ。
すると左手に持った銃で連射し正面の敵全部を撃ち抜き破壊した。
私とメガーヌは正面の敵をあっさり倒した仮面ライダーとやらに驚いた。

「早くこっちに来い。邪魔だ。」

「・・はっ、メガーヌ行くわよ！」

「え、ええ！」

私とメガーヌは仮面ライダーのところに移動した。
だが、その背後に敵が迫ってきた。
けど、仮面ライダーが私とメガーヌの後ろに周り手に持った銃が剣に変わり迫ってきた敵を切り裂いていった。

「大丈夫か？」

「え、ええ。」

「大丈夫よ。」

「そうか、下がっていろ。」

そう言い、仮面ライダーは敵に突撃する。
敵も応戦しようと構えるが、仮面ライダーのほうが早く敵を剣で切り裂き倒していった。
仮面ライダーはこっちまでバック回転で戻ってきた。

「かなり減ったな。なら、これで決める。」

仮面ライダーはカードを一枚取り出しバックルに差し込む。

「ファイナルアタックライド、ディディディディケイド！」

音声が聞こえ、仮面ライダーの前に三枚の大きなカードが現れた。
仮面ライダーは手に持った剣を銃に変え、それに向ける。
そして。

「フッ！！」

銃からビームみたいなものが発射されカード一枚を通る度にビームが太くなっていった。
三枚を通った時にはかなりの太いビーム砲となり敵を飲み込み爆燦していった。

「凄い。」

「ええ。あれだけの敵をたった一人で。」

仮面ライダーは警戒を緩める事なく正面を見据えていた。
？どうして？敵はやっつけたでしょ。

「隠れてないで出てこい。ばれてるんだよ。」

メガーヌＳＩＤＥ

何を見ているのかしら。
仮面ライダーは炎と煙が消え、通路の右の曲がり角を見つめる。

「気付いていたか。」

右の曲がり角から長身で短髪の女性が出てきた。
な！？全然気付かなかった。
クイントも同じようだ。
「どうやって気付いた。」

「そんなの知ってどうする。」

「確かにな。悪いが貴様らを殺らせてもらう。」

長身の女性がそう言うと殺気を出してきた。

「・・こい。」

「・・・ＩＳ［ライドインパルス］！！」

女性は消えた!?いや、高速で移動しているの!
それよりもあの女性、今ＩＳって言っていたわよね。

「クイント!」

「わかっているわ。もしかしてあの女性、戦闘機人!」

戦闘機人・・・魔導師の血液や遺伝子と機械を合わせて人型戦闘兵器を造る違法の技術。
やっぱりここに、違法を犯した犯罪者が。

「早いな。ならこいつだ。」

[カメンライド、クウガ!]

仮面ライダーがカードをバックルに差し込む。

「!?姿が変わった?」

「変身魔法?違う、これは一体?」

「さらに。」

[フォームライド、クウガ!ペガサス!]

またカードをバックルに差し込む。

「アーマーの色が変わった!?」

「緑？」

姿が変わり肩やアーマーが緑色になった。
しかも、手にもった銃がボウガンのような銃になった。

「姿を変えたらからといってもこの動きには捕らえきれん！」

「・・・」

仮面ライダーは微動だにしない。

「・・そこだ！！」

「グハッ！」

仮面ライダーは左斜め上に銃を向け発射した。
なんと、敵にヒットした。
一体どうして？

「ばかな。何故私の動きが・・まぐれか！」

「悪いが動きは読めていた。」

「ま、まさか。」

「そんな事はどうでもいい。そろそろ終わらせる。こいつでな。」

［カメンライド、ファイズ！］

ま、また変わるの！？

今度はメカニックなデザインになった。

「十秒で終わらせる。」

［フォームライド、ファイズ！アクセル！］

これを変化した。

胸元が開きより機械的になった。

「いくぞ！」

［スタートアップ！］

音声が聞こえたと同時に仮面ライダーが消えた！？

「何！？グッ！」

え？何？なんで女性が浮いているの？

よく見てみると、何かが通っている影が見える。

これは、高速移動している！？

しかもなんてスピードなの、私が知ってる高速移動用魔法より早いわ！

「うおおおお！！」

敵は食らい続ける。

［三、二、一、タイムアウト！］

音声の終わりとともに仮面ライダーが敵の近くに現れ、ボロボロに

なった敵が落ち倒れた。

「安心しろ。かなり手加減しといた。」

アレで手加減!?
もし本気ならどれだけの強さが。

「さて、そこまでボロボロにした俺が言うのもなんだが、さっそくで悪いが一緒にきてもらおうか。」

「ぐっ・・断る。」

「悪いが、お前の意見は聞いてない。もし抵抗するなら、このまま無理矢理連れて行く。」

「くそ・・」

向こうはなんか決まったようだ。
私とクイントはどうしようかしら。
できれば隊長のところに行きたいけど。

「そこの二人も一緒にくるか?」

「「え?」」

「二人の隊長のところに行くんだが。」

「どうして隊長の事を?」

クイントの言う通りよ。

なんで知っているの？

「あっちに着いたら教えてやる。どうする？」

「・・・行くわ。」

「そうね。お願い。」

私とクイントは仮面ライダーと捕らえられた戦闘機人の後をついて行く。

ゼストＳＩＤＥ

俺は友の様子がおかしい事に気が付き任務をきりあげ友には内緒で遂行している。
しかし、途中で敵と遭遇。
部下は全滅し俺一人でなんとか生き延びたが、新たな敵、戦闘機人と戦い負傷しかなりの深手をおった。
俺も敵に多少の傷を負わせ左目に傷を作った。

「大した腕だが、これで終わりだ。」

ぐっ・・くそっ！俺はここまでなのか。
それに、もしかしたら友はこれを知っていたのかもしれないのだ。
それすら聞けないとは。
敵は手に持ったダガーでとどめをさそうとする。

バシュンッバシュンッバシュンッ！

「？！」

な、なんだ！？何かの発射音が聞こえたと思ったら戦闘機人の後ろにいた兵器がそれに当たり爆発した。

一体誰が？

コツッコツッコツッ！

右の通路の奥から誰かが近付いてくる。

そこから現れたのは。

「少年だと！？」

「誰だ貴様は！」

戦闘機人がそう聞くと少年はこう言った。

「通りすがりの魔導師だ。」

と。

第２８話　墜落！潜入！（後書き）

白黒「第２８話完成！なのはの墜落フラグしました。」

ライダー「これは決まってた事なんですか？」

白黒「もちろん、これは外せない。」

家康「それに、ゼスト隊の事はどうなるんだ？」

白黒「それは次回にそれでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第２９話　スカリエッティ味方化！（前書き）

白黒「頑張ってやっとここまできました。」

セイバー「なんか話す事はないのか？」

白黒「ない！というわけで第２９話始まるぜ！」

第２９話　スカリエッティ味方化！

リョウＳＩＤＥ

「通りすがりの魔導師だと！？」

俺と同じ位の身長の戦闘機人の女の子『チンク』が警戒して構えている。

まあ、仕方ないがな。

「あんまり手荒な事はしたくないんだが、おとなしくしてくれないかな？」

「ふざけるなよ。貴様が何者か知らんが貴様も始末してやる！」

そう言うとダガーを投擲してきた。

俺は障壁を張る。

「甘いな。ＩＳ［ランブルデトネイター］！！」

ダガーが爆発した。

これがＩＳランブルデトネイターか。

さすがにやるな。

だが。

「んなっ！！？」

「なん・・だと!?」

「俺には通用しない。」

俺の障壁は破れない。

「クッ・・おのれ!」

チンクは新たなダガーを持ち構えるが、俺は一瞬で懐に入り。

「グフッ!」

腹に拳をたたみこむ。

チンクは腹を押さえうずくまる。

さらにバインドを使い動けなくした。

「さて、大丈夫か?」

俺はゼストに近付き、声をかける。

「あ、ああ。なんとかな。ところで君は。」

「それはあとで話す。その前に。」

俺はポケットから仙豆を一個取り出す。

「これを食え。」

「・・・なんだこれは?」

「食えばわかる。」

仙豆をゼストに食わす。

仙豆を食べ、ゼストの体の傷が治り回復していく。

「こ、これは！傷が回復していく！」

よし、ゼストの回復は完了したな。

あとは・・・ん！きたな。

「「隊長！」」

「クイント！メガーヌ！」

通路から分身体が変身した仮面ライダーディケイドとクイントとメガーヌと捕らえられた『トーレ』がきた。

「お前達、無事だったか。」

「はい。彼に助けてもらいました。」

「彼？」

「仮面ライダーです。」

「仮面ライダー？」

ゼストはクイントとメガーヌと再開を喜び合う。

「隊長もご無事だったんですね。」

「ああ、この少年に助けてもらった。」

「この子は？」

「そういえば、君の名前は？」

ああ、忘れていたな。

「そういえば言ってなかったな。俺の名は創神リョウ。リョウと読んでくれ。」

「そうか。リョウ、礼を言おう。」

「気にするな。」

俺はゼストに礼を言われた。
俺はディケイドとトーレに近付きトーレにはバインドをした。

「グッ！貴様！」

「外そうとしてもムダだ。そいつは俺特注のバインドだ。簡単には外せん。」

「クソッ！」

トーレは悔しそうに俺を睨む。
今にも射殺しそうな目だ。
俺には通用しないがな。

「さて、さっそくで悪いが連れてってくれないかな？」

「どこにだ。」

「ドクター『スカリエッティ』のところへだ。」

「何！？」

トーレは驚いた表情で俺を見た。
まあそうだろうな。
いきなり連れて行ってほしいと言うのだ。
しかも、産みの親のところの居る場所にだ。

「断る！誰が連れて行くか！大体何故貴様がドクターを知っている！」

「それは秘密で。」

やっぱり連れてってくれないか。
後ろを振り向くとチンクも鋭い目線で睨み付けている。
本当にどうしよっか。
痛い目に合わせて無理矢理・・・はさすがにダメだな。
今後の事を考えるとそれはマズい。
本当にどうしようか。

「どうしてもダメなのか？」

「くどい！いくらいわれようと連れていかん！」

やっぱり否定された。

「いいじゃないか。招待しよう。」

「「ドクター！」」

その時、横からモニターが現れ、紫のボサボサ髪で目付きの悪い男が写し出された。
間違ない、スカリエッティだ。
まさか本人から招待されるとはな。

「しかし！」

「興味があるのだよ彼には。トーレにチンク、彼等を連れてきてくれたまえ。いいね。」

「・・・わかりました。」

了承を得て、モニターが消えた。
トーレは嫌そうな顔をしながら俺を見る。

「ドクターから許可がおりた。仕方ないから連れていってやる。」

嫌そうな表情でそう答えた。
まあいいんだけど。
俺はゼストとクイントとメガーヌを見る。

「さて、お前達はどうする？一緒について来るか？」

「・・俺の任務はまだ終わってないからな。当然同行させてもらう。
クイント、メガーヌお前達二人はどうする？」

「もちろんご同行します！」

「私もです。」

というわけで三人とも一緒にくるようだ。
今度は俺はチンクに近付く。

「歩けるか？」

「敵が何情けをかける。私は歩け・・！？」

チンクは立って歩こうとしたら足が震えて歩けなかった。

「・・歩けないようだな。」

「う、うるさい！」

仕方ないな。
俺はチンクに近付き、抱き上げいわゆるお姫様抱っこをする。

「な、ななな何をする！／／／」

「何ってお前が歩けないから抱いて運ぼうと。」

「い、いい！やめろ！敵にそんな事される気は無い！／／／」

「まあまあ、ここは任せてな。」（ニコッ）

「！！／／／わ、わかった。任せる／／／」

俺が笑うと何故かチンクは真っ赤になる。
怒っているのかと思ったら違うようだ。
アレ？もしかしてこれって

〔はい。相変わらずマスターはフラグ乱立しますね〕

なんでだよ！俺はただ、動けないチンクを運んで行こうとしてるだけだぞ。
なんでこうなるんだよ。

「とりあえず、行こう。トーレだったな。案内頼む。」

「貴様が言うな！まあいい、ついてこい！」

俺達はトーレについていく。

数分後、俺達は今までの構造とは違う通路に出る。
周りを見ると、カプセルが沢山あり、中には女性が入っているものがある。
しかし、やっぱり全裸なんだな。
少し恥ずかしいな。

「これは・・・」

「酷い・・」

「こんな事が・・」

ゼスト達は嫌悪感を抱いている。
あ。

「アンタ達に言い忘れていた。」

「なんだ？」

「これから俺はスカリエッティと話し合いをする。あんまり口出ししないでほしい。邪魔をしないでくれよ。」

「・・・わかった。」

奥まで進むと一人の男性と二人の女性が立っていた。
一人はスカリエッティで髪が長いのがウーノ、メガネをかけてるのがクァットロか。
到着前にチンクを下ろさないとな。
それにしても重いかと思っていたが以外と軽かったな。
やっぱり背が低いからだな。

「もういいだろう。歩けるか？」

「あ、ああ。ありがとう。／／／」

俺はチンクを降ろした。
さらに、ディケイドになっていた分身体の俺を消した。

「消えた！？」

「これは驚いたね。あの仮面の戦士はどこに消えたのかね。」

「あれは俺の分身体で変身した姿だ。」

「ほぉ！」

まあそんな話をする為にここにきているわけではない。
さっさと目的を話すか。

「アンタがスカリエッティだな。改めて俺は創神リョウだ。」

「よろしく。紹介しよう。まず背の高いのがトーレ、小さいのがチンク、私の右隣にいるのはウーノ、左隣にいるのはクァットロだ。」

改めて今ここにいるナンバーズの紹介してもらった。

「さて、君は一体何の用だね。教えてくれないかな。」

「そうだな。単刀直入に言う。俺に協力してほしい。」

「ほぉ。」

『『『何っ！？』』』

誰もが驚いていた。
あのスカリエッティもだ。
普通はそうだよな、驚いて当然だ。

「何故なんだい？理由を聞いていいかな？」

「理由か・・・俺と俺の友人、それと今後の為だ。」

「ふむ・・・君は管理局の人間ではないのか？」

「悪いが俺は管理局の人間ではない。それに俺は管理局を信用してない。」

「ふむ、何故かな？」

「実は俺は管理局の裏をハッキングして知ってるんだ。管理局の闇をな。だから管理局は信用していない。だからアンタの事も知っている。スカリエッティ、お前がアルハザードの技術で造られた存在だと。」

「！！・・・知っていたのか。」

「ああ、ハッキングで知った。」

まあ実際は原作で知っていたが、ハッキングしてさらに詳しくしったがな。

「そうか。」

「別に俺は管理局がどうなろうと知った事では無い。だが、俺の友人達が管理局に入っているんだ。そいつらの為にどうしてもお前の力が必要だ。」

「ふ、ふはははは！なるほど、君は管理局のトップに立とうという事だね！」

なんかスカリエッティが勘違いをしているようだ。

これは訂正しないとな。

「残念だが、俺はそんなのに興味は無い。」

「なに?それはどういう事だい?」

「俺は組織のトップに立つ人間じゃない。ただ俺は友人達に管理局の犬になってほしくないだけだ。管理局の人間が何人死のうとした事では無い。だが、友人には死んでほしくない。それだけだ。」

「ふむ、なるほど。」

どうなる?できれば協力してほしいんだが。

「・・・いいだろう。協力してやろう。だが、それなりに等価交換が必要だ。もちろん用意しているのだろう?」

「もちろんちゃんと準備している。バサラ。」

〔了解〕

俺はバサラからある物を出す。
それは別荘だ。

「それはなんだい?このミニチュアは?」

「今から教えてやる。俺のいう通りにしろよ。」

そう言うと俺は今この場にいる全員を別荘に連れていく。
別荘に着いたらみんな驚いた。
もう慣れたので簡単に教える。

「凄いね。これは君のレアスキルかい。」

「ああ。スカリエッティ、俺についてこい。他はそこら辺に居てくれ。ついてきたければついてこい。」

俺はスカリエッティとウーノとクァットロと一緒に移動した。
それ以外はここで待っている事にしたようだ。
三人を連れてった場所は研究室。

「ここだ。」

「ここは、研究室かい。なかなか立派な場所じゃないか。」

「んで、ドクターをここに連れてきた理由は？」

「これだ。」

俺はある物を見せる。
モニターにそれが映る。

「こ、これは！！？」

「これは、別の世界の機械だ。ロボットでもある。」

そう、俺が見せたのはガンダムやパーソナルトルーパー、メカニロイドなどのデータだ。
これを見たスカリエッティは歓喜している。

「ふ、ふふふふ、ふはははははは！ゲホッゲホッ！」

あ、むせた。

「ぐふ、ふふふ、素晴らしい！今まで見た事もないシステムや構造などばかりだ！これは研究のしがいがある！ふふふふ！いいだろう！全面的に協力してやろう！」

「助かる。渡すほうはコピーでいいか？」

「もちろんだとも！」

ＯＫがもらえた。

ウーノはスカリエッティを見てまたかという感じで飽きれ、クァットロはスカリエッティと同じく嬉しそうにモニターを見つめている。

その後コピーを渡し、別荘から出る。

そして、スカリエッティはゼストとクイントとメガーヌに自分を作り出したのは最高評議会だと話し、奴等は自分達の思い通りの世界を作るのだと言った。

ゼストの親友『レジアス・ゲイス』はこの計画を知り、仕方なく参加したらしい。

ゼストは親友に怒りをあらわにしたが、理由が管理局の改善が進まないからだといいそれを最高評議会が意図的に仕向けたと答えた。

ゼストは納得し説得すると答えた。

話し合いを終え、三人の身柄をどうするか考え、結果プレシアに頼む事にした。

その辺は俺が話す事になり、ゼスト達はレジアスに話すといい分身体とともに行く事になった。

俺は一旦なのはが入院している病院に行くのでこの辺で解散となった。

スカリエッティＳＩＤＥ

創神リョウ、不思議な少年だね。
無垢な少年かと思っていたらとんでもない思考の人物だったね。
リョウは管理局の為ではなく自分と友人の為に動き、それ以外はどうなってもいいという考えだ。
もし、彼と対峙していたらこっちが負けていただろう。
だが、私にこのデータをあっさり渡した辺り私を仲間にする気マンマンだったな。
じゃなきゃこんな物（データ）を用意していたない。
ふふふ、食えないね。
だが、私にとってはどうでもいいな。
彼が協力してくれというなら協力してあげよう。
全く興味尽きないな！

第２９話　スカリエッティ味方化！（後書き）

白黒「第２９話完成！というわけでスカリエッティが味方になりました！」

家康「これは決まってた事なのか？」

白黒「決まってました！もう疲れたからそれでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はなのはが泣く。」

第３０話　今後の事！（前書き）

白黒「特に理由もなくドラえもんの映画作品をレンタルで観ました。」

テンテン「突然なによ？」

白黒「あ、うんとりあえず自分が好きな三作目と六作目を借りて観てた。」

家康「で？」

白黒「ドラえもんがダメダメ状態になってのび太とジャイアンがよく活躍するなと改めて感じました。」

ライダー「それだけ？」

白黒「そりだけ。」

セイバー「エクスカリバーでぶったぎってやりましょうか。とりあえず第３０話始まります！」

第３０話　今後の事！

リョウＳＩＤＥ

スカリエッティと出会い同盟を結んで次の日、俺は今病院にいる。
ゼスト達三人はプレシアに頼んでなんとか管理局の闇に狙われないようにしてもらった。
必死に頼んだかいがあり、管理局の三賢者の下に付く事になった。

〔もう少しでなのはさんがいる病室です〕

「そうか。少し考え事をしていた。」

少し歩くとなのはがいる病室の前に着いた。
俺は病室に入る。
入ると俺以外のいつものメンバーがいた。

「あ、リョウ。」

「よ、フェイト。」

「リョ、リョウ君・・・」
腕や首などに包帯を巻かれたなのはが立ち上がろうとしている。

「なのは、無理をするな。立つの無理だろう。」

「大丈夫だよ。リョウ君のおかげでこのくらいはできるの。」

「そうか。だが無理をするな。」

「うん。」

見たところ原作より酷いケガではないようだ。

「・・・悪いリョウ。あたしが気付いていれば、なのはがこんな事には。」

「分身体にも言ったがお前の責任じゃない。俺やフェイト達にも責任がある。」

「違うよ。これは私のせいなの。」

う〜む、このままだと平行線になるな。
それに、俺はなのはに渡したい物があるのにな。
だったら。

「フェイト、はやて、みんな悪いがなのはと二人っきりで話がしたい。病室から出てくれないか？」

「え、でも・・・」

「頼む。」

「わかったわ。」

プレシアが了解した。
どうやらわかってくれたようだ。

「お母さん！いいの？」

「いいのよ。」

「主はやて。ここはリョウに任せましょう。」

「リインフォース・・・わかったで。リョウ君、なのはの事頼むで。」

「ああ。」

テスサロッサ一家と八神一家が病室から出た。

さて・・・

「にゃはは、リョウ君一体何かな？も、もしかして告白！？／／／」

「んなわけあるか。」

何ばかな事を言ってやがるんだ。

全く。

「じゃあ、一体何かな？」

「・・単刀直入に言うぞ。お前はいつまで強がりをいうつもりだ。」

なのはＳＩＤＥ

え？
どういう事かな。

「なに、言っているの？リョウ君。」

「誤魔化すつもりか。俺の目には誤魔化されん。なのは、お前はなんでそこまで強がりを言う。何故だ？」

リョウ君・・・

「気付いて・・いたの？いつから？」

「知ったのは数ヶ月前だ。」

そうなんだ。
さすがだね。

「注視して見ていたからな。」

「にゃはは。やっぱりリョウ君は凄いね。」

「そうでもない。フェイト達はもっと早くに気付いていただろう。なのは、なんで無茶をした。ま、何となく予想はつくが理由を聞いていいか？」

「・・・見捨てられたくなかったから。リョウ君は知っているでしょ。お父さんが大けがを負って入院してた間の事。」

「ああ。」

その時、私はリョウ君に出会ったの。
そのおかげで私は独りぼっちじゃないと知り、後にアリサちゃんやすずかちゃん、フェイトちゃんにアリシアちゃんそしてはやてちゃん達と友達になれたの。

「でも、私がこんなに恵まれたのは魔法のおかげだと思うの。だから怖いの。私に魔法が奪われたら、友達がいなくなるんじゃないかって。」

だから、いやなの！
あの頃のように私だけ、独りぼっちになると思い始めたら！
私はみんなと一緒に居たいの！

「なのは。」

「なに？」

「ふんっ！」

「痛っ！」

痛い！
リョウ君が私のおでこにデコピンを食らわせたの。
なんで？

「なのはお前、そんなに俺達を信用できないか？」

リョウＳＩＤＥ

全くこの小娘は、なんでそんな思考になるんだ。
考えすぎなんだよ。

「痛～い！もぉぉ！なんでデコピンするの！？もの凄く痛かったの。」

「なんで俺がデコピンしたか分かるか？」

「うう～、分かんないの！」

「さっきも言ったがそんなに俺達が信用できないか？」

「え？」

聞いて無かったんかい。

「お前は一人で何でもやり俺達に相談やしない。そんなに信用ないんか。」

「そ、そんな事ないの！」

「だったら俺達に何にも言わなかった。」

「それは・・・」

「そんなに俺達は信じられないのか？」

「・・・でも。」

「友達だろ？」

「うん。」

「だったら俺達に頼れよ。」

こいつはなんでそんなに後ろ向きなんだ。

「なのは、お前は後ろ向きなんだよ。俺達を頼れ、信用しろ。友達だろ？」

「・・・リョウ君。」

なのは、いいかげん目を覚ませ。
お前は一人じゃない。
俺やフェイト達がいるだろ。

「リョウ君。少し胸・・貸してくれないかな？」

「・・・ああ。いいぜ。」

なのはが俺の胸に顔を埋め、そして。

「う、うわあああぁぁぁ！！！！」

泣いた。
俺は何も言わず、なのはを抱き締めた。

なのははいっぱい泣いたため目が赤く充血している。

「もういいか？」

「あうぅぅ。／／／」

恥ずかしいのだろう。

人前で泣いた事なかったもんな。

「もういいな。さっきより顔色がよくなかったな。」

「うん。」

「そんなお前にこれをやろう。」

俺は仙豆をだした。

俺は仙豆の効果を話した。

「いいの？」

「構わん。今のお前ならいいだろう。」

そう言いなのはに仙豆を渡した。

その後、俺は病室から出てあとはフェイト達に任せた。

俺は家に帰ろうとする時、プレシアからゼスト達の事を聞いた。

どうやらレジアスを説得し、三賢者のというか俺の傘下に入った。

説得は分身体から聞いている。

説得し、俺と同志になった。

俺は地上とパイプを繋ぐ事ができた。

〔マスター。これからどうします?〕

「・・・」

〔マスター?〕

「バサラ、お前は覚えているか?闇の書事件の時に現れた転生者の事。」

〔覚えています。それがどうしましたか?〕

「大創造神から聞いた話なんだが、複数の転生者が世界にいる場合全員が同じ神によって転生されるらしい。だが、大創造神は俺だけで他の人間はいないそうだ。」

俺以外の人間はいたのかと聞いたらＮＯと答えた。

〔という事は〕

「ああ、別の神かなんかが転生させた存在らしい。だが、それもおかしいらしい。通常は別の転生者がすでに転生している者がいる世界に送り込むっというのは無いそうだ。」

〔それってつまり〕

「ああ。どっかのアホな神がわざとか、はたまた偶然かこの世界に送ったようだ。」

一体だれがそんな事をしたんだ？わからん。
だが、このままだとまた転生者が現れる可能性がある。
それが敵か味方かは分からんが。
何にしても、もっともっと強くならないとな。

〔まだ強くなる気ですか？〕

当たり前だろ？
俺はまだまだ弱いほうだろ。
先の転生者との戦いだって相手が鍛えてなかったから勝てたんだ。
もし鍛えられた転生者と戦えば負けるかもしれないんだ。
だからそれに負けない位鍛えないとな。

〔・・・わかりました。私もそれに付き合います！〕

「悪いな。」

さて、帰ったら修業をするか！
俺は急いで家に帰った。

第３０話　今後の事！（後書き）

白黒「第３０話完成！やっと３０話か。」

家康「このあとはどうするんだ？」

セイバー「考えているのですか？」

白黒「とりあえず番外編を書こうかと。」

テンテン「番外編？」

白黒「そ！１５歳になるまでの間の事を書こうと思う。しかもその間、別の世界に行ってもらう予定です。」

ライダー「その世界はどこに行くのか決まっているのですか？」

白黒「それは秘密。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

番外編　シンフォニアの世界とスパロボの世界！（前書き）

番外編は文章のみです。
会話などありません。
その為、かなり変になっていると思います。
それでもよいなら・・・番外編始まります。

番外編　シンフォニアの世界とスパロボの世界！

ＴＯＳの世界

リョウが家に帰り別荘で修業して次の日、なのはは退院した。
みんなはどうやって丸二日で退院できたのか不思議がっていたが、
リョウのおかげだと言うと納得したようだ。
そして、また一年がたち小学六年生になった。
そんなある日、別荘で修業していたリョウの前に大創造神が現れた。
するといきなりリョウにしばらく別の世界に行ってほしいと言われた。
理由を聞くと別の世界に行き経験を積んできたらいいと言った。
要するに今後また転生者が現れる可能性がある為、実戦経験を積んでこいという訳だ。
もちろんリョウはＯＫをだした。
この世界には分身体を置き、本体は別世界に行った。
どこにいくのかは、リョウまた大創造神にもわからない。
まさしくランダムである。
リョウは別世界へ飛んだ。
リョウは目を開け周りを見渡す。
すぐ近くに村があった。
そこに行き、村を探索した。
そこでとある少年少女に出会った。
少年の名は『ロイド・アーヴィング』、少女の名は『コレット・ブルーネル』。
二人に出会い、リョウはここはテイルズオブシンフォニアの世界だと理解した。

その後、リョウは二人と友達となり、ともに過ごす事になった、
それから数年がたち、さらに『ジーニアス・セイジ』と『リフィル・セイジ』の姉弟と仲良くなった。
そして、ついにコレットの天使化の日がきた。
原作を知っている為リョウも協力した。
ロイドはリョウが手解きをした為かなりの腕になった。
そしてロイドの父『クラトス・アウリオン』と出会う。
ともに行動し、途中もう一つの世界の住人『藤林しいな』と出会う。
最初は敵だったが味方になった。
そして、二つの世界を繋ぐ塔で天使達の企みを知り、とある天使の一人を倒した。
だが、そこでクラトスが天使だと知った。
リョウは原作で知っていた為驚くふりをした。
ロイドはクラトスと戦うが劣勢をしいた。
代わりにリョウが戦い、圧倒した。
その時、リョウ達の前に天使達のトップにしてクルシスの指導者『ユグドラシル』が現れた。
リョウ達は逃げ、敵の反乱組織に助けられた。
そのもう一つの世界の首都でその世界の神子『ゼロス・ワイルダー』
そして木こりの少女『プレセア・コンバティール』と出会った。
新たに二人を仲間にしてともに行動した。
その途中とある理由で囚人になった男『リーガル・ブライアン』が仲間になった。
そして、仲間達と一緒に世界を救う旅をした。
その途中、しいなとプレセアはリョウに好意を寄せた。
リョウは何故だ!と嘆いた。
しいながリョウに好意をいだいたのは雷の精霊と契約する時、しいなは過去に契約に失敗した。
それを思い出し諦めていたが、しいなと苦楽をともにした一匹の擬似精霊の死とリョウの説得により契約ができた。

だが、契約した代償としてしいなは大切な一匹の擬似精霊の死に悲しんだ。
リョウはそんなしいなを抱き締めた。
そのおかげでしいなはリョウに惚れた。（笑）
プレセアには妹がいた。
だが、妹は殺された。
プレセアは殺した相手を探していた。
殺したのは仲間のリーガルだった。
プレセアはリーガルを殺そうとしたが、妹の霊がプレセアを説得した。
さらにリョウが背後からプレセアを抱き締め心を清めた。
途中、プレセアとリーガルを苦しめた張本人と対面しリョウが殺した。
本来はプレセアが殺すのだが、プレセアにそんな事をさせたくないというリョウが代わりに殺したのだ。
そのおかげでプレセアもリョウに惚れたのであった。
そして、リョウ達は二つの世界を行き来し終盤近くでクラトスがロイドの父親だという真実を知り、ロイドはクラトスと一対一の決闘をした。
最終決戦では、みんなが力を合わせて戦い二つの世界を平和にした。
二つの世界を巻き込んだ戦いが終わり、みんなはそれぞれの生活に戻った。
リョウは世界中を旅する事にした。
その時何故かしいなとプレセアが一緒になり、数ヶ月後に重婚した。
その後、リョウは逃げるかのごとくこの世界から消えた。
リョウは元の世界に戻り、なのはの世界に行こうとすると何故かしいなとプレセアがリョウの世界にいた。
何故いるのか理由を聞くとリョウが消えたと同時に二人も世界から消え、この世界にきていたと答えた。
リョウはあらたな嫁ができた。（笑）

その時、リョウの嫁達がリョウと二人にものすごい殺気を出していたのは言うまでもない。

スパロボの世界

リョウがＴＯＳの世界から帰ってきて早一年がたち中学生になった頃、リョウにランスター兄妹が仲間に友達になっていた。
どうやって仲間になったのかというと本来ならディーダが死ぬ任務にリョウが介入してディーダが助けたのだ。
その任務は凶悪犯罪者を逮捕するだけだったのだが、管理局の一部がディーダごと犯罪者を消そうとしたのだ。
そこをリョウがディーダを助け救ったのだ。
その後、ディーダはゼスト達の部隊に入隊した。
リョウはディーダからティアナを鍛えてほしいと頼まれた。
リョウはもちろんＯＫをだし、ティアナを鍛える事にした。
数週間後にはティアナはなのはと同等クラスにまで強くなった。
原作だとティアナは自分を凡才だというが、鍛え方を間違えなければ十分に非才だとわかった。

それからさらに一年がたちリョウは中学二年生になった。
ティアナを鍛えている最中に大創造神から念話がきた。
ティアナの修業は分身体に任せてリョウは自室に移動した。
話を聞くと、大創造神はまたリョウを違う世界に行ってほしいと言われた。
もちろんリョウは了承した。

そしてリョウは別の世界に行った。
次に行った世界は今いるなのはの世界と同じ位の建物だ。
すると、何かものすごい轟音が聞こえた。
轟音が聞こえた方向に顔を向けると巨大なロボットが沢山空を飛んで敵と戦っていた。
リョウはすぐにこの世界がスパロボの世界だと理解した。
その後、インターネットなどで調べここはOG版だとわかった。
この世界にきて二日後、リョウは戦場となっている場所にきた。
そこで一つのロボットが墜落してきた。
リョウはそのロボットが何なのかすぐに気付き、そこまで移動した。
コクピットを開け、気を失っている女性『アイビス・ダグラス』を抱きかかえ代わりにリョウがロボット、アステリオンを操縦する。
リョウは並外れた操縦テクニックで敵の半数をたった一機で撃墜していった。
敵を全滅させた後、リョウは主人公達が乗る戦艦に乗りパイロットになった。
リョウは改めてアイビスと挨拶し、彼女の訓練に付き合った。
そのおかげでアイビスはリョウに好意を抱く事になった。
リョウはもう諦めたようだ。
リョウは自分の機体を作ってもらった。
機体名はゲシュペンストメヒィスト。
ゲシュペンストにテスラ・ドライブを付け両肩にバスターカノン砲、両腰にレールガン砲、両腕にプラズマ・ステークを主武装。
サブは色々使うが基本はマシンガンかビームライフルか大型対艦剣かビームサーベルを装備する。
かなり重量だが、装甲から薄くされており機動力はかなり高い上、かなり高威力の武器を持つ。
しかし、ピーキーになり並いや、凄腕のパイロットでも使いこなせないほどの機体になってしまった。
だが、リョウはそれをまるで手足のように軽々と使いこなした。

その為、リョウ専用の機体になった。
それを使い、リョウと仲間達は戦場を駆けた。
いろんな敵と戦い、リョウはいろんな敵から厄介な強敵と認識された。
例えば近いようで遠い世界からきた組織のエースパイロット。
この男は、ある男を狙っていた。
だが、その時リョウが乱入し圧倒的な差で相手を戦闘不能直前にした。
さらに異星人の侵略者と戦い大将を含めた雑魚を半数以上をリョウが撃墜または戦闘不能直前にまでした。
そのおかげでリョウは有名人になった。
本人の意志とは関係なく。
そんな戦いの中、とある戦場で敵パイロット『オウカ・ナギサ』と出会った。
彼女は狂った科学者によって育てられた兵士。
彼女はマインドコントロールされ操られていた。
しかし、彼女の仲間によりマインドコントロールは解かれ、彼女は罪滅ぼしの為自らの命を犠牲にしようとしたがリョウがそれを止め代わりにリョウが彼女を苦しめた科学者を殺した。
そのおかげなのかオウカもリョウに好意を抱いた。
その瞬間、同じく好意を持つアイビスがオウカをライバル視しリョウを巡る戦いが広げられた。
その後、さらに戦争は激しくなり世界は多次元世界になった。
また、銀河を巡る戦争へと昇華した。
そんな時、リョウは因果律の番人『クォヴレー・ゴードン』と出会った。
クォヴレーはリョウの正体に気付き、協力する事を約束した。
さらに、『セツコ・オハラ』とも仲良くなった。
彼女はとある未知の力を持っておりそれゆえに狙われ、後に五感を徐々に失うようになっていった。

だが、リョウがセツコの五感を治し彼女を助けた。
そのおかげでセツコはリョウに好意を抱いた。
アイビスにオウカにさらにセツコが加わりリョウはさらに大変になった。
時々、三人の内誰かがリョウのベッドに潜り込んでくるようになり、かなり精神をガリガリ削られていた。
そして、リョウ達は幾つもの戦いを繰り広げた。
仲間も戦いや出会いで沢山得た。
そして、遂に最終決戦が始まった。
最後の敵はいや、次元をしる敵達はリョウが何者なのか気付いた。
最終的に仲間達にもリョウの正体がバレた。
だが、仲間達はそれでもリョウを仲間だと答え、最後の敵を倒した。
戦争終結後、リョウはこの世界から去った。
リョウの世界に戻り、なのはの世界に行こうとすると後ろから声をかけられた。
振り向くと何故かアイビスとオウカとセツコがいた。
リョウは何故いるのかすぐに理解した。
リョウは厄介ごとから逃れるように急いでなのはの世界に行った。
リョウはこう思った。
なんでこうなるんだと。

番外編　シンフォニアの世界とスパロボの世界！（後書き）

今回書いた番外編は、自分勝手に書いた話です。
別で書く可能性はかなり低いです。
ただリョウのハーレム要員を増やしただけです。

リョウ「んで、こいつらは本編で出番はあるのか？」

はっきり言って低いです。
悪ければ出ません。

リョウ「おいおい。」

そんなわけでいつやるか分かりませんが後一、二回は番外編をやる予定です。
それでは皆さん、次回もよろしくお願いします！

第３１話　空港火災！（前書き）

白黒「何も書く事ないのでさっさと進めます。第３０話始まります。」

第３１話　空港火災！

リョウＳＩＤＥ

なのはが墜落して早四年がたった。
俺達は小学校を卒業し中学生になった。
俺はある場所に移動中。
その場所に到着。

「いらっしゃいリョウ。」

「ああ。久し振りだなプレセアにアルフ。それに、リンディにえ～とエイミィ・・だったな。」

「ええリョウ君。しばらく見ないうちに大きくなったわね。」

「久し振り～！」

「よく覚えていたね。本当に久し振りだね。」

そこはリンディの家。
今日はみんなが久し振りに集まるから一緒に食事をしようとなのは達から言われた。
俺はあんまり来る気はなかったが、原作を思い出し仕方なく来た。

「そういえばエイミィ、クロノと結婚するんだってな。おめでとう。」

「ブッッ！な、ななんで知ってるの！？」

「アルフから聞いた。」

原作で知っていたが、二、三日前にアルフから聞いてもいないのに聞かされた。

まぁ、興味が無いがな。

「ア～ル～フ～！」

「う・・ご、ごめんよ！」

「もう～！でも、ありがと！」

そういえば言い忘れていたが、アルフは原作と同じように背が小さくなっている。

「ん？そういえばアリシアとユーノは？」

俺は周りを見、アリシアとユーノがいない事に気付いた。

プレセアに聞いてみる。

「アリシアとユーノはまだ無限図書館にいるわ。もうすぐ帰ってくると思うわ。」

「そっか。」

まだ無限図書館か。

ん？この二つの魔力は。

「ただいま～！」
「おじゃまします。」

帰ってきたか。
その後、なのは達も帰ってきた。
そして、みんなで飯を食う。
みんなは楽しそうに話をしている。
主にフェイトが保護した子供達の事でだ。
会話は弾むように進み、飯も食い終わった。

「ねえリョウ君。」

「なんだ？なのは。」

なのはがなんか話してきた。

「GWなにか予定とかあるかな？」

「GW？何も予定は入っていないが。」

なんだ？

「じゃあさ。もしよかったら私達と一緒に遊びに行かない？」

遊びに・・・あ、そうか。
確かその時は・・・なら、行くしかないな。

「わかった。いいぞ。」

「本当!?やった!」

めっちゃ嬉しそうだな。
それを聞いた後、なのは達は何故か口論をしていた。
なんでなんだ?
と自覚なしの奴等は言うだろうが、俺は分かってしまった。
はぁ・・・

〔マスターもご愁傷様です〕

〔もうイヤだ。俺は一人でゆっくり見て回りたいのに〕

〔諦めましょう〕

・・・はあ。

GWになり、俺ははやてが研修にきている温泉地にいる。
同行者はアリシアとリインだ。

「えへへ・・・」
「うふふ・・・」

アリシアとリインは嬉しそうに俺の両腕に体を絡めつける。
つうか、リインは言わずもがなアリシアもかなり成長している為、
その・・・胸が腕に当たって「「当ててるの。」」・・・心の中を読むなよ。

「えと、やめてくれないか?恥ずかしいし、なんか視線を沢山感じるのだが。」

主に野郎どもから嫉妬と妬みの視線を感じる。
頼むからやめてほしい。

「ええ～！いやだの！？」

「いや、いやというわけではないんだが。」

「なら問題ないですね。」

「いや、だからな。」

「「うるうる・・・」」（涙目＋上目遣い）

ちくしょう！
こいつら、いくらなのは達がいないからって。

「・・わかりました。」

だめだ。
どうしようもできん。
アリシアとリインはますます腕を絡め胸を押し付ける。
早く空港の火災起きやがれ！
不謹慎だとわかっていてもだ！
なのはとフェイトと合流後、カオスな状態になった。
どんなだと？・・・答えたくない。
ただ、野郎どもの視線が強くなったとだけ伝えよう。
数時間後、近くの空港で大火災が発生した。
きた！やっときたか！待っていたぞ！

〔マスター。嬉しそうですね〕

〔ああ嬉しいさ。このカオスから脱せられるんだからな！〕

〔マスター・・・〕

俺達は急いで現場に行く。
数分で到着し、空港は完全に燃えている。
まずは空港内に逃げ遅れた人達がいるか調べないとな。

「リョウ君！」

「はやてか。どうした？」

「空港内に逃げ遅れた人が二人ほどいるねん！悪いねんけど救出に行ってくれへん？」

「わかった任せろ。」

「おおきに！なのはちゃんとフェイトちゃんは既に空港内に入ってるから一緒にお願いや！」

「了解！いくぜバサラ！」

〔わかりました！行きましょうマスター！〕

アリシアとリインをはやてのところに行かせてもらい、俺は火のてがまわっている空港内部に潜入した。

???SIDE

うっく・・・ひっく・・・ここは、どこ?
おねーちゃんはどこにいるの?
熱いよ~怖いよ~!
おとーさん・・・おかーさん・・・誰か・・・助けて~!
死にたくないよ~!
ゴホッゴホッゴホッ!

ドカーン!ガラガラ!

きゃああ!
もう・・・いやだよ!
誰か・・・

ピシピシピシ!グラァッ!

うわあああ!
・・・アレ?
わたし・・・生きてるの?
目を開けると髪の長い人がわたしの前に立っている。

「大丈夫か?嬢ちゃん。」

リョウSIDE

俺は空港内に入り、奥まで移動する。

〔マスター！この奥に生命反応が！〕

「わかった。」

さらに奥に進むと一人の女の子がうずくまっていた。
あの娘は・・・ん？ヤバい。
巨大な女神像があの娘の頭上に落ちる。
俺は急いであの娘の前に立ち、女神像を受け止める。
ふう・・・ギリギリだったな。

「大丈夫か？嬢ちゃん。」

「・・・うん。」

大丈夫だな。

「そうか。ちょっと待ってろよ・・・よっと。」

俺は女神像を横に投げ落とす。
改めて俺は女の子の方に向く。
うん、やっぱりこの娘は。

「嬢ちゃんもう大丈夫だよ。怖かったね。」

「・・・うん。ありがとうおにーちゃん。」

「ふふっ。嬢ちゃん名前は？」

「・・スバル・・『スバル・ナカジマ』。」

やっぱりか。

まあ予想はしていたからな。

「リョウ君！」

ん？なのはがきたか。

「なのはか。この娘を救助した。」

「さすがはリョウ君だね。あとフェイトちゃんの方にもいるらしいの。」

確かにいるな。

そっちに行くか。

「なのは。この娘を任せていいか？俺はフェイトのところに行く。」

「え？・・うんわかったの！」

「おにーちゃん、どっか行っちゃうの？」

スバルが涙目をしながら俺を見つめる。

これは、何か言わないと動かないな。

「ちょっとね。大丈夫だよ。このお姉さんが君を安全な場所まで連

れてってくれる。だから心配しないでね。」

「・・・うん。」

納得してくれたようだ。
さて、行きますか。
フェイトのところに。

フェイトＳＩＤＥ

何処にいるんだろ？
私は空港内部に入りまだいる人を探している。
一人はなのはのところにいるはず。
もう一人はどこだろう？
私は広い場所に出た。
あとはここだけ。

「誰かいませんか！いたら返事をしてください！」

・・・ここにもいないのかな。

「・・・ません。」

ん？声が聞こえた。
上を向いてみる。

「すみません！ここにいます！コホッコホッ！」

いた！

私より二つ年下であろう女の子が。

その時、女の子の立っていた床が崩れた！

「きゃあああ！！」

危ない！

「バル「その必要は無い！フェイト！」・・この声は！」

女の子が落ちそうになったところを黒い影が女の子を抱え、私の近くに移動した。

「ふぅ・・間に合った。」

「リョウ！」

黒い影の正体はリョウだった。

リョウが女の子を抱きかかえ助けたのだ。

さすがはリョウ。

「あの・・・」

「もう大丈夫だよ。ケガはないね。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

リョウが女の子に優しく話しかける。

よかった。

「嬢ちゃん。名前は？」

「えっと、『ギンガ・ナカジマ』陸士候補生です。」

「陸士候補生・・・未来の同僚だね。」

「え？」

「ギンガか。君、もしかしてスバルの妹かな？」

「！！スバルを知ってるのですか！？どこに！？」

スバル？もしかしてなのはが救出に行ったところにいる子の事かな？

「落ち着いて、大丈夫だよ。スバルは無事だよ。救出されたよ。今は仲間が一緒にいるからね。」

「そうですか・・・よかった。」

そうか、リョウとなのはが。

「フェイト。この娘の事頼んだよ。俺は先に出るよ。少し話したい相手がいるからな。」

え？それはいいけど。

一体誰に？

「それは秘密。じゃ、お先。」

あ！リョウ！
・・・行っちゃった。
あとで聞いてみるか。
私はギンガ陸士候補生を抱いて外に出る。

リョウＳＩＤＥ

高速移動で外に出て、はやてのいる車前に立ち中に入る。

「はやて。」

「「リョウ君！」」
「リョウ！」

はやてとアリシアとリインが俺の登場に驚く。

「なんでここに？」

「救助が終わったからな。」

「嬢ちゃん達。この坊ちゃんは？」

はやての隣に一組の男女が座っていた。
女性は誰か知っている。

「リョウ！貴方がいてたなんてね。」

「まあな。そっちの男はアンタの旦那さんか？」

「まあね。あなた、紹介するわ。彼は創神リョウ。四年前に私の部隊を助けてくれた人よ。」

「こいつが。」

男が俺に近付く。

「『ゲンヤ・ナカジマ』だ。クイントを助けてくれてありがとよ。」

「別に気にするな。」

俺はゲンヤと握手する。

おっと、これ聞いておかないとな。

「なあクイント。アンタらに娘がいなかったか？しかも姉妹で。」

「ええいたわ。もしかして、空港内にいたの？」

やっぱりな。

まあ知っていたがな。

「いたぞ。スバルとギンガだろ。」

「そうだ。二人はどうしたんだ？」

「安心しな。なのはとフェイトが保護して安全な場所に避難してい

るはずだ。もう少ししたら連絡がくるはずだ。」

俺はそれを言ったあと、車から出ようとする。

「あれ?どこに行くん?」

「あとは管理局の奴等に任せておいていいだろう。俺は先に帰ってホテルに行ってるぜ。」

そう言い俺は現場から去った。

その時はやて達が何か言ってきたが無視した。

その後、ホテルに入りチェックインして部屋に入りシャワーを浴び寝た。

次の日の朝起きたら何故かなのはとフェイトとはやてが一緒に寝ていた。

しかもYシャツの格好という姿でだ。

いつの間に!しかもなんつう格好で寝てたんだ!

なんでいたんだよ!気付かなかったなんて!

もういい。

二度寝だ!おやすみ。

第３１話　空港火災！（後書き）

白黒「第３０話完成！ＳｔｒｉｋｅｒＳの四年前の空港火災の話をしました。」

家康「これであとは本編だな。」

セイバー「どうなる予定だ？」

白黒「とりあえず原作通りの進め方をしながら少しづつ変えていくって感じだな。」

テンテン「ますますリョウさんに好意を抱く人が増えそうなんだけど。」

ライダー「その前に前にやった番外編のあれ。どういうつもりなんですか？なんでリョウにあんなに嫁が増えたんですか？」

白黒「え、え～と。それは・・・ま、また今度にでも！そそ、それでは皆さん！」

テンテン・セイバー・ライダー（（（逃げたな））））

全員『次回もよろしくお願いします！』

テンテン・セイバー・ライダー「「「それでは改めてじっっっくり聞かせてもらいましょうか！」」」

白黒「えと・・・あの・・・た、助け！あぁぁぁぁぁ～～！！！」

番外編２　ＩＳの世界とらき☆すたの世界（前書き）

注意＊ＩＳは自分はアニメしかしりません。
その為、かなり変です。
それでもよろしかったらどうぞ！

番外編2　ＩＳの世界とらき☆すたの世界

ＩＳの世界

空港火災から一年がたった。
リョウは中学を卒業し高校に入らず旅をする事になった。
その時、ティアナが陸士訓練校に入ると言ってきた。
リョウは何も言わず訓練校に入る事を許可した。
その後、大創造神から念話がきた。
リョウは何なのかすぐさま理解し、あっさり了解した。
リョウは別の世界に行った。
目を開けるとそこには学園が映った。
学校名を見る。
『ＩＳ学園』と書いていた。
リョウはここがＩＳ（インフィニットストラトス）の世界だと理解した。
しかも、いつの間にかリョウは二人目の男性ＩＳ操縦者だという扱いだった。
リョウはＩＳ学園に入学した。
そこでリョウは学園の教師『織班千冬』と出会い教室まで案内してもらった。
教室に入ると手厚い歓迎を迎えられた。
まず知ってもらいたいのは、ＩＳは女性でしか扱えない物である。
その為、教室には女子しかいない。
いや、ただ一人男子がこの教室にいる。
『織班一夏』一人目の男性ＩＳ操縦者にして千冬の弟である。
名で分かる通り千冬と一夏は姉弟である。
それはともかくリョウは一夏と友達になった。

さらに一夏に想いを寄せる少女『篠ノ之箒』とも仲良くなった。
箒は一夏に好意を抱いている。
休み時間リョウと一夏の二人に一人の少女が近付いてきた。
『セシリア・オルコット』・・・イギリスの代表候補生のＩＳ操縦者だ。
代表候補生とは国の選ばれた者の予備軍みたいなものだ。
セシリアは二人の事を認めないと言ってきたのだ。
一夏は嫌味ったらしに言い返すがリョウは無視する。
授業中、千冬がクラス代表を決めると言ってきた。
もちろん選ばれたのはリョウと一夏だ。
その時セシリアは男に代表なんてイヤだと言い自分こそふさわしいと言ってきた。
言い忘れていたが、この世界は女尊男卑が常識なのだ。
女性が偉く男性は低いという愚かとしかいいようのない世界なのだ。
セシリアは一夏とリョウを日本を馬鹿にした。
一夏はそれに頭がきて言い返した。
セシリアは切れ、決闘を申込んだ。
リョウも申し込まれ巻き込まれた。
授業を終え、リョウは個室で自分のＩＳを調べる。
調べた結果、リョウのデバイス、バサラがＩＳとなっていた。
決闘当日になり、まず一夏から戦う事になった。
結果は原作通りだった。
次にリョウの試合。
リョウはＩＳを発動した。
それはリョウがスパロボの世界で使っていたゲシュペンストメヒィストだった。
しかも全身装甲（フルスキン）だった。
これを見た一夏達は驚いていた。
当然だ。
こんなＩＳは見た事もないのだから。

リョウはフィールドに飛び、セシリアとの試合を開始した。
結果はリョウの圧勝だ。
セシリアは全力で戦い全武器を使って攻撃してきたが、リョウはライフルとサーベルの二つしか使わずしかも全てを躱しビット兵器も何事もなく破壊し、圧倒したのだ。
これでリョウはクラス代表になる・・・はずだったが辞退し一夏に代表を譲った。
それを聞いた一夏は当然なんでと聞いてきたがリョウは自分より一夏のほうがいいと答えた。
これはリョウが原作を知っている為、一夏には経験を積んでほしいという事だ。
一夏がクラス代表に決まり、代表決定パーティーをしていた時、一夏のもう一人の幼馴染み『凰鈴音』が現れた。
一夏と鈴は親しく話をしていた。
それを見た箒とセシリアは一夏を睨みつけた。
言い忘れていたがセシリアはあの決闘のあと一夏に惚れたようだ。
その後、一夏の鈍感が発動し鈴と喧嘩したそうだ。
そして代表戦で勝負する事になった。
その為リョウは一夏を鍛える事になった。
本来は箒とセシリアが鍛えていたが二人の教え方が下手だった為一夏から頼まれたようだ。
当日となり一夏と鈴の戦いが始まった。
リョウのおかげで一夏は原作より強くなり鈴と互角以上の戦いを繰り広げていた。
なかなかの好勝負をし決着がつくとおもわれたその時、突然アリーナ上空から何かが落ちてきた。
現れたのはフルスキンのＩＳだった。
一夏と鈴は応戦するが決定打が与えられない。
モニターで見ていたリョウと千冬と箒とセシリアと教師の『山田真耶』は突然のＩＳ乱入に驚いた。

リョウは知っていた為ふりだ。
リョウは千冬に頼まれ一夏と鈴の救援に向かう。
シールドをあっさり壊し一夏と鈴の前に立つ。
リョウは敵が無人のＩＳだと気付き、あっさり大破させた。
それから数日がたち、クラスに転校生が現れた。
しかも二人だ。
一人は男子『シャルル・デュノア』・・・これは偽名だ。
本名は『シャルロット・デュノア』女の子である。
・・・とある理由で男装している。
リョウは原作で理由は知っている為助けてやろうか考えている。
もう一人は女の子『ラウラ・ボーデイッヒ』ドイツの軍人だ。
千冬を崇拝し、一夏を敵視している。
一夏の前にたち、いきなりビンタを食らわせた。
当然一夏は怒るがラウラは一夏を千冬の弟と認めないと言う。
その後、いろいろあったがリョウは部屋に入るが、何故かシャルが同じ部屋に入ってきた。
聞くとシャルが同居人になったそうだ。
次の日、いつものようにリョウが一夏を鍛える。
それを見たシャルはリョウの強さに驚く。
訓練を終え、帰ろうとしたらラウラが現れ一夏に勝負を仕掛けてきた。
が、一夏は興味なしと答えたが、ラウラは背後から一夏に向けて砲身を構えた。
しかし撃つ直前、背後から気配を感じたラウラは振り向くといつの間にかリョウが立っていた。
それを見た一夏達も驚いていた。
その日の夜、リョウはシャンプーがきれてたのを思い出し、シャルにシャンプーを渡そうと浴室のドアを開けるとそこには女らしい体をしたシャルがいた。
それを気にシャルはリョウに女の子だとバレた。

リョウはこれは一夏の代わりなんだなとかなんかフラグを建てたなと空しい考えをした。
次の日、女子の間で何故か盛り上がっていた。
リョウは何なのか気付き、箒を見て哀れんだ。
放課後、アリーナの方で爆発が起きた。
見るとセシリアと鈴がラウラと対決していた。
しかし、性能のおかげなのかラウラが圧倒、ヤバい状態にまで追い詰められていた。
一夏が助けに行くが、いまだ経験が足りない為、出鼻を挫かれる。
リョウは高いところに立ちＩＳを作動、両腰にあるレールガンでラウラの背後を攻撃した。
攻撃は見事に命中し、ラウラは一夏からリョウにターゲットを変更した。
ラウラはリョウに攻撃を仕掛けるが、終始圧倒され逆にやられる。
途中に千冬が間に入り戦いを止めた。
リョウは千冬に呼ばれ何故ラウラが一夏を敵視するのか聞く。
千冬はリョウにラウラを何とかしてほしいと頼む。
リョウは一応了承した。
その後、リョウは医務室に入り一夏達と会う。
その時、多数の女子が入ったきてパートナーになってほしいとせがんできた。
リョウはシャルとチームを組むといい、一夏には箒が組むと言った。
そしてチーム戦当日、リョウの一回戦の相手はラウラだった。
ラウラはモブと組んだようだ。
ラウラは俺を睨み付け挑発してくるが、リョウは聞いていない。
試合は始まり、リョウはラウラと一対一の戦いを始めた。
ラウラのＩＳには敵の動きを封じる武装がしてある。
だが、リョウはそれの弱点を既に見抜いているので最初っから優勢、無傷のまま最後までラウラに圧倒した。
その時、ラウラのＩＳに異変が起きた。

ラウラの体が黒い何かに飲み込まれそれが形成され人型になった。
その姿は千冬だった。
それを見て何故か一夏が現れ攻撃しようとしたがリョウが止める。
理由を聞き、代わりにリョウが相手をした。
リョウの圧倒的戦闘力の前にラウラは救出されＩＳは倒された。
ラウラは医務室に運ばれ意識を戻したラウラにリョウは説教？みたいなのをした。
次の日、リョウのクラスにシャルが女子となりみんなの前に現れた。
事情を知らないクラスのみんなは一夏とリョウに目を向け、鈴は一夏に攻撃を仕掛けようとした。
リョウがなんとか場を止め納得さした。
その時ラウラが現れ一夏に謝りリョウにはキスをしてきた。
とっさだった為リョウは何もできなかった。
理由を聞くとリョウは頭を悩ませた。
数週間がたち、リョウ達一年生は臨海学校に行く事になった。
みんな水着に着替え、海で泳ぐ。
リョウにはシャルとラウラが現れ、褒めてあげた。
ビーチバレーをし、途中千冬が現れどうだっと聞かれた。
リョウは似合っていると答えると、千冬は頬を染めながら少し嬉しそうに笑った。
それを見たシャルとラウラはリョウを睨んだのはお約束だ。
次の日、専用機持ちは集まった。
リョウ達の前にＩＳを造った人物『篠ノ之束』が現れた。
箒の姉である。
束は箒のＩＳを持ってきたのだ。
箒のＩＳの試運転の時、事件が発生した。
その事件に一夏と箒がやる事になった。
しかし、失敗して専用機持ちみんなでやる事になった。
戦いの最中、一夏のＩＳがパワーアップし事件は解決した。
その後はいろいろあった。

文化祭や体育祭その他諸々、リョウと一夏に休まる日はそんなになかった。
卒業しリョウは世界から消えた。
リョウはなのはの世界に帰ろうとすると、何故かシャルとラウラさらに千冬が現れた。
理由がわかったリョウは急いで去った。
リョウは帰ったあと自室で不貞寝した。

一年半がたったある日、リョウは無人世界で修業をしていた。
その時、大創造神が現れまた違う世界に行ってほしいと言われた。
リョウは今回は拒否しようと思っていたら有無をいわさず無理矢理違う世界に飛ばされた。
飛ばされる瞬間、リョウは大創造神を見ていつかぶん殴ると決意した。
目を開けると目の前に学校があった。
しかもリョウの服が制服に変わっていた。
頭にこの世界の事が流れてきた。
ここはらき☆すたの世界のようだ。
リョウは教室に入り、そこで『泉こなた』『柊かがみ』『柊つかさ』『高良みゆき』と仲良くなった。
他にも沢山の友人を作った。
この世界には戦いがないため、緩やかに過ごした。
こなた達とゲームをしたり、一緒に宿題をしたりと本当に緩やかに過ごす。
その過程でかがみがリョウに恋をした。
きっかけは文化祭の時、たまたま演劇で一緒にやり、ともにやる期間が多かった。
そのおかげで恋人同士となり、デートをしたり買い物したりと恋人

らしい付き合いをした。
学校を卒業し大学生になり、二十歳になった時にリョウとかがみは結婚をした。
老死するまで二人は幸せな人生をした。
死後リョウは自分の世界に戻り、なのはの世界に帰ろうとする。
やっぱりというかかがみがいた。
リョウはいつものように逃げるようになのはの世界に飛ぶ。

番外編2　ＩＳの世界とらき☆すたの世界（後書き）

かな～り変になっちまったな。
だが、後悔してません！

リョウ「後悔しろよ！なんだよこれ！ぶっ飛びすぎだろ！らき☆すたはまあマシだけどよ！」

細かい事は気にするな！そんじゃあ、次回はＳｔｒｉｋｅｒＳ編です！
それでは！

第３２話　機動六課へ！（前書き）

白黒「ついにＳｔｒｉｋｅｒＳ編に突入！」

テンテン「どうなるの？物語は原作通りに？それとも崩壊？」

白黒「最初は原作沿いかな、終盤は崩壊の予定だな。」

セイバー「そうですか。」

家康「第３２話出陣する！」

第３２話　機動六課へ！

リョウＳＩＤＥ

空港の火災から四年がたったある日、もうすぐ機動六課が動くだろうという時にリョウはプレシアに呼ばれて管理局に来ていた。

「どうしたんだ?プレシア、急に呼び出すなんて。」

「ごめんなさい。実は貴方にある方達とあってほしくてね。」

ある方達?一体・・・?

「プレシアです。連れてきました。」

扉の前に立ち名をいうと扉が開いた。
中に入ると、ある方達の正体がわかった。

「・・・おいプレシア。これはどういう事だ?何故俺の前に三賢人がいる。何故だ?」

「ごめんなさい。理由があるの。聞いてくれない?」

「こちらからもお願いします。我々の話を聞いてください。」

三賢人の近くにいる女性から声をかけてきた。
女性の名は『カリム・グラシア』・・聖王教会の騎士で確か未来予

知ができるレアスキル所持者だったな。

「・・・わかった聞いてやる。だが、長い会話は聞かんぞ。手短に頼むぞ。」

「うむ。」

さっさと聞いて帰って修業の続きをしたい。

「なるほど、聞いた通り我ら管理局を嫌っているようじゃな。」

「仕方ないだろう。聞いた所彼は管理局の闇を見たようだ。全ては我らの落ち度があったにしても我らにも責任はある。」

「だからこそ、彼のような人物が今必要なのじゃ。」

さっきからグダグダと、早く言え!

「単刀直入に言おう。我らに力を貸してくれぬか?」

「は?いきなり何言ってやがる。説明しろ。もちろん手短にな。」

「わかった。カリムよ。」

「はい。」

カリムが前に立つ。

「初めまして。わたしはカリムと申します。」

「リョウだ。さっさと説明しろ。」

「リョウ。さすがにそれは・・・」

「気にしないでくださいプレシアさん。わかりました説明します。」

内容は彼女の予言の内容だ。
彼女の予言に彼女自身衝撃が走ったようだ。
内容までは聞いて無いが、どうやらミッドチルダがいや、管理局に未曾有の危機が訪れる予言のようだ。

「で？」

「お願いします。管理局のいや、ミッドの平和の為力を貸してくれないでしょうか！？どうか頼みます。」

「・・・断る。」

バッサリ切り捨てるように吐いた。
俺が言った言葉にカリムは驚愕の表情で見つめる。
つうか何故俺が管理局の為にしなきゃならない。
はっきり言ってイヤだ。

「な、何故ですか！？理由を聞いても！」

「何故俺が管理局の為にしなきゃならない。」

「な、なぜって・・・管理局が消滅すれば世界が崩壊してしまうのですよ！」

「管理局は信用できない。それだけだ。」

「・・・理解しておる。ワシらは管理局の為ではなく、お主の大切な者達の為に一時的でもよいから暫く管理局員になってもらいたいのじゃ。」

カリムは分かってくれなかったが、三賢人は分かってくれたようだ。
つうか、三賢人は俺が何をしていたのか知っているのにカリムは知らんのかっていうか聞いて無いんか。
つうか、なんで知ってるんだ？
まあ、隣にいるプレシアから聞いたんだろうな。

「一時だけなんだな。」

「そうじゃ。」

「嘘じゃないな。」

「うむ。」

「・・・わかった。いいだろう。ただし、俺は管理局の為じゃない。守りたい奴等の為に戦う。それでいいな。」

「わかった。」

俺はそれに了承した。

「さて、俺はどういう役職に付くんだ？」

「お主には個人行動ができる特殊な局員になってもらいたいのじゃ。

誰からも命令されず自分の意志で動く・・・そうじゃな、どういう名がよいかの？」

「そうだな。ネクサスで頼む。」

「わかった。これから君は特別管理局局員のネクサスとして、行動してくれたまえ。」

「わかった。」

その後、俺とプレシアは部屋から出る。

「それでリョウ。これからどうするの？」

「・・・はやてが新しい部隊を作るようだな。そこに入るつもりだ。階級ももらったし居やすくなるだろう。」

「リョウ。あなたに頼むたい事があるの。」

？

「アリシアを連れてってくれないかしら？」

「・・・いいのか？」

「構わないわ。むしろそうしたほうがアリシアも喜ぶわ。」

「わかった。」

あて、帰ったら機動六課に配属されるから準備しないとな。

そして数日後、機動六課ができその三日後に俺とアリシアはその機動六課の公舎の前に立つ。

「ここが・・・機動六課か。」

「ここがはやてが新しく建てた部隊だね。それにしてもリョウ君、制服姿似合ってるね。」

「俺は堅っくるしい格好は嫌いなんだよ。アリシアは本当に似合ってるな。」

「本当!?褒めてもらっちゃった。えへへ。／／／」

言い忘れていたが、俺とアリシアは管理局の制服を着ている。
しかし、制服という服は堅っくるしくていやだな。

「まあいいか。さて、はやて達に会いにいくか。行くぞアリシア。」

「了解!なんてね。」

行くか。

はやてＳＩＤＥ

今日、機動六課に新たな配属者がくるらしいんや。
しかも二人・・・一体誰やろ?

「誰なんだろうね。」

「母さんに聞いたら、会ってからのお楽しみって言われたの。はやては？」

「それが上から聞いても知らんようやねん。リンディさんやクロノ君にも聞いてみたけど二人も知らへんて。」

なのはちゃんもフェイトちゃんも知らへんのか。
ほんま一体誰やろ？

「はやてちゃん！来たみたいです！」

私の前に小さなリインフォース『リインフォース？（ツヴァイ）』が来て教えてくれた。
この娘はリインフォースの妹でユニゾンデバイスや。

「そか。そろそろやな。ま、会ってみてからのお楽しみやな。」

数分後、歩く音が聞こえる。
来たようやな。
配属者が入ってきた・・・え？

「久し振りだな、はやて。」

「久し振り！フェイトになのは！」

え？え？

「「え～～～！！！」」

配属者ってリョウ君とアリシアちゃんなの！！？

アリシアＳＩＤＥ

ふふっ！驚いてる驚いてる！
まさかこんなに驚くなんて、隠しといてよかった。

「ね、姉さん！？どうしてここに！？」

「あたしとリョウ君はこれから機動六課に配属になったの。」

「嘘！？でも、二人共管理局に所属して無いでしょ！なんで！？」

そうなんだよね。
実はあたしは管理局に所属してないんだよね。
一応あたし死んだ事になってるからね。
それにあたしとリョウは管理局というより三賢人に属する個人職員扱いなんだよね。
リョウがフェイト達に簡潔に説明してくれた。

「・・・というわけだ。」

「なるほどな～。それにしても、プレシアさんも結構無茶をしたもんやな。リョウ君をわざわざ三賢人に会わすなんて。」

そうだよ！
もし、リョウ君が拒否し続けていたらどうなっていた事か。

「別に俺は管理局の為じゃないぞ。大切な奴等を守る為に一時的に組織に入ったんだ。」

「そ、それって・・・／／／」

なのはちゃん、言いたい事は分かるよ。
あたしもフェイトもはやても理解できたから。
大切な人達・・・それってつまりあたし達の事だよね。／／／
嬉しいな～。／／／

「さて、会話もこれくらいにして、機動六課のメンバー全員に挨拶くらいしないとな。」

「あ、そやったね。それじゃあいこか。」

リョウ君。
みんなと頑張ろうね。

リョウＳＩＤＥ

朝の挨拶を済ませ自己紹介をする。
ヴォルケンリッターの驚きは面白かったな。

特にシグナムとリインは俺が来たという事で舞い上がっていた。
その為なのは達に睨まれてたな。
挨拶の最中、俺はチラッとある人物を見る。
ティアナだ。
四年ぶりの再開だ。
あれからティアナは成長し強くなったな。
俺にはわかる。
さて、挨拶もすんだしティアナ達フォワードメンバーに会うか。
・・・お！いたいた。

「「「あ・・」」」

「や。君達がフォワードメンバーの四人だね。さっき自己紹介したばっかりだけど改めて創神リョウだ。よろしく。」

「あ、はい！私はスバル・ナカジマっていいます。あの・・もし間違っていたらすみません。四年前に私と会った事はありませんか？」

「ん？スバル・ナカジマ・・・ああ！あの時の娘か？いや～、大きくなったな。」

「！！やっぱり！あの時助けてくれてありがとうございます！私、創神リョウさんにあこがれて入隊したんです！」

やっぱりスバルもいたか。
それにしても、あこがれてとは・・・俺にあこがれても仕方ないのにな。

「いや、気にするな。」

俺は二人の少年少女を見る。

「あ、あの初めまして！僕は『エリオ・モンディアル』です！」

「キャ、『キャロ・ル・ルシエ』です。よろしくお願いします！それでこの子はあたしの竜でフリードです。」

「キュク～。」

エリオとキャロが紹介し、フリードも元気に声をあげた。

「うん。よろしくね。二人の事はフェイトから聞いてるよ。」

「あ、はい。」

「きょ、恐縮です。」

「そんなにかしこまらなくていいよ。フランクに話してね。」

「「あ、はい！」」

うん、原作でも見たけど結構いい子達だな。

そして。

「久し振りだなティアナ。四年ぶりかな。」

「そうねリョウさん。久し振りです。」

ティアナと久し振りに会話をする。

「うん。鍛練は怠ってないようだな。強くなってるな。分かるぞ。」

「そりゃそうよ。怠るなと言ったのは他でもないリョウさんだよ。」

確かにな。
それにしても本当に強くなかったな。
魔力でわかる。

「あの～。」

「ん？なんだい？」

スバルがなんか聞きたそうだな。
なんだ？

「リョウさん。ティアの事を知ってるのですか？」

「ああ。知らないのか？ティアナを鍛えたのは俺なんだ。」

「「「・・・え～～～！！！」」」

大声で叫ぶなよ。
びっくりしたじゃねえか。

「ティティティ、ティア！それ本当なの！？」

「スバルうっさい。本当よ。私はリョウさんに鍛えられたのよ。」

それを聞きスバルはほげ～っとした表情で見つめる。
俺は無視して、自室をめざす。

自室に入り、荷物を片付けて部屋を出てブラブラと公舎を探索する。

「リョウ君！」

ん？後ろからなのはが近付いてきた。

「なんだ？なのは。」

「リョウ君、今暇？」

暇と言われれば暇だな。

「じゃあリョウ君。もしよかったら一緒に訓練に参加しない？」

ふむ、確かにフォワードメンバーの実力知るのは悪くないな。
それに訓練場のフィールドを生で見れるのもいいな。

「わかった。案内頼むな。」

「うん！いこう！」

さて、フォワードメンバーの実力を見せてもらおうか。

第３２話　機動六課へ！（後書き）

白黒「第３２話完成！やっとＳｔｒｉｋｅｒＳ編だ～！」

家康「バトルは増える感じだな。大丈夫なのか？」

白黒「キツいかもしれない。」

セイバー「選んだのは貴方です。」

ライダー「しっかりしてください。」

白黒「はい。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回は模擬戦です。」

第３３話　訓練しよう！（前書き）

白黒「ギャグ系のネタがない。どうしよう。」

ライダー「それは困りましたね。シリアスばっかりだと読む人が減りますからね。」

テンテン「しっかり考えないと！」

白黒「はい・・・なんとか見つけてみます。」

セイバー「第３３話始まります。」

第３３話　訓練しよう！

リョウＳＩＤＥ

俺はなのはとともに訓練場に移動する。
そこは何もないただのフィールドだ。

「ここでやるのか。殺風景だな。」

「ふふふ・・・今にわかるよ。」

知っているが、あえて知らんふりをしておく。

「なのはさ～ん！」

「あ、シャーリー。」

フォワードメンバーとデバイス技術者『シャリオ・フィニーノ』がきた。

「来たねみんな。あ、リョウ君フォワードメンバーの自己紹介は？」

「それは済ませた。フォワードメンバーの隣にいる女は？」

「そうか。彼女は知らなかったね。彼女の名はシャリオ・フィニーノ。」

「シャリオです。できればシャーリーと呼んでください。」

「わかった。」

紹介も終わったし、そろそろ進めてくれないかな。

「それじゃあ訓練始めようか。」

「それなんだが、こんなただっ広いフィールドでどう訓練するんだ？」

「うふふ・・・シャーリー。」

「はい！」

シャーリーが操作するとただっ広いフィールドから廃墟に変わった。

「これは、凄いな。」

「凄いでしょ。さ、訓練を始めるわよ。」

「「「「はい！」」」」

まずはフォワードメンバーがガジェット何十体との模擬戦を開始する。

俺はなのはとシャーリーの二人と一緒に離れたビルの屋上に立つ。

ふむ・・・ティアナがよく指示をだし、スバル達三人を動かしているな。

なかなかの腕だな。

スバルとエリオはよく動く。

キャロも上手くサポートをしている。
しかし・・・スバルはまだまだ荒いな、隙が多い。
エリオは体格に似合った戦い方をしていない。
あれでは体を壊すぞ。

「どうかな?リョウ君から見て四人の動きは。」

「ん。ティアナがよく頑張っている。三人に効率のよい戦い方を指示している。三人もそれに答えてよく動く。」

「さすがだね。」

「ただ・・・」

「ただ?」

「ティアナはともかく三人はまだまだ動きが荒い。隙も多いしな。ここは個別で教えてやらないとそのうち体を壊す。だからちゃんとあった戦いを教えないとな。」

「にゃはは・・・聞いたよ。ティアナを鍛えたのはリョウ君なんだってね。」

「そうだが・・どうした?」

アレ?なんか怖くねえ?
なのはが怒ってるような。

「なんでなのは達に内緒にしていたのかな?」

「いや・・なのは達、管理局での仕事で忙しかっただろ。だから。」
あれ？なんで俺こんな言い訳じみたこと言ってるんだ？
まるで悪い事をしましたって感じじゃねえか。
「そんなの言い訳にすぎないよ。なんで隠したのかな？かな？」
「フェ、フェイト。いつの間に後ろに？」
振り返るとフェイトだけでなくシグナムとヴィータとリインがいた。
フェイトは何故かひぐらし化してるし、シグナムとリインの目は単色化してる。
こ、恐え～！
「おいなのは！新人どもの模擬戦終了したぜ！」
「え？あ、分かったの。」
ふう、助かった。
ヴィータに感謝だな・・・あとでなんか奢ってやらないとな。
「は～い。ご苦労様。・・・うん、昨日より動きがよくなったね。」
「「「「ありがとうございます！」」」」
ふ～む、どうやらなのはチーム戦での連携率を高める訓練を中心としているようだな。
今はそれでいいかもしれないが、ティアナはともかく他は個別の訓練してないからどうやっても荒い戦い方になってしまう。
やっぱりファーストミッションをこなしてから個別訓練に入ったほ

うがいいな。
とりあえず考えられる訓練方法は・・・

「リョウ君。」

「ん？なんだ？」

なのはに呼ばれた。
なんだ？俺は周りの奴等を見る。
ああ、そういう事か。

「リョウ君もやってみない？」

ティアナＳＩＤＥ

リョウさん・・・兄さんを助けてくれた人。
六年前、兄さんは殺されそうになった。
それをリョウさんが助けてくれた。
その後、私はリョウさんに鍛えてもらった。
リョウさんの教えは厳しくて辛かった。
けど、優しくしてくれたりケガを治してくれたり大変お世話になった。
三年前に私は訓練校に入り、スバルと出会いパートナーとなった。
スバル・ナカジマ・・クイントさんの娘で戦闘機人。
辛い人生を歩んできた娘。
最初に出会った頃のスバルは元気いっぱいでしかし、空回りも多か

った。
だから、あんまりチームワークもよくなかった。
けど、ある休日で急速によくなっていつの間にか訓練校でＮｏ．１の成績を残せた。
卒業後、私はスバルと一緒にペアを組んで救助部隊に入った。
そしてＢランク試験で私とスバルは機動六課にスカウトされた。
もちろん配属し、フォワードメンバーの新人として訓練を開始。
そして数日がたちなんとリョウさんが配属された。
私は焦った。
リョウさんの姿を見て胸がドキドキした。
リョウさんがなのはさんと話しているのを見た時、何故か胸が痛んだ。
それで私は気付いた。
私は・・・リョウさんの事が好きなんだと。

「ティア！始まるね！」

スバルの声に私は現実に戻った。

「どんな戦い方をするのでしょうか。」

「気に・・なるね。」

そうか、スバル達は初めてリョウさんの戦いを見るのだったわね。

「いい三人とも、よく見ておきなさい。特にスバルとエリオは。」

「「？」」

リョウさんの強さに！

リョウＳＩＤＥ

さて、準備体操もしたし。

「いいぞなのは。初めてくれ！」

「は～い！シャーリーお願い！」

「はい！まずは軽く三十体で！」

「「「三十体！？」」」

ティアナ以外のフォワードメンバーが驚く。

そりゃそうだな。

いきなり三十体だなんてな。

俺の正面にガジェット三十体が現れた。

「さて、いくかバサラ。セットアップ！」

〔了解！セットアップ！〕

セットアップ完了。

まずはこれでいくか。

「バサラ！」

〔了解。ファイターモード！〕

俺は格闘タイプのファイターモードになる。

「いくぜ！」

俺は一気に接近し、一体のガジェットのすぐそばに近付く。

「まず一体！」

軽く右ストレートでガジェットを貫く。

「「「早い！」」」

次に裏拳で一体、その次に回し蹴りで三体同時に破壊する。

「凄い・・・ガジェットをあんなにあっさり倒すなんて！」

「シューティングアーツ！？ううん、違う。何？あの体術！？」

「スバルさんの戦いとは違う。なんだか、流れるような。」

ＡＭＦがあるから、かなり魔力を込めたが、もう少し弱めてもいいな。

ムダな魔力を消費したくないからな。

〔マスター〕

「ああ。」

背後から敵が一体迫るが、素早く振り向き左のアッパーカットを浴びせる。
近くにいるガジェットは触手みたいなもので攻撃を、離れているのはビーム攻撃をしてくる。

「だが、見えるんだよ。」

全てを紙一重で躱す。
さらに、ガジェットの頭上をジャンプで飛び越えながら。

「ディバイン・バスター！」

砲撃をし、三体のガジェットを粉砕。
着地したあと、背後にいた一体を倒してそのまま殴り貫く。
これで十体のガジェットを撃破！あと二十体。

「す、凄い・・・」

「十体のガジェットをほんの十数秒で撃破するなんて。」

「すっごぉい！」

「妙ね。リョウさんならあれだけの数が相手でもすでに全て撃破してもおかしくないのに。なんかおかしい。」

「にゃはは、ティアナもそう思う？実は私もなんだよね。なんでだろう？」

「「「え？」」」

次は、こいつでいくぜ。

「バサラ。ランサーモードだ。」

〔了解。ランサーモード！〕

ファイターモードから槍のランサーモードに変更。

「武器が変わった！？」

「槍になった。」

「どういう事なんですか？」

「リョウさんのデバイス、バサラは近中遠の戦闘武器に変更できるかなり特殊なデバイス多武装タイプなんだ。たくさんの武器になるからかなり扱いが難しいんだ。あれは槍のランサーモード、さっきのファイターモードと同じく近距離タイプだね。」

「よく知っているねティアナ。」

「それはリョウさんからいろいろ鍛えてもらいましたから。いろんなタイプの武器との対戦をされましたから。」

「凄い。一体どのような構造なんでしょう。あ～～解体して中身がみたいです！」

「それはさすがに無理よシャーリー。リョウのデバイスにはプロテクトが掛かってるから。」

「う～！残念です。」

俺は一気に駆け突きで一体のガジェットを貫く。
そのままなぎ払いで囲んでいた五体のガジェットを切り裂く。

「そういう事ね。」

「？ティア、何か分かったの？」

「スバル、エリオ、リョウさんはあなた達の為に魅せているのよ。」

「「「え？」」」

「キャロは能力上仕方ないけど私はともかくスバルとエリオはまだデバイスの使い方が上手くないわ。だからリョウさんが武器の使い方を魅せてるの。」

「ティアナの解答は正解だね。スバルにエリオ、リョウ君の戦い方よく見ておくのよ。」

「「「はい！」」」

囲んでいた敵を倒したあと後方に距離をおく。

「バサラ。カートリッジロード。」

〔了解〕

カートリッジを二つ消費する。

地面に魔方陣が浮かぶ。
槍は光り輝く。
片手で持ち構える。

「雷速一掃（らいそくいっそう）！！」

俺は敵に突っ込む！
正面にいた一体を突きそのままさらに突っ込む！
突っ込んだあとの雷の放電が周りにいた三体のガジェットを破壊する。

「何あれ！？凄い突きだったよ！」

「それにあの雷・・・変換資質があるのですか！？」

「凄い・・・エリオ君のとは比べ物にもならないほど。」

「さすがはリョウさん。あの突きはいつ見ても凄い。」

「な、なんですかあれは！？さっきの技ＡＡの威力ですよ！」

これで残りはあと十体、最後はこれだな。

「あと十体、という事は最後はあれだね。」

「バサラ。ダブルガンモードだ。」

〔了解〕

槍から二丁拳銃に変わる。

手の中でクルクル回す。

「やっぱり。」

「今度は銃だ。しかもツーハンドタイプの！」

「これってティアに戦い方を魅せるのかな？」

俺は走り助走をつけ敵の頭上にジャンプする。
ジャンプ中に中心にいたガジェット二体を銃で一発づつ放ち撃破する。
そのまま中心に着地し、左で右の敵を右で前の敵を撃ち、さらに後ろの敵を左で、左の敵を右で撃ち前方に飛び離れる。
その瞬間敵は爆発し破壊された。

「凄い！あんな一瞬で！」

「もう驚きすぎて言葉にできない。」

「・・・」

「やっぱりリョウさんの銃術は凄いな。」

距離を取り、地面に魔方陣が描かれる。
俺の近くに魔力弾が四つが現れる。

「クロスファイヤー！フォースショット！！」

四つの魔力弾を残り四体のガジェットに向けて撃つ。
全弾命中し、ガジェットを全滅。

ま、こんなもんかな。

「は～い終了。さすがリョウ君だね。」

「ふう、これで終わりか？」

「ううん。実はまだ残ってるの？」

「？どういう事だ？」

「えっと、それは・・・」

「こういう事だ。」

後ろから声が聞こえたため振り向くとシグナムが宙に浮きながらデバイスを構えている。
そういう事か。

「シグナム、俺と勝負する・・・であってるな。」

「正解だ。どうだ？受けてくれるか。」

ふう・・・仕方ない。

「バサラ。刀モードだ。」

〔了解〕

銃から刀に変わる。
刀を構える。

「いいだろう。受けて立つ！」

第３３話　訓練しよう！（後書き）

白黒「第３３話完成！キャラクターが増えて大変だよ。」

家康「確かに、キャラが多いと忙しいな。」

セイバー「言い方が同じだと尚更な。」

白黒「でも頑張ります。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第３４話　再戦、リョウＶＳシグナム！（前書き）

白黒「何故だ。何故・・・自分はこんなに下手なんだ～！」

ライダー「どうしたのですか？いきなり。」

白黒「いやね。実は久し振りにロックマン2をやったんだよ。Ｗｉのバーチャルコンソールで手に入れてね。」

ライダー「ふむふむ。」

白黒「それで最後にクイックマンのステージにいってな。そのステージ中盤にでてくるトラップのレーザービームが避けられなくなっていたんだ～！前ならスイスイ避けれたのに！」

ライダー「そんな事ですか。つまらないですね。セイバータイトルコールをお願いします。」

白黒「おいこら！つまらないとはなんだ！つまらないとは！」

セイバー「わかりました。第３４話始まります。」

白黒「聞けよ～！」

第３４話　再戦、リョウＶＳシグナム！

三人称ＳＩＤＥ

リョウとシグナムは互いにデバイスを持ち構える。
建物のカケラが一つ落ちる。

「「！！」」

二人とも飛び駆ける。

「はあああ！！」
「おおおお！！」

デバイスがぶつかり鍔競り合いがおこる。

「ググググッ！」
「・・・」

シグナムは必死に押すがリョウは余裕といった感じで受け止める。

「ふっ！」

「なっ！」

リョウは刀を引き横に避ける。
シグナムはそのままリョウの横を通り過ぎ建物にぶつかる。

「あちゃ～。お～いシグナム、大丈夫か？」

「・・・あ、ああ。大丈夫だ。それにしても酷いぞ。いきなり力を抜いて避けるなんて！」

「それは済まなかった。しかし、勝負は勝負だ。手加減はしない。」

リョウは油断なく構える。
シグナムも瓦礫から出てきて剣を構える。

「いくぞ。」

「こい！」

リョウはシグナムに向かって飛ぶ！
リョウは刀で何度も切りかかる。
シグナムはそれを防ぎ躱す。

「フッ！ハッ！シュッ！」

「クッ！さすがだな。また腕が上がったようだな。」

「当然だ。お前も剣技が上がったようだな。」

リョウとシグナムは嬉しそうに互いを褒めたたえる。

「す、凄い！シグナム副隊長と互角なんて！」

「いえ！それ以上です！」

「フェイトさんに聞いてたけど、こんなに。」

「さすがはリョウさん。剣技でも一流、シグナム副隊長をものともしない。」

フォワードメンバーはリョウの強さに驚く。
ティアナは改めてリョウの強さに実感する。

「そらそらぁぁ！！」

「うおぉぉ！！」

凄まじい剣劇が広げられる。
しかし、シグナムは終始圧倒されている。

（やはりリョウは強い。あれから私は剣の腕をあげるためにかなり修業してきた。しかし差は埋まらない。それどころか差が広がる）

シグナムはリョウの力は強いと改めて知る。

「しゃあああっ！」

「ぐお！」

リョウの刀が当たり、吹き飛ばされる。
バリアジャケットの一部腹の部分が着られる。
空中で急停止し、シグナムは息をきらしはじめた。

「はぁっはぁっはぁっ・・・」

「・・・シグナム。そろそろ次で決めようか。」
「はぁっ・・はぁっ・・・そうだな。レヴァンティン！」
〔了解！カートリッジロード！〕
リョウは次で決めようという。
シグナムはリョウの了承し、カートリッジロードする。
「バサラ。」
〔了解。カートリッジロード！〕
リョウもカートリッジロードする。
リョウもシグナムも互いに必殺技を繰り出す気だ。
「紫電・・・一閃！！」
「飛天御剣流・・九頭龍閃！」
シグナムは一閃を、リョウはなんと上下左右斜めそして突きを一度に放った。
拮抗する事もなく、あっさりシグナムは九頭龍閃をもろにくらい吹き飛ばされる。
吹き飛ばされたシグナムはそのまま建物に激突して崩れ、瓦礫とかす。
リョウは瓦礫に近付く。
瓦礫の中からシグナムがはいでてきた。
「・・・俺の勝ちだ。」

「・・ああ。また私の負けだ。」
勝負はリョウの勝ち！

リョウＳＩＤＥ

シグナムとの再戦のあと、俺はティアナを除いたフォワードメンバーから質問攻めをされた。
俺はなんとか無難に答えていった。
そして、フォワードメンバーの訓練を再開し、夕方になるまで行った。
夕方になり、訓練を終え、メンバーと俺はいったんシャワーを浴び夕飯を食べるため食堂に移動する。
食堂にはなのは達がおり、俺とフォワードメンバーも飯を注文しみんなと一緒に食べる・・のだが。

「バクバクバク・・・」
「ガツガツガツ・・・」

「・・・」

いや、原作で知っていたとはいえさすがに生で見るとよく食べるな。
皿には大盛りの食べ物がどんどん減っていく。

「リョウさん。大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。前衛型は特に食べると聞いていたが、まさかこれほどとは。」

「あ、あはは。リョウさんはたくさん食べないのですか？」

まあ俺はそんなに食わないタイプだからな。
どんなに激しい運動をしても何故かスバルとエリオのようにたくさん食わないんだよな。
自分でもナゾだ。
飯を食い終わり自室に入りゆっくりするつもりだったのだが。

「何故お前達がここにいる。」

「えっと・・・」

「あはは・・」

いつの間にかなのはとフェイトが入ってきていた。
つうか本当にいつの間にだよ。
気付かなかったぞ。

「まあいい。んで？俺に一体なんのようだ？」

「え？なんもないよ。ただリョウ君に会いたかっただけだよ。」

「それだけ？」

「それだけだよ。」

・・・はあ、何も言わん。
なのはとフェイトは俺に管理局であった事やいろんな事を話始めた。
つうか、時々会ってるのになんでこうも話しかけてくるのかねえ。
気がついたらもう夜の十一時になっていた。

「さて、俺はもう寝るぞ。二人ともさっさと自分達の部屋に戻るんだな。」

「イヤだ。」

「今日はリョウと一緒に寝るの。」

今なんつったこいつら。
一緒に寝るだと？

「アホか！そんな事してみろ。俺がどんな目に合うか火を見るより明らかだろ！」

「そんなの関係ないよ！」

「そうだよ！いいでしょ？」

よくない！俺は二人を部屋から摘み出した。
カギをしてロックをかける。
ふう、やれやれ・・・俺は寝間着に着替えベッドに潜り寝る。
なんか疲れた・・・いろんな意味で。

第３４話　再戦、リョウＶＳシグナム！（後書き）

白黒「第３４話完成！この調子でいけるように頑張るぜ！」

テンテン「とりあえず一つわかった事はあのティアナって娘はライバルだね。」

セイバー「なのは達に続いてかなり強敵っぽいですね。」

ライダー「頑張りましょう！セイバーにテンテン」

セイバー「はい！」
テンテン「ええ！」

白黒「やれやれそれでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はファーストアラート！」

第35話　ファーストミッション！（前書き）

白黒「ようやくファーストアラートだな。」

家康「戦いはあるのか？」

白黒「それは本編で。」

テンテン「第35話始まります！」

第35話　ファーストミッション！

リョウＳＩＤＥ

俺が機動六課にきてから早数日が経過した。
今日もフォワードメンバーの訓練を見るのだが。

「はあ・・・」

「どうしたのリョウ君？ため息ついて。体調でも悪いの？」

なのは・・・こいつまさかしらばっくれる気か。

「誰かさん達が毎夜何故か俺のベッドに潜り込んでくるおかげで精神的に参ってるんだ。しかもその一人が俺の隣にいる。」

「あ、あはは・・」

全く・・・ロックしているのに、何故かなのは達が俺のベッドに潜り込んでくる。
しかも二人づつだ。
おかげで精神がガリガリ削られて参ってるんだ。
最後になのはとの模擬戦をして、今日の早朝訓練は終了した。

「は～い。早朝訓練は終了。みんなお疲れ様。」

「「「「お疲れ様でした！」」」」

四人とも元気だな。

「四人とも、いい動きだったよ。」

「特にティアナの指揮はなかなかよかった。お前はやはり指揮官向けだな。今後指揮官の訓練でもするか？」

「い、いえ！今の訓練で一杯一杯です。」

「そうか。」

それは残念だな。
ティアナの頭なら前線指揮を任せれるのに。
他の奴等は戦う奴等ばっかりだからな。
こういう指揮タイプがほしい。
ん？

「なんだ？少し焦げ臭いぞ。」

「え？ああ！スバル！アンタローラーが！」

「え？ああ！まずいよ！ってティアも！」

「わああ！」

二人のデバイスから煙がでている。
という事はアレか。

「う～ん。もう設備しても限度があるね。」

「そうだな。どうせ新しいデバイスに変えるんだ。ちょうどいいな。」

「「「「新しいデバイス？」」」」

四人の頭の上に？マークが浮かぶ。

「それはあとでな。とりあえず、シャワーを浴びてからな。」

そう言い、俺達は公舎に戻る。

入り口前で車に乗ったフェイトとはやてに会う。

「フェイトちゃん。はやてちゃん。」

「なのは。」

「なのはちゃん。訓練終わったん？」

「うん。」

「これ、フェイト隊長の車ですか？」

「ええ。」

凄い車だな。

「高そうな車だな。」

「二人ともこれからお出かけ？」

おっと、俺も出かけなきゃならないからな。
こんな所にいちゃだめだな。

「なのは。先にいくぜ。」

「あ、うん。」

俺は先に公舎に入りいつもの服に着替える。
ガレージにあるバイクを取り出し跨がる。
このバイクは仮面ライダーカブトのカブトが乗るバイク、カブトエクステンダーだ。
入り口前でなのは達と出会う。
まだ入ってなかったのか。

「なのは。」

「リョウ君！」

「それ、リョウさんのバイクですか！？」

「そうだが。」

「凄い・・・」

「やっぱりリョウさんのバイクはカッコいいですね。」

「ティアナ。今度バイクの一つをやろう。」

「本当ですか！？」

おう！さすがはティアナ。
バイク好きだな。

「ああ。何がいいか考えておけよ。」

「はい！」

「それじゃあ俺は少し出かけるな。飯は先に食っててていいからな。」

「うん。」

エンジンを蒸し俺はバイクで走らせる。
ある場所に行くために。

一時間後、俺はスカリエッティの研究所に到着。
入ると、ウーノが迎えにきてくれた。

「久し振りだなウーノ。」

「ええ、久し振りですぬ。ドクターは奥の部屋にいます。」

「わかった、いくか。」

奥の部屋に行くと、スカリエッティが何かしていた。

「スカリエッティ。」

「おや、リョウではないか。どうしたのだい？」

「いや、久し振りに会いにきただけだ。」

「そうかい。それにしても聞いたよ。機動六課に配属したんだって。」

さすがはスカリエッティだな。
もう入手していたか。

「ああ。あそこには俺の友人達がいるからな。守らなきゃならないからな。」

「なるほど。・・・で、これからどうするかね?私達はこれからレリックを取りにいくのだがな。」

「どこへだ?」

知ってるがな。

「とあるリニアレールの列車の中にあるらしい。ガジェットに襲わせる。」

なるほどね・・・原作通りか。

「おそらく機動六課が邪魔するだろうな。君はどうするかね?」

ふむ、どうしようか。
あいつらがどれほどのものか見る必要はあるな。
なら。

「俺は・・・ん？」

なのはから念話がきた。

〔リョウ君！〕

〔どうした。なのは〕

〔ガジェットが現れたの！〕

〔そうか〕

要するに現場に急行してほしいそうだ。

だが。

〔悪いが今回は俺は参加しない〕

〔え？どうして？〕

理由はちゃんとある。

俺が行ってはほとんどやってしまう事とこれはフォワードメンバーがどれほどの強さを知るには絶好の機会だからな。

〔そういうわけだから俺は行かない〕

〔・・・わかったよ。任せて！〕

なのははそう言い念話をきった。

「そういう事で俺はいかん。しばらくここにおらせてもらうぜ。久

し振りにあいつらに会いたいしな。」

「そうか。娘達は休憩室にいるはずだから。」

「わかった。」

俺は部屋を出、休憩室にいく。

・・・つくと三人がテーブルにいる。

「よ。」

「リョウ！」

チンクが気付き、『ウィンディ』と『セイン』が近付く。

「リョウさん。久し振りッス！」

「久し振りだね。」

本当に久し振りだな。

一年ぶりかな。

「久し振りだな。リョウ。」

「ああ久し振り。・・・他の奴等は？」

周りを見ると他の奴等がいない事に気付いた。

「ほとんどは訓練室で訓練中だ。クアットロは別の部屋で研究中だ。アンタのをな。」

「なるほど。・・・ん、どうやら訓練は終わったようだな。」

すると、休憩室に他のナンバーズが入ってきた。

「あ、リョウ。」

「よ、お前ら。お！メンバー全員揃ったのか。」

「ああ。紹介しろよ。」

トーレがまだ会ってない三人を前に出す。

「『セッテ』。」

「『オットー』です。」

「『ディード』です。」

まさかもう生まれていたとは。
本来はまだ先だと思ってたのに早いな。

「おいリョウ！今暇か？」

「ん？どうした『ノーヴェ』。」

「もし暇だったらあたしと勝負しろ！」

ああ、そういえばノーヴェって戦闘狂なんだよな。
仕方ない。

「わかったわかった。相手してやるよ。ついでだから他の奴等も相手してやる。」

「そうか。ならば我々も行くぞ。今度こそ勝つ！」

俺はナンバーズ数人と一緒に部屋を出て訓練室に行く。

スバルＳＩＤＥ

初めての機動六課でのミッション。
私はとても緊張した。
私だけじゃなくエリオとキャロも緊張していた。
でも、ティアだけは余裕があった。
やっぱり慣れてるのかな。
新デバイスの力は凄い。
今の私にはそんなに使いこなせないけど、いつかは使いこなしてみる。
ティアはまるで手足のように新デバイスを軽々使いこなしてみせた。
やっぱりリョウさんに鍛えられただけあって凄いな。
エリオとキャロはピンチになったりしたけどなんとか切り抜けたようだ。
それにしてもあのガジェット達、まるで私達の力を試してみるって感じで挑んできたな。
なんでだろ？
まあいいか、ミッションも終わったしレリックも手に入れたから帰

還しよう。

「一緒に頑張ろうね。マッハキャリバー。」

〔わかりましたマスター〕

帰ってきたらリョウさんも帰ってきていた。
その時リョウはなのはさん達に詰め寄られていた。
しかもティアもなのはさん達と一緒に。
なんでだろ？

第３５話　ファーストミッション！（後書き）

白黒「第３５話完成！次はドラマＣＤかな。」

ライダー「忙しそうですね。リョウ。」

セイバー「大変ですね。特に女性関係で・・・これは少し灸をすえる必要がありますね。」（ゴゴゴゴ！）

白黒「（こわっ！）・・そ、それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

ライダー「セイバー。もし灸をすえるなら私も同行します。」

テンテン「あたしもよ。」

三人「「「うふふふふ・・・」」」

白黒「こ、恐すぎる！」（ガクガクブルブル・・・）

第３６話　地球へ！（前書き）

白黒「金が～、金が減っていく～。」

テンテン「どうしたのよいきなり？」

白黒「実は数日前に家のじいちゃんが病院に入院してね。見舞いに行くわけよ。そのおかげで金が徐々に減ってきてるんだよ～。」

ライダー「それは・・ご愁傷様です。」

家康「第３６話出陣する！」

第３６話　地球へ！

リョウＳＩＤＥ

あ～～、二日前は酷い目にあった。
スカリエッティの研究所から帰ってきたら、いつの間にか問い詰められたし。
しかも、女の所に行ってたのかってなんでだよ。
そりゃ、ナンバーズにあっていたがどうして分かったんだ？
聞いたら匂いとか言いやがった。
お前らは犬か！！
全く・・・朝になり、いつものように俺に密着する二人（今日はフェイトとアリシア）を退し制服に着替え部屋からでる。
食堂に行き朝食をたべてる最中にはやてがいきなり声を張り上げて喋り出した。

「隊長陣とフォワード陣とリョウ君は聞いてほしいんや。」

「ん？」

「どうしたの？はやてちゃん。」

「実はな。今日は派遣任務に行く事になったんや。」

「派遣任務？」

派遣任務・・・確かドラマＣＤに収録されてた話だったな。

そうか、もうそんな時期か。

「何処に行くんですか？」

「はやて、何処に行くんだ？」

「ふっふっふっ、なのは達隊長陣は特に驚きや。なんと！派遣先は地球や！」

「「「「地球！！？」」」」

地球に行くと知り、なのは達地球出身者は驚く。
俺は驚くふりをする。

「というわけで食い終わったら早速地球に行くで。」

『『『『了解！』』』』

その後、食い終わりいつもの服に着替えみんなと合流し地球海鳴市に行く。
海鳴市に到着。

「久し振りだな。」

「ここが地球・・・」

「え？魔法文化０！？」

「でも、科学は高いですよ。」

フォワードメンバーは地球に来て感動と驚きに満ちた表情で周りを見る。

「なあはやて。これからどうするんだ？」

「ん？まずある人物二人が来るのを待ってから別れて行動や。」

ある二人？・・・ああ、あの二人か。

するとエンジン音が聞こえその方向に顔を向けると車が一台が物凄いスピードでこっちにくる。

みんなの前に止まり、ドアが開く。

「なのは！フェイト！はやて！」

「なのはちゃん！フェイトちゃん！はやてちゃん！」

やっぱりアリサとすずかか。

「久し振りだな。アリサ、すずか。」

「リョウ！」

「リョウ君！」

二人が俺に気付き、接近してくる。

「なんでアンタがここにいるのよ！」

「リョウ君機動六課に入ったの！？」

「頼むから二人一辺に話しかけるな。一人づついってくれ。」

落ち着かせて、なんでいるのか理由を答える。
理由を聞くと納得したようだ。

「それで、どういうチームで行動するんだ？」

一応原作通りのチームで行動するようだ。
俺は誰と？

「もちろん！」

「あたし達よ！」

両腕にアリサとすずかが抱き付いてきた、ってこの二人！？

「何故？」

「何故ってあたし達と一緒じゃいやなの？」

「い、いやそういうわけでは。」

「じゃ、いいよね。」

ぐッウウウッ、なのは達の視線が刺さって苦しい。
このままだと精神が参っちまう。

〔ごめんなのは！フェイト！はやて！みんな！あとでなんか奢るから！〕

〔う～ん。わかったの。それで許してあげる〕

どうやら助かったようだ。
財布の中身がかなり減りそうだけど。

「そんじゃあ行こうか。」

はやての合図でみんなと別れて行動する。

ティアナＳＩＤＥ

ここが地球海鳴市・・・リョウさんとなのは隊長達が生まれ住んでた町。
どんなかと思ってたら緑はあるし、町並みもミッドのちょっと田舎あたりと大差ない。
ただ魔法文化が０なだけ。

「凄いねティア。ミッドの田舎あたりとあんまし大差ないよ。」

「そうね。」

私とスバルは町の探索をしながらサーチャーを置いていく。
途中スバルがアイスを食べようとしたが、それは私が必死に止めた。

「スバル、ティアナ。サーチャー巻き終えた。」

「なのは隊長。」

「はい。巻き終えました。」

「そ、これからどうしようか。」

どうしよ、確かに暇になってしまったから。

「あ、ちょっとごめん。」

突然なのは隊長の携帯が鳴り出した。
誰からだろ?

「はいもしもし、あ母さん。」

「「え?」」

え?お母さん?

〔ティ、ティア。今なのはさんがお母さんって〕

〔まあ、いても不思議じゃないんじゃない〕

なのは隊長のお母さんか・・・どんな人なのかな?

「うん。じゃあね。・・・っというわけでちょっと寄り道するけどいいかな?二人も一緒にくる?」

「え?いいんですか?」

「うん。私の家すぐ近くだから。」

どうしようか。
スバルと顔を合わせる。
〔どうしようティア？〕
〔う～ん。いいんじゃない。どうせ暇だし〕
決まりだね。
「わかりました。ご一緒にいきます。」
「それじゃあ行こうか。」
私とスバルはなのは隊長に連れられ、なのは隊長の実家に行く。
数分後についた・・ってここ。
「喫茶店ですか？」
「そ。翠屋といって私の両親のお店なの。」
なのは隊長の両親、喫茶店の店長なんですか。
「あ、ついでだからリョウ君にも来てもらおう。」
なのは隊長はそう言いリョウさんに念話を送る。
「・・・リョウ君あとで来るから私達は先に入りましょう。」
そう言いなのは隊長とスバルと一緒に翠屋に入る。

「いらっしゃ・・あら、なのは久し振りね。」

「お母さん。」

え?この人が、なのは隊長のお母さん?
嘘?すごく若い。
見た目どうみても二十代、なのは隊長と並んで立っても姉妹にしか見えない。

〔わ、若い!なのはさんのお母さんすごく若くみえる!〕

スバルも驚いてるわね。
当然ね、有り得ないほど若いもんね。
見た目が。

「おお、なのは帰ってきたのか。久し振りだな。」

「お父さん!」

「「え!?」」

え、え~~~!?この人がなのは隊長のお父さん!?
こ、この人も見た目が若い。
なのは隊長の家系は見た目が若い体質なのかな?
その後、挨拶をして、リョウさんが来るまで私とスバルはケーキをご馳走してもらった。

リョウＳＩＤＥ

なのはからいきなり念話がきて翠屋に寄ってと言われたので行く事になった。
もちろんアリサとすずかを連れてだ。
翠屋に到着し、中に入るとなのはと両親の他にティアナとスバルがいた。

「あら、リョウ君。いらっしゃい。アリサちゃんにすずかちゃんも。」

「どうも。」

「「はい。」」

「おおリョウ君。久し振りじゃないか。」

「士郎さん。久し振りです。」

原作でも見たけど、二人ともやっぱり見た目が若い。
今日はナルトとヒナタはいないようだな。

「あ、リョウ君。あとでナルトとヒナタがこっちに来るそうよ。」

まじかよ。
なんでくるんだよ。

「リョウ。久し振り。」

「リョウ。帰ってきたなら言わなきゃダメよ。」

って考えてる間に来たよ。

なんでくる。

「父さんに母さん。」

「え？この二人が。」

「リョウさんの両親ですか？」

正確には違うがな。

〔なんで来るんだよ。説明しろ〕

〔いやあ、これから関わる人達を見たくてな〕

〔いずれあなたに新たなお嫁さんができるのだから〕

おい！それはどういう意味だ！

なんでそうなる。

新しい嫁とか、いつから俺はそんなハーレム野郎になったんだよ。

〔相変わらず無自覚か〕

〔あれだけ新しい妻をゲットしているのに〕

〔マスター。正直に相手が多すぎると夜が大変です〕

こ・い・つ・ら・は～！何を言ってやがる！

その後、軽く談笑しケーキを食べる。

「そういえばリョウ君。」

「はい？」

「なのはと何処までいったんだい？」

「ブッッ！！」

「・・・は？」

おいおい、いきなり何言ってやがる士郎。

「おい士郎さん。何いってるんだ？」

「キスはもうしたのか？コースは何処までいった？Ａか？それとも、もうＣまでいったのか？だったら孫がくるのが楽しみだ。」

くおら～！士郎！おまっ、なのはやみんなの前で何言ってやがる！なのはも何赤くなってやがるんだ！

桃子さん！なんでナルトとヒナタと一緒にあらあらまあまあ、って言ってるんだ！

スバルは赤くなってるし、ティアナとアリサとすずかは赤くなりながらも黒いオーラが出てる！

・・・もういや、誰か助けてくれ。

第３６話　地球へ！（後書き）

白黒「第３６話完成！ドラマＣＤ編です。」

セイバー「ドラマＣＤ編ですか。」

ライダー「それにしても、ＮＡＲＵＴＯ編よりも長いですね。」

白黒「仕方ないよ。そうなっちゃうんだから。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第３７話　銭湯に行こう！（前書き）

白黒「なんとか順調に書けてるな。」

テンテン「そうね。」

セイバー「この調子で書ける事を祈ります。」

白黒「うすっ！」

ライダー「第３７話始まります。」

第３７話　銭湯に行こう！

リョウＳＩＤＥ

あのあとなんとかごまかし、いつもの談笑に戻った。
数十分後、フェイト達がきて、集合場所に行くと伝えてきてくれた。
俺達は士郎達にお礼を言い、集合場所に移動する。
集合場所に行くと、残った全員が集まっており、さらにアルフと美由希とエイミイがいた。
そして、みんなで焼き肉パーティーをする事になった。

「・・・のだが、なんだこのカオスは。」

焼き肉といえば肉の取り合いだ。
そこには隊長だ部下だという壁はない。
ただ多くの肉を食べるのみ。

「肉・・・買っとけばよかったかな。」

〔そうでしたね。まさかこうなるとは思いもしませんでしたね〕

まあ、こうなっては仕方ない。
焼き肉パーティーも終わりはやてが立ち上がりみんなを見渡す。

「さて、お腹も膨れたしみんなで銭湯に行くで！」

「「「「銭湯？」」」」

はやてが突然銭湯に行くと言ってきた。
フォワードメンバーは頭に?マークがつく。

「そうか。ミッドには無いのか。銭湯。」

「そうやねん。実は銭湯は無いねん。」

ドラマCDでも不思議がってたからな。
やっぱりか。

「銭湯というのは簡単に言ったら大きな風呂ってやつだ。」

「大きな風呂ですか?」

「ま、こういうのは聞くより直に見たほうが早い。」

というわけで俺達は銭湯に行く。
数十分後、銭湯に到着。

「いらっしゃいませ?!だ、団体様ですか?」

「えっと・・・大人17人と・・・」

「子供4人だね。」

子供四人・・・エリオとキャロとリイン?とアルフか。
とりあえず今はさっさと風呂に入りたい。
なんか疲れた。
俺はエリオと一緒に男湯に行く・・・のだが。

「エリオ君。一緒に入ろう？」

「え？なに言ってるの！？そんなの無理だよ！」

「ふふっ、エリオ君。あの張り紙を読んでみて。」

「え？・・・十一歳以下はどっちでも入れます。ええ！？」

「ふふっ、エリオ君十一歳以下。」

確かに、張り紙をよく読んだらそう書いてある。

「ぼ、僕はリョウさんと一緒に男湯に入るよ！」

「エリオは私達と入るのイヤなの？」

「で、でも・・・ス、スバルさんやティアナさん隊長達はイヤでしょ。」

「そう？私達は別に気にしないわよ。」

このままだと、エリオ女湯に入っちまうな。

仕方ない、助けてやるか。

「おいお前ら。その辺にしてやれ。エリオが困ってるだろ。エリオは男子なんだ。だから・・・」

「だったらリョウも入ればいいじゃない。」

は？いまフェイトはなんつった？

「あ、それいいね。リョウ君一緒に入ろう。」

こ、こいつらアホか～！
なに考えてやがる！しかも、みんなその手があったか・・って顔をするな～！
ま、まずい！このままだとエリオはともかく俺は犯罪者のレッテルを貼られてしまう！

「エリオ！早く風呂に入るぞ！ここで時間をつぶしてる場合じゃない！」

「あ、はーい！」

俺はエリオの手をひっぱり男湯に入る。
なんとか助かった。
すっげえ疲れたからさっさと脱いで入ろ。

エリオＳＩＤＥ

リョウさんに連れられ男湯に入る。
服を脱ぎ裸になる。

「ふぅ～。いい湯だな。」

「は、はい。」

リョウさんの体・・すごくひき締まっている。
筋肉のムダがほとんどない。
どうやったらこんな体になるのかな?

「どうした?そんなに俺の体を見て。」

「あ、いえ。・・・リョウさんの体、すごく鍛えられてるなって。」

「・・・そりゃ、お前ぐらいの年頃からずっと鍛えてきたからな。
ムダな筋肉なんかつけないようにしたりと、結構大変だったけどな。」

(本当はこの世界に来る前からだけどな)

僕と同じ年頃から、僕もこれから頑張れば・・・

「それよりエリオ。他にも言いたい事でもあるんじゃないんか?」

!!・・・気づかれた。

「・・・なんで僕が何か言いたいのかわかったのですか?」

「お前は俺を見ると何か言いたそうな感じだったな。」

「・・・実は・・・僕はフェイトさんと同じクローンなんです。」

「クローン・・・F計画のか。」

さすがに知ってますか。

「そうです。僕はF計画によって作られたエリオ・モンディアルのクローンです。」

本物のエリオ・モンディアルはすでに死んでいて、その両親が僕をクローンを作った。
でも、僕は本物のエリオじゃないから研究所に売られた。
そこで僕は酷い実験を受け心を閉じた。
そこに管理局、フェイトさんに助けられた。
けど、僕の心は人を信用できなくなって保護してもらっても拒絶を続けた。
けど・・・

「その時、フェイトさんが優しく包み込んでくれたんです。そのおかげで僕は今の僕ができたのです。フェイトさんは僕の保護責任者になってくれたんです。僕はフェイトさんに恩返しがしたい。そのために僕は・・・」

「管理局に、機動六課に入ったのか。」

「はい。」

僕はなんでかリョウさんに聞いてほしかった。
多分、罪の意識を誰かに・・・

「お前は自分のせいでフェイトを苦しめたと思ってるのか?」

「・・・はい。」

「だとしたらとんだお門違いだ。」

え？

「お前に罪なんざない。罪はお前を作ったクズと親という名のカスだ。作っといて捨てモルモットのように扱ったな。
それとフェイトがそんなにお前を、お前のような子ども達を助けたのは自分と同じ存在を救いたかったからだ。」

それは知っている。
確かフェイトさんもアリシアさんのクローンだと聞いている。

「フェイトもな。昔は虐待を受けてたんだ。お前と同じ理由でな。」

え！？そうなんですか？
フェイトさんのお母さんプレシアさんとは会った事がありますがそんな人には見えなかったですけど。

「まあ、ちょっとな。とある理由で今の優しく母親になったんだ。」

へ～、そうだったんですか。

「あいつはお前から恩返ししてほしいとか考えてない。ただ、救いたいから助けたにすぎない。だから、罪や恩返しをしたいなんて考えるな。お前がしたいようにやりな。それが、一番の恩返しになるしフェイトも喜ぶ。」

リョウさん・・・ありがとうございます。

「はい！」

その後、キャロがこっちに来て子ども風呂に入り女湯に入っちゃった。
結局こうなってしまうんですか。

リョウＳＩＤＥ

銭湯から上がった直後、ターゲットが見つかった。
フォワードメンバーの活躍により確保完了。
その後、ホテルに泊まり込みグッスリ寝た・・・わけはなかった。

「アリサ、すずか。どういうつもりだ？」

「ど、どういうつもりってべ、別に大した事ないわ！ただ、アンタが一人で寝れないと思って仕方なく一緒に寝てあげるのよ！」

「クスッ、アリサちゃんったら。聞いたよ。なのはちゃん達とも一緒に寝たんだって？なら、私達と一緒に寝ても問題無いでしょ？」

なに言ってるのこの二人！？確かに一緒に寝たのは認めるけど、それは勝手に。

「ふ～ん、やっぱり一緒に寝たんだ。しかも勝手にね。」

心を読んだ！？

「ならいいじゃない。私達も勝手に一緒に寝るんだから。」

だめだこりゃ。
俺は諦め仕方なく一緒に寝る事にした。
次の日の朝、起きたら目の前になのは達が部屋に入ってきてお仕置された。
そして、ミッドに帰ろうとするとアリサとすずかの二人がとんでもない事を言ってきた。

「「「え～～！！二人とも機動六課に入る～！！」」」

「そうよ。あたし達だって戦えるわ。それにリョウもいるなら絶対に行くわ！」

「なのはちゃん達が心配することないわよ。私達だってリョウ君の力になりたいから。」

「で、でも家族は？」

「許可は取ってあるわ。」

「問題無し。」

いつの間に、こりゃテコでも動かんな。
なのは達は粘ったんだが俺の言葉で渋々許可した。
俺達は機動六課に帰った。
アリサとすずかを加えて、帰ってきてすぐに俺はなのは達に睨まれた。

第３７話　銭湯に行こう！（後書き）

白黒「第３７話完成！ドラマＣＤ編終了。」

家康「今のところは原作に忠実ってとこかな。」

セイバー「ですが、このあとどうするか考えてあるのですか？」

白黒「もちろん、任せてくれ。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はホテルアグスタ！」

第３８話　ホテルアグスタ護衛任務！（前書き）

白黒「なんか前書き書くのもめんどくさくなってきたな。」

セイバー「それはよくありませんね。ちゃんと書きましょう。」

白黒「無理。というわけで次回は前書き無しで。」

ライダー「これは、テコでも動きませんね。仕方ありません。タイトルだけでもいいますか。第３８話始まります。」

第３８話　ホテルアグスタ護衛任務！

リョウＳＩＤＥ

俺は今、なのは達とフォワードメンバーと一緒にヘリに乗っている。
というか思ってたのだが、このヘリって見た目以上に中は広いんだな。

「さて、今回の任務はホテルアグスタの護衛任務や。」

「なんで護衛なんですか？そこにレリックはあるんですか？」

「いんやない。ただ、そこでオークションをやるんや。まあ、それは重要やない。まずはこれを見てほしい。」

はやてがそう言うとモニターに一人の男が写し出された。

「ドクタージェイル・スカリエッティ。広域次元犯罪者で数々の違法をしてきた重罪人。彼がオークションの物を狙ってる可能性があるの。」

フェイトがスカリエッティの画像をみんなに見せてそう言う。
みんなに、特にフェイトに今のスカリエッティを見せたらどんな反応するかな。
今のあいつはかなりいい人だからな。
それに、あいつはアグスタにこない。
実は昨日あいつに会って直接聞いたからな。

それに、妙な事も・・・

昨日・・・

「スカリエッティ。明日ホテルアグスタでオークションが行われるだろ。それ、どうするんだ？」

「ん？ああ、私は関与しないよ。もう興味も無いしね。」

「そうか。」

「そういえば、最近妙な事が起こってるんだが。」

「妙な事？」

「ああ、非合法の研究所が謎の集団によって壊されていってるんだ。」

「謎の集団？集団名とか知らんのか？」

「分からん。だが、奴等は研究所だけではなく管理局なども潰してるようだ。」

「管理局もか。ま、いいがまさか。」

「ああ、その謎の集団がアグスタを襲撃するそうだ。」

「しかし、よく調べれたな。」

「娘達が特にドゥーエがね、頑張ってくれたからな。」

「わかった。情報は助かった。注意する。お前達も気をつけろよ。狙われる可能性があるからな。」

「わかった。その時は、君に頼む事にするよ。」

・・・謎の集団か。
どっちにしても厄介な事ができたな。
俺がこの世界に来たからだろ。
もしかしたら、転生者が・・・

「あの・・・シャマル先生。さっきから気になってたんですけどその箱は一体なんですか？」

「ん？ああこれ？うふっ、隊長たちとアリサちゃんとすずかちゃんとアリシアちゃんとリョウ君のお仕事着。」

俺はシャマルとキャロのやり取りを聞いて思考を止め現実に戻す。
いや、それより今シャマルはなんて言った？
俺の仕事着だと？

「どういう事だシャマル。説明しろ。」

「説明って言われてもそのまんまの意味だけど。」

「ふざけるな。勝手な事をいうな！大体なんで俺が！」

「いいじゃない。女だけだと、何かと不安で。」

「しかも、どうやって服を!?」

「あ、それは私がインターネットで買ってん。」

「ちなみにサイズは、あたしがお義父さんとお義母さんに聞いたから。」

「アリシア!お前な!しかも何気に義父さんと義母さんと言わなかったか!?」

抜け目ない。

それを聞いてなのは達が怒ってるし。

「リョウ。」

「フェイト?」

「人間、諦めが大事だよ。」

俺はその場でｏｒｚの体勢になった。

「いらっしゃいませ・・?!!」

「機動六課です。ご苦労様です。」

はやてが名刺を見せホテル内部に入る。

なのはとフェイトとはやてとアリシアとアリサとすずかはドレスを着ている。

みんなそれぞれの色をした綺麗なドレスを着ているな。

「たくっ、なんで俺がこんな堅っくるしい格好をしなくちゃならない。俺には似合わんぞ。」

俺はスーツを着ている。

はっきり言ってしまえばすぐにでも脱ぎたい。

「そんな事ないよ。とても似合ってるよ。」

「いや、どっちかいうと似合うといったらお前達だろ。すごく似合ってる。綺麗だぞ。」

「にゃはは。／／／／」

「ほ、本当？／／／／」

「本心だぞ。どっかのお姫様みたいだぞ。」

む、今のは少しクサかったか。

「お姫様・・／／／／」

「ふ、ふん！一応喜んであげる。／／／／」

「そりゃ嬉しいな。／／／／」

「えへへ・・・／／／／」

あんなクサいセリフでも喜ぶのか。

まあいいか。

「とりあえず、さっさと移動しようぜ。こんなところで突っ立ってないでな。」

「そやな。そんじゃ、移動開始しますか。」

それにしても、さっきからチラチラ見られて気分よくなかった。
特に女性から好奇な目で見られてて、なんでだ?

(さすがはマスター。すでにこのホテル内にいる女性陣を魅了するとは)

ティアナSIDE

私達はホテル外で警護にあたっている。
今のところは何もなしだね。

「なんかヒマだねティア。」

「文句言わない。」

その時、センサーがなった。
敵!

「ティアナ!敵よ!」

「シャマル先生モニターをこちらにも見せてください！」

「わかったわ。」

モニターが映し出された。

何？アレ・・・見た目はガジェットだけど、色が黒い。

「何アレ？ガジェット？」

「でしょうね。もしかしたら色違いかも。」

シグナム副隊長とヴィータ副隊長とザフィーラさんが戦闘を開始した。

あっさり破壊されていく。

「ねえティア。なんかあのガジェット達、あんまり強くないね。」

「そうですね。なんか動きも今までのガジェットより単調ですね。」

確かに、黒なのにこの動きの遅さと単調さ。

劣化品みたい。

なんだかスカリエッティって奴が作った物じゃないって感じ。

「ティアナさん！空間転移の反応が！魔方陣がきます！」

敵はそういう存在もいるというわけね。

「いくわよ！スバル、エリオ、キャロ！」

「「了解！」」

私達は転移してきたガジェットもどきと交戦開始した。

「はあああ！！！」

「おおおお！！！」

スバルとエリオが前に出てガジェットもどきを蹴散らしていく。

強くなってる。

二人とも、あの初めての戦いから個人訓練に入って力をつけてきてる。

二人ともリョウさん直々に鍛えてもらってるからスバルは武術を、エリオは槍術を教えてもらって腕が上がってる。

おかげでかなり戦闘力が上がってる。

「っと、感心してる場合じゃないか。いくわよ！クロスミラージュ！」

〔了解！〕

私もクロスミラージュで敵を撃ち抜いていく。

「ティアナ！そっちに敵の増援がくるわ！」

「増援・・・」

「どうする？」

どうしよ。

このまま攻撃体勢にするか、それとも防御に周るか。

「シャマル先生。副隊長達は？」

「敵の数が予想以上に多くてそっちにこれません。ここは・・・」

「いえ、このまま戦闘を続行します。」

援護がこないならここは攻める。
数が多くなるなら防衛はキツい。
攻撃は最大の防御と言うしね。

「無茶よ！相手が多すぎるわ！ここは。」

「大丈夫です。なれない防衛より慣れてる攻撃のほうがいいです。
いいわね。スバルにエリオにキャロ！」

「「はい！」」

「・・・わかったわ。でも、気をつけてね。」

「ありがとうございます！」

シャマル先生との通信は終わった。

「さて、いくわよ！敵は増えてくるわよ。私達はそれ以上に敵を撃破していくわよ！」

「「「了解！」」」

「キャロ、二人にブースト。できる。」

「できます！」

「お願い。さあ、攻撃再開！」

「ケリュケリオン！」

キャロがスバルとエリオの二人にブーストをする。
おかげで二人の動きがさらによくなる。
私はその場で対多数用魔法を使用する。

「はあああ！スバル、エリオ！離れて！」

スバルとエリオが敵から距離を取り離れる。

「クロスファイヤー！！フルバースト！！！」

多数の魔力弾を撃ち放つ。
これだけの魔力弾を回避するのは不可能よ。
全ての敵に直撃し連続で爆発が起こる。

「やった～！さすがはティア！あれだけの敵を撃破するなんて！」

「うるさいわね。まだ敵はいるのよ。油断しない。」

私が喝をいれる。
喝を入れたことで三人は構える。

「ふぅ～ふっふっふっ。」

「声？」

「え？」

「一体誰？」

私達は警戒する。
ガジェットもどきの後方から一人の人間が現れた。
性別は男、茶髪で目はオッドアイ右が黒で左が赤、服は動きやすそうな格好。
見た目は好青年っぽいけど、なんか気持ち悪い。

「ティ、ティア。」

「わかってる。」

こいつ、まるで私達を舐めまわすように見ている。
けど、それ以上に強い。

「おお、可哀相なマイレディ達。僕は君達を助けにきたのだよ。」

助けに？嘘をつくな。
どうみたってガジェットもどきを従えてる存在じゃない。
何者？

「このオリ主、奉月仮名機（ほうづきかなき）がね。」

第３８話　ホテルアグスタ護衛任務！（後書き）

白黒「第３８完成！ホテルアグスタ編です。」

テンテン「謎の集団か。どんな奴等がいるのかしら。それと集団名が知りたいな。」

白黒「それはまだ先かな。集団名は次回判明予定だから。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第３９話　謎の集団！

スバルＳＩＤＥ

俸月仮名機・・・この人はそう名乗った。
オリ主って何の事か分からないけどはっきりしてるのはこの人は敵だってことだ。

〔スバル、気をつけなさい！ふざけてるけどこいつ、かなりできるわ〕

〔うん！手強そうね〕

〔エリオとキャロは下がってガジェットもどきを！〕

〔〔はい！〕〕

エリオとキャロは下がる。

「ん～？君達二人が僕の相手かな？だとしたら僕は嬉しいね。」

う・・この人、ニタニタと笑いながら私達を見てるよ。
き、気持ち悪い。

「私達はちっとも嬉しくないわ。」

「つれないなあ。これから君達二人は僕の女になるのだから。」

「お断りよ！スバル！」

「うん！」

私はリボルバーナックルを構えながら敵に突っ込む！
ティアが援護射撃で牽制する。

「うおおお！！」

食らえ～！

「！！？」

「危ないな～。」

障壁！？でも！

「む？」

「おおおお！！！」

こんな障壁で私の攻撃が防げるものか～～！！

「僕の障壁にヒビが！」

敵の障壁が割れる瞬間、敵はバックステップで下がって躱す。

「驚いたな～。こんなに強いなんてびっくりだよ。」

余裕って顔。
なんかムカつく。

〔ティア。こいつの顔、歪ませてやりたい〕

〔奇遇ねスバル。私も同じよ。あのニヤけヅラ、驚愕に歪ませてやる〕

よし！・・・いくぞ！

「いくわよ！スバル！」

ウイングロードを展開し、私達は一緒に駆ける。
ローラーを全開にしてウイングロードを走りまくる。

「なるほど。目眩ましですか。でも、僕には効きませんよ～。」

違うよ！
これは。

〔いい？スバル〕

〔ＯＫ！〕

「はあああ！！」

まず、ティアが牽制しながら敵の地面に魔力弾を撃つ。
地面に当たり土煙ができる。
私はその中に突っ込む。

「ふっふっふっ、小賢しい真似をしますね。でも・・・」

今だよ！ティア！

「てやああ！」

「なに？ティアナが前に？」

ティアと私が入れ替わり、ティアが接近戦を仕掛ける。

「驚きました。まさかティアナが格闘技をするとはね。」

「まだ余裕って顔ね。なら、これでどお？」

銃撃音が聞こえる。

ティアがクロスミラージュで撃っているようだね。

「ふっふっふっ、どこでこんな技術を？でも、僕には勝てない。」

〔どうかな？いいスバル〕

〔いつでも！〕

私はマッハキャリバーをカートリッジロードさせる。

いくよ。

「うおおお！！」

「なるほど、大技ですか。でも、僕には・・！？」

ティアが敵を掴む。

「な、何を!?そんなことをすれば君も!」

「ありがと。気をつかってくれて。でもね。」

「ディバイ～ン!」

「本当に私は本人かしら?」

「?!!しまっ!」

「バスターー!!!」

ティアをいや、フェイクシルエットのティアごと敵にディバインバスターで撃ち抜く!

「上手くいったわねスバル。」

「うん!」

ティアが撃った弾幕はただの目くらましじゃない。
ティアの幻術を見せないための土煙だったんだよ。
さらに私が敵の注意を引きつける。
そしてフェイクシルエットのティアが戦いあたかも本人であるようにみせかける。
ティアのフェイクシルエットはかなり強力でただの分身ではなく実体するタイプなんだって。
これはティアが凄腕だから。
ティアはまだまだだって言ってるけど。

そして、私の攻撃で決める。
単純なようで結構難しい。
あ、あと、ティア本人は自身の気配を消す魔法で隠れて分身体をコントロールしてたんだ。

「やったかな？」

「わからないわ。でも、あれだけの攻撃力ならかなり食らってても。」

煙が晴れる。
！！・・・嘘！？

「おのれ～！まさかこの僕にここまで食らわすとは！小娘どもめ～！」

そんな・・ほとんど効いてない！？
あの威力を耐えきったの！？

「へぇ・・・ようやくそのニヤけヅラの皮が剥れたようね。醜いツラになったわね。」

驚きながらもティアは敵を挑発する。

「もう許さん！せっかく優しく諭してやろうと思ってたのに、もうやめだ！二人まとめて痛め付けて僕の奴隷にしてやる！」

な、なんかヤバくなってない？

「ティア！」

「分かってるわ！やっと本番ね、きなさい！」

「うるあああ！！」

「「きゃああ！！」」

戦闘体勢を取ってると敵の魔砲を食らった。

「ス、スバル・・大丈夫？」

「な、なんとかね。とっさに障壁をしてなきゃ・・・ヤバかった。」

クッ・・・なんて魔砲なんだ。
なのは隊長より強力だった。
このままだと。

「本当は痛め付けて従わせるなんて、僕の主義に反するんだがね。
君達が悪いんだからね。君達がたて突くから。」

「悪かったわね。」

「まあいいさ。僕の主義に反するが君達自身をいただかせてもらうよ。」

「私達を、どうする気？」

「ふっふっふっ、君達は僕たちのために動く人形・・いや、性奴隷となるんだ。」

性奴隷?!!いやだ!そんなの!

「お断りよ!犯されたくないわ。」

「ふっふっふっ、そう言わずに。今は何もしませんよ。僕たちのいる場所に行けばされますけどね。」

い、いや・・・お父さん、お母さん、お姉ちゃん・・・リョウさん!!!

「では・・・」

「そうはさせん。」

敵の顔面を何かが当たりおもいっきり吹っ飛ばされた。
何かが、私達の前に立った。
あの人影は・・・

「無事か?二人とも。」

「「リョウさん。」」

リョウ（分身体）ＳＩＤＥ

分身体の俺は本体に頼まれてスバルとティアナの援護にきた。
ちなみにいつ影分身したのかというとここにきてすぐにしたのだ。

まあそれはいい。
こいつか、謎の集団の一員だな。

「怪我はないか？」

「大丈夫よ。スバルは？」

「私も。」

「それはよかった。こいつは俺に任せろ。二人はエリオとキャロの援護に向かいな。」

「「はい！」」

二人はエリオとキャロの援護に向かう。
さて、俺はこいつからいろいろ情報を手にいれないとな。

「いたた・・・やってくれますね～。あなたは誰ですか？」

「誰でもいいだろ。」

ふん、加減して蹴りをいれてやったがまだ余裕って感じだな。

「ふん！モブですか。まあいいでしょ。見たところ大したことなさそうな相手そうですしね。軽～くねじ伏せてやりましょう。」

ふん、力の差も理解できないようだな。
外見だけで判断するとは、どうみても１０年前に現れた転生者と大差ないな。

「ふっふっふっ、安心してください。死ぬのは一瞬ですみます。」

「なら、冥土の土産に教えてくれないか？お前は転生者か？そして、お前達の集団名は？」

「・・・ふっふっふっ、いいでしょう。どうせ死ぬのですから、教えてあげましょう。」

単純な奴だな。
こんなあっさり聴けるなんてな。

「君の言う通り僕は転生者です。そして、僕たちの組織名は『転生神』！」

「転生神。」

なんともセンスの無い組織名だな。

「そうです。僕たちの構成員は転生者達と管理局を憎む者達で構成されている。僕たちの目的はこの世界をよりよき未来にするためだ。」

「よりよき未来？・・違うだろ。自分達の欲望のためだろ。」

「ふっふっふっ。その通りだよ。転生したからには当然だろ。それが転生者になったのだからな。」

「そうか。」

なるほど・・・充分に情報を得られた。

これだけ得れればいい。

「最後に一つ。」

「なにかな?」

「アンタの組織の親玉の名は?」

「そんなの知る必要無い。もう死ぬのだからな。」

「・・・」

さすがにそれは教えてくれんか。
まあいいがな。

「もう問答も終わりだ。さあ、そろそろ・・・」

「・・」

俺は瞬歩で奴の横を通り過ぎる。

「死ね。」

その瞬間、奴の首と両腕と胴体が切り裂かれ絶命した。
俺の左手には投影された刀と鞘がある。
刀は鞘に納められている。
さっきの瞬歩で奴を斬ったからだ。

「さて、組織名も分かったし、構成員も分かった。数はかなり多いと見て間違いないな。」

大将の名は分からなかったが、まあよしだな。
さて、敵も消したしそろそろみんなのところに戻るか。

第３９話　謎の集団！（後書き）

白黒「第３９話完成！オリ敵キャラ達が続々登場する予定です。」

ライダー「軽くネタバレですね。今後は原作崩壊ですか？」

白黒「そうだね。ティアナが強くなってる時点で崩壊だけど。」

家康「確かに。」

白黒「それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第４０話　ホテルアグスタ任務終了！（前書き）

白黒「なんか疲れてきた。書くのが大変で。」

ライダー「頑張って書いていただかないといけませんよ。」

白黒「承知してます。頑張って書いていきます。」

家康「第４０話出陣する！」

第４０話　ホテルアグスタ任務終了！

リョウＳＩＤＥ

転生者を倒したと分身体から情報を得た。
入り口前に行くと、みんなが集まっている。

「みんな大丈夫？」

「全員大丈夫です。」

「話は聞いたよ。とりあえず、このガジェットもどきはこっちで捜査するから周りの監視と警護をよろしくね。」

「「「「はい！」」」」

俺はどうしようか。
このまま何もせずフラフラ見回るのも悪くない。
さて・・・

「なのは！」

この声は。

「ユーノ君！」

「なのは！久し振りだね。」

「ユーノ君も、久し振り。」

「ユーノ。久し振りだな。」

「リョウ君！君、機動六課に！？」

「まあな。」

そういや、ユーノがここにきとったな。
忘れてたよ。

「リョウ君。ちょっといいかな？二人っきりで話したいことがあるんだ。」

「？・・わかった。」

俺はユーノと一緒にみんなと少し離れたところに移動する。
いったいなんの話を？

「ここでいいかな。話したいことってのはなのはの事でね。」

「なのはの？」

「実は・・なのはの事を頼みたいんだ。」

「は？」

わけ分からない。
何が言いたいんだ？ユーノは。

「君に言うけど、僕はなのはの事が好きだ。」

？

「けど、なのははリョウ君・・君のことが好きなようだ。」

・・・

「僕ではなのはを、彼女を守れない。彼女を巻き込んだのは、僕の責任だ。僕が力がないから彼女を魔法を、この世界に来させてしまった。」

ユーノ、お前は責任を感じてるのか。

「だから、頼む！なのはを、みんなをこの魔法の世界から守ってほしい。」

「・・・分かった。なのはとみんなのことは任せろ。お前はお前のできることをしろ。」

「・・・ありがとう。」

全く、しょうがない奴だな。

「さて、なのはのところに帰ろうぜ。」

「そうだね。」

はやてＳＩＤＥ

ガジェットもどき、それにそれを従えてる男。
その男はリョウ君が倒したようやけど。
それに謎の集団、転生神か。

「はやて。」

「リョウ君。どないしたん？」

「全員揃ったからそろそろ帰るぞ。」

「そか。・・・なあ、リョウ君。」

「？」

「もしかして、転生神という集団はスカリエッティと繋がってんのかな？」

私の勘やとおそらく。

「いや、奴と繋がってない。」

「やっぱりか。証拠と根拠は？」

「もしスカリエッティが絡むならこんな粗悪品なんか作るか？」

「なるほどな。」

スカリエッティは絡んでないのは分かったけど、新たな敵やな。どないするか。

「はやて。」

「ん？ロッサ！」

ロッサがこっちに近付いてきおる。

「探したよ。それにしても、初めまして創神リョウ君だね。」

「俺を知ってるのか。アンタは誰だ？」

「これは自己紹介をしてなかったね。僕はヴェロッサ・アコース。本局の査察官さ。」

ロッサが手を差し延べる。
リョウ君は差し出さない。

「握手をしたいのだけど。」

「悪いな。管理局の奴等は信用できないのでな。特にお前のような奴はな。」

「これは手厳しいね。僕は何もしてないのに。」

「うそをつくな。なら、さっきから周りにいる犬はなんなんだ？」

「「な！？」」

犬ってもしかして、ロッサのレアスキルの。

「凄いね。いつ気付いたんだい？」

「俺達がホテルに入った時にだ。」

「それってつまり最初からかい。恐ろしいね。」

「ロッサ！どういう事や！？なんでリョウ君を！」

なんでや！？

「君のことは姉さん、カリムから聞いてるよ。」

「カリムから？」

「あの女か。で？」

「カリムは君のことを調査してほしいと頼まれてね。」

カリムがどうしてリョウ君を？

「あれか。あの時、カリムの誘いを断ったことのか。」

「ええ。姉さんはショックを受けてね。君ならと期待していたのに。」

「勘弁してほしいな。俺は管理局のためにも聖王教会のためにも戦

わない。だいたい俺は管理局も聖王教会も信じてない。」

管理局はまあ分かるけど聖王教会も？なんでや？

「ふむ。理由を聞いても？」

「はっきり言ってしまえば貴様らは何様だ？」

「む？」

「まるで自分達のために働いてくれといった物言い、自分達はエラいといった態度。いちいちがイラだたせる。俺はお前達のために動く人形でも道具でも兵器でもない。」

「「・・・」」

「俺は、俺自身のために俺の仲間達のために戦うだけだ。」

リョウ君。

「ふむ、噂通りの人物だね。しかし、今後起こる事件が君達に害を及ぼすものだったら。」

「ロッサ！それは・・・」

それを言ったらあかん！それはまだ秘密なんや！

いくらなんでも今は！

「カリムのレアスキルか。確か・・未来を予言できる能力だっかな。」

「「！！」」

し、知っとったん！？

「驚いたな。知っていたのかい？」

「調べたからな。予言内容までは知らないし興味もない。」

「ふむ・・・実はね。この世界が未曾有の危機にさらされるんだ。今回現れたガジェットもどき、そして謎の集団転生神。さらにスカリエッティの存在もあるからね。世界は限り無く危機だよ。滅亡だってありえる。だから世界のために我々と一緒に。」

「何が世界のためにだ。違うだろ。本当は管理局と聖王教会のためだろうが。」

「なに！？」

「管理局も聖王教会も結局は自分大事なんだよ。世界のためなんかじゃない。ま、それは上の・・特に自分のことしかかんがえられない奴等なんかわな。」

「・・・」

「俺はただ、仲間達のために戦うだけだ。問答はこれでお終いだ。さ、はやてみんなのところに帰るぞ。さっさと帰って休みたい。」

「あ、うん。」

私とリョウ君はロッサと別れる。

「わかったよ。カリムにはこのことを伝えるよ。リョウ君、カリムになにか伝えることはないかな？」

「・・なら一つだけ。」

？

「本当に世界を救いたいなら他人の力を頼るのではなく自分達の力でなんとかしろ・・とな。」

「・・・わかったよ。必ず伝えるよ。」

そう言いロッサは別れる。

私とリョウはみんなと合流して機動六課に帰還した。

？？？？ＳＩＤＥ

「奉月仮名機が死んだようだ。」

「ふん！奴は転生者の中では最弱の奴だ。」

「しかし、厄介だな。まさか、我々の他にも転生者がいたとはな。」

「構わん。たった一人だ。たかがしれている。」

「どうするのよ。私達の存在がバレたわよ。このままだと計画が。」

「ほっとくがいい。もみ消せるのだ。慌てる必要もない。」

「・・・で、これから。」

「ジックリ待てばいい。まだアレが完成してないからな。アレが完成すれば、どんな奴でも何もできまい。」

「くくくっ・・確かにな。」

「くっくっくっ・・はっはっはっはっはっ！この世界は我々転生神がより良き未来へ導いてやろう！！」

第４０話　ホテルアグスタ任務終了！（後書き）

白黒「第４０話完成！ホテルアグスタ編しました。新たにオリ組織が出現したんだけど改めて大変だと感じました。」

テンテン「頑張って書いてよ！」

セイバー「そうですよ。早く書いて私達の出番をください！」

白黒「はい。頑張ります。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第４１話　進歩無し！（前書き）

白黒「あかん。いいタイトルが思い浮かばなかった。めっちゃ適当になってしまった。」

セイバー「たわけだな。」

白黒「すんません。」

ライダー「第４１話始まります。」

第４１話　進歩無し！

リョウＳＩＤＥ

アグスタの任務を終えて数日が経過した。
今日も訓練訓練の忙しい日だ。
訓練の錬度も日に日に濃くなってきて大変だ。
まあ、結局は分身体に任せてるから本体である俺は大変じゃないがな。
ティアナが反抗する事もないから平和そのものだな。

「近い内にフォワードメンバーも別荘で訓練でもさせるかな。一応魔改造させないとな。」

〔そうですね。今後の事を考えると〕

だな・・・さて、部屋に戻るか。
隊舎に入る。

「リョウ～！」

「ぐふっ！？」

は、腹になにかがぶつかった。
って、よく見たら俺の知ってる奴だった。

「ド、『ドゥーエ』！？」

「久し振りね。会いたかったわ。」

ドゥーエは妖艶な笑みで俺を見る。
いや、つうかなんでお前がここにいるんだよ!?
ま、まずい!こんなところなのは達に見られたら!

「リョウ君、帰ってたの・・・」

「リョウ。アンタどうし・・・」

げげっ!なんてタイミングの悪い!すずかとアリサが現れてドゥーエが俺を抱き締める姿を見られた!

「リョウクン、ダレカナソノオンナハ・・・」

「アンタ、アタシタチトイウモノガイナガラ・・・」

こ、こえ～～!言葉が片言だし黒いオーラが俺達を包みこむ。(汗)

「と、とりあえず二人とも、落ち着いて・・・」

「リョウクン・・・」
「リョウ・・・」

「「スコシアタマヲヒヤソウカ・・・」」

うぎゃあああ!!不幸だぁぁぁ!!

「初めまして。地上本部レジアス中将の秘書のドゥーエです。よろしくね。」

ドゥーエが機動六課の面々に自己紹介してる。
うぅ～、体中が痛い、おもいっきり攻撃しやがって。
あのあとなんとか誤解？を解いたのだが、今度はなのはとフェイトとティアナとはやてとシグナムとリインとアリシアが黒いオーラと単色の目と片言になって俺に襲いかかってきやがった。
特になのはとフェイトとティアナは怖かった。
なのはは魔王化してたしフェイトは背後に死神の技影（シャドウ）が見えたし、ティアナはあははって笑ってて俺がなにか言ったら嘘だ！！とか叫び今にも銃を手に持ってそうな雰囲気だった。
俺はその時初めて死ぬんじゃねえと感じたな。
あ、やば・・思い出したら震えてきた。（ガクガクブルブル・・・）

「そ、それでその秘書さんがいったいなんのようですか？」

はやてが敬語で話してる。
まあ、関西弁だと困るからな。
気のせいか、なのは達はなんかこっそりデバイスを構えてるし。

「別に大したことじゃないわ。ただリョウに会いに来ただけだから。」

〔ドクターが来てほしいって〕

〔スカリエッティが？わかった〕

なにしに来たと思ったらスカリエッティがか。
俺はドゥーエと一緒にスカリエッティがいる研究所へ行く。
その時、なのは達の顔が怖かった。

数十分後、スカリエッティの研究所に到着。

「・・・なあ、もういいだろ？腕組むの。」

「いいじゃない。こんなチャンスそうないのだから。」

「だけどさっきから腕に胸が当たって「当ててるのよ。」・・・さいですか。」

全く、なんもいえない。

「来たわね。」

「よ、ウーノ。」

ちょうどいいタイミングでウーノが現れた。

「頼むウーノ。ドゥーエをなんとかしてくれ。」

「全く、ドゥーエ。リョウが困ってるわよ。離れなさい。」

「いやよ。ここで一歩でもリードしとかないと。」

おいドゥーエ！さらに腕に胸を押しつけるな。

もしこれを・・・

「ああ！ドゥーエ。なにしてる！」

うっ・・・他のナンバーズが来た。
チンクはドゥーエを見て怒ってる。

「ずるいです。私もします。」

「おい『ディエチ』。何言ってやがる。」
「なら、私は背中を。」

「ディード、止めろ。」

「止めません。」

「それに、私達はナンバーズの中でも胸は大きいほうです。リョウさんにとっては役得でしょう。」

ディエチとディードが胸を押し当ててきて他のナンバーズを挑発する。
何人かは悔しそうに、特にチンクとセッテは歯ぎしりまでする始末だ。
ウーノ、頼む。
このカオスを止めてくれ。
・・・数分後、なんとか三人を離しスカリエッティに会いにいく。

「スカリエッティ。」

「おおリョウ。少し遅かったね。どうしたのかな?」

「あ、ああ。ナンバーズのせいで少しな。」

「ふむ、それはなんとも嬉しいことではないか。娘達は君に会いた

くてしかたなかったからね。」

勘弁してくれよ。
疲れるのは俺だし、俺は被害者だ。

「そんなことより用があったんじゃないのか？」

「ん？そうだったね。実は君が遭遇し知った謎の集団転生神のことなんだが。」

それか・・・さて、どんな情報が。

「はっきり言ってしまえば不明だね。ハッキングもしたがなにも情報が得られなかった。だが、分かったこともある。」

ほぅ、それはいったい？

「実はそのハッキングでわかったのだが、情報がもみ消された後がみつかったのだよ。」

「なるほど、つまり。」

「うむ。間違いなく管理局の大部分と繋がってることがわかったのだよ。」

なるほど。
恐らくは出世欲のある奴等や野望を持つ奴等とか。
ますますよりよき未来のためじゃないな。
完全に欲望のための集団だな。

「それだけか？」

「うむ。・・・リョウ。」

「なんだ？」

「もしかしたら、機動六課におじゃますることになるかもしれない。」

「・・・そうなるな。わかった。なんとかフェイト達を説得できるように努力してみる。」

「・・・助かる。」

さてどうするか、暇になったからな。
ナンバーズ達に会いに行くか。

「あ、そうそう。君が来る十分前にゼストとメガーヌとルーテシアと『アギト』てディーダが来てるよ。」

そうなのか。
あ、そういやナンバーズやスカリエッティを護衛してほしいと頼んだんだっけ。
忘れてた。

「わかった。サンキュー。」

俺はスカリエッティと別れてナンバーズ達とゼスト達に会いに行くことにした。

ゼストＳＩＤＥ

俺はメガーヌとその娘『ルーテシア・アルピーノ』と烈火の剣精アギトとディーダとともにスカリエッティの研究所に来ている。
本当はクイントも来る予定だったが旦那であるゲンヤの部隊が忙しいため来れないようだ。

「それにしてもリョウの兄貴に会うのも久し振りだな！ルールー！」

「うん。久し振りに会える。」

アギトは古代ベルカ式の純正のユニゾンデバイスだ。
とある研究所でモルモット扱いにされてたところを俺とリョウが助け出した。
そのおかげでアギトは俺のことを旦那と、リョウのことを兄貴と呼ぶ。

「よ。」

「リョウの兄貴！」

「リョウ兄・・・」

「久しいな。」

リョウが俺達の前に現れた。

ルーテシアとアギトがリョウに近寄る。

「久し振りだな。こうして会うのは。」

「リョウ。ティアナはどうだった?」

「ディーダ、安心しろ。ティアナは強いぜ。フォワードメンバーを引っ張って中心となって頑張ってるぜ。」

「そうか。」

ディーダは嬉しそうに笑う。
自分の妹が成長してるのだ、喜ばないはずはない。

「あ~!いたッス!」

む?声が聞こえたほうに振り向くと、ナンバーズの数人が近付いてきた。

「お前達か。どうした?」

「どうしたじゃねえよ。せっかくリョウが来たのに戦えないなんていやだぜ!」

ナンバーズの一人ノーヴェがそう言う。
ノーヴェ・・・クイントの血液でできた戦闘機人。
おそらくはクイントの娘のギンガとスバルの妹的存在だな。

「やれやれ、ノーヴェは戦闘狂かい。」

「ちげえよ！あたしはただリョウと訓練したいだけだ！」

「わかった。わかったから落ち着け。」

大変だなリョウは。
それだけ好かれてるというわけか。

「そんじゃ、訓練室にいって一勝負するか。」

「おう！今度こそ勝つぜ！」

「私達も参加させてもらう。そして、今度こそデートをするぞ！」

リョウとナンバーズの数人が部屋から出る。
やれやれ、忙しい奴だ。

リョウＳＩＤＥ

訓練室に行き勝負して、また勝つ。
そして、夕方になったためそろそろ帰ることにする。

「そんじゃ、帰るな。」

「ああ。なにかわかったら連絡をしよう。」

「助かる。それじゃあな。」

俺はスカリエッティ達に別れの挨拶をして、機動六課に帰還する。

十数分後、機動六課に到着。

「ただいま。」

「お帰りなさい。リョウ君。」

「遅かったわね。」

隊舎入口でなのは達がいた。

つうか、いつからいたんだ？

「リョウ君。」

「？どうしたはやて。」

アレ？なんかなのは達の目が単色かして黒いオーラが出てるんだが。

「リョウクンノカラダカライロンナオンナノニオイガスルンダケド。」

！！・・おい！なんでそんなことがわかるんだよ！

他の奴等もうんうんうなずいてるし！お前らは犬か！

確かにナンバーズに会ってきて抱き付かれたりしたけどよ！

「ま、待てお前ら！これは実はドゥーエに妹達がいてな。その時に抱き付かれたから！」

「ソノコムスメタチモリョウクンニコウイガアルノカナ？カナ？」

ぬお！ひぐらし化かよ！ヤバい！

「そ、それは無いだろ。」

「ウソダ！！」

ぐあっ！ティアナがそれを言うか！いくら中の人がそれを言ってたからってそれは！

「「「「リョウクン・・・」」」」

「「「「リョウ・・・」」」」

「リョウサン・・・」

あ、ヤバい・・・俺死んだかな。

「「「「「スコシＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩショウカ！」」」」」

「「「「スコシアタマヲヒヤソウカ！」」」」

ぐげづぶぎゃあああ！！不っっ幸だあああああ！！！

第４１話　進歩無し！（後書き）

白黒「第４１話完成！のんびりとした話を書いてしまったな。」

テンテン「そういえば、ティアナの撃墜フラグは？」

白黒「無し！これは決まってたことだから。」

家康「ということは次回は。」

白黒「多分、家康の考えてる通りです。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はリョウと？？？と？？？？のダブルデートです！」

セイバー「その人物は誰ですか？」

ライダー「詳しく教えなさい。あと本編にあったアレ（ナンバーズのある三人がリョウの腕と背中に胸を押しつけたシーン）を説明してください。」

テンテン「逃がさないわよ！」

白黒「ま、まて！とりあえず武器をしまって話し合いを！助け・・・あああああ！！！」

第４２話　短い休日！（前書き）

白黒「寒なってきたな。」

家康「もう１１月だからな。」

白黒「ああ、温かい食べ物が食いたくなる。」

セイバー「鍋物にシチュー、カレーにラーメンにうどん。」

ライダー「さすがはセイバー（腹ペコ王）。食い意地がはってますね。」

セイバー「・・・エクスカリバーの錆にしますよ。」

テンテン「第４２話始まります。」

第４２話　短い休日！

なのはＳＩＤＥ

今、フォワードメンバーとリョウ君が模擬戦をしてる。
今日の訓練はみんなのリミッターを外すかのテストをしてるの。

「でりゃあああ！！」

「ふっ！」

「うわああ！」

スバルが突っ込んでリボルバーナックルで攻撃するけどリョウ君がそれを流しながら投げ飛ばした。

「クロスファイヤー！シュート！」

「狙いが甘い。」

ティアナのクロスファイヤーをリョウ君は軽く躱す。

「たあああ！！」

「バサラ。」

〔了解。ランサーモード〕

背後からエリオ君がストラーダで切りかかるけどリョウ君のバサラをファイターモードからランサーモードに変えて防ぐ。
あ、ストラーダが淡く光出して威力が上がってる。
キャロのブーストだね。
でも・・・

「まだ甘い！」

「わあっ！」

リョウ君がバサラを思いっきり振るい、エリオ君を吹き飛ばした。

「リボルバー！シュート！」

しかし、その背後から猛スピードでスバルがリョウ君に突撃する。
スバルの一撃がリョウ君にヒット・・・

「今のはよかった。だが、まだまだ！」

・・と思ったらリョウ君はスバルの一撃をバサラで防ぎ止めた。

「うわあああ！」

「てやあああ！！」

スバルが投げ飛ばされて、今度はティアナが魔力弾を撃ちながら接近戦を仕掛ける。
本来のCG（センターガード）はそんなことをしちゃいけないけど、ティアナはすでに自分のスタイルがあるからなにも言わない。

それにティアナ自身もＣＧの意味も知ってるから私はほとんど教えてない。
リョウ君によく鍛えられてるの。

「ティアナ、それは失策だったな。次の行動が読めるぞ！」

「どうでしょうかね？」

？・・ティアナ、なにか策があるのかな？

「うおおお！！」

ウイングロードを利用してエリオ君がリョウ君の真上から一撃の突きを決めようとしてる。

「やはりか。残念だな。その手は読めてる・・！？」

え？ティアナが消えて代わりにリョウ君の両腕と両足にバインドが付けられたの。

「これは・・フェイクシルエット！・・？！！しまった！」

「引っ掛かりましたねリョウさん。私の、私達の作戦勝ちです！」

「いっけ～エリオ！」

「エリオ君！」

「はあああ！！」

「なめんな！！」

動けないリョウ君にエリオ君の一撃が決まったの。
凄い土煙！どうなったの！？

「・・・え？」

「い、いない！？」

「どこに行ったのですか？」

晴れると地面に突き刺さったストラーダを持つエリオ君しかいない。
いったいリョウ君はどこに・・・あ。

「・・・！」

ティアナがいち早く気付き背後を振り向き銃を向ける。
そこにはティアナのバインドを破り、エリオ君の攻撃を躱したリョウ君が銃を構えていた。
リョウ君の銃がティアナの眉間に、ティアナの銃がリョウ君の眉間に向けられた。

「さすがだな。よく気付いたなティアナ。」

「最後まで油断するなって言ったのはリョウさんですよ。」

「ティア！」
「「ティアナさん！」」

「スバルとエリオ。やったと思って浮かれるな。それは敵に隙をみせると同じだ。まあエリオは感触で分かってたようだからましだが。

」

「「うっ・・」」

「キャロ。お前が真っ先に気付くべきだったな。お前にはそういう訓練をしてやってるのに、それでは自分もみんなもやられるぞ。」

「すみません・・・」

リョウ君は厳しいの。

「ま、腕は上がってるんだ。特にエリオ、お前の一撃はヤバかったぞ。少し本気を出したしな。」

リョウ君にそう言われてエリオ君の顔は喜んだ表情になったの。

「ま、これからまだまだ伸びるからな。焦らず成長していこう。」

「「「「はい！」」」」

「は～い。模擬戦終了～！みんな集まって～。」

模擬戦終了の合図を言い、集合をかける。

四人とも疲れてるけど生き生きした表情だ。

私の隣りにはフェイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさんがいる。

リョウ君は少し離れたところにいるの。

「さて、実はさっきの模擬戦はみんなのリミッターを外すかどうかのテストだったんだけど。」

「「「「え？」」」」

「どうだったかな？」

「合格！」

「「早っ！」」

フェイトちゃん達に聞くとフェイトちゃんが合格と言った。

「つうかこんだけやって不合格なら明日からもっと厳しくやってるとこだぜ！」

「「「「あ、あはは・・」」」」

ヴィータちゃんも厳しい言葉ながらも納得しており、シグナムさんも頷く。

「ティアナのおかげで合格したようなものだからな。これからは三人ももっと強くならないとな。」

「「「はい！」」」

リョウ君も多少厳しいけどＯＫだって。

「じゃあ、今日はそのご褒美に訓練は休み！町にでも行って遊んでおいで。」

「「「「やった～！」」」」

ということで、今日は休日になったの。

リョウＳＩＤＥ

フォワードメンバーのリミッターを外すかのテストを終え、今日は休日とすることになった。
昼飯を食い、ティアナはスバルと外へ出ることになったようだ。
バイクは俺のを貸してやることにした。
エリオとキャロは二人で行くことになったようだしな。
さて、俺はどうしようか？思い出したんだが、確か今日はあの娘と出会うんだよな。
う～ん・・・

「リョウ。」

「ん？どうしたアリサ。」

「アンタ暇？」

なんだ？すっげ～いやな予感がするんだが。

「？暇は暇だが。」

「そう。じゃ、じゃあこれからわ、私と一緒にクラナガンに・・・
／／／／グエッ！」

「アリサちゃ～ん。な～に抜け駆けしようとしてるのかな？」

「アリサちゃんの言葉は聞き流してあたしと行こう？／／／／」

「すずかもなに言ってるの！？リョウ。私と、私と行こう。」

おいおい、いやな予感的中だよ。
このまま数が増えれば・・・

「まちいや！リョウ君と出かけるのは私や！」

「なに言ってるのですか！主はやて！リョウ！私と行こうではないか！」

「お前こそなにを言っている烈火の将よ！リョウ！わ、私と出かけよう！」

「みんななに言ってるのよ。リョウと出かけるのはこの私よ。」

うわ～、みんな出てきたよ。
この食堂がカオスな空間になってきちまったよ。
周りを見たら女性陣は苦笑いしてるし、男性陣は喚いてる奴がいるわ五寸釘と藁人形を持って叩いてる奴もいるし、殺気を俺に向けてる奴もいるしで精神がガリガリ削られていくよ。

『『『『う～～！』』』』

「こうなったら！勝負しよう！」

勝負だと!?まさか、やめろ!こんなところで戦りあう気か!
くっっ!このままだと・・・仕方ない!

「バサラ・・・」
『『『『ジャンケンポン!!』』』』

「・・・は?」

アレ?・・・よかった。
ドンパチを起こすんじゃないかとヒヤヒヤした。
この時俺はジャンケンというものがあってよかったと心から思った。

フォワードメンバーが出かけて二分ほど経った頃、俺は隊舎入り口前で待ち合わせをしている。
そろそろ来るかな?

「お待たせ~!」

「すまない。少し時間がかかった。」

そこにおめかししたアリシアとリインが来た。
アリシアは黄色の可愛い服とロングスカートを、リインは白のワンピースを着て現れた。
勝ったのはアリシアとリインの二人だ。
何故二人なのかというとなかなか勝敗が決まらなかったため俺の一言で二人同時にダブルデートをすることになったのだ。

「どうかな?似合う?」

「・・に、似合うか？／／／／」

「似合ってるぞ。アリシアは可愛いし、リインは綺麗だぞ。」

ちょっとクサいセリフを言ってしまったな。

ハズいな。

「本当！？えへへ・・／／／／」

「似合うか・・それに綺麗。うふふ・・／／／／」

クサいセリフでも喜ぶかよ。

まあいいか。

「そんじゃ行くか。」

「うん！」

「ええ。」

アリシアとリインは俺の両腕に胸を押しつけくっつきながら出かける。

その時、隊舎の窓からなのは達が呪詛を発しながらアリシアとリインを見ていたことは内緒だ。

３０分後、ミッドチルダに到着。

「さて、これからどこに行こうか？」

「ん～、まずは買い物かな？みたい映画もないし。」

「それでいいか？リイン。」

「私は構わない。」

そんじゃあ行くか。

・・・一時間くらい経った。

ふぅ・・かなり見回ったな。

たくさんの服も買ったし、小物も買った。

ただ、アクセサリーは買わなかった。

つうか、アリシアとリインが指輪を買ってって言われた時はヤバかった。

その時ブツブツなにか言ってるが気にしないことにしよう。

それにしても、移動中とかになんか多数の男女からチラチラ見られてたな。

男性はアリシアとリインを見ていた。

まあ当然だな、二人は美人だからな。

でも、時々俺に敵意の視線を向けられたがな。

二人の美人を野郎の俺一人に引っ付いてたからな。

妬みだな。

そんで女性は俺に好意な視線を感じる。

何故だ？

「そりゃ、リョウ君がカッコいいからじゃない。」

「ま、当然ですね。少しムカつきますが。」

もういやだ。

さっさとこの視線だらけの場所から去りたい。

〔ライトニング０４より緊急事態につき全体通信！〕

む！ようやくきたか。

「どうやら休日はここまでのようだな。」

「ちえ～。しょうがないね。せっかくのデートだったのに。」

「愚痴ってもしょうがありません。行きましょう。」

さて、会いにいきますか。

『ヴィヴィオ』に！

第４２話　短い休日！（後書き）

白黒「第４２話完成！次回はあのヴィヴィオと出会います。」

ライダー「物語も中盤になってきましたね。」

テンテン「面白くなってきたかな？」

白黒「できたらいいなと思います。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第４３話　強すぎる男！（前書き）

白黒「敵の転生者のイメージは分かりやすい奴等がいいな。」

ライダー「確かにそのほうが進みやすいからな。」

白黒「その分殺られ様もかなりあっさりしてます。」

家康「第４３話出陣する！」

第４３話　強すぎる男！

ティアナＳＩＤＥ

キャロから緊急連絡がきてスバルと一緒に現場に急行する。

「せっかくの休日だったのに～。」

「しょうがないわよ。起こってしまったものは。ほら、急ぐわよ！」

私とスバルは急ぐ。

・・数分後、到着した。

そこにはぼろ布を着た金髪の女の子が倒れていて、エリオとキャロはその娘を介抱している。

私とスバルが到着して一分後、リョウさんとアリシアさんとリインさんが到着した。

ていうか、リョウさんなんでお二人が腕に引っ付いているのですか？

ダブルデートですか？そうですか。

ならば・・・あとでＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしようかな？かな？

（この時、スバルとエリオとキャロが私の目が単色になって黒いオーラを出して怖かったと言っていた）

「エリオ、この娘が？」

「あ、はい。このマンホールの中から、多分下水道から来たのだと思います。レリックと一緒に。」

「見た感じ、何かから追われてるって感じだな。」

「どうします？」

「とりあえずキャロはこの娘の治療を、俺達は警戒しながらなのは達が来るのを待つぞ。」

「「「「「了解！」」」」」

待つこと約十分、なのは隊長達とヘリがきた。
女の子をシャマル先生に見せる。

「・・・うん。バイタルは安定してるわね。危険な反応もないわ。心配ないわ。」

ホッ・・・私達は安堵した。

「安堵したところ悪いが任務を始めるぞ。フォワードメンバーは下水道を通りレリックを探して来るんだ。シャマルとアリシアとリインはヘリとこの娘の護衛を、なのはとフェイトはおそらく増援がくるはずだからそれの迎撃を。」

『『『『了解！』』』』

さすがはリョウさん、すぐに作戦を決めるなんて。

「それで俺は・・・影分身の術！」

リョウさんが三人になった。

「本体の俺はフォワードメンバーと同行、分身体の一人はヘリの護衛を、もう一人はなのはとフェイトの二人と一緒に迎撃を。」

二人のリョウさんの分身体は頷く。

「それじゃあ、行くぞ！」

スバルＳＩＤＥ

私達フォワードメンバーはリョウさんと一緒に地下水道を移動中。
途中、ガジェットもどきが現れるけど私達の敵じゃない。

「はあああ！！」
「てやああ！！」

「フリード！ブラストレイ！」

「キュクウウ！！」

「外さないわ！」

いつもの連携で敵を蹴散らしていく。
リョウさんは？

「じゃまだ！」

凄い・・・リョウさんはブレードモードで敵を切り裂いていく。
さすがはリョウさん。

「改良はされてないな。どうやら大量に生産できるようにしてるようだな。」

「だとしたら、敵はかなり大量のガジェットもどきを。」

「多分な、それより急ぐぞ。敵にレリックを取られるわけにはいかないからな。」

「「「「はい！」」」」

私達は先に急いで行く。
少し進んだところで曲がり角でガジェットもどき数体が何者かの手によって破壊された。
誰が・・・
あ！・・・あれは！

「ギン姉！」
「ギンガさん！」

ギン姉！ギン姉だ！そういえば、この辺りを調査していたのは父さんの部隊だった。

「スバル！あなた達がきてくれたの！」

ギン姉と一緒に仕事ができるんだ！

「ギンガさん。お久し振りです。」

「久し振りねティアナ。」

「あの、ティアナさん。この人は？」

あ、そうか。
エリオとキャロはギン姉を知らなかったっけ。

「この人はギンガ・ナカジマ。スバルのお姉さんよ。」

「ギンガ・ナカジマよ。よろしくね。」

「「あ、はい！よろしくお願いします！」」

エリオとキャロは挨拶をする。

「それでスバル？この人は？」

この人？あ、そうか。
ギン姉、リョウさんのこと知らなかったっけ。

「ギンガか。身長、でかくなったな。」

「え、え？」

「ギン姉！リョウさんだよ！ほら、四年前に助けてくれた人だよ！」

「・・ああ！まさか、あの時の！？」

「そ、覚えてたの？」

「はい。あの時は助けてくれてありがとうございます。」

「気にするな。・・と、こんなことをしてる場合じゃないな。お前ら、敵だ。」

そう言うと前後からガジェットもどきが現れた。
数は多い！けど、私達なら全滅させられる。

「行くぞ！」

「「「「了解！」」」」

私はティアナとギン姉と連携で敵を蹴散らしていく。

「いくわよ！スバル！」

「うん！ギン姉！」

「弾幕をはるわ！」

ティアナが弾幕をはり、その間に私とギン姉は接近して敵の懐に入る。
そして、私はリボルバーナックルを使って直接殴り、ギン姉は魔法を使って敵を倒していく。

「やっぱりギン姉は強いね！」

「私はスバルがこんなに強くなってるなんてね。どうやったらそんなに強くなるのよ。」

「ギンガさん。それはリョウさんを見れば分かります。」

「リョウさんを?」

速攻で全滅させたあと、リョウさんとエリオとキャロの戦いを見る。
キャロはエリオにブーストをかけさせてエリオは槍を振るい蹴散らしていく。

「遅い。」

リョウ君は相変わらず敵をあっさり倒していく。

「あ~、納得。」

「でしょ。」

「・・・カッコいい。///」

え?ギン姉今なんて言ったの?
よく見るとギン姉の頬が赤く染まってる。
もしかしてギン姉、リョウさんのこと・・・
チクッ。
?・・何?今、胸の奥がチクッて痛んだ。
何でだろ?分からないな。

「スバル!何してるの!早く行くわよ!ボ~ッとしない!」

「あ・・うん!分かったよ!」

おっと、今はレリックを見つけなきゃ！

リョウＳＩＤＥ

敵を蹴散らし、奥まで進むと広い空間に出た。
ここにレリックがあるな。

「キャロ、どこに・・・」

「えっと・・・あ、あそこです！」

む、あれか。
キャロがレリックが入ってるケースを拾いにいく。
原作ではここでルーテシア達が出てくるんだが、ルーテシア達はすでに俺の仲間だからな。
だとすると、ここで出てくるのは・・！

「キャロ！」

「え？・・きゃっ！」

俺はキャロとケースを抱えてみんなのいる場所まで下がる。

「へ～、気付いたのか。」

「よく気付いたな。」

前方から五つの人影が見える。
五つの人影が姿を現す。
五人とも男か。
一番左からツンツン髪、黒の短髪、赤の短髪か。
つうか、残り二人はまんまｆａｔｅの士郎とギルガメッシュじゃねえか。
この二人は転生者だな、間違いない。

「君達、悪いがそのケースを我々にくれないかな？」

「断る。だいたいてめえらは何者だ？」

「ふん！所詮は管理局の犬か！」

左から三番目の奴がそう言う。
左から三人目までは転生者じゃないな。
こいつらは・・なるほど、元管理局の奴等か。
確か情報だと、転生神に属する管理局の奴等は元の奴等か転生神に賛同した奴等かのどちらかだったな。

「俺は右の二人を相手する。残りの三人はお前達が相手しろ。」

「そんな！無茶です！ここはみんな力を合わせて！」

「・・・わかりました。任せます。」

「ティアナ！？」

ティアナは分かってるな。

ギンガは仕方ないが。

「大丈夫ですね。」

「問題ない。」

「決まったかい！それじゃあおっぱじめようぜ！」

俺は右二人を連れて移動する。

他はその場で戦うようだ。

三人称ＳＩＤＥ

リョウは敵二人と一緒に別の広い場所に移動する。

「君のことは知ってるよ。あいつを殺ったようだな。」

「だが、俺達は奴のようにはいかない。なぜなら！」

「なぜなら僕たちはあいつより強いんだからな！」

まず、ギルガメッシュ似の転生者が王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）で攻撃を仕掛ける。

「ゲート・オブ・バビロン！」

「！」

「まだまだ！投影開始（トレースオン）！！」

士郎似の転生者がエクスカリバーを投影する。

「くらえ～！！約束された（エクス）・・・勝利の剣（カリバー）！！！」

リョウにゲート・オブ・バビロンとエクスカリバーの斬撃がくる。
ぶつかり大爆発を起こす。

「くっくっくっはっはっはっはっはっ！」

「どうだ！何もせずに終わったな！奴を倒したからっていい気になるなよ！」

煙が晴れ、残ったのは破壊された床のみだ。
リョウの姿はどこにも見当たらない。

「ふっふっふっ・・・死んだか。所詮この程度か。」

「僕たちの前では無力なのさ。あれだけの攻撃を食らえばな。僕たちの強さは転生神の中でも上位の強さだからな。」

「下位はこの世界の魔法しか使えない奴等、中位は一応他作品の技が使える奴等、上位は俺達のように他作品の技が完璧に使える奴等のことだ。」

「ふっふっふっ・・そんな僕たち二人と戦えたんだ。誇りに思って死んでくれたまえ。」

敵二人は瓦礫しかない前方を見てほくそ笑む。
しかも余計な事までベラベラと喋るオマケつけで。

「それで・・・二人ごとはもう終わりか？」

「「！？」」

敵二人の後方から声が聞こえた。
敵二人は振り向く。
振り向くとそこには無傷のリョウがただずんでいた。

「な！！？ば、ばかな！？あれだけのオーバーキルを食らって無傷だと！？」

「しかも、いつの間に後ろに！？僕たちが気付かなかったなんて！？」

敵二人はリョウが無傷な上後方にいたことに驚く。
リョウはただ障壁を貼り防ぎ、そこから一瞬で敵二人の後方に移動したのだ。
ちなみに移動方法は縮地で。

「ふん！まあいい、避けたぐらいでいい気になるな！俺達は強いんだ！貴様とは違う！」

「それに二対一だ！大人しく僕たちに殺されろ！」

「・・・そうか。なら

・・・大人しく死んでろ。」

その瞬間士郎似は縦に真っ二つに、ギルガメッシュ似はバラバラに切り裂かれた。

実は、縮地で躱した時ついでに二人を斬ったのだ。

ちなみに、リョウ本人にしたらこの程度見切れるだろうクラスのスピードで駆け斬ったのだ。

それすら見切れない・・・つまり、この二人は“この程度”も見切れないほど弱いのだ。

いや違う・・・リョウが強すぎるのだ。

「ふん！これで上位クラスの実力だと？だとしたら、転生神の親玉も大した事ないな。いや、油断したらいけないな。さて、死体を片付けて他の奴等の救援に向かうか。」

リョウは死体を消して他の人達の援護に向かった。

第４３話　強すぎる男！（後書き）

白黒「第４３話完成！今回でリョウの強さを確認できる・・・と思う。」

セイバー「あの、リョウが出した縮地はどれくらいの速さなんですか？」

白黒「え～と・・瀬田宗二郎の瞬天殺と同じかそれ以上かな？ちなみにリョウが本気を出したらその約数十倍は速いよ。」

家康「・・・チートのレベルを超えてないか？」

白黒「いやいや、他作品のオリ主を見たらリョウはまだ弱いほうじゃないかな？」

家康（それは無い！！・・・とは言えないな）

白黒「それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第４４話　マヌケはたくさんいる！（前書き）

白黒「あかん・・・前書きのネタがない。」

テンテン「ちょっと！それはダメじゃない！」

白黒「すんません。というわけでタイトルコールよろしく。」

ライダー「わかりました。第４４話始まります。」

第４４話　マヌケはたくさんいる！

ギンガＳＩＤＥ

私達の前には三人の魔導師が対峙している。
リョウさんのほうは大丈夫かしら。

「ギンガさん。リョウさんなら心配ないですよ。あの人は強いですから。」

「はあ？お前はあの強そうに見えない奴が負けないとでも言うのか？」

「言っておくが、あの二人は我が組織でも上位クラスの実力者だ。あの二人を同時に相手をするんだ。今頃もう死んでるはずだ。」

「そして、君達もだ。だが、君達は殺さないでおけと言われてるが足の一本ぐらいは消しても構わないだろ。」

「あなた達、リョウさんをなめてるでしょ。リョウさんはあなた達の想像を遥かに超越する強さをもってるのよ。」

ティアナはリョウさんを信じてるんだね。
じゃなきゃあんな事を言えない。
いいなぁ。

「ふん！まあいい。御託はここまでだ。とっとと始めようか！」

くる！私達はデバイスを構える！
左の敵は両刃の剣、真ん中は杖、右はグローブ。
なるほど、バランスがいいチームね。

「くるわよ！」

「おおおお！！」

「はあああ！！」

剣を持った敵が突っ込んでくる。
エリオが迎撃する。

「ほぉ！ガキのくせになかなかやるな！」

「クッ・・・はあ！」

エリオと敵は剣劇をしている。
エリオ凄い、自分より大きい獲物をあれだけ扱えるなんて。

「ギン姉！」
「ギンガさん！よそ見しないでください！」

！・・しまった！ついよそ見していた。
グローブの敵が迫ってくる！

「おらああ！！」

「クッッ！」

私はとっさに障壁を貼る！
だけど、徐々にヒビが割れていく。

「そらああ！！」

「きゃああ！」

障壁が割れ吹き飛ばされた。
まずい！体勢が悪い！このままだと！

「ギン姉！」

「スバル！」

スバルが私の前に立ち構える。

「てめえもろとも食らわしてやる！」

相手が拳を振るう。
スバル！逃げて！

「どらああ！！」

「甘い！はああ！！」

「何！？ぐあああ！」

うそ！？スバルは相手の拳を軽くいなしてリボルバーナックルで反撃した。

スバル・・本当に強くなってる。

「そらそら！逃げろ逃げろ！逃げ切れるならな！」

「あなたは逃げないようにね。これを食らいなさい！」

ティアナは杖を持った敵と対峙している。
敵は宙に浮きながら魔力弾を撃ってくる。
ティアナはそれを躱しながら反撃の魔力弾を撃つ。

「ガキのくせにやるじゃねえか！仕方ねえ！こうなったらオレの本気、みせてやる！」

すると、敵の剣が二つになった！？二刀流だったんだ！

エリオＳＩＤＥ

相手は二刀流だったんだ。

「そりゃああ！！」

相手は魔力を込めた斬撃をしてきた。
僕はなんとかストラーダで防ぐ。
確かに威力はある・・・だけど、リョウさんやフェイトさんやシグナムさんのような腕じゃない！
なら、僕でもなんとかなりそうだ！

「キャロ！ブーストお願い！」

「はい！ケリュケリオン！」

僕の体周りが光に包まれる。
これで強化された！

「ふん！強化されたのか！だが、そんな事をしても無駄なんだよ！
すぐに楽にしてやる！」

いくぞ！これで決める。

「紫電・・・一閃！！」
「だあああ！！」

ストラーダの斬撃と敵の二刀流がぶつかる。
けど、拮抗はすぐに終わった。
相手のデバイスがヒビを起こす。

「そ、そんなばかな！オレのデバイスが！！」

「てりゃああ！！」

「ぐあああ！！」

僕の技が決まり、敵のデバイスを粉砕して敵に直撃して吹っ飛ばした。
敵はこのまま気絶した。

「大丈夫？エリオくん。」

「僕は大丈夫だよ。キャロのおかげで勝てたよ！」

「本当？」

本当にキャロがブーストをかけてくれなかったらてこずってたね。
キャロには感謝だよ。

「エリオくん！ティアナさん達の援護に向かおう！」

「うん！そうだね・・・いや、どうやらティアナさん達のほうも終わりそうだよ。」

「え？・・・あ、本当だ。」

スバルＳＩＤＥ

私はギン姉と一緒に敵と交戦している。
敵は私達と同じ格闘戦が得意なタイプだけどあんまり格闘技は使ってこない。
どちらかというと、魔法を主に使ってくる。
なら、勝機はある！

「いくよギン姉！」

「ええ！スバル！」

「クッ！たかが小娘二人にこの俺が！」

敵は射撃を繰り返すが全て躱すか防ぐでダメージを最小限にする。
敵は苛立ってきたようだ。

「くっそ～！ならば、これで一気に決めてやる！食らえー！！」

どうやら敵は砲撃を仕掛けるようだ。
チャンスだ！私はギン姉と目配りする。
私とギン姉は敵の砲撃を躱し、そのまま敵の懐に飛び込んだ。

「な、なにィ！？」

「今よ！」

「うん！」

「「でやあああ！！！」」

「がはああ！」

敵は私とギン姉のリボルバーナックルをモロに食らい、壁までぶっ飛ばされた。
そのまま壁に激突し、気絶した。

「やったよ！ギン姉！」

「ええ！」

勝った・・・勝ったんだ！私達！
あとは、ティアだけだね。
頑張って！ティア！

ティアナＳＩＤＥ

どうやら二つの戦いは終わったようね。
あとは私だけ・・・気合いをいれなきゃ！

「ば、ばかな・・・我々はトップエリートだぞ！たかが地にはいつくばる陸戦の雑魚ごときに！我らが・・・クッソー！」

「あら、逃げるの？あれだけでかい口をたたいてたのに逃げるなんて本当にエリートかしら？本当はエリートじゃなくてそこらへんの一般魔導師じゃないの？」

「な、なんだと～！」

これだけ挑発すれば、奴はその場で立ち止まる。
敵の顔は茹蛸のように真っ赤になる。

「俺が逃げるだと！？バカな！俺が逃げるなど有り得ん！」

単純ね。
こんな簡単な挑発に乗るなんてチョロいわね。

「なら、逃げないでね。これから攻撃するから。」

そう言いながら、私は魔力弾を作る。

「攻撃だと？そんなちゃちな魔法でか？面白い、できるものならやってみろ！」

敵は砲撃を放つ気ね。

上等！いくわよ！

「ブァリアブル・・・シュート！！」

私は魔力弾を放つ。

敵は砲撃を放ってくる。

私の魔力弾と敵の砲撃がぶつかる。

私の魔力弾は敵の砲撃に飲み込まれながらも、敵目掛けて進行している。

敵は気付かない。

そのまま砲撃を抜け、敵の腹に直撃する。

「グハッ！」

敵は墜落して気絶した。

私は敵をバインドで縛る。

「ティア！大丈夫？」

「問題ないわスバル。そっちも終わったようね。」

さて、こいつらを他の管理員達に連行しないとね。

〔ティアナ！聞こえるか？聞こえたら連絡してくれ！〕

〔はい！聞こえます。ヴィータ副隊長。こちらの敵を捕らえました〕

〔なに！よくやった！あたしと？がすぐそこに行く！〕

〔そこで待機と警戒をしていてくださいです！〕

〔わかりました〕

私はヴィータ副隊長との念話を済ませる。

「聞いてた通り、私達はここで待機と警戒をするわよ。みんな、最後まで油断しないようにね。」

「「「「了解！」」」」

フェイトＳＩＤＥ

「ディバイン・・・バスター！！」

「ハーケン・・・セイバー！！」

私はなのはと分身体のリョウと一緒に上空に現れたガジェットもどきを撃破していく。

「チッ！予想より数が多いな。これだけ多いと面倒だな。」

「確かに、この数の多さは。なんとかしないと。」

「どうする？」

どうしよう？このままだと町にも被害が。

「こうなったら広域砲撃で敵を蹴散らすしかないな。」

「広域砲撃で・・・リョウ君はともかく、私達は許可をもらわないと！」

「とにかく、許可をもらわないと！」

「その心配はいらへんで！」

この声・・・はやて！？

「はやてちゃん！？どうして！？」

「この数はちょっと予想外や。やから私も参戦するんや。」

「でも、許可は？」

「許可はもう取ってあるで。やから心配いらへん。」

もう取ってあるのか。
なら、はやてに期待するしかない。

「私は広域砲撃で仕掛けるで。リョウ君達は私を近付けないように近付いてくるガジェットもどきの迎撃よろしくな。」

「「了解！」」
「わかった。」

はやてが広域砲撃の準備に取り掛かった。
私達も仕掛けないと。

「これならこいつだ。」

リョウの手に武器が現れた。
二つの剣、二刀流か。

「ふんっ！」

リョウは二刀流の剣を自在に振り回しガジェットもどきを切り裂いていく。
さすがリョウ、強い。

「フェイトちゃん！」

おっと、見とれてる場合じゃないね。
こっちも頑張らないと。

「準備完了や！巻き込まれんように離れてや！」

はやての広域砲撃が飛んできた。
はやての広域砲撃がガジェットもどき数体に当たり周りを巻き込んで破壊していく。
おかげで一気に数十体を撃破する。
はやての広域砲撃でガジェットもどきの数がどんどん減っていく。
この調子なら・・・

「悪い三人とも、俺は別のところにいく。」

へ?どういう事?なのはとはやても同じのようだ。

「どうして?リョウ。説明して?」

「別のところで魔力を感じた。多分敵の増援だ。迎撃にいく。」

なら、なのはか私が一緒に・・・

「お前達の考えてる事は分かる。心配するな。増援の数はそんなに多くない。俺一人で充分だ。」

リョウ・・・

「・・・わかったで。でも、無茶はせんといてや。」

「わかった。なのはとフェイトはしっかりはやてを守れよ。」

「「うん!」」

私となのはの返事を聞いて、リョウは増援が来るであろう方向に行った。

気をつけて・・・リョウ。

リョウ（分身体１）ＳＩＤＥ

はやてが遠距離から広域砲撃を仕掛けて敵を減らしている時、離れたところから魔力を感じた。
俺はそこにいく事にした。
数は一つ・・・魔力の高さから転生者だな。
しかし、この魔力の垂れ流しはどうにかならんのかな。
制御もできてないとは・・・俺なんか魔力をコントロールしてあんまり感じないようにしているのに。
バカとしか言い様がない。
む・・・アレか。

「ほぉ～、よく気付いたな！褒めてやる！」

こいつが転生者か・・・つうか分かりやすいな、見た目がｆａｔｅのランサークー・フーリンだ。
しかも手には槍、ゲイボルク・・・単純だな。
そんで周りはガジェットもどきが・・・二十体ほどか。

「モブのくせになかなかだな！だが、俺の前では無力だぜ！そういうわけで、大人しく死んどけ！」

そう言いながら槍を構える。
ふぅ・・・いずれ転生者がたくさん現れるのは予想してたが、アグ

スタに現れた転生者や十年前に戦った転生者と同一かよ。
欲望に忠実で実力差もわからない・・・さらに自分が最強だと信じて疑わない自意識過剰ぶり、アホの極みだ。
ま、それはともかくまずはガジェットもどきをさっさと蹴散らすか。

「そらぁっ！」

投影魔術して作った双剣が連結刃になりガジェットもどきを切り裂き破壊していく。
僅か数秒でガジェットもどきは全滅し、残ったのは転生者一人だけとなった。

「ば・・バカな!?俺達のガジェットミレニアムが全滅だと!?」

この程度の雑魚ごときに時間を掛けたくないからな。
つうか、このガジェットもどきの名ってミレニアムっていうのかよ。
はっきり言ってセンス無さすぎ。
しかも強化したのは攻撃力のみだ。
しかも機動性や防御力はかなり落ちてるし。
強化どころか劣化してるのに気付かないのか？
やっぱりアホだ。

「なるほど、それなりの腕はあるようだな。だが！その程度の腕では俺に勝つ事など不可能だ！せめて一撃で仕留めてやるよ！」

そう言うと奴は槍を構えた。
あの構えは・・・アレか。
ふん！御託はもういいしな。
さっさと片付けてやるか。

「いくぞ！」

奴は突っ込んできた。
くるか・・・

「刺し穿つ（ゲイ）・・・死棘の槍（ボルク）！！」

宝具の真名解放をし、俺の心臓目掛けて突きを繰り出してくる。
だが・・・

「その心臓・・・もらったあああ！！！」

「・・・甘いな！」

俺は奴のゲイボルクを双剣でたたき折った。
ゲイボルクが折られた事に唖然とする奴の腹に右手にある剣を突き刺す。
剣はあっさり刺さり突き抜ける。
奴の口から血が吹き出る。

「ゴフッ！・・・バ、バカな・・・何故・・俺の・・・ゲイ・・ボル・・・クが・・・・」

何故って・・・スピードはないし、いくら宝具であるゲイボルクでも魔力で上乗せすれば投影された俺の武器でも破壊できるっつうの。
さらに言えばこいつ宝具を完全に使いこなせてない。
一瞬だったがすぐに勘づいた。
ま、そんなの敵に言うつもりはない。

「うるさいからさっさと死ね。」

そう言い俺は奴を滅多斬りにして絶命させた。
そのあと奴の死体を消し去る。

「ふぅ、こんなもんか。しかし、転生神の転生者どもってこんな奴等ばっかりなのか？しかもあの戦闘力で自意識過剰になれるのかわけ分からん。まあいいか、とりあえずなのは達のところに戻るか。」

俺はなのは達のところに戻る。

第４４話　マヌケはたくさんいる！（後書き）

白黒「第４４話完成！戦闘シーンは楽しいけど書くのは大変だよ。」

セイバー「それは仕方ないでしょう。」

家康「うむ！戦闘シーンは長くなりやすいからな。」

白黒「そうだな。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第４５話　護衛任務完了！（前書き）

白黒「今回は短いよ。」

ライダー「前話が長かったですからね。」

白黒「短くてすみません。」

家康「第４５話出陣する！」

第４５話　護衛任務完了！

三人称ＳＩＤＥ

ヘリは機動六課に帰還しようと移動中。
そのヘリから離れたところのビルの屋上に二人の男女が立っていた。
男はボサボサの茶髪で両手に大型のキャノン砲を持っている。
女は見た目はブリーチにでてくる朽木ルキア似で背は高く巨乳である。
二人は転生神に属する転生者である。

「とりあえず、ヘリを破壊するくらいの威力でいいよな。」

「ええ、そのくらいの威力で頼むわよ。あとはあたしがやるわ。」

男は機動六課のヘリに向けてキャノン砲を構える。
奴等の目的はもちろん、機動六課に保護された子どもとそれに乗り込んでいる女性キャラを手に入れることだ。

「まさかあのリインフォースやアリシアが生きてたなんてね。なんていう幸運なのかしら。うふふ・・絶対にゲットしてやるわ。」

「いらんのはヴァイスと一緒にいたモブだな。そいつらは消さないとな。」

「ふふ・・・頼むわよ。」

二人はそう言いながらキャノン砲のエネルギーをチャージしていく。
充填が完了したようだ。

「じゃあ、いくわ。」

「あいよ！」

女はこの場から離れ、ヘリへと向かう。

「いっけよや～～！！」

キャノン砲が発射された。
一直線にヘリへと向かう。

「これでヘリはアウト♪あとは・・・」

だが、二人の目論みはあっさり崩壊した。
それは・・・

「な、なにぃ！？」
「え！？」
砲撃がヘリに当たる直前何かによって防がれる。

「な・・・」
「そ、そんなバカな・・・」

それだけでなく砲撃が反射して跳ね返った。

「なにぃぃぃ！！」

跳ね返った砲撃は撃った男を飲み込んだ。

「うがあああ！！」

男は自ら放った砲撃によって絶命した。

「ば、バカな・・・あの砲撃を防いだだけでなく跳ね返したなんて！？・・・」

女は動きが止まる。

だが、その時ある人物が接近していた。

リョウ（分身体２）ＳＩＤＥ

俺は本体に言われてヘリの護衛をしている。

すると、離れたところから魔力を感じた。

感じた魔力は二つ・・・一つは移動しこっちにやってくる。

もう一つはそこで動かなく魔力が収束されているのがわかる。

すると、離れたところから砲撃が飛んできた。

「砲撃！」

「ヘリを狙ってる！？」

「リョウ！」

「問題ない。俺に任せろ。」

俺はヘリの後方の前に立ち、反射防壁を貼る。
砲撃を防ぐ。

「なんだ?この砲撃はあんまり威力ないな。」

バカにしてるのか?まあいい。
この砲撃に俺の魔力を加え威力を増幅して返す。
跳ね返った砲撃は撃った奴を飲み込んだ。

「さすがはリョウだな。」

「凄い凄い!」

「もう心配ないだろ。俺は少し寄るところがあるから引き続き護衛を頼むぞ。」

「わかった。」

「任せて!」

「ヴァイス。気をつけろよ。」

「任せて下さい旦那!」

さて、行くか。
俺はヘリから離れて近付いてくる敵のところに高速移動する。
・・・・・見つけた!あいつか。
女か・・まあどうでもいいな。

俺は女の眼前に現れる。

「なに!?あ、アンタ・・いつの間にわたしの近くに!?」

いつって、今来たところだが。

「まあいいわ。わたしの前に現れたという事はわたしに殺されにきたという意味でいいかしら?」

「どうかな?」

「ふん!どうでもいいわ。さっさと（グサッ）・・?!!」

悪いが無駄話は好きじゃないんだ。
だからさっさと殺る。

「じゃあな。・・・女!」

俺は投影した刀を女の腹に突き刺し、すぐに抜きバラバラに切り裂き絶命させた。
これで終わりだな。

「さて、護衛に戻るか。」

俺はヘリの護衛に戻る。

リョウＳＩＤＥ

ヴィータと?に合流して、フォワードメンバーとギンガを連れて地上に出る。
地上に出ると三つほどの魔力を感じた。
おそらく転生神の転生者だな。
しかし、すでに消えているから死んだかな。

「さてどうする?このまま六課に帰還するか?それともなのは達と合流するか?」

「なのは達と合流しよう。そのほうが比較的安全だしな。」

決まりだな。
俺達はなのは達と合流する。
合流する直前なのは達といた分身体のほうが消え、情報が流れてきた。
・・・ふむ、なるほどな。
しかし、転生神の転生者どもの実力はこんなもんか?
たいしたこと無さすぎだろ。
まあいいか、なのは達と合流し、六課に帰還した。
帰還後、六課に先に帰還した分身体も消え情報が流れる。
さて、どうするか。
ヴィヴィオは聖王教会の方で診察を受けるようだし、今日はいろいろあって少し疲れたな。
さっさと飯食ってシャワー浴びて寝よう。
夜になり、これから寝ようとした時だった。

「リョウ・・・いるか?」

「入るよ!」

誰だよ?こんな時間に。

「ってアリシアとリインじゃねえか。どうした?」

「いやなに。今日のデート、中途半端に終わっただろ?私とアリシアは不完全燃焼でな。」

「だからね。一緒に寝よう?」

おいおい、ヤバいぜ。
このままだと俺は一緒に寝てしまう!それだけはなんとしても避けないと!

「逃げるのはなしだよ。」

「カギはもう閉めてる。一緒に寝るの選択肢しかない。／／／／」

な、どうやって!?

「お母さんのハッキングのおかげだよ。」

プレシアか～!クッ、ならばバサラ!

〔スリープモードに移行します〕

う～ら～ぎ～り～デバイス～!

「あきらめて一緒に寝よ。／／／／」

「観念してください。／／／／」

「ちくしょう～～！」

俺は根負けし、一緒に寝ることになった。

次の日、朝なのは達に殺されかけたのはお約束だ。

第４５話　護衛任務完了！（後書き）

白黒「第４５話完成！長くなりそうだな。なのはの世界編。」

テンテン「オリ敵達がいるもんね。長くなるわよ。」

セイバー「我々の世界編でも、それくらい長ければ。」

白黒「申し訳ありません。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はリョウ、パパになる！」

第４６話　ヴィヴィオ迎えに行く！（前書き）

白黒「寒い・・・さすがに十一月になるとさむなってきたな。」

テンテン「暖かい格好をしないといけない時期になったわ。」

白黒「スカートを履く女性は大変だな。」

ライダー「全くですね。自分にはＧパンを履くので関係ありませんが。」

家康「第４６話出陣する！」

第４６話　ヴィヴィオ迎えに行く！

リョウＳＩＤＥ

ヴィヴィオを保護して次の日、俺は今なのはとシグナムと一緒に車に乗って聖王教会のほうに移動している。
理由は聖王教会にある病院にいき、ヴィヴィオをどうするか決めるためだ。

「すまないな。勝手に連れてきてもらって。」

「構わない。ちょうど俺もあの娘のこと気になっていたからな。」

「よかった。もし来る気が無理矢理連れて行く気だったから。」

うおい！なのはの奴、そんなことを！

「そうだな。リインとアリシアは良い思いをしたのに私達には何もなしなど認めん！」

「シグナムの言う通りだよ。私達だって良い思いしたいもん！」

うぅ・・・これは帰ってから大変だ。
その時、聖王教会のカリムの秘書でシスターの『シャッハ・ヌエラ』から連絡がきた。
どうやらヴィヴィオが病室から抜け出したようだ。
到着すると、状況を報告した。

どうやら外に出てるらしく、扉や窓は完全に封鎖されてるようだ。
つうか、原作でも思ったがなんでたった一人の小さな女の子にたいしてこんなに厳重体勢なんだよ。
わけ分からん。
俺は中庭の方を探索する。
そこにいること知ってるからな。
・・・いた。
あそこか・・・俺はゆっくり近付く。

「お嬢ちゃん。」

「ふぇ・・?」

ヴィヴィオは俺のほうをゆっくり振り向く。
怯えてるな・・目線を同じ背丈くらいに合わせて優しく語りかけないと。

「迷子かい?」

(フルフル・・・)

「誰かを探しているのかな?」

「・・・ママ・・・」

「ん?」

「ママとパパを探してるの。」

「見つかったのかな?」

「・・見つからないの。」

「そう・・・」

う～ん、ママとパパか。
この年頃なら、親を恋しがるもんな。

「よし、自分が探すのを手伝ってあげる。」

「ほんと？」

「うん。それじゃあお嬢ちゃん、名前を教えてくれないかな？」

「・・ヴィヴィオ。」

「ヴィヴィオか・・うん、いい名前だね。それじゃあ一緒に探しに・・！」

後方から気配を感じた。
とっさにデバイスを発動し、ブレードモードにして振り返りながらおもいっきり振るう。
なにかがぶつかり、吹き飛ばす。
俺に攻撃をしてきたのはシャッハだった。
トンファー型のデバイスを構えている。

「！？何をするのですか！？」

「それはこっちのセリフだ。いきなり攻撃とは、聖王教会の修道騎士とは見つけたら攻撃をするのが習慣なのか？」

〔バサラ、録音準備〕

〔了解〕

「私はただ、あなたに危険がないようにですね！」

「は？なに言ってんの？この娘はただの小さな女の子だぜ。どこに危険があるんだ？」

「その娘は人造魔導師です！どれだけ危険か、あなたは分かっているのですか！？」

そのくらい知ってるっつうの。
つうかなにその言い方。
まるで造られた存在は危険だという言い方はよ。
マジでキレそうだ。

「おいおい、なんだよその言い方は。まるで造られた存在は危険ですって聞こえるんだがな。」

「当然です！人造魔導師は危険です！力があり、いつ暴走し我々にキバを向けるか分かりません！だからこそ今のうちにしっかり監視しなければなりません！」

「んで排除しようと考えるわけか。いや、実験材料にするつもりか。」

「そうです。聖王教会に危険が及ばすわけにはいきません！造られた存在など信用できません！」

「なるほど、それはつまりフェイトやシグナム達ヴォルケンリッターを信用してないようだな。」

「なっ!!?」

だってそうだろ?造られた存在、つまりフェイトやシグナム達ヴォルケンリッターを信じてないという事だろ?

「なにを言っているのです!!いつ私がそんな事を!!」

「今さっき自分の口で言ったじゃねえか。造られた存在は信用できないって。危険な存在なんだろ。だったらフェイトやシグナム達は信用できないと同意だろ。それともなにか?今の言葉を否定するところでもあるのか?」

「そ、それは・・・」

「ああ、心配いらないよ。もう拒否も否定も弁解もいらないからな。もう記録も録ったしな。」

「なっ!!いつの間に!?」

「お前が襲ってきた時にな。それにしてもさすがだな。表面上ではフェイト達を優しく接してるのに本心ではあいつらを監視していつキバを向けられても大丈夫ように武器を構えてるんだろ?」

「ち、ちがっ・・・」

「違わない。そうだろ?」

結局こいつも組織の正義に妄信しているカスだな。
だから信用できないんだよ。
お、シャッハがデバイスを構えた。

「なんのつもりかな？」

「カリムからあなたの事は聴きました。だが、私はあなたを信用できない！あなたは危険です！」

「ふん！なら、どうしようとゆうんだ？」

「決まっています！あなたを拘束し捕らえます！！」

「ほぉ・・・」

くくくっ・・・面白いことを言ってきやがった。
これはチャンスだな。
自衛防衛という口実でこいつをボコれるぜ。
俺はシャッハがあんまり好きじゃない。
原作でヴィヴィオにデバイスをむけたんだからな。
容赦はしない。

「いいぜ・・こいよ。遊んでやるからよ。」

「そのふざけた口調をふさがしてもらいます！」

まさに一触即発の空気。
シャッハはマジモードだな。
俺はマジで遊び感覚だがな。

「止めろリョウ。シスターシャッハも。」

ん、シグナムとなのはがきたか。
まあ、気付くわな。

「シスターシャッハ。あなたはなにをしているのかお分かりなのですか？」

「もぉリョウ君！二人がデバイスを構えるからこの娘が怯えちゃったじゃない！」

あ・・・しまった。
つい忘れていた。
ヴィヴィオを見ると、怯えた表情で見つめてる。

「もう大丈夫だよ。怖かったね。」

ヴィヴィオ涙目だな。
なのはがヴィヴィオに近付きあやす・・・俺、やっちまったな。

「ごめんよヴィヴィオ。怖がらしちまって、もう大丈夫だよ。怖くないよ。」

俺はヴィヴィオに近付き屈みあやす。
必死にあやしたおかげでどうにか怯えるのはなくなった。

「ヴィヴィオ？」

「ああ、この娘の名前のようだ。」

「ヴィヴィオか。うん、良い名前だね。」
なのはも同じだな。
「ねえ・・・ママとパパはどこなの？」
「ママとパパ？」
あ、忘れてた。
そういえば、ヴィヴィオのママとパパを探していたっけな。
「ごめんよ。探すのを忘れていたよ。これから探しに行こうか。」
「うん。」
「という事でなのはにシグナム。この娘を六課に連れていくぞ。こんなところより六課のほうがいいだろう？」
「・・・確かにな。」
「私もリョウ君の意見に賛成だよ。」
「なのはさん！シグナムさん！」
なのはとシグナムは賛成してくれた。
しかし、シャッハが抗議の声をあげる。
「シスターシャッハ。ここは設備は完備していいだろう。しかし、この娘が外にでるだけでこれではこの娘も辛いだろう。」

「その点、六課ならそんな事しないしみんな優しいからこの娘も嬉しいと思うよ。」

「・・・はぁ、わかりました。しかし、危険だとわかりましたらすぐに連絡してくださいね！」

シャッハのバカな言葉を聞きながら、俺達は六課に帰還した。
なお、帰還中に録音したシャッハの言葉をカリムへと届け渡した。
（その時、シャッハは録音を聞いたカリムにこっぴどく怒られていた）

第４６話　ヴィヴィオ迎えに行く！（後書き）

白黒「第４６話完成！ヴィヴィオが機動六課にきました。だけど、ミスをおかしてしまった。」

セイバー「ミス？」

白黒「実は、次回リョウがパパになるって言ったんだけど書かなかったんだ。改めて次回にしようと思います。」

ライダー「ダメダメだな。」

白黒「面目ありません。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第４７話　リョウパパになる！なのは達ママになる！（前書き）

白黒「主人公は必ず疲れる目にあう。これは定番だな。」

家康「定番外の主人公っているのかな？」

白黒「それは知らない。」

テンテン「第４７話始まります！」

第47話　リョウパパになる！なのは達ママになる！

三人称ＳＩＤＥ

リョウとなのは、シグナムがヴィヴィオを機動六課に連れてきて数時間が経った。
ヴィヴィオはリョウといる時間が多い。
その頃、フェイトとはやては部隊長室で今後の事を話し合っていた。
そして、これからリョウとなのはに話を聞こうと回線を繋ぐ。

「びえええええっ！！いっちゃやだあああ！！！」

「えっとね。私はこのまま出かけなきゃならないの。だからね。」

「いやだあああああ！！！」

「俺は残るよ。だからな。なのはは仕方ないから俺と一緒に。」

「びえええええ！！！」

モニターには泣いているヴィヴィオとそれをあやすリョウとなのは、
そしてフォワードメンバーだった。
それを見て、フェイトとはやては目を丸くしていた。

〔フェイトちゃん、はやてちゃん助けて～！〕

なのはから念話がくるまでその場で動かなかった。

リョウＳＩＤＥ

ヴィヴィオが泣きやまなくてかなり困っていた。
どうしよう・・・

「さすがにエースオブエースやリョウ君でも子供の泣き声には勝てへんか。」

「はやてちゃん！フェイトちゃん！」

おいおい、フェイトとはやてだけじゃなく他の奴等も来たよ。
マジでどうしよ。

〔バサラ、なにかないか？〕

〔そうですね・・・音楽なんかどうですか？もしくはテレビとか〕

それだ！さすがは俺のデバイスだ！
ここは音楽がいいな。

〔バサラ、幻想水滸伝？の月夜のテーマを流せ！〕

〔了解！〕

俺はバサラに音楽を流してもらう。

柔らかな曲が流れ、ヴィヴィオはそれを聴き泣きやんだ。
ふぅ、助かった。

〔さすがはリョウ君や！バサラにこんな機能を付けとるなんて！〕

〔まさか、こんな時に役に立つとは俺も予想外だけどな〕

泣きやんでくれたからゆっくり話をしないとな。

「ヴィヴィオ。ヴィヴィオはなのはを困らせたいわけじゃないだろ？」

「・・・うん。」

「だから、いい子にして待ってあげような？それまで一緒に遊んであげるからさ？」

「本当？」

本当だぜ。
俺の部屋にいけばたくさん遊べる道具があるからな。
ただ、絵本はないな。
どっかで買い物して買うか。

「ああ、テレビもあるし遊び道具もある。俺の部屋にいけばたくさんな。」

そうすれば時間もすぐにすぎるさ。

「ふえ～～！」

「つうわけで行ってきな。俺はフォワードメンバーと一緒にヴィヴィオと遊ぶから。」

「うん。ごめんね。帰ったら一緒に遊ぼうね。指切りげんまん。」

「うん。」

なのははフェイトとはやてと一緒に管理局っていうかプレシアのところにいった。

なんでも報告があるとか。

アレ？ここって確かカリムに呼ばれるとかじゃなかったっけ？

まあいいか。

「さてヴィヴィオ、俺の部屋で遊ぼうか。フォワードメンバーも行くぞ。」

「うん！」

「「「「え？私達（僕達）も？」」」」

「当然だろ。俺一人だと飽きるだろ。お前達も来てくれたら助かる。」

ティアナ達は納得してくれたようだ。

さて、部屋に移動するか。

ティアナＳＩＤＥ

私達フォワードメンバーはリョウさんに誘われてリョウさんの部屋に入る。

「ここがリョウさんの部屋・・・」

「小綺麗だけど物がたくさんあるね。」

「うん。いろいろある。」

リョウさんの部屋って確かに綺麗に片付いてるけど物が多い。
確か、地球のゲームや漫画なんかを取り寄せて持って来てるんだったわね。

「うわ～～！」

ヴィヴィオはリョウさんの部屋を見て目をキラキラさせてる。

「さて、ぬいぐるみとか絵本とははあとで取り寄せてもらうとして、とりあえず子供でもできるゲームがいいな。こういうのはシンプルなものがいいから、う～～ん。」

リョウさんはブツブツ言ってる。

「よし！まずはこれで遊ぶか。」

そう言いリョウさんがある物を取り出した。
それは？

「これはW〇.iっていうゲーム機だ。これにはレトロゲームもある。
これならたくさんのゲームができるだろう。」

なるほどね。
そして、私達はヴィヴィオと一緒にゲームをして遊ぶ。

「あらあら、みんな楽しんでるわね？」

「こんにちは？」

アリサさんとすずかさんが部屋にやって来た。
どうして？

「俺が呼んだんだ。人は多いほうがいいだろう？」

「私達もヴィヴィオと仲良くなりたいんだから。」

「そういう事。」

私達はアリサさんとすずかさんを加えてたくさん楽しんだ。
途中でぬいぐるみや絵本とかきて大変だった。
夕方前にはなのはさん達も加わり大いに楽しんだ。

リョウＳＩＤＥ

ふわあ～～・・・
よく寝た。
昨日はヴィヴィオとなのは達と一緒に遊んだな。
おかげでまだ眠い・・・でも、ここで寝たら昼まで起きなくなるからな。
眠気を押さえながらなんとかベッドから出て、顔を洗いシャワーを浴び着替えて部屋を出る。
部屋を出て訓練場に行く。
行くとなのはとフォワードメンバーが早朝訓練をしている。
眠たいだろうなあ、ご苦労な事だ。
あ、俺もか。

「あ、リョウ君。」

「よ。」

「リョウ君も訓練？」

「いや、軽くランニングして少しフォワードメンバーの調子を見にな。」

「そう。」

俺は軽く三十分、隊舎の周りを走りこむ。
三十分が経ち、フォワードメンバーの様子を見にいく。
ちなみに隊舎の周りを五周ほどした。
到着するとアリサとすずか、さらにヴィヴィオと増えていた。

「リョウ君。」

「アンタもいたの？どこに行ってたのよ？」
「すずかにアリサ。少しランニングをな。」
「おはようございます！」
「おはよう。ヴィヴィオ。」
「えへへ～・・・」
ヴィヴィオが朝の挨拶をしてきたので俺も挨拶する。
俺達はフォワードメンバーの様子を見る。
「ねぇ・・・」
「ん？」
ヴィヴィオが裾をクイクイ引っ張りながら俺を見る。
「なんだ？」
「・・・抱っこ。」
抱っこか。
まあ別に構わんな。
「抱っこより・・「わっ！！」・・こっちのほうがいいだろう？」
ヴィヴィオを肩車で乗せる。
そしたらヴィヴィオはとても喜んでくれた。

こっちのほうが見やすいだろうからな。

「リョウ。なんかアンタお父さんみたいね。」

「そうか？」

そうなのかな？

「だったら・・・私がアンタの奥さ・・グエッ！」

「アリサちゃ～ん・・・抜け駆けはいけないよ～。リョウ君も今のは聞かなかった事にしてね。（ハート）」

「は、はい。」

こ、こえ～！すずか、十年前より怖くなってるよ。

ヴィヴィオは頭に？マークを浮かべながら首を傾げる。

この時、俺は気付くべきだった。

これが後のとんでもないことの火種だった事を。

早朝の訓練を終え朝食を食べている時だった。

「ほらヴィヴィオ。ほっぺにケチャップが付いてるぞ。」

「ふぇ。」

俺はナプキンでヴィヴィオのほっぺについたケチャップを拭き取る。

ヴィヴィオはご満悦な表情だ。

「こうしてるとリョウ君とヴィヴィオは親子だね。」

親子？俺がか？
髪の色は違うし目もオッドアイじゃないぞ。

「だってそんなふうに面倒を見るところなんかまさに親子ってかんじだもん。」

フェイトがそう言うと他の奴等もうんうんって頷く。
ああ・・・それはたぶん俺が子供好きだからだろう。
これでも昔はＮＡＲＵＴＯの世界でナルトとヒナタの子や他の奴等の子の面倒をみたことがあったからな。
慣れてるんだよな。

「うぅ？パパなの？」

は？今なんつった？
ヴィヴィオ、今パパと言ったのか？
困るんだがな。

「いや、俺はパパじゃ「ちがうの？」・・・えっと・・・・」

「・・・」
「・・・」

「・・・ふえっ・・・」

ああ！泣きそうな顔をしないでくれ。
周りからの視線がキツい！
クッ！仕方ない。

「ああ！わかったわかった！俺がヴィヴィオのパパになるよ！」

「・・・ほんと？」

「ああ。」

「えへへ・・・リョウパパ～！」

ヴィヴィオは喜びながらそう言う。

「リョウがパパなら、あたしはママかな？」

は？アリシア？・・なに言ってんの？

そんな事を言ったら。

「ちょ！なに言ってるの姉さん！ヴィヴィオ！私がママのほうがいいよね！」

「フェイトちゃんもなに言ってるの！私だよね！」

「なのはちゃんもなに言うてるん！私がママや！」

「アンタ達なに言ってるのよ！私が先に言ったのよ！私がママでしょ！」

「アリサちゃんのは抜け駆けでしょ。ヴィヴィオちゃん、あたしがママになってあげる！」

「主達、なにを言っているのですか！ヴィヴィオよ、どうか私を母

と呼ぶがよい！」

「夜天よ、なにを言っているのだ！わ、私こそ母にふさわしい！／／／／」

「隊長達！ふざけないでください！あなた達に任せられません！わ、わ、私がママになります！／／／／」

あ～～！やっぱりそうだな！そうなると思ったわ！
もういやだ！予想はしていたぞ！
ちくしょう！周りも喧しくなったよ！
しかし、ティアナもかよ！いやいやティアナはヤバいよ！
このままだとヤバい！いろんな意味でヤバい！
なんとかしなくては・・・なんとか・・・考えろ！
考えるんだ！

「だったらアンタ達全員がママになればいいじゃない。」

「「「「「「「「「「「「それだ！！」」」」」」」」」」」」

それだじゃねええ～～！！プレシアいつの間に来たんだああ～～！
しかも、なに納得してんだよお前ら！

「う～？誰がママなの？」

「えっと・・・」

う！周りの視線が痛い。
くそったれ！

「ええっとな。この九人がヴィヴィオのママだ。」

「・・・ママたち？」

「「「「「「「「「な～にヴィヴィオ？」」」」」」」」」

うわ～、なのは達微笑みながら応えてるよ。
ちくしょう・・・なんでこうなるんだよ。
ていうか。

「プレシア、いつ来たんだよ？」

「今さっきついたばっかりよ。食堂で食事しようと来てみればあーなっていたし。だからああ言ったのよ。」

「だからってさすがに・・・」

「じゃあ、あなたがなんとかできたの？」

うっ・・・どうにもできない。
しかし、さすがに。

「どうせ重婚するのだから問題無いでしょ？」

「重婚すること確定なのか！？くそ、強く言えないからなんともできないぞちくしょう！」

「あきらめも必要よ。ちなみに私は重婚許可よ。ちゃんと娘達を幸せになってくれるならね。」

もういやだ。

「あの・・・そうなると、僕たちもお父さんと呼んだほうがいいのでしょうか？」

「それはやめてくれエリオ！なんでその考えにいたったのか分からないが却下だからな。いいな？」

「「はい。」」

はあっ・・・こんなに疲れたのは初めてだよ。

とにかく俺がすべき事はたった一つ！それは早く飯を食って自室にこもることだけだ。

俺は急いで飯を食い、食堂を出る。

「どこへ行くの？」

「あ？部屋へ戻るんだよ。なのは。」

「え～！もうちょっとここにいてよ！」

「却下。というわけでじゃあな。」

俺は急いで食堂から出た。

その時、なのは達がなにか言っていたが無視した。

はあっ、疲れた。

俺に似たような別世界の転生者達もこんな気持ちなのかな？

・・・まあいいや。

早く風呂入って寝よ。

今日はマジで疲れたからな。

さあ寝よ。

第47話　リョウパパになる！なのは達ママになる！（後書き）

白黒「第47話完成！ついにリョウがパパになりました。」

セイバー「まさかリョウがパパになるなんて。」

ライダー「なら私達はママですね。ですよね？作者？」

白黒「は、はい・・」（ガクガク・・・）

家康「ご愁傷様だな。リョウ殿。」

白黒「ああ。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「次回はあの奴等が六課に！」

第４８話　スカリエッティ一味機動六課にくる！（前書き）

白黒「これから大変な事になるよ。リョウは。」

家康「それはどういう事なのだ？」

白黒「それは本編にて。」

セイバー「第４８話始まります！」

第４８話　スカリエッティ一味機動六課にくる！

リョウＳＩＤＥ

う～ん…もう朝か。
…あれ？両腕が動かない。
それになにか体に乗っかってて重いんだけど？
チラッ……え？

「はあああああ！！」

やっべ～！つい大声出しちまったよ！
いや、それはともかく……なんでこいつらがここに居やがるんだ！？

「う～ん。……おはようリョウ。」

「…おはようチンク。なんでここにいるんだ？」

俺の体に乗っていたのはチンクだった。
そして両腕には右はセッテ、左はウェンディが引っ付いている。
つうかなんでここに？

「チンク、悪いがどいてくれ。ついでにこの二人を起こしてくれ。」

「わかった。」

チンクがどいてくれて二人を起こした。

俺はベッドに座り改めて聞く。

「さて、聞かしてもらおうか。どうしてここにいるんだ?」

「ふむそれは…」

「それは私の口から言おう。」

「スカリエッティ!」

スカリエッティもいたのか。
あれ?いつの間に現れたんだ?

「クアットロのＩＳ『シルバーカーテン』のおかげさ。さらにドゥーエがここのＩＤを手に入れたおかげですんなり入れたのさ。」

心の中を読んだ!?
つうかクアットロとドゥーエの仕業かよ!よくみたらナンバーズ全員いるじゃねえか!
いくら俺の部屋は広いといってもさすがに狭いぞ!

「なんでお前達がここに居るんだよ!ここが何処か分かってるのか!?機動六課だぞ!なんで?」

「おやおや、忘れたのかい?私は君に機動六課に居させてもらう約束をしたではないか。」

確かにしたよ!けどな…

「まさか今日だとは思わなかったわい!だいたいそういう事は連絡

しろよ！」

「それではつまらないではないか。サプライズというものだ。いや、この場合はドッキリかな？」

んな理由でかよ！困るぞ！

「まあそんなことより、“アレ”はちゃんとあるのだろうね？私は直に見てないのでね。」

「そんなことよりですますな！はぁ…まあいい、“アレ”はちゃんと機動六課の完全秘密地下倉庫にある。まだ誰にもバレてない。」

「そうか。助かるよ。」

“アレ”とはなにか？それは後に分かるだろう。
やれやれ、面倒いことになったな。
さて、どうするか……あ！

「そういえばゼスト達は？あいつらもここに来るだろ？」

「ああ、ゼスト達はもうすぐに来るそうだ。我々と違って普通に入れるからね。」

ならてめえらも普通に入れよ！

「リョウ？さっき大声が聞こえたんだけど、聞いてる？」

うお～～！フェイトが部屋の前にいるぅ！俺が大声を出したからか！

「リョウ君。ほら、開けてよ。」

「開けてくれへんかな?リョウ君。」

なのは達もきてるよ!どうする!?どうするよ!!?

「スカリエッティにお前ら!シルバーカーテンをするかセインのディープダイバーで身を隠せ!このままだとヤバい!見つかったら!」

「私に任せてな。私は部隊長やで。カギくらい簡単に開けられるで!」

「さすがは主はやてだ。我々にできない事を平然とやってのける。それに痺れる憧れる。」

「それはいいから早くしなさいよ!」

「そうよはやてちゃん。リョウ君になにか起こったのよ。」

「そうやな。」

ヤバ~い!だめだ間に合わない!

「リョウ、入る…よ。」

あ、入ってきちまったよ。

みんな見てるよ。

「…」

あ、扉を閉めた。

「スカリエッティ！」

「それに、よくみたらあのドゥーエって女もいるわよ！」

「どういう事や！どうしてスカリエッティがリョウ君の部屋にいるんや！」

うわ～、こうなったよ。
俺はみんなと離れて中間の位置に突っ立ってる。

「初めましてフェイト・テスタロッサ。なに、ここにきたのは彼に会いにきたからさ。」

「フフフ…私達もリョウに会いにきたのよ。最近会ってなかったからね。」

「どういう事や！なんでリョウ君に！」

「もちろん、目的があってね。」

「目的やて！？なんや？」

「決まってるではないか。彼をもらいにきたのだよ。」

「なんだって！！？」

うおい！なに言ってやがる！

「私達は本気よ。私達は彼が欲しいの。」

「無論、婿としてだ。」

は？

「なんですって～！」

「む、むむ婿だって～！」

「どういう事かな？リョウ君。説明してくれないかな？」

「ま、待て！俺にはサッパリだ！」

だいたいなんで婿なんだよ！しかも結婚前提って勝手に決めんなよ！

「勝手に決めないで！」

そうだなのは！なんとか言ってやれ！

「リョウ君を婿にするのは私達だよ！」

なんでだよ～！なんでこうなるんだよ！

「そうじゃないよなのは！今はそんな事言ってる場合じゃないよ！それはあとで口論すればいいんだから！」

できれば無しにしてくれると嬉しいんだが。

できないかな～？できないか。

「スカリエッティ！あなたを逮捕します！」

「できるかね。君にいや、君達に…」

まさに一触即発の雰囲気だよ。

だけどな…だけどなあ！

「いい加減に…しやがれええ！！」

『『『『！！』』』』

「いい加減にしろよ貴様ら！ここが何処か分かってんのか！俺の部屋だ！こんなところでやり合うな！やり合うなら訓練場に行きやがれ！もしここでやり合う気なら…貴様ら、覚悟はいいだろうな。ああ゛！！」

『『『『す、すみません。』』』』（冷汗）

いやほんとマジで！こいつらは！俺を無視して勝手にごちゃごちゃ決めやがって！

〔プクク…〕

〔アリシア…お前は知ってるだろ。何故止めない〕

そう、実はアリシアはスカリエッティが味方だと知っているのだ。

もちろん、プレシアもだ。

〔だって、フェイトやみんなのマジな顔がぷぷ…〕

ア～リ～シ～ア～！お前はこんな時になに呑気な事を言ってやがるんだよ～！
こっちはピンチなんだ！助けろよ！

〔いやよ。少し頭を冷やしてね。（ハート）〕
（だいたいリョウ君を巡るライバルが多すぎるよ。ここで減らさないと！）

なんだろ…アリシアの念話を聞いてたらなんかなんか恐ろしい感じがしたんだが。
と、とにかく！この現状をなんとかしないと！

「あら、フェイトにアリシアそれに皆もどうしたの？」

「あ、母さん。」
「お母さん。」
『『『プレシアさん！』』』

お、プレシアが来た。

「母さん！スカリエッティがここに、リョウの部屋に！」

「え？」

プレシアが俺の部屋を見る。

「あらスカリエッティ、ここにいたの。いつの間に入ってたのよ。」

『『『『え？』』』』

「いやいやすまない。彼にちょっとしたドッキリをしたかったのだよプレシア女史。それにしてもまさかこうなるとは思ってなかったけどね。」

「全く、フェイト達を困らせないでほしいわ。リョウが困るわよ。」

プレシアとスカリエッティがのんびり話をし、アリシアを除くフェイト達は唖然としている。

まあ当然だよな、いきなりプレシアとスカリエッティが何の変哲もない会話をしてるんだからな。

「ゼスト達からあなた達が六課にきてると聞いて探してたのよ。全く、ドッキリも結構だけどこっちの身にもなってほしいわ。」

「ふむ。それはすまない。謝ろう。」

全く謝ってる感じじゃないんだがな、スカリエッティ。

「ちょ、ちょっと待って母さん！」

「なに？フェイト。みんなもそんな豆鉄砲を食らったような顔で。」

「あの、プレシアさん。なんでスカリエッティとそんなに親しく会話をしているのですか？」

「そ、そうだよ！母さん！スカリエッティは！」

「知ってるわよ。彼等とは友人関係よ。」

『『『『へ？』』』』

「あれ?フェイト達、知らなかったの?…リョウ。」

うっ、プレシアが俺をにらみ付ける。

「あなた…話さなかったの?」

「すみません…話す機会がなかったので。なによりまさか今日だとは思わなかったから。」

「全く、あなたがさっさと伝えないからこうなるのでしょう?」

おっしゃる通りです。

完成に俺の落ち度です。

「…すまん。」

「ふぅ…とりあえずリョウ、あなたはまず着替えなさい。私達は先に食堂に行くわ。そこでゼスト達が待っているから。」

「わかった。」

「というわけで食堂に行くわよ。スカリエッティ達もいいわね?」

「ああ、構わないよ。我々もまだ朝食を食べていないからね。」

なのは達はプレシアに連れて行かれてスカリエッティとともに食堂に行った。

さて…俺も着替えるか。

いつもの服装に。

はやてＳＩＤＥ

私達はプレシアさんに連れられてスカリエッティ一味と一緒に食堂に移動しとる。
けどな…

（この空気、どないかなんないんかな）

さっきから私もやけどアリシアとプレシアさん以外がスカリエッティ一味を睨んどる。
特にフェイトなんかいつでも攻勢にでられるようにデバイスまで持って構えとる。

「ふむ、そんなに睨まないでほしいな。我々は何もしないというのに。」

「どうかしら。油断したところを攻められたらかなわないからね。信用できないわ！」

「そうかい。」

スカリエッティはまるでなんでもないというように気軽に話しかけてきよる。
ほんまきにくわへんわ。
プレシアさんは無視しとるし。

「ついたわ。ここが食堂よ。」

「ほぉ、ここが食堂か。ご飯は美味しいことを期待している。」

スカリエッティの奴、ふざけやがって。
なにのんびり喋ってんねん。
プレシアさんもや。
私達は食堂に入る。

「やっときたか。プレシア、スカリエッティ達はどこに居たのだ?」

「リョウの部屋よ。全く、おかげでいらない手間をかけたわ。」

食堂に入ると近くのテーブルに知らない人が数人が座っとった。
中年の男が一人、青年が一人、女性が三人、少女が一人、アレはユニゾンデバイスか?が一人が座っとった。
つうか女性三人の内二人は知っとる二人やった。

「母さん!?それにギン姉!」

「スバル!」

「スバル…頑張ってる?」

「え?あ、うん。頑張ってるよ。」

スバルの母親のクイントさんと姉のギンガやった。
なんでここに?

「兄さん!?」

「やあティアナ。リョウから聞いたよ。強くなってるそうじゃないか。嬉しいよ。」

「ど、どうして兄さんが!?」

あの青年はティアナのお兄さんなんや。

「リョウに呼ばれてね。これからは一緒に任務ができるよ。」

「え?」

どういうことや?すると堅い身体をしとる中年の男が私に近付いてきよる。

「八神はやてだな。」

「そうですけど…」

「俺の名はゼスト。リョウに助けられた者だ。」

リョウ君に?いったいいつ?
他の人達も自己紹介してもらった。
そして着替えたリョウ君が食堂にきた。

「待たせたな。さて、飯を食いながら説明してやるよ。」

リョウ君がそう言うから私達も朝食を食いながら説明をしてくれるようや。

さて、話してもらうで。

「さて、説明してや。」

「わかった。俺がスカリエッティと出会ったのは約8年前だ。」

8年前!?それってなのはちゃんが怪我した時にか!

そういえば何故かなのはちゃんとヴィータを助けたのは分身体のほうやったな。

「ねえリョウ君。スカリエッティと会ったのは8年前のいつ?」

「なのはがあの怪我をした時だ。」

「あの時!?」

やっぱりか。

「その時にスカリエッティだけじゃなくゼストやクイント、メガーヌに会ったんだ。」

「そんなことがあったんだ母さん!」

「ええ、彼には感謝してるわ。彼が助けてくれなかったら私らは死んでたわ。」

そうなんや。

やっぱリョウ君は凄いな。

「それでプレシアと三賢人にお願いして今にいたるわけだ。」

「それで私はスカリエッティと知り合ったの。最初は警戒したけど今では仲がいいわ。」

「あたしもお母さんと一緒に出会って、ナンバーズの何人かと仲がいいよ。」

やからプレシアさんはスカリエッティと会っても落ち着いてたんやな。

つうかアリシアちゃんも知っとったんや。

「なんでスカリエッティと仲良くなってるの!?だってこいつは!」

確かにな。

スカリエッティは指名手配中の次元犯罪者や。

普通はそう簡単に仲良くなれへん。

「スカリエッティが造られた存在だとしてもか?」

『『『『え?』』』』

どういう事や!?スカリエッティが造られた存在?

「リョウから聞いたのだけど、彼はアルハザードの技術を利用して造られたそうよ。」

アルハザード!?確か、プレシアさんもそこを目指そうとしとった幻の世界。

存在しとったんか!

「私は管理局の手により培養槽で造られたのだよ。奴等の思い通りの傀儡となるために。」

「奴等？奴等って誰？」

もしかして、レジアス中将か？

「最高評議会の三人さ。」

『『『『！？』』』』

最高評議会！？なんでなんや！わけがわからへん！？

「最高評議会の三人は自分達の思い通りになるように手駒を作り出した。それがその一つがスカリエッティだ。」

詳しく聞くと評議会は人造魔導師計画や戦闘機人計画を科学者などに造らせるよう指示しとったようや。
つまりスカリエッティも被害者という事かい。
腐っとる！ここまで腐っとるんかい！管理局は！

「組織の一番恐ろしいところは自分達が正義だと信じて疑わない。組織の正義って奴は自分達は正しいと、これは正義なんだと言い誤魔化す。罪の意識すら感じないほどにな。」

おかしい！そんなんおかしすぎや！それって犯罪やのにやってることは正しいって言ってるようなもんやん！
これが、現状の管理局なん！？

「今のところは海は大半がそういう奴等だ。陸も海ほどではないが

かなりの数がそういう思考の持ち主だ。レジアスがなんとかしてるがいかんせん数が多すぎる。」

レジアス中将？どういう事や？レジアス中将は絶対にそういう奴等の仲間やと思うねんけど。

「レジアスは腐った管理局をなんとかしたいと頑張ってきた。しかし、減るどころかますます増えていくばかりだといつもぼやいていた。」

「そういや。忘れてたが、お前とレジアスは友人だったな。」

「ああ。」

この人、レジアス中将と友人なんや。
ちょっと待ってや？それってつまりレジアス中将はほんまはええ人？けど…

「あれは市民を考えた行動だ。現状の管理局を考えれば最善さ。」

そういう事か。
やったら私達はとんだ勘違いをしとったんやな。

「これで説明は終わりだ。」

いくつかわかった事があるな。
特に管理局のヒドさには驚愕や。
私達はどうしたらええんや？これからの事は。
それはこれから決めなな。

第４８話　スカリエッティ一味機動六課にくる！（後書き）

白黒「第４８話完成！ついにスカリエッティ一味が本格的に仲間になりました！」

テンテン「ほかにも仲間がたくさんできたね。」

白黒「リョウのカリスマ性がそうさせたのだろう。」

ライダー「それはよろしいのですが。リョウにまたハーレム要員が増えましたね。これは少しお灸をすえなければなりませんね。作者に。」

白黒「自分にですか～！」

セイバー「当然でしょ！さ、早く言いなさい！言ったら。うふふ…」

白黒「は、はい…（冷汗）そ、それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

白黒「おい、お前達！武器を構えるな！顔怖いよ！た、助け…アッーーー！！」

第４９話　予言！（前書き）

白黒「なんも浮かばないので第４９話始まるぜ！」

第４９話　予言！

リョウＳＩＤＥ

スカリエッティ達が機動六課にきて、今俺達は仲良くするため、訓練をやめて談笑をすることになった。
昼になり、昼食を食べている最中。

「そういや、カリムから聖王教会に来てほしいって連絡がきたねんけどな。なのはちゃんとフェイトちゃんは一緒に行くねんけど、リョウ君もきてほしいそうや。」

俺も？俺は行く気ないし、なんで俺なんだ？わからん。

「理由を知りたいんだが。」

「あんな、なんかリョウ君に謝りたいことがあるねんて。」

謝りたいこと？なんだろう。

「悪いが却下だ。俺はいかん。」

はやてはやっぱりなという表情だ。

「やったら、分身体でもええから頼むわ。お願い！」

う～ん、はやてがそこまで言うなら仕方ないな。

「分かった。分身体でいいなら行かせる。」

「ほんま！ありがと！」

俺は分身体を出し、はやて達と一緒に聖王教会に行った。
俺はヴィヴィオと遊びながらスカリエッティ達と談笑した。
その時、新たなママができてしまったことを記しておく

フェイトＳＩＤＥ

はやてに連れられて、私はなのはとリョウと一緒に数十分後に聖王教会に到着した。
私達は騎士カリムがいる応接室に入る。

「はやて！」

「カリム！遅れてごめんな。来たで。」

そこには騎士カリムの他にクロノがいた。

「まさかお前がいたとはなＫＹ。」

「誰がＫＹだ！君はいつも僕をＫＹＫＹと…」

「喧しい。貴様なんかＫＹで十分だ。」

相変わらずリョウはクロノが嫌いなんだ。

「それでカリム、俺を呼んだ理由を早く言ってくれねえか。さっさとこの場から去りたいんだが。」

「ええ。久し振りねリョウさん。まずシャッハの件で謝りたくて。」

シャッハの件？どういう事？

「ごめんなさい。まさかシャッハがあんな事を言うなんて。私がキチンと怒りましたからどうかシャッハを責めないで下さい。」

「…どうでもいい。あいつがどいなろうとな。だからお前が謝る必要は無い。」

「そう言われると気が楽になります。」

シャッハがヴィヴィオに言ったアレだね。
確かにあの言葉は許せなかったな。
でも、リョウが許すなら私も許そう。

「もういいか？だったら俺は帰らせてもらうぜ。」

「待ってください。あなたにも聞いてほしいお話しがあります。そのまま聞いてください。」

聞いてほしい話ってなんだろう？はやてとクロノは知ってそうだね。
私となのはは何のことかわからない。

「予言の事だろ？」

リョウはやっぱり知ってるんだ！…って予言！？

「やっぱり知っとったんやな。」

「つうか三賢人から聞いた。さらに言えば興味無い。」

「はやてちゃん。予言って？」

なのはが予言って何のことか聞く。

「カリムのレアスキルだ。簡単に言えば未来予知だな。」

「「未来予知！？」」

リョウ君が代わりに答えてくれた。

っていうか未来予知？レアスキルってそんなものもあるんだ。

「そうです。これがその予言です。」

これが予言…ミッドの古代文字かな？なんなのかわからないや。

カリムがそれを読み上げる。

無限の欲望と創造神の子がともに立つ。そして、友達とともに歩く。

欲望を持つ転生せし者達が法の者達と手を組み世界を我が物にせんと立つ。世界は混迷の渦に飲まれ欲望が支配する。しかし、創造神の子とその友達さらに無限の欲望はそれに立ち向かい世界を光にか

えん。

これが予言の内容か。
何なんだろう?わかる言葉の意味もある。

「これは少し複雑で解明できてないところもあります。それがわかれば対処法も。」

私はリョウを見る。
見ると、リョウは何か考え事をしていて理解できてるようだ。

「リョウ君。もしかして理解できとんのとちゃうか?」

「「「「!?」」」」

「ああ。」

凄い…リョウはこの予言が分かったんだ!

「ほ、本当ですか!?も、もしよろしかったらその意味をお教えくださ い!」

「…断る。」

断るってなんで?教えれば対処法も掴めるというのに!

「カリム、アンタもすでに理解してるんだろ?だったらアンタの口から答えればいい。」

カリムも分かってるの？だったら…

「…ええ。その通りです。わかりました。予言の内容をお教えします。」

カリムが教えてくれた。
無限の欲望は分からなかったけど、欲望を持つ転生せし者達は転生神、法の者達は管理局だと。
つまり管理局と転生神が手を組んで世界を支配するという事らしい。
これは、確実にスカリエッティ達が言っていた事に辻褄があう。
そして一番分からないのは創造神の子…これは？

「私の考えでは創造神の子とは…」

「…俺だと言いたいのか？だったらノーだ。俺は創造神の子でもなんでもない。」

「それでも、私達にはあなたの力が必要なのです！お願いです！我々に力をお貸しください！」

どうするんだろ？リョウは。

「…断る。」

「ど、どうしてですか！？」

やっぱり断った。

カリムＳＩＤＥ

な、何故断るのですか！管理局や聖王教会…いや、世界を救う気持ちはないのですか！？

「リョウ！貴様、何故断る！管理局のために戦う気はないのか！」

「何故俺が管理局のために戦わなきゃならない。管理局が無くなろうが俺の知ったことか。世界を救うにも興味がない。」

「そんな…見ず知らずの市民を見捨てるというのですか！」

「そこはお前達がやればいいだけの話だろう。なに俺を頼み込もうとしてやがる。」

彼はなにを考えているのですか！？我々が滅びれば世界は混迷の渦に飲まれてしまうのですよ！

「他人を頼らないと何もできない組織なぞ誰が信用するか。誰が手伝うか。お前達の物差しで測ってんじゃねえ。」

彼はそう言いながらある資料を見せる。
これは？

「なんだこれは？」

「読めばわかる。」

渡された資料を読んでみる。
……な!!?!

「おい!これはいったいなんなんだ!被検体とか実験名とか、なんだこれは!」

なんなの!?これは?まさか…まさか、そんな…

「もう気付いてるだろう?そいつは管理局が非合法に設立した研究所と実験だ。被検体の名づきだ。」

そ、そんな…管理局がこんな…管理局だけじゃない…聖王教会とかもある。
そんな…

「ばかな!管理局がこんなことを!管理局がこんなことをするわけがない!」

「否定したい気持ちはわかるが、全ては真実だ。まあ、お前がどう思おうが勝手だがな。」

私は…これをどうしたらいいのかしら。
これが真実なら私は…

「僕は信じない!こんなもの!」

「これを見てどうするかはお前の勝手だ。カリム、お前はどうしたいのかもう一度考えてみるのだな。」

彼はそう言い、部屋から出た。

残った私達はなんともいえない空気になった。
クロノはいまだにキイキイ言ってるが私達の耳には聞こえない。
私達…どうすれば……答えは……

リョウＳＩＤＥ

聖王教会にいる分身体から情報がきた。
とりあえず、カリムがどうでるかだな。
俺は三人が帰ってくるまでヴィヴィオと遊ぶ。
一時間後、三人が帰ってきた。

「リョウ君。」

三人が俺に近寄る。

「リョウ…あの資料、見せてもらったよ。」

「そうか。…で？」

「私らの答えを聞いてほしいんや。」

答えか…聞かせてもらおうか。

「私達はリョウ君と一緒に進む事を決めた。」

「私達は管理局のためじゃなく、罪もない市民達のために戦う事に

したんだ。」

「だから、私達はリョウと一緒に戦うよ。」

「…そうか。」

正直に言えば、なのは達がどう進もうが俺には関係ない。
俺はなのは達のために大切な奴等のために、ただ戦うだけだからな。

「なら俺は、お前達のために戦おう。」

「「「うん！」」」

俺となのは達はさらに絆が強まったはず。
ただ、その後なのは達に新たなママができた事がバレてお仕置された。

＞オマケ＜

「この娘がヴィヴィオか。」
（聖王のクローンか）

「可愛いわね。」

「うぅ～パパ。この人達は？」

『『『パパ！？』』』

「ほぉ～、君はいつの間にパパになったんだい？」

「…昨日だ。それとあんまり触れてほしくない。」

「「「「「「なら私がママになる（ッス）！」」」」」」

「ドゥーエチンクセッテディエチウェンディディード！なに言ってやがる！」

「ふむ、重婚は可能なのだ。そうなったら私は祖父さんだな。いや～照れるね。」

「そんな事を言ってる場合じゃないだろう。」

こうして新たに六人の嫁ができた。

第４９話　予言！（後書き）

白黒「第４９話完成！予言って難しいな。しっかり考えないといけなかったから手間取っちまった。」

家康「こういう小難しいのは苦手だもんな。」

白黒「面目ない。」

セイバー「頑張りましょう。」

白黒「嫌味か！嫌味ですか！そうですか！…ゴホンッ、それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

第５０話　新たな嫁二人増える！（前書き）

しばらくは前書きを無しにします。

第５０話　新たな嫁二人増える！

リョウＳＩＤＥ

スカリエッティ達がきて早二日がすぎた。
六課とスカリエッティ達の溝は早くも埋まり、今では親しくなりともに訓練するほどになった。
だが…

「スバルとギンガの様子がおかしいな。」

無論分かっている。
スバルとギンガが元気ないのか。

「ティアナ。」

「リョウさん。」

「スバルとギンガの事なんだが…」

「やっぱり、気付いてましたか。」

「…二人の事は知ってる。二人が戦闘機人だって事も。」

「知って!?…いえ、クイントさんがいるなら知っていて当然ですね。」

クイントから直接聞いたからな。
さて…どうするか。
このままだと、ズルズルと引きずりながら一緒に戦わなきゃならない。
…仕方ない、俺が一肌脱ぐか。

「ティアナ。昼の訓練終えたら二人を俺の部屋にくるよう伝えてくれ。」

「どうするの？」

「なんとかするさ。得意じゃないがな。」

そう言い俺は訓練場を出、俺の部屋に戻る。
部屋に入り、別荘に移動する。

「さて、修業を始めるか。重力を五百倍にして相手は…バーダックと悟飯の二人を相手するか。準備はいいか？バサラ。」

〔いつでも構いません！〕

修業場にある重力装置にスイッチを入れ五百倍にする。
そして、バーダックと悟飯の二人が現れる。

「さて…いくぜ！」

俺はバーダックと悟飯に突っ込む。
戦いは別荘内設定で約二日間死闘を繰り広げた。
そのおかげでまた強くなった。

ギンガＳＩＤＥ

お昼の訓練を終え、私とスバルはティアナからリョウさんの部屋に行くように言われた。

「ギン姉…リョウさん、いったい何の用で呼んだんだろう？」

「さあ？私にも分からないわ。」

なんで呼んだのか分からないけど、きっと何か理由があるはず。
そんな会話をしてる間にリョウさんの部屋の前に着いた。

「とりあえず、本人の口から聞いてみましょ？」

「うん。」

ドアを開ける。

「失礼します。ギンガ・ナカジマ、スバル・ナカジマただいま両名来ました。」

「ああ、入ってきな。」

部屋に入る。
そういえば、私リョウさんの部屋に入るの初めてだったわね。

「ふわぁ～…リョウさんの部屋、やっぱりすごく広いですね！」

本当…広いわ。
まるでＶＩＰルームみたい。
部屋は綺麗で小物や遊び道具も多い。
あと、ミニチュアもある。
そういえば、スバルは入った事があるようね。
詳しく聞かないと。

「そんなとこに突っ立てないでまあ、イスに座りな。」

私達はイスに座る。
いったいなんだろう？真面目な顔をしていて…

「それで、いったいなんの御用なんですか？」

「ああ…」

リョウさんは少し言いにくそうだけど、意を決して言う事にしたようだ。

「お前達…」

「なんですか？」

「いつまで隠す気だ？」

「「え？」」

どういう事なのかな？まさか…私達の秘密を！

スバルＳＩＤＥ

突然のリョウさんの言葉に私は何のことかわからなかった。
でも…頭では理解できていた。
できれば外れてほしいし、知られたくない！

「な、何のことですか？私達には何のことかさっぱり…」

「誤魔化す必要は無いぞ。お前達がナンバーズ達と同じ戦闘機人だってな。」

！！知っていた…

「知って…いたのですか…」

「クイントから直接聞いた。だから隠そうとしなくていい。」

お母さんから聞いたんだ。
…なら、隠す必要は無いかな。

「そうですか。」

「本題に入るぞ。スカリエッティ達が来てからお前達の様子がおかしくてな。ティアナやクイントに聞いたんだが、わからなかったらしいから俺が直接聞くことにしたんだ。」

…

「ご存じの通り私達は戦闘機人です。人間ではありません。だから、私達は人間として生活をしていました。」

「だけど、あのナンバーズ達は私達と同じ戦闘機人なのに、人間としてだけでなく戦闘機人として生活してた。」

「なるほどな。ナンバーズの奴等が自分達の存在を否定せずに生きていたことに戸惑いを覚えたってことか。」

「はい。」

彼女達は私達と同じ戦闘機人なのにいやな表情もせずまるでさも当然といった感じでみんなと話したりしてた。
それが、とても羨ましかった。
私達はいまだにビクビクしてる。
もし、私達が戦闘機人だと知れば…

「二人とも、どうしてそこまで怯える必要があるんだ?」

「「え?」」

なんで?だって、私とギン姉は戦闘機人だよ。人間じゃないんだよ。

「なら聞かせてもらうが、フェイトやヴォルケンリッター達はどうなんだ?フェイトはアリシアのクローンだし、ヴォルケンリッターなんかプログラムだぞ。」

確かに聞いたことがありますし、そうですが。
それがいったいなんの関係が？

「だが、あいつらはクローンとしてやプログラムとしてでなく、一人の人間として生きてるぞ。」

「「！！」」

確かに…フェイトさんやシグナムさん達はそんなことに関係無く楽しく生きている。
あのナンバーズの子達だって。

「だが、お前達二人はどうだ。戦闘機人だからとかグダグダした感じで生きやがって。そんなの関係無いだろ。第一、お前達自身が自分の存在を否定してどうすんだよ。」

「私達が自分の存在を否定！そんなこと「ないとは言わせないぞ。現に今だって自分達の存在に迷いを出してるだろ。それは否定してるのと同じだ。」…そ、それは…」

自分の存在を否定してる。
それは違う！…と否定できない。
わかってる、自分でもわかってる。
自分の存在を否定してることくらい。
だって当然だ…私達が誕生したからナンバーズが生まれた。
もし、私達が誕生してなかったらナンバーズは生まれなかったし戦闘機人計画や人造魔導師計画もできなかった。
でも、私達が生まれたから。

「お前達が罪を背負う必要はないだろう。だいたい、お前達を生ま

れさしたのは欲望深いクズどものせいだろ。」

心を読んだ!?いや、そんなことより結局…

「いい加減にしろよ。それ以上自分達が悪いと言うならデコピンをかますぞ。だいたいお前達はなんだ?戦闘機人か?タイプゼロか?違うだろ。」

「何なんですか?私達は。」

「お前達はスバル・ナカジマとギンガ・ナカジマというこの世に生まれた存在だろな」

あ……そうだ…そうだよ、私達は戦闘機人でもタイプゼロなんかでもない。

スバルって言う名前の生きている存在なんだ。

私達はやっと……そのことに気付いた。

「泣いてるな。二人とも。」

え?…アレ?私の目から涙が出てる。

ギン姉を見ると、ギン姉も泣いている。

「泣きたきゃ泣けばいい。こういう時はスッキリしたほうがいい。」

リョウさんがそういうから私達の涙は止まらなくなった。

「あの…リョウさん。」

「ん?」

「少しの間だけ、寄り添っていいですか？」

「私も…」

「構わない。」

「「うわあああ～～！！！」」

リョウＳＩＤＥ

スバルとギンガが俺の胸を借りて泣く。
しばらくは、このままだな。
約十数分間、二人は泣き続けた。
泣きやんだ二人の目は充血しており、頬も赤く染まっている。

「気分はどうだ？」

「は、はい。だいぶよくなりました。／／／／」

「す、すみません。／／／／」

うん、いっぱい泣いたし心の中にあった思いを吐き出したおかげで顔色もよくなって清々しい表情だ。
俺はこういうのは苦手だったから上手くいくかわからなかったが上手くいってよかったぜ。

「あ、ありがとうございます。／／／／」

「リョウさんには感謝しきれません。／／／／」

「フッ…どういたしまして。」

少し照れるな。
さて、話も終えたし皆のところに戻るか。
俺達は食堂に移動する。
時計を見たらもう夕飯の時間だったからな。
食堂に行くと、みんなすでに食っている。

「リョウ君。」

「リョウ君。スバルとギンガとなに話しとったん？」

「いやなに、たいしたことじゃない。ちょっとな。」

「ふ～ん。…まあええわ、そういう事にしとくわ。」

とりあえずは納得してもらえた。
ヴィヴィオの隣りの席に座り、一緒に食事を楽しむ。

「ね、ねえヴィヴィオ…あ、あのさ…もう一人いや二人ママがほしくない？／／／／」

「ふぇ？」

うお～い！なに言ってるんだ！クイントはニヤニヤすんな！

「ママ？」

「う、うん。私とギン姉が新たなママになるんだ。／／／／」

勘弁してくれ～。
これ以上ママが増えるな～！

「ふ～ん。スバルだけじゃなくてギンガもなんだ。」

「わ、私達負けません！／／／／」

「頑張ろうね。ギン姉！／／／／」

スバルとティアナが睨み合ってるよ。
ギンガはフェイトと…

「頑張んなさい！二人とも、お母さんが応援してるわ。」

やめてくれ～！
その後、俺はなのは達に怒られた……俺は被害者だ！
あと、クイントから礼を言われた。

第５０話　新たな嫁二人増える！（後書き）

白黒「第５０話完成！少し手間がかかったな。」

セイバー「…」
ライダー「…」
テンテン「…」

白黒「な、なにかな？（汗）」

三人「なんでママが増えてるのかな？かな？」

白黒「ひっひぃぃ～～！！ごめんなさ～い！」

家康「はは…そろでは皆の者！次回もよろしくお願いします！」

白黒「家康～！なに勝手にしめてんだよ！って助けて…あああああ！！！」

第５１話　公開意見陳述会！

リョウＳＩＤＥ

スバルとギンガのわだかまりも溶け、みんなどんどん強くなってきている。
ティアナがフォワードメンバーだけでなく、ナンバーズやギンガも引っ張っていくおかげで予想以上のレベルアップをしている。
このままいけばなのは達に追いつくな。

〔そろそろ別荘を使う時ですね〕

だな、なのは達も加えて転生神に圧倒できるくらいの実力をつけないとな。
三日後、フォワードメンバーとギンガとナンバーズはなのは達と同クラスの実力を持ち始めたので、別荘での訓練にシフトチェンジした。
別荘に入り、ティアナを除いたフォワードメンバーと入ったことがないナンバーズは大層に驚いていた。
そして、なのは達戦闘メンバー達に俺の指導による訓練を始めた。
最初はすぐに疲れたが、なのは達はメキメキ強くなっていった。
それから数日…ついに原作のあの予言の日がきた。

今日は公開意見陳述会、俺達はその警備にあたる。
地上本部の警護は俺をいれたなのは達隊長陣とフォワードメンバーにギンガ、さらにトーレチンクセッテが警備することになった。

残りは六課の警護をすることになった。
主にヴィヴィオの護衛だな。
ゼストやクイント、メガーヌは本部に行きたがってたがさすがにやばいのであきらめてもらった。

「パパ～！」

これから行こうという時に、ヴィヴィオがやってきた。
もう夜なのに。

「どうしたんだ？もう夜だろ？」

「…どこかに行くの？」

「ああ、お仕事だ。大丈夫…すぐにとはいかないけど必ず帰ってくる。約束する。」

ヴィヴィオが不安な顔で見つめるので頭を撫でながら約束する。

「約束…」

「うん、約束…ほら、指切りげんまん。」

「うん。」

俺はヴィヴィオと指切りをする。
ヴィヴィオのことは、アリサとすずかに他の奴等に任せるように言い出発する。
数分後、到着し、配備を開始する。
皆、警護場所に移動し、俺は本部屋上に待機する。

本当は内部だが、屋上に待機することにした。
ただし、影分身を数体だしなのは達の護衛をするよう指示を送る。
もちろん六課にも分身体数体護衛している。
分身体は必要無いと言われたが、念には念をいれ警戒した。
相手は転生神だし、それに組みする大半の管理局もいるからな。
油断はできない。

〔敵は、どう攻めてくるでしょうか？〕

「わからんな。相手の思考が読めん。単純な奴等なら突っ込んでくるだろうが、策略家だったら絡め手で攻めてくるだろう。だからこその念だ。」

さて、いつくるのやら。
陳述会が始まったようだ。
警備は万全とはいえないからな。
ん？遠くからなにかが光った。
あれは…砲撃！
砲撃が本部の一部に当たり爆発する。
それによりいくつかの部隊が混乱に陥る。
そして、部隊近くの道路に魔法陣が描かれそこからガジェットもどきが大多数現れた。
さらに上空からかなりの数の魔導師と転生者がこっちに飛んできている。

〔どうやらきたようですね〕

「単純に真正面から攻めてきたか。しかし、転生者の数が予想より多いな。」

全く人気だな、なのはの世界は。

〔リョウ君！〕

〔はやてか。どうした？〕

〔本部のシステムが乗っ取られたようや！こっちは身動きが取れんねん！頼む！そっちで何とかして！〕

ほぉ、絡め手も使うとは…相手はバカじゃないようだな。
念をいれといてよかったぜ。

〔分かった。任せとけ。分身体にはしっかり護衛させてもらいな〕

念話を切る。
敵は俺に気付いてないな。
さて…いくか！

キャロＳＩＤＥ

私達は分身体のリョウさんと一緒になのはさん達にデバイスを届けに移動中、途中ガジェットもどきや転生神の人達が現れたけどなんとか撃墜できた。
だけど…

「「「「…」」」」

「お前ら、いつまで俯く気だ?殺らなきゃ殺られる。だから殺ったまでだけだ。」

実は、さっきの転生神の人達との戦いの時に…リョウさんは…その人達数人を…殺した。
私達は初めて人の死を見た。
気分が悪くなって吐きそうになった。
だって…まさかあんなあっさり人を…殺すなんて…思わなかったから。

「批判するなら好きにしな。ただな、これはゲームじゃない。戦いに死が無いなんて無い。必ず生死をかけた戦いがある。奴等だって、そのつもりで迫ってきたんだ。覚悟はしてただろう。」

リョウさんの言葉を聞きながらなのはさん達と合流を急ぐ。
私達はまだわからない。
それは多分、私達は子供だからだ。
だから…だと思う。
私達も覚悟しなきゃならないかな。
敵を殺すことを…でも、それはいやだな。
エレベーター近くに到着し、そこでなのはさん達と合流する。

「みんな大丈夫?」

「なのはさん、皆さん…デバイスです。私達は大丈夫です。」

「そう。よかった。」

スバルさんとエリオ君がなのはさん達のデバイスを返す。

「さて…これからどうしようか？私的には迎撃だと思う。」

「妥当だな。だが、内部に敵がいるからな。まずは内部にいる敵を撃破するのが先だな。」

「なら私とリインは主にデバイスを届けにいく。」

「そうだな。主はやてもそれを待ってるはずだ。」

「決まりだな。ならさっそく実行するぞ。」

凄いなぁ。
もう作戦ができた。
私やエリオ君、スバルさんはこういうのはできない。
もっと勉強しないといけないかな。

〔なのはさん…なのはさん！皆さん！聞こえたら応答願います！〕

〔シャーリー！？〕

突然シャーリーさんから緊急連絡がきた。
何か起こったの！？

〔どうしたのシャーリー！何かあったの！？報告を！〕

〔は、はい！六課に多数のガジェットもどきと同じく多数の転生神達が攻めてきました！〕

〔なんですって！〕

六課に転生神が!?どうして六課に?わからない。

〔アリサさん達やナンバーズの人達が迎撃しているおかげでなんとか耐えてますが、予想より数が多いです!〕

〔分かったわ!そっちに私とライトニングが行くわ!着くまでになんとか持ち堪えて!〕

〔り、了解!〕

どうやら方針が決まったらしい。

「作戦を少し変更してフェイトちゃんとライトニングは六課に戻って救援を、私とスターズは内部にいる敵を撃破します。」

「「「「了解!」」」」

「どっちにも分身体の俺を護衛につける。これは変わらない。いいな。」

作戦は決まった。

私とフェイトさんとエリオ君と分身体の一人のリョウさんは本部から出て、六課に移動開始する。

皆さん…無事でいてください。

第５１話　公開意見陳述会！（後書き）

白黒「第５１話完成！ついに物語は後編に入っていきます。」

家康「ここからバトルが多くなりそうだな。」

テンテン「敵は手強いのは多そうだね。」

セイバー「ですが、リョウは負けません。」

白黒「信頼されてるねえ。それでは皆さん！」

全員『次回もよろしくお願いします！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2109u/

創造神の誕生（後）

2011年12月1日18時10分発行